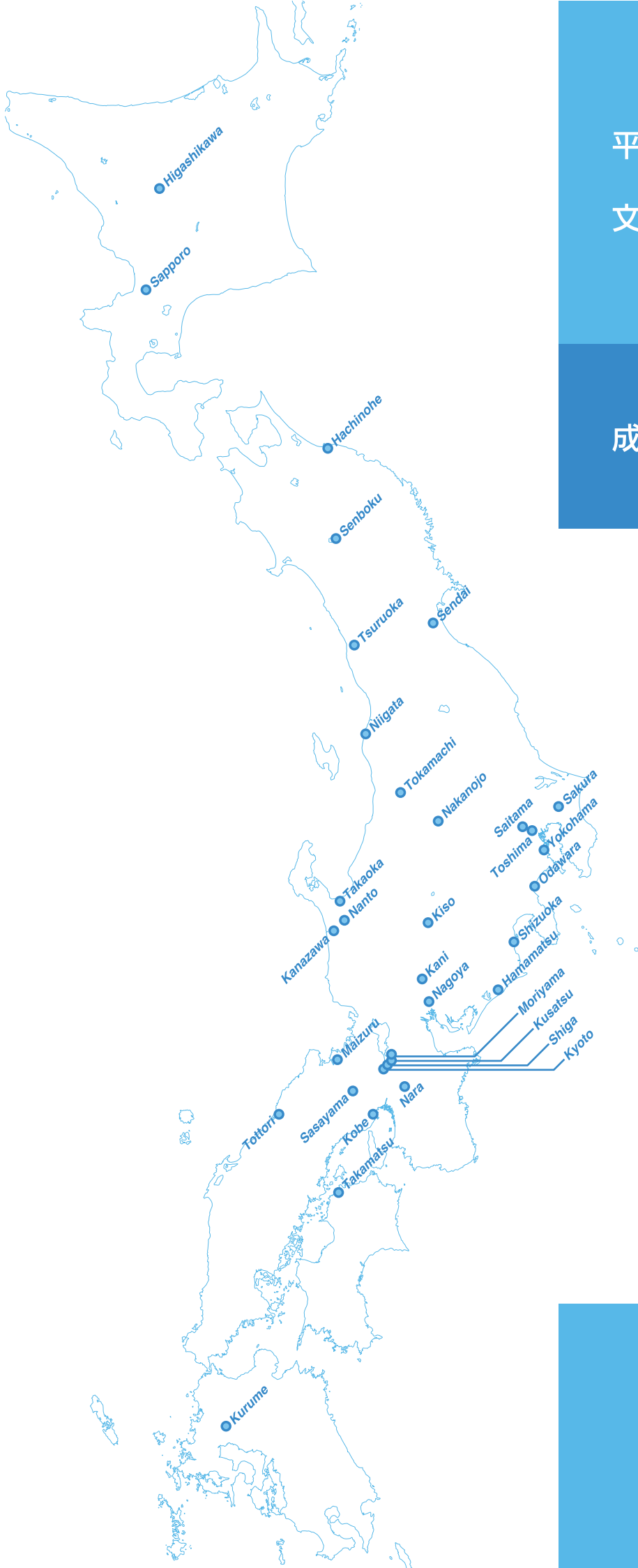


平成25年度

文化芸術創造都市推進事業

成果報告書



平成26年3月

NOTE

一般社団法人ノオト

## 文化芸術創造都市推進事業 成果報告書

## 目次

第1章	創造都市ネットワーク日本（CCNJ）の活動報告	
（1）	幹事団体会議の開催	…1
（2）	創造都市ネットワーク日本（CCNJ）総会の開催	…3
（3）	参加団体の拡充	…4
第2章	国内・海外の取組に関する情報収集	
（1）	ユネスコ創造都市ネットワーク（UCCN）の動向	…6
（2）	国内の創造都市・創造農村の動向	…14
（3）	東アジア文化都市事業のスタート	…17
第3章	参加団体アンケート 集計結果と特徴	
（1）	参加団体の概要	…18
（2）	取組事例	…21
（3）	ユネスコ申請に至る各都市の取組と経緯	…24
第4章	会議、研修の実施	
（1）	創造農村ワークショップ「なつかしいみらい。」	…30
（2）	創造都市政策セミナー「メディア芸術と創造都市」	…31
（3）	東アジア文化都市交流シンポジウム「文化芸術と都市の再生」	…33
第5章	CCNJ ウェブサイトの拡充	
（1）	ウェブサイト全面リニューアルの実施	…34
（2）	参加団体からの情報発信コーナーを新設	…35
（3）	リニューアル後の閲覧コンテンツについて	…36
（4）	今後の課題	…36

# CONTENTS

文化芸術創造都市推進事業 成果報告書

## 添付資料 …37

### 第1章関係

#### 創造都市ネットワーク日本（CCNJ）総会 要約

要約 …38

資料 …51

### 第4章関係

#### 創造農村ワークショップ「地域資産と創造農村」in 長野県木曾町

要約 …58

アンケート …85

広報チラシ …86

#### 創造都市政策セミナー in 新潟

「メディア芸術と創造都市」 要約 …88

「スペシャルインタビュー」 要約 …106

アンケート …116

創造都市入門セミナー「創造都市が目指すもの」 要約 …117

アンケート …137

広報チラシ …138





## 第1章 創造都市ネットワーク日本（CCNJ）の活動報告

創造都市ネットワーク日本（以下CCNJ）設立2年目にあたる本年は、シンポジウム、総会の開催にあわせて計3回の幹事団体会議が開催された。

### （1）幹事団体会議の開催

#### 1）第2回CCNJ幹事団体会議（平成25年度 1回目）

日程：平成25年8月25日（日）

開催地：木曽町

出席：横浜市（代表）、鶴岡市、金沢市、篠山市、佐々木氏（CCNJ顧問）、  
文化庁、一般社団法人ノオト（文化芸術創造都市推進事業 受託業者）

#### <報告事項>

- ・顧問の就任について。6月に、青木保氏（国立新美術館館長、元文化庁長官）及び佐々木雅幸氏（大阪市立大学大学院都市研究科教授 同都市研究プラザ所長）、8月に、近藤誠一氏（前文化庁長官）にご就任いただいた。
- ・参加登録状況について。自治体では1自治体、民間団体では、1団体が新たに会員になった。

#### <審議事項>

- ・これまでの事務局による処理案件について → 「了承」。  
事務処理規程、公印規程を整備した。
- ・平成25年度、今後の事業計画（案）について。
  - 1 創造都市政策セミナー → 「了承」。  
9月20日にwebでの掲載、チラシの配布を開始予定。  
幹事団体会議の日程を確認。
  - 2 ネットワーク会議（総会）。  
東アジア文化都市のオープニングに合わせて開催するため、日時を調整。後半「シンポジウム（講演会）」については横浜市立大学との共催事業とする。
  - 3 自治体会員の拡大 → 「了承」。
  - 4 次期幹事団体の選出。  
9月初旬をめどに、全会員自治体に希望調査を実施したい → 大枠は「了承」。
  - 5 webサイト運営事業。
  - 6 その他事業。

#### <意見交換>

平成26年度以降の事業計画について。CCNJの自立的な運営に向けて → 「引き続き検討」。

#### 2）第3回CCNJ幹事団体会議（平成25年度 2回目）

日程：平成25年11月2日（日）

開催地：新潟市

出席：横浜市（代表）、鶴岡市、金沢市、神戸市、篠山市、佐々木氏（CCNJ顧問）、  
文化庁、一般社団法人ノオト（文化芸術創造都市推進事業 受託業者）

#### <報告事項>

- ・自治体会員の拡大について。
- ・全国80自治体に参加の呼びかけをおこなったところ、新たに3自治体に参加することになった。

#### <審議事項>

・ネットワーク会議（総会）について → 「了承」。

- 1 総会の日程を2月26日に決定。
- 2 総会に諮る議題について。
- 3 民間団体の参加手続については、既参加団体の推薦を必要とすることとし、様式の一部を変更、総会に諮ることとする。
- 4 来年度の創造農村WS及び創造都市政策セミナーについては、8月に北海道東川町及び札幌市で、両者を連続して開催することで今後調整する。
- 5 次期幹事団体について立候補の希望調査を実施したところ、札幌市、新潟市、浜松市から名乗りがあった。次期幹事団体については、今後調整を進める。また、次期代表幹事団体は金沢市で総会に諮る。
- 6 後半の「シンポジウム（講演会）」については、前回の幹事団体会議で了承されたように、文科省のCOCを活用し、CCNJと横浜市立大学の共催事業とし、内容を詰める。

・webサイト運営事業。

webサイトの管理の負担の軽減、参加会員の情報発信・情報共有の支援、並びにCCNJへの参加促進のため、サイトの改善をおこなう。また、公式サイトに団体の概要等を掲載するためのプロフィールフォームに必要事項の記入・返信をお願いする。

・CCNJの自立的な運営に向けて → 「引き続き検討」。

### 3) 第4回CCNJ幹事団体会議（平成25年度 3回目）

日程：平成26年2月25日（火）

開催地：横浜市

出席：横浜市（代表）、鶴岡市、金沢市、神戸市、篠山市、佐々木氏（CCNJ顧問）、  
文化庁、一般社団法人ノオト（文化芸術創造都市推進事業 受託業者）

<審議事項>

- 1 創造都市ネットワーク会議（総会）の議案の最終確認。
- 2 創造都市ネットワーク会議（総会）総会の進行について。  
シナリオの確認。
- 3 幹事団体会議の出席に伴う旅費等の費用負担について。

## （２）創造都市ネットワーク日本（CCNJ）総会の開催

日程：平成２６年２月２６日（水） １０：００～１１：３０

開催地：横浜市 ヨコハマ創造都市センター

出席：自治体２３、団体６、個人１（出席者数６７名）

内容：

○ 主催者あいさつ 林文子 横浜市長（創造都市ネットワーク日本代表）

○ 文化庁あいさつ 青柳正規 文化庁長官

### ○ 議案審議

議長 横浜市 中山こずゑ文化観光局長

#### １ 第１号議案 「規約の改正について」

- ・様式の変更
- ・幹事団体の定数

#### ２ 第２号議案 「平成２５年度事業報告について」

- ・顧問の設置

青木 保（国立新美術館館長 元文化庁長官）様

近藤 誠一（前文化庁長官）様

佐々木 雅幸（大阪市立大学大学院都市研究科教授／同都市研究プラザ所長）様

- ・創造農村ワークショップ

日程：平成２５年８月２４日（土）、２５日（日）

開催地：木曽町郡民会館（長野県木曽町）ほか

- ・創造都市政策セミナー

日程：平成２５年１１月２日（土）、３日（日）

開催地：新潟東急イン（新潟市）

- ・webサイトの改善

#### ３ 第３号議案 「平成２６年度事業計画について」

- ・創造農村ワークショップ

日程：平成２６年８月

開催地：東川町（北海道）

- ・創造都市政策セミナー

日程：平成２６年８月

開催地：札幌市（北海道）

- ・首長サミット・国際シンポジウム（仮称）

日程：平成２６年１０月

開催地：横浜市

- ・ネットワーク会議（総会）

日程：平成２６年度中

開催地：次期代表幹事都市

- ・その他規約第４条に掲げる事業

#### ４ 第４号議案 「次期幹事団体の改選について」

- ・幹事団体（案）（五十音順）

金沢市（代表幹事団体）、神戸市、篠山市、札幌市、鶴岡市、新潟市、浜松市  
・任期 平成26年4月1日から平成28年3月31日まで

事務局から説明の後に、平成26年度 創造農村ワークショップの開催地（案）・東川町と、平成26年度 創造都市政策セミナー開催地（案）・札幌市からの補足説明。最後に顧問の佐々木先生から第3号議案に関して、全体的な補足説明がなされた。

- 議題に対する質疑応答
- 議案の採決 賛成多数により第1号議案から第4号議案まですべての議案が採択された。
- 次期幹事団体紹介  
金沢市（代表幹事団体）  
神戸市、篠山市、札幌市、鶴岡市、新潟市、浜松市
- 代表あいさつ 山野之義 金沢市長
- 閉会

### （3）参加団体の拡充

幹事団体、CCNJ顧問による全国の自治体に対する参加の呼びかけを行なった結果、平成25年度中に自治体が10団体、その他団体が3団体、新たに参加することとなった。

平成26年3月31日現在で、CCNJ参加団体数は、46団体（自治体33、自治体以外の団体13）となった。各自治体の概要、取組は <http://ccn-j.net/> を参照されたい。

#### ・新規加盟団体（自治体）

さいたま市（埼玉県）

小田原市（神奈川県）

十日町市（新潟県）

佐倉市（千葉県）

静岡市（静岡県）

草津市（滋賀県）

守山市（滋賀県）

奈良市（奈良県）

久留米市（福岡県）

滋賀県

#### ・新規加盟団体（自治体以外）

公益財団法人音楽文化創造（東京都）

滋賀次世代文化芸術センター（滋賀県）

大道芸ワールドカップ実行委員会（静岡県）

## 参加団体（平成26年3月31日時点）

◎ 参加団体（自治体） 33

◎ 参加団体（自治体以外） 13

音楽文化創造

滋賀次世代文化芸術センター

大道芸ワールドカップ実行委員会

アーツエイド東北

アート NPO リンク

NPO 法人 Creative Association

NPO 法人駿河地域経営支援研究所

DANCE BOX

NPO 法人都市文化創造機構

鳥の劇場

一般社団法人ノオト

BEPPU PROJECT

公益財団法人横浜市芸術文化振興財団

※太字は平成25年度新規加盟団体



Creative  
City  
Network of  
Japan

## 第2章 国内・海外の取組に関する情報収集

### (1) ユネスコ創造都市ネットワーク (UCCN) の動向

ユネスコは2004年以来、世界各都市の多様な文化産業が持っている発展可能性を、都市間の連携によって持続的に発展させる枠組みとして、創造都市ネットワーク事業を開始し、デザイン、クラフト&フォークアート、音楽、メディアアート、ガストロノミー、映画、文学の7分野で2013年10月までに世界34都市の登録を承認してきた。

一方で、新規加入都市に関する審査プロセスは、2011年末以降、ユネスコ本部の財政危機（アメリカが分担金の支出をストップしていることに起因する）により中断していたが、中国政府が資金援助することにより、2013年夏ごろから審査再開となり、年次総会で新たな審査プロセスが確認されることになった。

#### 1) 第7回 UCCN 年次総会ーボローニャ会議

第7回の年次総会となったボローニャ（音楽都市）会議は2013年9月18－21日に開催され、26都市の代表が集まり、日本からは既加盟都市である名古屋市・神戸市・金沢市の他に、札幌市、浜松市がオブザーバーとして参加した。

基調講演の他、全体会議と7分野毎のサブネットワーク会議が行われ、以下について議論された。

1. 互いの経験の共有と能力形成の改善
2. メンバー都市の最新の活動状況の交流
3. ネットワークのコミュニケーション戦略と運営に関する討論
4. ネットワークの今後のガバナンスと発展に関する方針の承認

そして、特に、新たな創造都市の指名手続きに関して討論の後、決定された改正点の要点は、①申請書類フォーマットの指定、②申請時期（毎年1月20日から3月20日までの予定）と審査期間、③申請要件（ユネスコ国内委員会と、既加盟の5都市以上、及び専門分野の団体からの推薦状を添付すること）の明確化が挙げられる。（詳細はP.12-13の資料参照）

本総会の最後に、2014年度の年次総会は中国の成都市（ガストロノミー都市）で秋に開催されることになり、2015年度は日本の金沢市（クラフト&フォークアート都市）での開催に際して、市長ラウンドテーブル会議も併催されることが決まった。

ボローニャ会議の運営で特徴的なことは、7分野ごとのエクスカージョンの日程が組まれ、少人数で、美術館博物館やクラフト工房、専門学校などの訪問が充実していたことが挙げられる。

また、同時期の9月19－20日に開催されたボローニャ大学主催の大学マグナカルタ（同大学の創立900年を記念して世界中の大学の学長が署名した大学憲章）25周年式典にUCCN参加メンバーが招待され、参列した。基調講演を行ったボローニャ大学名誉教授のウンベルト・エーコ氏が講演したタイトルは「なぜ、いま大学か？」というもので、「情報化社会の進展の中で、様々な情報が飛び交うが、大学は良質な情報を保持し、社会に提供するゲートキーパーたれ！」と述べた。

また、UCCNとボローニャ大学との共催による記念フォーラムでは、CCNJ顧問の佐々木雅幸・大阪市立大学教授が、「日本の創造都市と大学」について発表し、大学は創造的ハブではあるが、周囲の社会が創造的でなければ孤立するだけだと、「創造都市と大学とのwin-winの関係」を提唱した。最後に、イワーノ・ディオーニギ・ボローニャ学長は、1088年に創設された大学は研究所ではなく、問題解決の知を求める人々が集う「場」であったし、今後も社会に開かれた「広場」でなければならないと締めくくった。

ボローニャでの総会終了後、2013年10月に音楽分野でブラザヴィル（コンゴ共和国）、ガストロノミー分野でザーレ（レバノン）、文学でクラクフ（ポーランド）、クラフト&フォークアート分野でファブリアーノ（イタリア）、さらに11月には、札幌市とアンギャン・レ・パン（フランス）がメディアアート分野で、パデューカ（アメリカ）がクラフト&フォークアート分野で承認されて2013年末現在、41都市となった。

一方で、浜松市（音楽）、新潟市（ガストロノミー）、鶴岡市（ガストロノミー）は本年の年次総会で改訂された審査プロセスに従って審査を受けることになり、新たに篠山市もクラフト&フォークアート分野での申請を行った。この秋の登録承認が待たれるところである。

UCCNの今後のガバナンスと運営に関する規定については、ワーキンググループにおいて議論されて原案が提示されている。それによれば、UCCNは1つのNGOとして、独自の財源と執行委員会を持ち、ユネスコと連携しながら活動するイメージとなる。今後の展開が注目される。

## 2) 「世界創造都市フォーラム in KANAZAWA」

2014年1月24日に、金沢市は「世界創造都市フォーラム in KANAZAWA」を開催し、2015年の金沢でのユネスコ世界会議と市長サミットの成功を見据えて、「創造都市から始まる新たな交流」と題するシンポジウムに、UCCN参加メンバーのサンタフェ（クラフト&フォークアート）、ブラッドフォード（映画）、サンテティエンヌ（デザイン）の3都市を招いて、経験交流と今後の課題について討論を行った。

各都市の取組状況を簡単に紹介しておこう。

### 2) - a. サンタフェの取組

最初に、サンタフェ市芸術協会、コミュニティーギャラリー館長のロバート・ランバート氏はサンタフェが力を入れている「クリエイティブ・ツーリズム」の経験を紹介した。

サンタフェでは、1610年のスペインによる入植時に先住民族が持っていた1千年にわたる芸術的な伝統や習慣、工芸品が日常生活の中に脈々と引き継がれ、現代アートの重要な要素として根づいており、スペイン人の植民地芸術も引き継がれている。スペイン人が持ち込んだフォークロアの舞踊は、その後入植したメキシコとニューメキシコの先住民族のものとも組み合わせられており、また、藁のアップリケや錫を使った工芸品もスペイン植民地のアートワークとして引き継がれている。さらに20世紀前半には、画家、作家など米国東部からやってきた人たちによって、さらにそれらが活性化されて、文化的多様性に満ちた魅力的なアートシーンとオリジナルな都市景観を創り出している。

サンタフェには、多くの博物館、美術館、文化施設があり、75以上の芸術関連NGO組織が活動しており、250ものプライベートギャラリーがある。また、毎年開催されている多彩なアートマーケットが、創造的産業・経済を活性化しており、創造的企業、キュレーター、デザイナー、ダンサー、音楽家、アクターなどが集まり、創造性の坩堝と言って良いほど多様な人たちがやってくるようになった。この結果、サンタフェは人口約7万人と少ないが、リチャード・フロリダのいう「クリエイティブクラス」の居住率が、アメリカの都市の中で最も多く、連邦政府の全米芸術基金が行った調査で、労働人口に占める作家の割合が一位であり、建築家、作家、アーティストの集中度が、サンフランシスコと同レベルという結果が出ており、2005年のニューメキシコ大学の調査によれば、サンタフェの創造産業は年間11億ドルを生み出している。

UCCNに認定されて以来、クリエイティブ・ツーリズムをスタートしており、サンタフェが享受した最も重要なベネフィットは、このネットワークをとおしてクリエイティブ・ツーリズムを訴え、リーダーシップをとり、その進化をもたらせたことである。2005年時点では8都市が異なった分野でネットワークに認定されており、我々がどういう活動をするべきなのか議論することができたうえに、ネットワークとしてのア



ジェンダの決定にも参加することができ、サンタフェはクリエイティブ・ツーリズムがUCCNの活動領域のひとつとなると提案したのである。

クリエイティブ・ツーリズムには、ツーリストが、その土地の創造的活動に手で触れて経験し、コミュニティ活動に参加するというものであり、その定義としては、本物のアート、文化遺産、歴史的サイトを体験してもらうことである。2008年にサンタフェは、クリエイティブ・ツーリズムの潜在可能性に焦点を当てた国際会議をUCCNと共催し、16カ国から200名の人たちが参加したが、会議期間中にニューメキシコのクッキング、陶器制作、リオグランデの織物など、50ものクリエイティブ・ツーリズムを体験してもらうことができた。

さらに、サンタフェはアーティストと旅行者をリンクさせるためのインフラづくりというアイデア、コンセプトをベースとして活動を進めており、その第一歩として、アートコミッションを通して、クリエイティブ・ツーリズムのウェブサイトを作り、そこでは200以上の体験プログラムが展開されている。ウェブサイト上では、アーティスト、ホテル、訪問者、コミュニティ、地域社会がつながって、クリエイティブ・ツーリズムに関わることが可能となり、フェイスブック、ツイッターなども展開されている。

ソーシャルメディアを使えば、フォーマルとインフォーマルのネットワーキングの機会を提供することができ、フェイスブックにアクセスすると、アーティスト、パートナー、旅行者がリアルタイムで時間を共有することにより、オンラインでアクセスしてくる人たちに、自分の望むコンテンツをアップし、サンタフェを紹介することができる。

クリエイティブ・ツーリズムのプログラムを展開していく時には、市はビジネスの専門家を呼び、アーティストの相談を受けるサービスを提供しており、ウェブサイトをどう構築するか、プレス発表をどうつくるか、作品写真をどうして撮るか、コミュニティとのネットワークをどう結ばよいかといった相談内容に対応している。

このようなビジネス開発プログラムを通して、今までワークショップなど開催したことのなかったアーティストも、月1回のワークショップを開けるようになり、相談を受けた結果、アーティストがウェブサイトを自力で開設したという例も出てきた。2011年から300人がこのクラスに参加し、ワークショップをしたアーティストは最初40人だったが、現在では235ものプログラムが展開されて、2011年には収益は40,790ドルであったが、2012年には62,782ドルに至っている。

## 2) - b. サンテティエンヌの取組

サンテティエンヌのデザイン国際部長（兼工芸高等学校国際部長）のジョジアンヌ・フラン氏が取り組みと課題を語った。

サンテティエンヌは、2010年にフランスで初めて、デザイン分野でユネスコ創造都市ネットワークに加盟した都市で、都市圏人口は50万人、サンテティエンヌ市の人口は18万人で、19世紀から炭鉱業、金属加工、自転車製造、機械工業、テキスタイルで栄えていたが、衰退した産業都市の再生をめざした戦略的ビジョンをどう描くのか、建築物、都市景観、デザイナーの力をどう生かすのかが重要なテーマであり、魅力ある生活環境をつくりたいというのが根底にあった。

また、ポンピドゥセンターに次ぐ規模のモダンアートセンター、産業博物館があり、近郊には、有名なル・コルビュジエの設計になる建造物群がある。1998年からサンテティエンヌ国際デザインビエンナーレが開始されて、国際交流にも豊かな経験を積み重ね、デザインに挑戦してきた。デザインセンターであるシティ・デュ・デザインの設立は2005年で、昔は武器の製造場所であったが、クリエイティブな都市の拠点として使われている。

サンテティエンヌのクリエイティビティは、高等教育機関が中心となっており、デザインスクール、技術

学校、企業の研究機関も開設されて、さらにデザイナーの工房、ラジオ、テレビ局があり、さまざまなクリエイティブ産業や機関が集積しており、戦略的にネットワークづくりも進めてきた。

ユネスコ創造都市として、2009年のブラジルにおけるフランス年には、デザインセンターが中心となって外務省と協力し、ブラジルを巡回する展覧会を開催し、ヘルシンキ、リエージュ、ブラチスラヴァ、グラーツ、モントリオール、名古屋などとも連携してきた。

UCCNの重要性は、他の都市で同じ仕事をしている人たちと一緒に活動し、討論することにより、パリのユネスコ本部で行われるデザイン都市のワーキンググループや中国・深圳でのデザインのネットワーク会議の参加は非常に楽しい、面白い経験であったという。また、地元産品を土産にしようとする「コード・スーベニア」プログラムにネットワークとして取り組んでおり、デザイナー、企業、メーカーなどのプロポーザルを得て、地元の生産品による土産物カタログをつくる。コード・スーベニアによって地元でできたものを土産にできれば、都市のイメージづくりに寄与し、ローカルなクリエイターを力づけることになる。

中でもデザインビエンナーレはキーイベントということができ、デザインの力をツールとして、社会的な一体感を生み出すために使おうというコンセプトで、「エンパシーシティ」（我々の都市の力を結集して）というプログラムを立ちあげた。これは、3週間の間にフランスだけではなく、全世界から14万人のビジターがあり、大きな成功を収めた。

ユネスコのデザイン創造都市は、都市再生へのひとつのイニシャチブになるが、継続した改善が必要で、デザインをもとにクリエイティブ産業、クリエイティビティを創成する息の長い取り組み、政策が必要で、創造都市によるネットワークは、この新しい価値をつくるための枠組みとなり、次世代にわたるヒューマニズムづくりの土台となると述べていた。

## 2) - c. ブラッドフォードの取組

ユネスコ映画都市であるイギリスのブラッドフォード市からはBCB（コミュニティラジオ）ディレクターの、マリー・ドーソン氏が次のように報告した。

ブラッドフォードは英国の北部、ヨークシャー州の羊毛産業の中心のまちとして栄え、100年前は豊かな都市であった。現在の人口は50万人を超えており、周辺には小さな町と村、静かな田園風景が広がっている。伝統的に数多くの移民を受け入れており、1950年代から工場労働者としてパキスタン人が移住し、現在人口の約26%がパキスタンにルーツを持つ人たちで、現在は東欧の人たちが増加しており、若年人口が急増し、貧富の格差が比較的大きな都市でもある。

ユネスコに映画都市として申請した理由は、映画に関する歴史があるからで、映画の初期の頃、ロンドンにやや遅れて、映画スタジオが9軒もブラッドフォードにでき、30年の歴史を持つ国立メディアミュージアムも、ブラッドフォードにある。

4年前に映画の創造都市としてユネスコに認定されたが、申請のプロセスは長くかかったので、認定を得るために何が必要か？ クリエイティブ産業やアーティストだけではなく、全ての市民に対して、社会経済的にどのような影響があるかを深く考えることになった。

その結果、映画都市として重要な4つのアクション「楽しむ」「学習する」「つくる」「訪問する」を提唱した。これらは、デザイン、工芸などその他のジャンルにおいてもあてはまるものであろう。

映画を「楽しむ」というのは単純なことで、映画館に行く人たちは、映画を楽しむに行くわけで、ブラッドフォードではいくつかの映画祭を開催し有名な俳優、ディレクターを招いている。子どもの映画祭も間もなく開く予定で、映画を地域社会に溶け込ませようと、映画館だけではなく田園地域でも映画を見られる場所づくりをしている。空気を入れて膨らませる巨大なスクリーンを昨年、公園につくった。週末や学校が休みには、みんなが家族と共に、映画と一緒に見ることもできる場だ。

パキスタンにルーツをもつ人たちが多くことから、昨年、BBC と協力して、インド映画 100 周年のイベントを開催し、ムンバイ（ボンベイ）で製作されたいわゆるボリウッド映画シリーズを上映した。このイベントは多くの聴衆を魅了して大成功し、また、ボンベイ版カルメンというすばらしいダンスと音楽イベントを行い、日曜の夜にテレビ放送され、ブラッドフォードと英国全域に広がり、活気にあふれたすばらしい経験となった。

「学習する」ことでは、ブラッドフォードは本当に大切な映像リテラシー法を開発して、小学校の子どもたちが、映画を活用して聞く・書く・読むことを学ぶ知識プログラムを展開している。これは、映画を学ぶだけではなく、映画から学ぶという活動である。ブラッドフォード大学は、映像リテラシープロジェクトの成果を測定している博士課程の大学院生を支援した。昨年はブラッドフォード・カレッジの一部に、ボンベイの学生の相互訪問の促進を目的とするウィストリングウッズ国際映画スクールをつくった。また、地域住民が生涯学習としてより映画について知識が深められるように、図書館、ミュージアム、ギャラリーで映画を放映し、話し合いの場も設けている。

映画を「つくる」ことについては、ブラッドフォードでの映画製作を増やすために、映画をつくる場所として優れていると認められるように努めている。映画撮影に必要なものは全部、ブラッドフォードで入手できるようにして、ビジネスセクターと協力し、食事のケータリング、撮影クルーの輸送など映画づくりに必要なものは、すべて整えられているように取り組みをスタートさせている。BBC、ITV フィルム、BFI などともパートナーシップを結んでおり、多くの映画製作者がブラッドフォードにやって来るようになった。アカデミー賞を受賞した『英国王のスピーチ The King's Speech』は、ブラッドフォードで多くのシーンが撮影されている。

「訪問する」ことでは、ツーリズムを展開して映画創造都市に多くの訪問者、ツーリストを招き入れたいと考えている。これまでの撮影スポットなどの遺産を活用しながら、今後生まれる資産も加え、常に新しい映画都市の実際を見られるようにしていきたい。

ブラッドフォードは、映画以外でも創造都市であり、ブラッドフォード生まれの著名なアーティストや作曲家がおり、ブラッドフォードの近郊、中心から西にあるハワースは、日本でも有名なブロンテ姉妹の住んでいた場所でもある。日本語の案内表記も作ったので、是非、ブラッドフォードに、ハワースに来ていただきたいと結んだ。

## 2) - d. 2015 年 UCCN 金沢会議・市長サミットの開催に向けて

最後に、金沢市卯辰山工芸工房館長の川本敦久氏が、金沢がユネスコ創造都市に認定されたのを機に、若手の工芸家、美術家が異文化との交流の中から新たな刺激を受け、国際的な人脈や視野を得ることができるよう開始した、UCCN の加盟都市を訪れるプログラムである「クリエイティブ・ワルツ」について発表した。

クリエイティブ・ワルツによって、2010 年から 16 名を世界に派遣しており、派遣者からの報告書によれば、以下のような成果が挙げられている。

サンテティエンヌの産業博物館の訪問では、リボン、織物資料が展示されており、このまちの産業の全貌を明確に見ることができ、非常に緻密な織物がつくられていたことを目の当たりにし、これがフランスのファッションを支えてきた産業であること、そして展示された甲冑、馬具、銃などの武器の製造技術が自転車の製造に活かされており、こうした変遷の中にデザインの発展過程、多様性というものを知ることができたという。これは、金沢の加賀藩御細工所と同じで、御細工所も元々は武器を修理し作っていたが、太平の世になって工芸品や生活に身近なものをつくるようになってきた歴史とよく似ている。

ブラッドフォードではワルツの派遣者が着いたときに、翌日から訪れる各施設の 3 人の責任者から、タイ料理の店で歓迎を受けた。米を使った料理に感動し、映画のまちのスタッフジャケットをもらい、それを着

てまちを歩いていると、同じジャケットを着て映画を観る子どもたちなどに接し、映画のまちを応援しようという気風が感じられたという。

金沢と同じクラフトシティであるサンタフェのコミュニティカレッジでは、金工、ガラス、陶芸、木工、家具デザインなどの研修を見学し、クラフトをまちのひとつの産業、文化として捉えていることが良く分かること、また、立派なスタジオを持つ売れっ子の若手アーティストが、コレクターとして若手作家をサポートしている姿に感銘を受けたという。

このように、ワルツの派遣者が共通して感じたものは、観光とは違った密度のある経験をするることによって自分を見つめ直し、日本人としての生き方、生き様を認識する必要があると考えさせられる機会になり、現地で感じ、見て、触れて、まちを歩き、人びととふれあう経験が非常に重要なものであること、海外からも深く愛される金沢のまちのあり方をより戦略的に創造していかなければならないことなどである。

\*\*\*\*\*

以上のように、UCCN では、これまで7分野ごとのサブネットワークの集まりの中で、相互の経験交流や共通イベント（「コード・スーベニア」など）を行ってきたが、今後は、分野を超えたダイナミックな交流が始まろうとしており、2015 年の UCCN 金沢会議に向けた盛り上がり期待されることである。

## ■ユネスコ創造都市ネットワーク 申請書様式

\*以下は、ユネスコが公表している資料を和訳した

申請書には以下の書類を添付すること

- ・市長による立候補表明の公式文書
- ・国内ユネスコ委員会からの立候補承認の公式文書
- ・当該都市の申請に対してしっかりとした議論をふまえた上で、申請を支持する

ユネスコ創造都市（少なくとも5都市）からの公式な支援文書。3都市は申請都市とは違う地域（アフリカ、アラブ諸国、アジア・太平洋、欧州・北米、ラテンアメリカ・カリブ諸国の5地域）であること。文書は市長または公的な都市の代表者からの署名入りであること。

- ・申請分野に関連する全国的な専門家協会からの公式支援文書（たとえば作家や音楽家、デザイナーの全国組織）

申請書はユネスコ事務局へ2014年3月20日正午（中央ヨーロッパ時間）まで受付。規定の申請書でないもの、または締切日を過ぎたものは審査されない。

ユネスコは提出された申請書に不備があった場合は、速やかに申請者へ通知する。

申請都市は（通知された）項目を完成させて2014年4月20日正午（中央ヨーロッパ時間）までに提出すること。この日までに完成できなかった場合は審査されない。

- |  |                           |
|--|---------------------------|
| 1. 都市名                                 | —都市の多文化的なプロフィール           |
| 2. 正式な連絡担当者                            | —地方自治体／行政機構               |
| 主な窓口                                   | —都市計画の政策と戦略の概要            |
| 敬称（称号）、姓、名、機関／役職、住所、電話、Fax、メールアドレス、その他 | —人口と経済のデータ                |
| 代理窓口                                   | 5. 創造資産とプログラム（最大6000ワード）  |
| 敬称（称号）、姓、名、機関／役職、住所、電話、Fax、メールアドレス、その他 | 以下のものを含む                  |
| 3. 分野                                  | 消費と娯楽のインフラストラクチャ          |
| 4. 導入（最大3000ワード）                       | —文化センター、クラブ、協会            |
| 以下のものを含む                               | —プロダクションセンター（生産の拠点）       |
| —都市のマネジメントチームの紹介（氏名、役割、メールアドレス、電話）     | —映画館                      |
| —申請の動機                                 | —書店                       |
| —都市の概要／一般的な情報                          | —図書館                      |
| —地理                                    | —美術館                      |
| —都市の位置づけ                               | —コンサート会場                  |
| —インフラストラクチャ                            | —フェスティバル、フェア              |
|  | —アーティスト・文化専門家への支援メカニズムと政策 |
|  | 人材                        |

- －地域クリエイターの存在と関係者
- －関連する専門家組織
- －近年の雇用創出と予測
- －現在および将来の創作環境

#### 教育／調査／能力育成

- －教育プログラム、関連機関
- －資格の水準
- －創造セクターにおける年間卒業生の数
- －創造セクターにおける著名な教授、受賞
- －国際的な名声
- －非公式な教育の機会

#### 6. 創造都市ネットワークへの都市の貢献(最大 8000 ワード)

目的に向かって、そしてミッション・ステートメントに記述された事項に関してどのように進めていくのか、記述すること

#### 目的

- －地域レベルでの創造、制作、普及、文化的な財とサービスの享受の強化
- －特に社会的弱者（女性や若者を含む）の創造性・創造的表現の促進
- －文化的生活や文化的な財の享受へのアクセスと参加の増進
- －地域再生計画へ向けた文化・創造産業の統合

#### アクション分野

- －パイロットプロジェクト：発展の鍵として創造性の重要性を示す戦略
- －優良事例の促進：効率と効果が証明されたプロジェクトや対策の交換
- －研究：調査、分析、創造都市事例の評価
- －会議：相談、会合、バーチャル会議
- －協カプログラム：南北間・南南間での援助を必要とするメンバー都市への支援イニシャチブ

- －訓練と能力育成：インターンの交換、訓練生と学習モジュール
- －政策措置：地域／国内開発計画へ関連づけることを率先する

#### 人材

- －地域クリエイターの存在と関係者
- －関連する専門家組織
- －近年の雇用創出と予測
- －現在および将来の創作環境

#### 7. コミュニケーションと可視的な資産（最大 3000 ワード）

以下のものを含む

- －創造性に寄与する地域プログラムやメディア
- －顕彰プログラムやその他の形式の認証
- －イベント（地域、国内、国際）

#### 8. 予算

創造都市ネットワークへ参加した場合の、年間の活動関連費を記述（U S ドル）

以下を含む：人件費、機材・設備、通信、サービス、会議、その他

#### 9. 実施報告

ネットワークに加盟した場合、ユネスコの要求があれば自治体は、創造都市に関する活動の効果的推進に関する詳細な情報を提供することを約束する

#### 10. 必要な添付書類

署名

## (2) 国内の創造都市・創造農村の動向

創造都市ネットワーク日本（CCNJ）は設立後1年を経過して、33自治体、その他13団体まで参加団体が増加している。ここでは、幹事自治体以外の自治体の特徴的な動きを取り上げておこう。

### 1) 「高松市創造都市推進ビジョン」

高松市では、大西秀人市長のリーダーシップのもと、2012年4月に創造都市推進局が立ち上がり、創造都市推進条例によって審議会が設置されて、1年がかりで本格的な「高松市創造都市推進ビジョン」づくりを行ってきた。

ビジョンづくりの推進体制として、創造都市推進審議会を設置して、有識者や市民の意見を集めるのみならず、審議会の下に40歳以下の市民による「高松市創造都市推進懇談会（U-40）」を設置しているのが注目される。現場で活動している若手の柔軟な発想を提案に活かそうという試みであり、U-40の若い人たちがぎっくばらんにアイデアを出し合うような体制で議論を深めてきた。

人口42万人の高松市では、少子高齢化が進み、2050年には10万人ほど減少して31万2000人までになるという将来推計の中でも、持続可能なまちとしての希望の灯りが見えるようにと、灯台の灯りがまちを照らすようなロゴマークをつくった。



次に、高松らしい創造都市とは何かを討論する中で、高松市の特徴を、四国の中核拠点都市であり、インフラが集積した都市的な利便性のある一方で、瀬戸内海の美しい海と四国の穏やかな自然や山なみがある潤いのある田園都市であり、その中で市民が芸術文化の活動を花開かせて、街全体が元気になり持続可能性のあるまちとして発展していくイメージを絵にすることによって、具体的に何をやるかを市民に示している。ここには大西市長が打ち出した「創造性豊かな海園、田園、人間都市の実現」というイメージが重なっている。

創造都市の核となるのは、創造的な市民の活動である文化芸術、工芸、伝統芸能あるいはスポーツである

が、これらから派生してまち全体を元気にしていこうと、創造的な文化芸術、伝統芸能、スポーツ、工芸等を、商工業の振興、まちづくり、農林水産業の振興、観光の振興等に広げることによって、魅力あふれ活力ある創造都市にしようというイメージを描き、その推進方向として、独創指向、世界指向、未来指向の3つの戦略を進めることを打ち出している。

高松らしさを発信するためには地域だけを見るのではなく、世界全体を見てグローバルに開く考え方でなければならず、将来を見通した「独創・世界・未来指向」で、文化芸術の持つ力を街全体の活力に繋げる創造都市を進めていこうという戦略を基本に据えている。

このビジョンの基本的な考え方に基づいて、6つの分野でプロジェクトを配置している。

具体的には、「交流空間」「食」「生活工芸」「祝祭」「国際会議」、それから「こども」という6つの分野で括り、創造都市を実現するためのプロジェクトとして43の事業を掲げている。例えば、「交流空間」では、市内中心部でこどもの数が減って統合された小学校－高松出身の文豪・菊池寛の出身校である四番丁小学校が他の二つの小学校と統合されて新番町小学校に移った一跡地を活用して創造支援センターという、新産業を創る起業を支援する小さなオフィス、インキュベータールームを設置した。そこに埋蔵文化財センターと、NPOの市民活動センター、地域のコミュニティセンターとを同居させることによって、地域住民と一緒に新たな創造的な産業も含めた起業を支援していこうとしている。

「生活工芸」の分野では、2012年に開催した「瀬戸内生活工芸祭」－高松を代表する工芸である漆器、石材のほか、盆栽などといった伝統的な工芸を集めて展示する－を2014年には、高松の作品のみならず、全国から集めて展示開催する予定である。

「祝祭」の分野では、今や海外からの評価も高く、2010年と2013年の2度の開催を成功させた瀬戸内国際芸術祭をトリエンナーレとして継続開催する。高度経済成長の陰で、コンビナート開発や産業廃棄物の投棄で汚された瀬戸内海と島々の環境と景観をアートの力で甦らそうという壮大な実験であり、期間中に国内外からの30万人を超える訪問者に地域は大きなインパクトを与えている。世界中から駆け付けたアーティストとの共同の作品制作によって眠っていた地域の記憶が再生され、来訪者との交流の中で住民たちは自信を回復し、「空洞化しつつあった誇りを回復させる」ことにつながっている。こうした中で、島を離れていた家族が帰還を決意することによって閉校中の小中学校を再開する運びになったと、開催地の一つである高松市男木島から報告されている。

「国際会議」としては2014年に、日仏の自治体交流会議を開催する予定である。第1回は2008年にフラ





ンスのナンシー市で、第2回は2010年に日本の金沢市で、第3回は2012年にフランスのシャルトル市でというように2年おきに日仏交互に開催されてきた。次回の第4回は2014年に高松で開催される。

6分野の中で特徴的なものとしては、「こども」の分野が挙げられる。将来を担うこどもたちが、高松で創造的な活動をして大きく明るく育ってゆき、それがまちの活性化につながるという視点から、こどもに関する事業を創造都市のプロジェクトに入れている。これからの高松を担うこどもたちを地域全体で育むことで、創造性を発揮できるこどもに育てていき、これによってまちの将来の明るさ、活気もたらされるという考え方で、具体的な取り組み事業として、「芸術士派遣事業」「地域密着型トップスポーツチームの活用」「ものづくりふれあい教室事業」を掲げている。

芸術士派遣事業とは、高松市の独自事業で高松オリジナルの取り組みであり、「芸術士」を保育所やこども園、幼稚園などに派遣するものである。さまざまな分野の芸術家や若い芸術家の卵や、絵や彫刻、デザインといった分野で芸術的な才能を発揮する表現者、作家たちを、NPO法人アーキペラゴ（三井文博代表）を通じて保育所などに派遣して、こども達の芸術的センスを育むという事業である。

さらに、「もっともっと創造プロジェクト」という分野を設定し、新規事業として「瀬戸内メディアアート祭」の開催や、サテライトオフィスを山間部・島嶼部に誘致する事業もビジョンの中に取り込んで、文化芸術の力で高松全体を活性化していこうという取組みを始めている。

また、ビジョンづくりと並行して、「紺屋町カフェ」という社会実験的プロジェクトも動かしてきた。高松市美術館で使われずにいたスペースを活用して、「U-40」の人たちのアイデアで漆器や庵治石などの高松独自の工芸品を展示販売するのとセットで、若い人たちがいろいろなテーマでトークするカフェを復活させようというプロジェクトである。

2013年9月25日には、この高松市美術館を会場に日本ファッション協会主催の「生活文化創造都市高松会議」が開催されて、近藤誠一・前文化庁長官の記念講演ののち、「創造性と都市の魅力づくり」をテーマとするパネルディスカッションが開催され、これに合わせて、「紺屋町カフェ」が臨時に開かれて「創造の場」づくりに貢献した。

## 2)『創造農村―過疎をクリエイティブに生きる』の出版

創造農村の動向として注目されるのは、2013年夏に木曽町で開催された第3回創造農村ワークショップ（WS）の盛り上がりの中で、その背景となった考え方や新しいコンセプトなどを盛り込んだ書物が関係者の熱意によってまとめられ、『創造農村―過疎をクリエイティブに生きる』が刊行されたことであろう。そこでは、主催地の木曽町、第2回の開催地である篠山市、さらに、手づくりのビエンナーレで注目される中之条町、そして、「創造的過疎」の実践でマスコミから注視される神山町のリーダーによる実践と熱いメッセージも掲載されており、以上の4地域の他、第1回創造農村WS開催地である仙北市、ユネスコ創造都市ネットワークにガストロノミー分野での登録をめざす鶴岡市、「創造的過疎」を掲げてサテライトオフィスの集積が進む神山町、瀬戸内国際芸術祭を追い風にアートによる島の再生をめざす直島と小豆島、三線と工芸を活かしたまちづくりが進む読谷村など、多様な取り組みが紹介されており、過疎地域における創造的地域づくりへの励ましになるものと思われる。

第4回創造農村ワークショップは北海道の東川町で2014年8月に開催されることも決まり、全国の農山漁村にまでCCNJが広がりを見せることで、「文化立国中期プラン」に掲示されている、170自治体のCCNJへの参加も実現に近づくであろう。

### (3) 東アジア文化都市事業のスタート

2014 年より、新たに東アジア文化都市 East Asian City of Culture 事業がスタートすることになった。これは、1985 年に開始された「欧州文化首都」事業に範を取り、アジアの平和と共生、持続的発展に寄与するために、都市の文化交流を進めようとするもので、2011 年の日中韓 3 国文化大臣会合において、日本側から提案し合意を見たものであり、ゆくゆくはアジア全域の都市に広げる構想である。すなわち、日中韓 3 国が文化芸術による発展を目指す都市を選定し、その都市において様々な文化芸術イベントを実施するのであり、以下の目的を掲げている。

1. 東アジア域内の相互理解と連帯感の形成を促進する。
2. 東アジアの多様な文化の国際発信力を強化する。
3. 都市の文化的特徴を活かして、文化芸術・クリエイティブ産業・観光の振興を図り、継続的に発展する。

事業スタートの 2014 年には日中韓 3 国がそれぞれ、東アジア文化都市を選定し、記念の交流事業を展開することとなり、以降は 2015 年－中国、2016 年－韓国、2017 年－日本と順番に毎年 1 都市を選定する運びとなった。初年度は中国が泉州市、韓国が光州広域市、日本が CCNJ の幹事代表を務める横浜市が選ばれて、交流事業を開始した。

最初に、開幕式典を開催したのは中国・泉州市であり、2014 年 2 月 13 日の開幕式には、泉州市市長や光州広域市東アジア文化都市推進委員会委員長、横浜市副市長らが出席して、記者発表と挨拶を行った。14 日の記念公演会には、横浜市からは広報親善大使のアイドルグループ「でんぱ組.inc」が登場して、現代日本の若者文化を発信して、聴衆から盛んな拍手を受けた。また、伝統的日本音楽ユニット「岩田ユニット・あべや」による尺八、琴、三味線等による特別公演会は伝統と現代との融合した新たな日本文化を発信して注目された。

同日には東アジア文化都市記念フォーラムも開催され、光州広域市東アジア文化都市推進委員会委員長のジョン・ドンジェ氏が東アジア文化都市事業の背景と歴史的意義について語り、東アジア文化都市実行委員会副委員長の佐々木雅幸氏が、横浜市の創造都市事業の取組の経緯と特徴について発表し、参加した泉州市側の専門家から、熱心な質問が続き、学術交流の重要性が認識された。

引き続き、舞台を移して 2 月 25 日には、横浜市での開幕記念イベントに泉州市、光州広域市の代表が集集して、開会式と、ウェイウェイ・ウー（二胡／中国）ベー・チェチョル（テノール／韓国）らとの競演によるオープニングイベント「三都浪漫～時空を超えた音絵巻」が行われ、多くの聴衆を魅了した。

さらに、3 月 18 日から 20 日には光州広域市において開幕式、特別公演会、文化施設見学などが行われ、泉州市、横浜市の代表団、アイドルグループ「でんぱ組.inc」や伝統的日本音楽ユニット「岩田ユニット・あべや」の他、3 都市のマスコミもそれぞれ交流を行った。

このように、東アジア文化都市は順調な滑り出しで、今後の展開が期待されているのであり、上述したユネスコ創造都市ネットワーク（UCCN）と、創造都市ネットワーク日本（CCNJ）の中間のレベルでの、ネットワークに発展してゆくものと思われる。

NPO 法人都市文化創造機構

## 第3章 参加団体アンケート 集計結果と特徴

### (1) 参加団体の概要

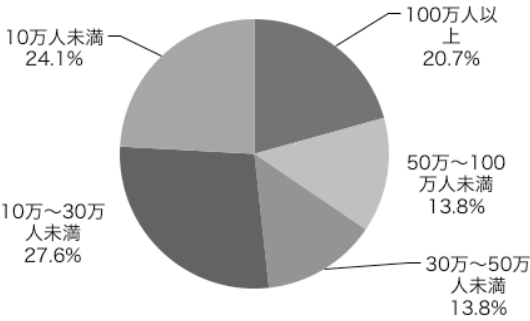
CCNJ のサイトに各自治体の取組を紹介するページを設ける事を目的に、CCNJ に参加する 33 自治体を対象に取組内容や今後ユネスコに申請をする可能性があるかのアンケートを行なった。(有効回答数 29 件)「創造都市は多様性こそ命」の言葉の通り、多種多様な取組が見られる。

#### 1) 人口規模

全体としては、100 万人を超える大都市から 10 万人未満の小規模自治体まで、非常にバランス良く構成されている。これは、自治体規模の大小にかかわらず、創造都市、創造農村という概念が文化政策、都市政策を語る上で注目されてきたことを表していると言えよう。また、人口規模 30 万人未満の自治体が約半数を占めているが、次年度以降、必然的にこのセグメントの割合が増加していき、大都市における創造都市論との違いをより明確にしていくステップになるであろう。

表 1-1 人口規模別回答状況

人口規模 (H26.3 現在)	回答数
100 万人以上	6 (20.7%)
50 万～100 万人未満	4 (13.8%)
30 万～50 万人未満	4 (13.8%)
10 万～30 万人未満	8 (27.6%)
10 万人未満	7 (24.1%)
全体	29 (100%)

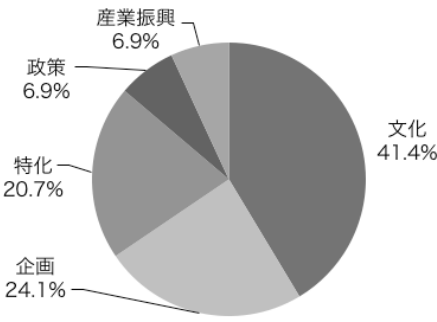


#### 2) 主管部署

「文化芸術創造都市」を推進する主管部署は、約 4 割の自治体で文化振興系の部署が担っており、その中で最も多い担当課名は文化政策課である。次いで、企画系と創造都市施策特化系（以下特化系）が続く。ユネスコ創造都市認定都市、もしくは申請中の都市には、特化系の部署（鶴岡・食文化推進室、神戸・デザイン都市推進室など）を設けている例が目立つ。企画系の部署が担当するケースは、自治体規模が小さくなるほどその割合が高い。

表 2-1

担当部署系統名	該当数
文化振興系	12 (41.4%)
企画	7 (24.1%)
特化	6 (20.7%)
政策	2 ( 6.9%)
産業振興	2 ( 6.9%)
全体	29 (100%)



以下担当課、担当室名

政策企画部プロジェクト室、文化施設、文化財課、食文化推進室、企画政策課、文化振興課、文化デザイン課、創造都市推進課、文化政策課、文化創造推進室、企画調整課、企画財政課、文化室、企画課、企画課創造都市推進グループ、文化芸術企画課、デザイン都市推進室、創造都市推進局産業振興課、総合政策課、産業振興課

表 2-2 人口規模別担当部署系統

担当部署系統						
自治体規模	文化	企画	特化	政策	産業振興	総計
100 万人以上	3		2	1		6
50 万～ 100 万人未満	2	1	1			4
30 万～ 50 万人未満	1	1		1	1	4
10 万～ 30 万人未満	4	2	2			8
10 万人未満	2	3	1		1	7
総計	12	7	6	2	2	29

### 3) 主な取組の内容

主な内容としては6割以上の自治体がアート関係の取組を挙げているが、一つの分野だけではなく、音楽とアート、食文化と映画というように、多分野を掛けあわせた複合的な取組が多く見られる。また、分野は同じでも一般的なイベント形式、地域住民への文化定着としての教育推進形式、産業支援・担い手支援形式というように異なる切り口から地域における創造性の向上に挑戦していると言える。

また、ヨコハマトリエンナーレ（横浜市）、札幌国際芸術祭等（札幌市）が代表するような人口規模 100 万人を超える自治体で行われる大規模な現代アートイベントだけでなく、大地の芸術祭（十日町市）、中之条ビエンナーレ（中之条）といった、里山や空き家などを地域資源と捉えて、文化活動を結びつけることで、まちづくり活動に昇華させている例や、ならまちわらべうたフェスタ（奈良市）、木曽学研究所（長野県）の例のように、文化＝「地域の暮らし」という視点で取り組む事例も多く挙げられている。

主な取組にあげられた内容

アート（デザイン系）イベント  
アート地域交流  
音楽祭、音楽イベント  
食文化の振興、発信  
伝統産業、工芸  
舞台芸術、パフォーマンス  
映画祭

### 4) 造都市推進や取組に関する条例、ビジョン等

主な創造都市の取組紹介では、施策を進める上で条例や計画、振興の為のビジョンを約6割（18件）の自治体があげた。本年メディアアーツでユネスコに認定された札幌市は「創造都市さっぽろ宣言」を2006年に掲げている。本年度では10月に高松市が「高松市創造都市推進ビジョン」を策定した。それぞれの自都市が目指していく方向性を定めるとい流れが、今後ますます加速していくであろう。また、創造都市推進や取組に関する条例、ビジョンを制定している都市のほとんどは、景観行政団体でもある。（豊

島区は認定に向けて準備中) まちの景観が文化施策と密接に関係し合いながら進められることで、より創造的な空間が構成されることを表していると言えよう。伝統的な古い町並みを多く残す地域では、景観計画の他に歴史文化基本構想や歴史的風致維持向上計画も制定されている。

以下、施策を実施していく基本、もしくは過程で名前があげられた条例、ビジョン

文化芸術都市創造条例、文化芸術振興条例、文化振興条例、文化芸術都市創生計画、文化振興ビジョン、文化創造都市ビジョン、推進プログラム、創造都市宣言、文化創造都市宣言、等

5) 活動拠点

交流センター、文化政策センター等が、取組を進めていく為に活動拠点としての役割を持っている事例が多く紹介されていた。運営をアート系 NPO 法人や外郭団体に委託する形式が多くみられ、産学官、市民と供に取組を進めていこうとする姿勢が感じられる。アーティストの支援、育成事業の為に施設も多い。

今回の調査では、運営体制の具体的な内容には踏み込んでいないが、実際にどのように拠点づくりが進められたのか、また、民間が管理・運営を行うことでどのような効果が期待されるか、実際に効果があったか、といった視点での調査を行い、ネットワーク内外で共有していくことで、さらに創造都市の取組を深みのあるものに繋げられるであろう。

6) ユネスコへの申請状況 (回答があった自治体のみ)

認定済	4 (デザイン 2、クラフト&フォークアート 1、メディアアーツ 1)
申請中	4 (食文化 2、音楽 1、クラフト&フォークアート 1)
予定無し	21

※申請までの過程については後述の、「ユネスコ申請に至る各都市の取組と経緯」を参照されたい

## (2) 取組事例 (詳細 :<http://ccn-j.net/>)

### アートイベント

#### ・札幌国際芸術祭 (札幌市)

複合的な地域体験型アートイベント。今年1回目となる「札幌国際芸術祭2014」を開催。<http://www.sapporo-internationalartfestival.jp/>

#### ・アート de まちあるき (仙北市)

重要伝統的建造物群保存地区を舞台にアートを展示。芸術、文化、歴史に触れるイベント。

#### ・中之条ビエンナーレ (中之条市)

参加団体の中でも規模の小さい自治体 (人口2万人弱) ではあるが、農村風景ともてなしに対する評価が高い、特色あるアートイベント。入場者数35万8千人 (2011年/創造農村シンポジウム 入内島氏発表内容より) <http://nakanojo-biennale.com/>

#### ・水と土の芸術祭 (新潟市)

新潟市を特徴づける「水と土」の文化・地域資源に着目し、その魅力をアートを通じて発見・発信し、市民と協働で磨き上げる芸術祭。72万4千人 (2012/総括報告書より)

#### ・大地の芸術祭 (十日町市)

過疎高齢化に悩む越後妻有地域を舞台にした、文化・芸術による地域づくりのアートプロジェクト。地域住民との協働による現代アート作品制作及び展示、ワークショップやパフォーマンスイベントなど。入場者数は、48万8千人 (2012年/大地の芸術祭実行委員会統括報告書より) <http://www.echigo-tsumari.jp/>

#### ・横浜トリエンナーレ (横浜市)

日本を代表する現代アートの国際展。次回は本年2014年に行なわれる。入場者数33万3千人 (2011年/横浜トリエンナーレ特設サイトより) <http://www.yokohamatriennale.jp/>

#### ・丹波篠山・まちなみアートフェスティバル (篠山市)

重要伝統的建造物群保存地区を舞台に地元ゆかりのアーティストが町屋に芸術作品を展示するイベント。  
<http://sasayama-art.com/>



十日町



篠山市

## 地域産業、工芸イベント

- ・金沢・世界工芸トリエンナーレ（金沢市）

金沢の伝統工芸を国内外に発信するとともに、さらに発展させて未来へと継承していく。

## 音楽イベント

- ・木曽音楽祭（木曽町）

日本のクラシック音楽祭の草分け的な存在。2014年に40周年を迎える。町民の手作りで始まり、ボランティアと行政が中心となり続けられている。

- ・浜松国際ピアノコンクール（浜松市）

1991年にスタート、若いピアニストの研鑽の成果を披露する場の提供と育成、振興、推進を目的としている。

- ・くるめ街かど音楽祭（久留米市）

多彩な音楽ジャンルのステージを複数会場で実施。市民の間に息づいている音楽文化を活かし、まちに誇りや賑わいをもたらすことを目指している。

## 舞台芸術、他

- ・フェスティバル／トーキョー／（豊島区）

こどもを対象としたアートワークショップ「にしすがも創造舎」、舞台芸術発信と育成拠点「あうるスポット」等を中心拠点に行なわれる日本最大の舞台芸術フェスティバル。<http://festival-tokyo.jp/>

- ・ならまちわらべうたフェスタ（奈良市）

今年で21回目、昔懐かしい遊びや風情が感じられるイベントとして古都奈良の秋の風物詩。日本ユネスコ協会連盟「第1回プロジェクト未来遺産」にも登録。



金沢市



浜松市



久留米市

## 交流、育成拠点の紹介

- ・八戸ポータルミュージアムはっち（八戸市）

「地域の資源を大事に想いながら新たな魅力をつくりだすこと」をコンセプトにした文化観光複合施設。

<http://hacchi.jp/>

- ・アーツコミッションヨコハマ（横浜市）

アーティストやクリエイター、NPO、市民、企業などの「創造の担い手」をサポートする中間支援機能。活動の相談、助成を行なう。

- ・静岡市クリエイター支援センター（静岡市）

クリエイティブ産業の集積を図るとともに、クリエイターと地元企業のマッチング、新商品開発を支援。

<http://www.c-c-c.or.jp/>

- ・鴨江アートセンター（浜松市）

ジャンルを越えたアーティストやクリエイター達の表現活動を支援し、市民や地域との交流を促進する拠点としてだけでなく、発信の拠点にもなっている。<http://kamoeartcenter.org/>

- ・東山 アーティスツ・プレイスメント・サービス（HAPS）（京都市）

芸術家の育成、活動支援、若手芸術家等の居住、制作、発表の場づくり。<http://haps-kyoto.com/>

- ・デザインクリエイティブセンター（KIITO）（神戸市）

創造的人材の育成・集積を図るためにゼミ、レクチャー、ワークショップなどを実施。<http://kiito.jp/>



八戸市



静岡市



神戸市



### (3) ユネスコ申請に至る各都市の取組と経緯

アンケートの回答によると、鶴岡市、新潟市、浜松市、篠山市の4都市が、平成25年度中にユネスコ創造都市ネットワークに申請書を提出。平成26年度中の認定を目指している。各都市ともに文化庁長官表彰（文化芸術創造都市部門）を受賞しており、申請にいたるまでに数年来の取組を重ねている。

ユネスコ創造都市ネットワークへの申請状況については、CCNJ参加団体においても非常に関心が高い事柄であるため、取組の概要と経緯について、新潟市と浜松市にヒアリングをおこなった。尚、2都市ともに平成26年度の幹事団体に選出されている。

#### 1) 新潟市／ガストロノミー

##### ①目的と背景

新潟市は、米を中心とした分野に関しては、国内外に比肩するものがないほど多様な文化（米作りの幅広い技術、コシヒカリ等のブランド、日本酒、菓子、発酵食、伝統的な料理、食関連イベント、顕彰事業、料亭、芸妓のおもてなしなど）を有する。



米を中心とした豊かな食文化を世界へ 新潟市

これら新潟市の食文化について、世界的な水準であることが認定されれば、地域の誇りづくりにつながるとともに、ユネスコの名称使用などを通じて、国内外に向けた強い発信力を持つ事ができる。

合わせて、ネットワークを結んだ都市と連携して相互のステータスをさらに高めて、交流人口の増加や地域の産業の育成にも貢献できる。

合わせて、ネットワークを結んだ都市と連携して相互のステータスをさらに高めて、交流人口の増加や地域の産業の育成にも貢献できる。

##### ②これまでの経緯

平成23年	2月	議会説明（認定に向け本格始動）
	8月	申請要旨提出
	11月	ユネスコ創造都市ネットワーク・ソウル会議出席 （ユネスコの事情によりネットワーク事業審査手が停止）
平成24年	8月	ユネスコ日本政府代表部特命全権大使に新潟市の取組を説明（パリ）
平成25年	3月	申請書素案提出
	9月	ユネスコ事務局次長に新潟市の取組を説明（パリ）
	10月	全州ユネスコ創造都市フォーラム出席
平成26年	2月	申請書提出

##### ③主となる取組団体

食と花の世界フォーラム組織委員会（食文化創造都市推進研究会）<http://www.shokuhana.com/about/>

##### ④平成26年度に予定されている事業

- ・食と花の世界フォーラムにいがた2014開催 <http://www.shokuhana.com/>
- ・にいがた食文化クリエイティブ・フォトコンテスト（第3回）

##### ⑤官民連携の取組

にいがた食の陣等、食のフェスティバル／食と花の世界フォーラムにいがた／食育・教育ファームの推進、ニューフードバレーの形成 など

## 2) 浜松市／音楽

### ①目的と背景

「創造都市・浜松」の実現に向け、ユネスコ創造都市ネットワークへ加盟することで、浜松の音楽文化を世界へ発信するとともに、他都市との連携や交流を図り、「音楽の都づくり」を推進していく。

### ○目指す創造都市の姿

- ・浜松のものづくりや音楽、多文化共生などの根底にある“やらまいか精神”“柔軟で寛容な市民性”が、まちづくりや暮らしに広く活かされていく都市
- ・市民が常に新しい試みにチャレンジし、次々と新しい価値を生み出していく都市
- ・創造的な人材や企業が集積し、日常空間を創造空間（魅力的な都市空間）に変え、市民の暮らしに刺激を与えていく都市

### ②これまでの経緯

平成22年	8月	第1回浜松創造都市推進会議開催時に加盟を目指すと公表
平成23年	3月	ユネスコに加盟申請書を提出 (ユネスコの事情によりネットワーク事業審査手続が停止)
平成26年	2月	新フォーマットに基づき、申請書再提出

### ③主となる取組団体

「浜松創造都市推進会議」

浜松市、浜松商工会議所、静岡文化芸術大学、浜松市文化振興財団などにより構成

### ④平成26年度に予定されている事業

- ・静岡国際オペラコンクール <http://www.suac.ac.jp/opera/soc/>
- ・世界青少年音楽祭

### ⑤官民連携、市民協働の取組

- ・みんなのはままつ創造プロジェクト／はままつくす



歴史と伝統を誇る楽器と音楽のまち 浜松市

昨今盛りあがりを見せている「創造農村」の鶴岡市と篠山市についても、同じく平成26年3月にユネスコに申請書を提出している。2都市ともに設立時からCCNJの幹事団体として、活動を率先している。以下取組の概要である。

### 3) 鶴岡市／ガストロノミー

多彩な食文化を次代に継承するとともに、食関係産業の振興に取り組むことを目的に、産・学・官・民の連携のもと「鶴岡食文化創造都市推進協議会」を設立。ユネスコ創造都市ネットワークへの加盟申請の主体事業となっている。平成23年にはソウル市において開催された「ユネスコ創造都市ネットワーク会議 in ソウル



鶴岡の料理人が復活させた庄内藩主への「献上膳」 鶴岡市

2011」に参加し、鶴岡の食文化の魅力と将来ビジョンをアピールする演説を行い、同ネットワークへの加盟を目指すことを表明。さらには国際的なプロモーション活動を展開している。

### 4) 篠山市／クラフト&フォークアート

丹波篠山築城400年祭をきっかけに、篠山に残る様々な文化を土台に新しい独自の文化を創造することで、内外に誇れる丹波篠山スタイルを創り出していこうと創造的なまちづくりを進めている。平成25年度9月に、篠山市創造都市推進計画を策定した。「暮らしに結びついた産業」を創造産業と位置づけ、その具体的な振興策を取りまとめている。



100年後の未来に繋ぐ創造農村 篠山市

早ければこの秋に登録承認が発表される。また各都市においては今年度も活発な活動が予定されている。今後の動向に注目したい。

CCNJ 参加団体アンケート概要

人口規模 区分	都市 名	所管部署	所管 部署 系統	団体 区分	ユネスコ 創造都市 申請状況	活動内容の概要	文化交流拠点および 派生組織、協力団体	文化庁 長官表 彰受賞 年度	創造都市に関連する 指針・宣言・条例・計画等	景観行 政団体 ※	景観計画 ※	歴史文化基本 構想 歴史的風致維 持向上計画
100万人 以上	横 浜 市	文化観光局 創造都市推進部 創造都市推進課	特 化	政 令 市	予定なし	歴史的建造物などを活用し、アーティスト・クリエイターの活動拠点を提供する「創造界隈拠点」の形成、アートの国際展である横浜トリエンナーレの開催や、スマートイルミネーションの開催に取り組んでいる。	BankART Studio 急な坂スタジオ 初黄・日ノ出町文化活動振 興拠点 ヨコハマ創造都市セン ター・象の鼻テラス アーツコミッションヨコハ マ（中間支援機能）	H19	横浜市文化芸術創造都市施 策の基本的な考え方 横浜市の文化芸術政策にお ける中期的方針	H16.12	横浜市 景観計画	-
100万人 以上	札 幌 市	市長政策室政策 企画部 プロジェクト担 当	政 策	政 令 市	H25年度認 定 メディア アーツ	アジア初の「メディアアーツ都市」認定を受ける。(H25.11) さっぽろ雪まつりプロジェクトマッピングな どの、メディアアーツを活用した既存の観光資源 の魅力向上や、まちの活性化をベースに、都市ブ ランド力の向上、産業振興・人材育成を実施。札 幌国際芸術祭2014を開催予定（2014年7月～）	札幌駅前通地下歩行空間北 2条広場 大通公園 札幌メディアアーツラボ 通称：SMAL（産学官連携 組織）	H20	創造都市さっぽろ宣言 札幌市文化芸術振興条例 札幌市文化芸術基本計画	H16.12	札幌市 景観計画	-
100万人 以上	神 戸 市	企画調整局 デザイン都市推 進室	特 化	政 令 市	H20年度認 定 デザイン	創造都市「デザイン都市・神戸」の推進。 「KOBEデザインの日」記念イベントや、デザイ ン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）を拠 点に創造的人材の育成・集積を図るためのゼミ、 レクチャー、ワークショップなどを実施。	KIITO（デザインの拠点）	H22	「デザイン都市・神戸」を 推進するための基本的方針 神戸2010ビジョン文化創 生都市推進プラン	H16.12	神戸市 景観計画	-
100万人 以上	京 都 市	文化市民局 文化芸術都市推 進室 文化芸術企画課	文 化	政 令 市	予定なし	「京都芸術センター等による芸術家の育成・活動 支援」や「ロームシアター京都の創造・発表拠点 としての再整備」、「若手芸術家等の居住・制 作・発表の場づくり」等を重点的に展開。	京都芸術センター ロームシアター京都 HAPS（アーティスト支援 センター）	-	京都文化芸術都市創生条例 京都文化芸術都市創生計画	H16.12	京都市 景観計画	京都市歴史的 風致維持向上 計画 (H21.11)
100万人 以上	さい たま 市	市民・スポーツ 文化局 スポーツ文化部 文化振興課	文 化	政 令 市	予定なし	「さいたま市文化芸術都市創造条例」に基づく 「さいたま市文化芸術都市創造計画」を策定中。 盆栽、マンガ、人形鉄道といった地域資源を活 用・発信や、芸術祭の開催、アーティスト・イ ン・レジデンスを通じた芸術家と地域の交流促進 などを推進する予定。	-	-	さいたま市文化芸術都市創 造条例 さいたま市文化芸術振興計 画	H16.12	さいたま 市 景観計画	-
100万人 以上	仙 台 市	市民局文化ス ポーツ部 文化振興課	文 化	政 令 市	予定なし	「劇都」「楽都」をテーマに、音楽振興・舞台芸 術振興を実施。仙台国際音楽コンクール、仙台ク ラシックフェスティバルの開催や、舞台芸術振 興、仙台フィルハーモニー管弦楽団の運営支援な どを行う。	せんだい演劇工房10-BOX (演劇系練習施設)	H21	仙台市における芸術文化振 興のための指針	H16.12	仙台市 景観計画	-
50万～ 100万 人未満	新 潟 市	文化観光・ス ポーツ部 文化政策課	文 化	政 令 市	申請中 ガストロノ ミー (食文化)	食を生かした創造的なまちづくり、食文化の発信 や、暮らし文化をアートを通じて発見・発信する 「水と土の文化創造」、マンガ・アニメを生かし たまちづくりなどを「新潟市文化創造都市ビジョ ン」をもとに取り組んでいる。	-	H24	新潟市文化創造都市ビジョ ン	H16.12	新潟市景 観計画	-
50万～ 100万 人未満	浜 松 市	企画調整部 企画課創造都市 推進グループ	特 化	政 令 市	申請中 ミュージッ ク (音楽)	創造的・独創的なスタートアップ事業応援プロ ジェクト「みんなのはままつ創造プロジェクト」、 鴨江アートセンターでのアーティスト・ク リエイターの表現活動の支援等を実施。	鴨江アートセンター (クリエイター支援&地域 交流活動)	H23	創造都市推進のための基本 方針	H16.12	浜松市 景観計画	-
50万～ 100万 人未満	静 岡 市	企画局 企画部企画課	企 画	政 令 市	予定なし	国内外のパフォーミングアーティストが集結する 「大道芸ワールドカップ」、姉妹都市・カンヌ市 とのつながりをPRする「シズオカ×カンヌウィ ーク」の開催、シズオカ市クリエイター支援セン ター（CCC）の運営等。	CCC（静岡市クリエイター 支援センター）	-	静岡市まちなみがき戦略推進 プラン ～静岡を「希望の岡」に ～	H16.12	静岡市 景観計画	-
50万～ 100万 人未満	鳥 取 県	文化観光局 文化政策課	文 化	県	予定なし	アーティストリゾート（アーティストインレジ デンス：AIR）を推進。受け入れ団体の育成（暮 らしとアートとコノサキ計画）や、拠点施設を持 ったAIR事業の支援（鳥の演劇祭、鳥取市中心市街 地ホスピタリティプロジェクトなど）を展開。	-	-	鳥根県文化芸術振興条例	H16.12	鳥取県 景観計画	-

人口規模 区分	都市名	所管部署	所管部署 系統	団体 区分	ユネスコ 創造都市 申請状況	活動内容の概要	文化交流拠点および 派生組織、協力団体	文化庁 長官表彰 受賞 年度	創造都市に関連する 指針・宣言・条例・計画等	景観行政団体 ※	景観計画 ※	歴史文化基本 構想 歴史的風致維持 向上計画
30万～ 50万人 未満	金沢市	都市政策局 企画調整課	企画	中核市	H21年度認定 クラフト& フォーク アート	クラフト都市として、文化のビジネス化、人材の育成、世界への発信という観点から「おしゃれメッセ」や、「クリエイティブ・ワルツ」、「金沢・世界工芸トリエンナーレ」などの事業を展開。	創造都市推進委員会	H19	創造都市推進プログラム 金沢市文化芸術振興プラン	H16.12	金沢市 景観計画	金沢市歴史遺産 保存活用計画 マスタープラン (H21.3) 金沢市歴史的 風致維持向上 計画 (H21.1)
30万～ 50万人 未満	高松市	創造都市推進局 産業経済部 産業振興課	産業振興	中核市	予定なし	創造都市推進のための組織「創造都市推進局」を設立。有識者による高松市創造都市推進審議会、青年層を中心とする創造都市推進懇談会を設置。平成25年10月末に「高松市創造都市推進ビジョン」を策定。利用していない立地に優れた公共施設を有効活用した社会実験も実施。		-	高松市創造都市推進ビジョン	H16.12	高松市 景観計画	-
30万～ 50万人 未満	奈良市	市民活動部文化 振興課	文化	中核市	予定なし	「ならまち」エリアの文化拠点を中心に、歴史的 文化遺産への親しみの場の提供、伝統工芸の継承 などを行い、景観の維持を目指すとともに地域文化 を振興。今年で21回目を迎える「ならまちわ らべうたフェスタ」の開催、など。		-	奈良市文化振興条例 奈良市文化振興計画	H16.12	奈良市 景観計画	-
30万～ 50万人 未満	久留米市	総合政策部 総合政策課	政策	中核市	予定なし	多彩な音楽ジャンルのステージを市内複数会場で 開催する「くるめ街かど音楽祭」の実施。文化芸術 振興、広域交流促進、賑わい交流の拠点となる 久留米市総合都市プラザが平成27年度末にオープン 予定。	久留米市総合都市プラザ (文化交流拠点)	-	久留米市文化芸術振興条例 久留米市文化芸術振興基本 計画	H20.4	久留米市 景観計画	-
10万～ 30万人 未満	豊島区	文化商工部文化 デザイン課	文化	特別区	予定なし	区内にオープンした美術館や文化拠点での活動を 中心に、外郭団体とも協力しながら、文化施策を 展開。廃校を活用した「にしすがも創造舎」にて、 アートワークショップなどを実施。舞台芸術 交流センター「あうるすぽっと」では、舞台芸術 の創造発信とその担い手育成によるにぎわい創出 とまちの活性化を図っている。	にしがうも創造舎 あうるすぽっと（舞台芸術 交流センター） 新池袋モンパルナス西口ま ちかど回遊美術館 熊谷守一美術館 アートネットワーク・ジャ パン 芸術家と子どもたち	H20	文化創造都市宣言／ 豊島区文化芸術振興条例	-	-	-
10万～ 30万人 未満	八戸市	八戸ポータル ミュージアム	特化	特別市	予定なし	文化観光複合プロジェクト（八戸ポータルミュージ アムはっち）および、 地域交流アートプロジェクトである「南郷アート プロジェクト」（ダンス公園、アーティスト定住 実験プロジェクトなど）などを実施。	八戸ポータルミュージアム はっち（文化観光複合施設） 芸術環境創造専門員、はっ ちディレクター、コーディネーター	H25	-	H19.7	八戸市 景観計画	-
10万～ 30万人 未満	小田原市	文化部 文化政策課	文化	特別市	予定なし	「小田原市文化振興ビジョン」に基づいて、芸術 文化創造センターを整備中（H28完成予定）。 また、子どもたちが質の高い芸術活動に触れる文化 アウトリーチ活動も積極的に展開。	芸術文化創造センターの整備 中	-	小田原市文化振興ビジョン	H17.2	小田原市 景観計画	小田原市歴史的 風致維持向上 計画 (H23.6)
10万～ 30万人 未満	高岡市	都市経営課 文化創造推進室	文化		予定なし	文化創造都市高岡推進フォーラムの実施や、万葉 故地高岡として高岡万葉亭楽宴事業、高岡万葉まつ りの実施、富山大学芸術文化学部との連携事業 として、工芸・生活・産業が同居するゾーン ミュージアム「金屋町楽市」、クラフト市場街など を展開。		-	文化創造都市ビジョン （仮）の策定予定	H18.7	高岡市 景観計画	高岡市歴史文化 基本構想 (H23.3) 高岡市歴史的 風致維持向上 計画 (H23.6)
10万～ 30万人 未満	佐倉市	企画政策部企画 政策課	企画		予定なし	「佐倉・城下町400年記念事業」として、「佐倉 学」の推進、江戸の賑わいを再現したイベント 「佐倉・時代まつり」の実施、フィルムコミッ ション等、幅広い事業を実施。		-	-	H17.12	-	-
10万～ 30万人 未満	鶴岡市	政策推進課食文 化推進室	特化		申請中 ガストロノ ミー （食文化）	「食の理想郷」を将来像とする食文化創造都市推進 事業を実施。食の祭典、鶴岡食の国際映画祭など を行い、多分野と連携した活動を進めている。 「食」から「職」の創造を目指す人材育成も推進。 。	食文化創造都市推進協議会	H23	-	H18.5	鶴岡市 景観計画	鶴岡市歴史的 風致維持向上 計画 (H25.11)

人口規模 区分	都市 名	所管部署	所管 部署 系統	団体 区分	ユネスコ 創造都市 申請状況	活動内容の概要	文化交流拠点および 派生組織、協力団体	文化庁 長官表 彰受賞 年度	創造都市に関連する 指針・宣言・条例・計画等	景観行 政団体 ※	景観計画 ※	歴史文化基本 構想 歴史的風致維 持向上計画
10万～ 30万人 未満	草 津 市	総合政策部 企画調整課	企 画		予定なし	草津市出身の著名人によるシティセールスチーム「KUSATSU BOOSTERS」の結成、「くさつ魅力発信塾「マッキーのいねゼミナール2013」の開催、「草津市シティセールス活動認定事業」の認定等を実施。		-	-	H23.6	草津市 景観計画	-
10万～ 30万人 未満	可 児 市	市民部 生涯学習文化室	文 化		予定なし	可児市文化創造センターalaを拠点とした「まち元気プロジェクト」を主軸事業として展開。アーティストによるワークショップや、プロの俳優とスタッフが滞在型で演劇作品を作り上げる「アラコレクションシリーズ」などを展開。	文化創造センターala	-	-	H17.11	可児市 景観計画	-
10万人 未満	舞 鶴 市	文化振興課	文 化		予定なし	「赤れんがサマー・ジャズ in 舞鶴」や文化創造拠点「舞鶴赤れんがパーク」のオープンなど赤れんがを活かした個性的なまちづくりを展開。アートプロジェクト「MAIZURU RB」の実施、食文化を活かしたまちづくり「肉じゃがまつり」などを展開。	舞鶴赤れんがパーク (文化創造拠点)	H23	-	-	-	-
10万人 未満	十 日 町 市	産業観光部 観光交流課	産 業 振 興		予定なし	過疎高齢化に悩む越後妻有地域を舞台に、2000年から始まった文化・芸術による地域づくりのアートプロジェクト「大地の芸術祭」をトリエンナーレとして開催運営。開催年以外にも通年した作品公開やアートプログラムを開催し、「大地の芸術祭の里」として取り組んでいる。		H22	-	-	-	-
10万人 未満	南 砺 市	南砺市教育委員会 文化・世界遺産課	特 化		予定なし	世界遺産五箇山の合掌造り集落や、五箇山民謡などの伝統文化を継承すると同時に、「SCOTサマーシーズン」「いなみ国際木彫りキャンプ」などを開催し、新たな世界を取り入れつつ地域振興を図っている。また、「TOGA国際芸術村」構想による「富山から世界に発信する芸術文化の振興」を進めている。		H22	-	-	-	-
10万人 未満	篠 山 市	政策部企画課	企 画		申請中 クラフト& フォーク アート	「暮らしに結びついた産業の育成」を目指し、創造農村と称したまちづくりを展開。まち歩きや地域文化の学習会、伝統的な祭りの復活といった市民活動から「丹波篠山・まちなみアートフェスティバル」などが生まれた。		H20	篠山市総合計画 篠山市創造都市推進計画	H23.1	篠山市 景観計画	篠山市歴史文 化基本構想 (H23.3)
10万人 未満	仙 北 市	教育委員会文化 財課	文 化		予定なし	角館の商家や蔵を利用した作品展「アートdeまちあるき」を実施。豊かな文化・観光資源を活かした交流人口の増加、文化芸術に携わる雇用の創出を企図した「田園型・創造都市（創造農村）」づくりを目指す。		H23	-	H21.10	-	-
10万人 未満	中 之 条	企画政策課	企 画		予定なし	伊参スタジオ映画祭、中之条ピエンナーレを文化事業として継続支援。廃校活用、若手の映像作家支援、空き家活用に寄るアーティスト支援によるまちづくりに繋げている。		H21	-	H21.8	中之条町 景観計画	-
10万人 未満	木 曽 町	企画財政課	企 画		予定なし	「過去に学び、地域を見つめ、将来を創る」をテーマに地域固有の自然や歴史、伝統、文化など山村に息づく貴重な資源を学ぶ木曽学研究所や、2014年に40周年を迎える日本のクラシック音楽祭の草分け的な存在である木曽音楽祭を実施。	木曽学研究所	H22	-	-	-	-

※2013年9月30日時点

## 第4章 会議、研修の実施

### (1) 創造農村ワークショップ「なつかしいみらい。」

日程：平成25年8月25日（日）

主催：文化庁、創造都市ネットワーク日本（CCNJ）

共催：木曽町

会場：木曽町 木曽郡民会館

テーマ：地域資産と創造農村

内容：9:00～9:20 主催者あいさつ（文化庁）

開催地あいさつ（田中勝己町長）

9:20～12:15 パネルディスカッション

モデレーター：

佐々木雅幸氏（大阪市立大学大学院創造都市研究科教授／同都市研究プラザ所長）

パネリスト：

木曽町 田中勝己氏（木曽町長／木曽広域連合長）

中之条町 入内島道隆氏（前中之条町長／NPO法人ぐんまCSO理事長）

神山町 大南信也氏（NPO法人グリーンバレー理事長）

篠山市 金野幸雄氏（流通科学大学教授／一般社団法人ノオト代表理事）

参加状況 86人

#### 内容と評価

CCNJの顧問でもある佐々木氏をファシリテーターに迎え、中之条町、木曽町、篠山市、神山町の4都市より「地域資源と創造農村」をテーマとした、各々の取組が発表された。

事業開始が8月からとなり、本ワークショップの広報期間も非常に短くなり、遠方からの参加は少ない傾向にあった。しかし木曽町は比較的小さい自治体ではあるが、長く地域研究や交流事業を実施しており地域住民や町づくり団体の参加が目立った。

内容的には、過疎化に対してどう立ち向かうか、という多くの地方自治体が抱えている課題に対して、積極的、創造的な取組事例の発表がおこなわれた。パネリストは、それぞれの地域において活動に取り組む実践的な団体のリーダーであり、現場でのリアルな取組内容、取組手法が参加者の関心を高めた。

アンケートの集計結果でも「創造都市（創造農村）への取り組みから、今後のまちづくりに可能性を感じますか」という設問に92%の人が「はい」と答えており、取組の理念や方法論を聞く事が出来て有意義だった、というような感想が多く見られた。最後に行なわれた質疑応答の時間では「創造農村」の考え方、評価指標が話題となった。

## (2) 創造都市政策セミナー「メディア芸術と創造都市」

日程：平成25年11月2日（土）～3日（日）  
主催：文化庁、創造都市ネットワーク日本（CCNJ）  
共催：新潟市  
会場：新潟市 新潟東急イン

### 1) シンポジウム「メディア芸術と創造都市」

日程：平成25年11月2日（土）

テーマ：メディア芸術と創造都市

内容：

主催者あいさつ（文化庁）

開催地あいさつ（新潟市長）

#### 1部 13:45～15:45 導入、パネルディスカッション、報告

ファシリテーター：太下 義之氏（三菱UFJリサーチ&コンサルティング 芸術・文化政策センター  
主席研究員／センター長）

パネリスト：

札幌市 酒井 裕司氏（札幌市市長政策室プロジェクト担当部長）

京都市 白須 正氏（京都市産業観光局長）

新潟市 木村 勇一氏（新潟市文化観光・スポーツ部長）

#### 2部 16:00～17:00 スペシャルインタビュー「へうげものからみる創造都市」

インタビュアー：太下 義之氏

ゲスト：

田村 一氏、金 理有氏（クリエイター「激陶者集団・へうげ十作」）

藤沢 学氏（株式会社講談社モーニング編集者）

参加状況：95人

### 内容と評価

日本の強みでもある「メディア芸術」をテーマとし、1部に行政、2部にアーティストとアプローチの視点を変えた2部形式で行なった。

1部では太下氏をファシリテーターにお招きし、この分野で大きなポテンシャルを持つ札幌市、京都市、新潟市の3都市におけるマンガ・アニメ、プロジェクトマップなどの「メディア芸術」をテーマとした取組が発表された。まだ馴染みの薄い分野である為か、それぞれの個性が際立ち、また積極的な取組が目立った。

2部では3名のアーティストを招き、「『へうげもの』からみる創造都市～クリエイターが育ち、活動しやすいまちとは～」をテーマとして、インタビュー形式で行なわれた。地元出身アーティストの関係者をゲストに迎えたことで、一般市民の関心も高く、幅広い分野からの参加がみられた。（参加者の内訳は行政が4割、法人・団体が3割、個人が3割）

1部と2部で発言者の立場の違いによる価値観の違いが鮮明になった点も、参加者の関心を高めたようである。行政が「メディア芸術」に取り組むことに関しては、関心が高い分野でもあるが賛否両論もあり、「（アニメではなく）地域の固有文化の方を開拓してほしい」「自治体が何故アニメに直接関わるのかその必要性



を感じない。」といったコメントも目立ち、アンケート結果にも顕著にあらわれている。これもこれからの課題のひとつとなるだろう。

## 2) 入門セミナー 「創造都市を目指すもの」

日時：平成25年11月3日(日)

テーマ：創造都市を目指すもの

内容：9:30～10:00 問題提起  
 10:00～11:00 報告(各都市 各15分～20分程度)  
 11:00～11:55 ディスカッション  
 11:55～12:00 閉会あいさつ

講師：

大阪市立大学大学院創造都市研究科教授、同都市研究プラザ所長

佐々木雅幸氏

鳥取大学 地域学部教授 野田 邦弘氏

パネリスト：

高松市 宮武寛氏(創造都市推進局長)

金沢市 松本尚人氏(政策局企画調整課政策推進グループ長)

横浜市 奥田裕之氏(創造都市推進課長)

参加状況 41人

### 内容と評価

入門セミナーは、「創造都市をめざすもの」をテーマに行なわれた。自治体向けのセミナーであるが、一部一般市民からの参加や発言がみられたことも意義深い。

講師には創造都市の具現化とネットワーク構築に取り組む佐々木氏、野田氏を迎え、「創造都市」の最前線を走る高松市、金沢市、横浜市より、各都市の推進ビジョン、これまでの実績と今後の方針が発表された。

発表の前後に講師より導入、統括が行なわれたことにより、「創造都市」を始めて知る参加者にも理解しやすい内容となった。実務者による取組事例はリアリティがあり、課題克服のヒントを求めた質問が多かった。特に行政と市民がいかに協働して取組を進めるかという課題が大きな焦点となった。

### (3) 東アジア文化都市交流シンポジウム「文化芸術と都市の再生」

日程：平成26年2月26日(水) 13:00～ 16:00

会場：横浜市 ヨコハマ創造都市センター

主催：横浜市立大学・文化庁・創造都市ネットワーク日本

共催：横浜市文化観光局・ヨコハマ創造都市センター（公益財団法人横浜市芸術文化振興財団）・  
YCC スクール・東アジア文化都市2014 横浜パートナー事業

内容：コーディネーター

鈴木 伸治 横浜市立大学 教授

パネリスト

泉州市

王 敏（泉州市城市規画設計研究院 副院長）

張 澍楠（興世紀（香港）旅遊文化投資有限  
会社 経営者）

光州広域市

趙 容準（朝鮮大学 名誉教授）

南 勝震（東亜人材大学校 教授）

姜 權（光州広域市都市デザイン課 公共  
デザイン担当事務官）

横浜市

松村 岳利（横浜市文化観光局・横浜魅力  
づくり室 室長）

国吉 直行（横浜市立大学 特別契約教授）



詳細は東アジア文化都市交流シンポジウム報告書を  
参照されたい

## 第5章 CCNJ ウェブサイトの拡充

### (1) ウェブサイト全面リニューアルの実施



CCNJのさらなる情報発信力の強化のため、加盟団体からの積極的な情報発信をテーマに、デザインを含めウェブサイトのリニューアルを実施した。

昨年度と同様に文化芸術創造都市推進事業として実施したワークショップ、セミナーの告知・広報の実施はもちろん、2020年までに170団体の加盟を目指し、創造都市に関連する様々な情報を集約するためのプラットフォームとして機能するよう構成されている。(トップページ画面は上図参照)

トップページには、サイトを訪問したユーザが創造都市への理解を深めるための要素として、創造都市の取組をリードする各都市の画像を利用したスライドショーを配置した。その下部に、新着情報や参加団体からの情報発信内容を一覧表示することで、閲覧性の向上を図った。

またネットワークが拡大していく様子を表すために、加盟団体の徽章や団体ロゴマーク、イメージアイコンを団体一覧として掲載した。

上記に加えて、昨年に引き続き CCNJ 公式 Facebook ページを運用し、Web サイトリニューアル後は、投稿記事の内容が自動連携される仕様に変更を行った。その他にも、セミナー写真の公開などを行ったことで、有用な情報発信、広報の場として認知され始めている。

認知度を測る指標の一つとなる、ファン数は、320 件（平成 25 年 8 月 1 日時点）から、1,031 件（平成 26 年 3 月 31 日時点）と大きく数を伸ばし、創造農村 Facebook ページの 1,071 件（平成 26 年 3 月 31 日時点）と合わせると 2,102 件となった。今後の情報発信において、CCNJ 関係者にとどまらず、広くリーチできる媒体としての基礎力を培うことができた。

## （２）参加団体からの 情報発信コーナーを新設

サイトリニューアルの大きな要素として、新たに「参加自治体からの情報発信」コーナーを新設し、加盟団体の概略・主な創造都市の取組がわかる団体ページを設置した。仕組みとして CMS 機能を導入したことで、各参画団体の管理・請負のもと記事を更新することが可能となった。これにより、幹事団体に情報集約をせずとも、各々の団体が創造都市にまつわる様々な取組を自コーナーで積極的に情報配信できる体制が整った。（図 2 参照）

実際に、サイトリニューアル後には、続々と各地での取組の様子が投稿されており、CCNJ としての情報発信力が強化されたことが確認できたとともに、今後、各参加団体からのさらなる情報発信が行われることで、日本全国の創造都市に関する情報交換が行われることが期待される。

The screenshot displays the CCNJ website's interface for Shizuoka City. At the top, there's a header with the CCNJ logo and navigation links like 'HOME', 'CCNJについて', 'CCNJの活動', 'ニュース', 'ネットワーク参加団体', and '創造都市とは'. Below this, a sidebar on the left lists '静岡市' and 'お知らせ'. The main content area is titled '静岡市' and features a large image of the city. To the right of the image, there's a section for '最新記事' (Latest News) with a list of articles. The main text area contains a detailed article about Shizuoka City, mentioning its history, population, and creative activities. The article is written in Japanese and includes a date '2014.2.25'. At the bottom, there's a footer with contact information and a site map.

### (3) リニューアル後の閲覧コンテンツについて

リニューアルに合わせて、サイト解析ツールである GoogleAnalytics を導入。 ページ閲覧数上位 5 ページ（トップページを除く）のうち、4 ページが今回のリニューアルにて新設されたページとなった。唯一、自治体更新の記事でランクインした、静岡市が作成した記事「シズオカ × カンヌウィーク 2014 を開催します」が 4 位に入った背景としては、静岡市担当者の広報（ソーシャルネットワーク上でのシェアなど）に寄与するところが大きい。当ページの Facebook いいね・シェア数のみで合計が 3 0 0 を越えた。

#### ○リニューアル 閲覧数上位 5 ページ ※トップページを除く

- 1 参加団体一覧  
<http://ccn-j.net/network/list.html>
- 2 ネットワーク参加団体からの情報発信  
<http://ccn-j.net/network/>
- 3 CCNJ について  
<http://ccn-j.net/about/>
- 4 シズオカ × カンヌウィーク 2014 を開催します（静岡市）  
<http://ccn-j.net/shizuoka/2014/02/2014.html>
- 5 創造都市とは  
<http://ccn-j.net/what/>

（対象期間：平成 26 年 2 月 21 日～平成 26 年 3 月 31 日、計測方法：Google Analytics にて計測）

### (4) 今後の課題

#### ・モバイル / タブレット対応の充実

CCNJ 公式サイト訪問ユーザのうち、利用端末の割合は PC：モバイル（タブレット含む）＝6：4 となっている。今後、モバイルを利用した情報収集の流れが加速していくことから、公式サイトにもモバイル対応の充実が求められる。

#### ・セミナー、ワークショップの動画アーカイブ

事業の一環として実施している各種セミナー、ワークショップについては、開催後に要約を作成・公開しているが、その場で発表された内容全てを集約することは困難なため、今後の情報発信・蓄積の方向性として、動画アーカイブ、ストリーミング配信といった手法が求められる。



添付資料 第1章関係

# 創造都市ネットワーク日本 (CCNJ) 総会 要約

< 平成26年2月26日収録 >



## 司会（一般社団法人ノオト 金野幸雄氏）

皆様、お待たせいたしました。ただ今から、「平成25年度創造都市ネットワーク会議」を開催します。本日の会議の司会進行を務めます、一般社団法人ノオトの金野と申します。どうぞ、よろしくお願いいたします。

それでは、本日のプログラムに入ります。最初に、主催者として本ネットワーク代表幹事団体である林文子横浜市長のご挨拶でございます。林市長、よろしくお願いいたします。

## ■開催都市挨拶



### 横浜市長 林文子氏

皆さまおはようございます。本日は創造都市ネットワーク日本、CCNJの総会にあたりまして、青柳文化庁長官をはじめ、各地の皆さまにおいでいただき誠にありがとうございます。歴代の長官がお揃いということで最強の布陣でございます。佐々木先生も熱心に応援してくれますから、本当に私達としても大変心強いところでございます。また多くの皆さま方に、昨日開催の「東アジア文化都市2014横浜」のオープニングにご出席いただきました。本当にありがとうございます。そして24の自治体から名産品のご提供を頂きました。この場をお借りいたしまして、心より感謝を申し上げます。ありがとうございました。

昨年設立以降、このCCNJには新たに9の自治体、2つの団体が加わりました。（※平成26年2月26日時点）また各地でワークショップやセミナーを開催いたしまして、創造都市が地域の活性化に役立つ効果があるとお伝えしてきました。昨日スタートいたしました東アジア文化都市も、創造都市の取組を内外へ発信する大きなチャンスであると捉えております。この事業では今後一年を通じまして日本、韓国、中国のそれぞれ文化の交流による連帯感の向上を目指しまして、多彩な文化イベントを開催しております。内外から訪れる多くの方々へ各国の豊かな文化に親しんでいただき、横浜の文化芸術の創造性を活かした街づくりを体感していただきたいと取り組んでまいります。昨日のオープニングでは歴史的建造物を創作拠点としているアーティスト、クリエイター達の活動を会場でご紹介しました。更に今年は創造都市横浜のリーディングプロジェクトである横浜トリエンナーレの開催年でございます。東アジア文化都市を契機に一層、創造産業の創出や観光産業振興など街の活性化を目指しております。

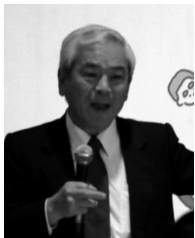
本日の総会では規約改正や26年度の事業計画についてご審議をいただきます。午後には、横浜市と同じ東アジア文化都市の開催都市である中国泉州市、韓国光州市からゲストをお招きいたしまして、東アジア文化都市交流シンポジウム「芸術文化と都市の再生」を開催いたします。文化庁のご支援のもと、更なる活動を推進いたしまして創造都市の取組



を皆さまと手を携えて、一層発展させ、社会全体の活力に繋げていきたいと思っておりますので、どうぞ宜しくお願いいたします。本日はご参加ありがとうございます。

#### 司会（金野氏）

林市長、ありがとうございました。続きまして、青柳正規文化庁長官のご挨拶でございます。青柳長官、よろしくをお願いいたします。



#### ■文化庁挨拶

##### 文化庁長官 青柳正規氏

このネットワークが出来てから1年経っております。都市文化創造機構の佐々木先生をはじめ、横浜市や金沢市、神戸市、鶴岡市、篠山市の幹事団体、創造都市ネットワークの方々のご尽力に大変感謝を申し上げます。

今私が申すまでもございませぬが、創造都市というのは大変世界で注目され、活発な活動しております。ちょうど1980年頃、ナント市でジャン＝マルク・エローという大変すぐれた市長が「文化でこの町を再興させる」ということを公約に掲げ、選挙をとります。その当時ナント市は造船業中心の都市でありました。ところが、1960年頃から日本の造船業が大変盛んになってきた為に、お家業であった造船業がどんどん衰退をしていってしましまして、いわゆる「ものづくり」ではもうやっていけないということを、ジャン＝マルク・エローが、大変鋭い歴史感というか将来を見渡す感覚を働かせてですね、これからは文化であるという事を掲げていきます。そして有名なラ・フォル・ジュルネという熱狂の日というものをナント市で始めて、1週間ほどの期間中、だんだん増えてコンサートも200、300までとなっていく。ですから若者たちもコンサートを見たいが為に、会場から会場まで移る時に走りながら次に行くという、まさに狂瀾の日々になるくらいの状況が生まれるという事があって、見事に街が文化を軸にしながら復興していきます。その過程に、様々な文化的な充実が行なわれた為に、例えばフランスの鉄道公社が予約センターを

地方におかなければならないという時に、社員にアンケートをとります。そうすると社員達は地方に行くのだったら、一番文化的に優れている、充実している都市がいいという事で、ナント市がアンケートでトップになる。その為に予約センターがナント市に移ると、そこに約5千人の雇用需要が生まれて、そういうものが出来ると違う会社が地方に展開しなくてはいけないという時にナント市を選ぶ。ということで、雇用にまで大変な需要を文化が喚起した、というような事が次々に現れてきます。その成功話がヨーロッパに拡がって、たとえばリバプールであるとか、ルール地方のドイツ側のドーノであるとか、他にもたくさんナント市を手本にしながら、クリエイティブシティというものが展開していく。

そういう動きがあったから、ユネスコがこの創造都市というものを軸にしながら、現代文明の中で文化というものを更に強化していこうということで、その枠組みを作っていきます。そしてその結果、今30余りの都市があり、日本では金沢、神戸、名古屋、札幌が手を挙げて、どんどん拡がっていきます。その中で、やっぱり非常に重要な役割をするのが、このネットワークです。つまりネットワークを作ることによって、あの都市はこんな事をやっている、この都市はああいう事をやっている、私の所はこういう事をやっているという事で、それぞれの都市でそれぞれが持っている歴史的、文化的コンテンツがあるので、それをネットワーク上で情報発信して、それを自分達の都市の一番いいところ取りをしながら、充実させていくという事が、大切なことになる。ですから創造都市ネットワーク日本、CCNJはこれから非常に大きな役割を果たしていくものと考えております。その為に文化庁としましても、出来る事をやっていきたいと思いますが、今現在創造都市の取組を推進する為にひとつは文化庁長官表彰、これは創造都市部門ということでやっております。それから国内ネットワークの充実強化、それから創造都市モデル事業ということをやっております。それからこの4月の新年度からはですね、創造都市関係予算として地域発文化芸術創造発信イニシアチブ事業において3億円を計上し、地方自治体への支援メニューを創設するなど、文化芸術の持つ創

造性を地域の観光や文化などに活用していくよう取り組んでおります。2020年はスポーツだけではなく、文化もオリンピック、パラリンピックの核にしていこうということをやりたいと考えておりまして、下村文部科学大臣も1万人のアスリートが来るのだから1万人のアーティストを呼ぼうじゃないか。それから、全国の津々浦々、文化で2020年を祝っていこう。しかもスポーツの場合は開催期間だけですけれど、その前とその後は文化で日本の力、あるいは社会の充実というものを図っていこうと考えており、CCNJに大きな大変な役割を担っていただけるものではないかと期待しておりますので、是非宜しくお願いします。

## ■議案審査

### 議長（横浜市文化観光局局长 中山こずゑ氏）

熱い長官のお言葉をいただきまして、本当に心強く思っているところでございます。本日の会議の議長を務めさせていただきます、横浜市文化観光局局长の中山でございます。会議終了まで宜しくお願いいたします。

それでは、お手元の議案書の「会議次第」に沿って進めてまいります。なお、本日の会議の出席団体数・個人会員の出席者数です。

○自治体 22団体

○自治体以外の団体 7団体

○個人会員 3名

となっています。

それでは、議案の審査に入りたいと思います。

第1号議案 「規約の改正について」

第2号議案 「平成25年度事業報告について」

第3号議案 「平成26年度事業計画について」

第4号議案 「次期幹事団体の改選について」

を一括して議題に供したいと思います。それでは、各議案の説明を、事務局よりお願いします。

### 横浜市 文化観光局創造都市推進課

#### 藤田健一氏

皆さま、おはようございます。事務局をしておりま

司会（金野氏）

青柳長官、ありがとうございました。なお、林市長は、他の公務のためここで退席となります。どうもありがとうございました。

続きまして、本日のネットワーク会議の議長ですが、代表幹事団体であります横浜市より、文化観光局の中山こずゑ局長にお願いしたいと思います。皆様、拍手をもってご承認いただきたいと思います。いかがでしょうか。（一拍手）

皆様ありがとうございます。それでは、ここからの議事の進行は、中山局長にお願いしたいと思います。中山局長、よろしくお願いいたします。

す、横浜市文化観光局創造都市推進課、藤田と申します。お手元の議案書に沿ってご説明させていただきますので宜しくお願いします。

議案書の1ページ目をご覧ください。

### 第1号議案「規約の改正について」

内容としまして1点目は団体の参加届の規約の一部の改正を、2点目は幹事団体の定数の改正をお願いするものでございます。

1点目は、規約の第6条では、「創造都市ネットワーク日本への参加届（団体）（様式1）」となっておりますけれども、様式中に本ネットワークの会員の推薦を求めるというもので、自治体以外の団体という事になります。従前から、個人会員の場合は推薦を求めるとなっておりましたが、実際に実務を処理するなかで、実態の分かりづらい団体から問い合わせ、という事もございましたので、本ネットワークの会員の推薦をいただきたいというものでございます。

2点目は、参加団体が増加しているということもありまして今32団体という事になっておりますので、それに併せまして幹事団体の定数を5から7に増やすものでございます。

## 「第2号議案 平成25年度事業報告について」

始めに本ネットワーク運営につきまして、規約第9条により3人の方に顧問にご就任していただきましたので、ご報告させていただきます。

- ・国立新美術館館長 元文化庁長官 青木 保様
- ・前文化庁長官 近藤 誠一様
- ・大阪市立大学大学院都市研究科教授／同都市研究プラザ所長 佐々木 雅幸様

それでは早速ではございますが、顧問の方々にひと言ずつお挨拶をいただきたいので、宜しくお願いします。

### 顧問挨拶



#### 国立新美術館館長 元文化庁長官 青木保氏

ご紹介にあずかりました、青木でございます。宜しくお願いします。

日本の発展というか、それこそ日本の回復は全国にある大中小の都市をいかに活性化させるか、いかに創造的な魅力的な都市を作れるか、ということにかかっていると思います。都市が脆弱になると国や地域全体が脆弱になる。その意味で創造都市ネットワークは大変重要であると思います。

これは個人的な話ですが、ここでいうのもちょっと恥ずかしいのですが、私は最近横浜にはまっておりまして、横浜にはみなとみらい地域をはじめ美術館も含めて、新しい素晴らしい所があるのですが、私は、これまで60年以上のジャズ音楽の愛好家でありまして、ここには金沢市の山名市長がいらしていますが、金沢では9月に金沢ジャズストリートという催しが3日間あるのですが、毎年友人たちを連れて金沢詣でをすることにしています。横浜には、開港以来のジャズの伝統があるのですが、今では非常に珍しい、レコードとかCDとかでジャズを聴かせるジャズ喫茶、東京ではほとんど無くなってしまったのですが、横浜には桜木町の近くに有名なジャズ喫茶があります。そこのマスターが先年亡くなってどうなるかと思っていたら、地元商店街が応援して新しい店が出来まして、今日も実はこの後

そこに行こうかと。最近私の楽しみは、週末の午後来て、4軒あるジャズ喫茶で、ジャズを数時間聴きまして、その後中華街に行きます。これが大変いいですね。中国語圏以外の世界のさまざまな都市にある中華街の中では、今一番いいのではないのでしょうか、美味しくて安い。そして関内にあるジャズのライブハウスへ行く。そういう昔から息づいている横浜のジャズ音楽と中華街の料理文化を吸収して、夜の11時過ぎに家に帰る。これが出来ると、精神を一新されると言いますか気持ちが寛ぐ。創造都市も新しいものばかり作らないで、そういう地元の文化というか、ジャズはいまや日本の現代文化ですからね、それを残して大事にしていきたいと思えます。



#### 前文化庁長官 近藤 誠一氏

おはようございます。昨年の7月に退官をしました近藤でございます。

私はかなり前から、これからは文化の時代であり、都市の時代であるとずっと感じて参りましたが、3年間の文化庁長官の仕事を通してこのことを確信した次第であります。佐々木先生のリーダーシップがあり、世の感心が高まり、CCNJが一年前に出来たということで、非常に何事も動かすのが難しい今の世の中で、これほど短期間で、実のある結果が生まれたムーブメントというのはそれほど多くないと思います。そういう意味では皆さんの気運が高まっているという事、佐々木先生のリーダーシップ、また欧米の理論とヨーロッパの都市における実践というのが上手にかみ合って、それを我々が上手に吸収してこれだけの動きになったと思っております。これからがたいへん楽しみです。そしてまた先ほど市長さんがおっしゃった東アジア文化都市、これもまたこういう難しい状況の中で、ちょうど私が長官の時に日本から日中間の文化大臣会合で提案をして、わりとすんなりと受け入れられたのですね。その後の状況でダメになるかと思ったのですが、これだけは上手くいっている、という事は、やっぱり都市だからですね。国ではなくて都市の動きだ、ということがやらして

おこうかということになったと思います。そういう所も、都市が活躍する場があるという事を如実に現れていると思います。

私は退官して今、いくつかの大学で教えていますが、実は佐々木先生も一緒に京都の同志社大学で創造都市理論という、講座というか研究会というのがございまして、そこで理論と実践と両方を教えながら、勉強しながら、この国の活性化にお役に立てればと思っております。皆さん方は、文化は大事だという確信を持っておられると思いますが、まだ国全体を見ると「何故文化か」、という声もまだまだあると思います。最近ロンドンオリンピックの文化プログラムをした3人のイギリス人の女性の説明会がございました。そこで聞いてなるほどと思ったのは、「何故文化か」という質問の際、「今までいろいろやってみた、結局最後は文化しか残っていない。文化をやった、そしたら成功した」と言っていました。という事で、誰もが文化を思いつく訳ではないかとも思いますが、今現実的なのは文化の力だと言う事をイギリスが証明してくれたと思います。したがって、これから「これ以上市の文化の予算を増やしていいのか」と、あるいは議会からの抵抗があったりするかもしれませんが、今のイギリスの経験、言葉を思い出して頂いて、これから皆さんのリーダーシップにより、このうまく誕生し、発展しつつある CCNJ を将来にわたって発展させていただければと思います。

私も新しい立場で自分自身の事務所、文化外交研究所というのを立ち上げました。それはひとつでいえば文化の力で日本を活性化し、そして国際的な日本のイメージを上げていくことに、今残りの人生を尽くしたいという意向でございます。皆さんと手を携えて創造都市を軸にして日本を元気にしていこうということで、私も力を尽くしたいと思います。宜しくお願いいたします。



## 大阪市立大学大学院都市研究科教授 同都市研究プラザ所長 佐々木雅幸氏

おはようございます。私はまず本の宣伝をさせていただきます。創造都市ネットワーク日本の拡がり

の中で創造農村という、農村部からの動きも出てまいりまして、創造農村ワークショップを仙北市、篠山市、昨年は木曾町でやらせて頂きました。これをまとめた『創造農村―過疎をクリエイティブに生きる戦略』を出版しました。是非お読みいただくと、都市と農村双方で、このネットワークの動きが拡がるものと思っています。

私も大学で創造都市の講義をしてまいりましたけれど、具体的な実践が増えてまいりましたので、もっと政策評価とか、更にたくさんの自治体が取り組む場合どういう事に気を付けたらいいのかなど、より政策に近いレベルで研究なり、調査をしていく必要が出てくると思っておりました。そうした事を文化庁の担当の方々と話していたところ、それならば、これまで関西分室と言っておりました「関西元気文化圏推進・連携支援室」が京都府庁にあるのですが、それをこの4月から「文化芸術創造都市振興室」という名前に変えて、そういう政策支援のような事をやりましょうという事になりまして、二束のわらじですが、室長をお引き受けすることにしました。そういった事で現在の職は退職しまして、先ほどお話があった同志社大学に移ります。今日午後、実は退職の願いを教授会に申し出るために、申し訳ございませんが、11時前に退席いたします。引き続きこのうねりを更に定着させる為に、理論・政策面で一緒に歩みたいと思っておりますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

## 横浜市文化観光局創造都市推進課 藤田氏

ありがとうございました。顧問の皆さまには、ネットワークの運営等に多大なご助言を賜りますように是非宜しくお願いいたします。

続きまして議案の説明に入らせていただきます。今年度の事業報告の2点目でございます。

### ○ 創造農村ワークショップ

- (1) 日程 平成 25 年 8 月 24 日 (土)・25 日 (日)
- (2) 場所 木曽町郡民会館 (長野県木曽町) ほか
- 創造都市政策セミナー

- (1) 日程 平成 25 年 11 月 2 日 (土)・3 日 (日)
- (2) 場所 新潟東急イン (新潟市)
- web サイトの改善

団体の会員情報を会員自ら発信するとともに、それらの情報を共有できるように改善してございます。

### 「第 3 号議案 平成 26 年度事業計画について」

1 から 5 までの事業を実施したいと考えております。それぞれ詳細は調整のうえ、会員の皆さまにご案内をさしあげたいと思いますので、宜しくお願いします。

- 1 創造農村ワークショップ
  - (1) 開催月日 平成 26 年 8 月
  - (2) 開催地 東川町 (北海道)
- 2 創造都市政策セミナー
  - (1) 開催月日 平成 26 年 8 月
  - (2) 開催地 札幌市
- 3 創造都市ネットワーク日本 首長サミット・国際シンポジウム (仮称)
  - (1) 開催月日 平成 26 年 10 月
  - (2) 開催地 横浜市
- 4 ネットワーク会議 (総会)
  - (1) 開催月日 平成 26 年度中
  - (2) 開催地 次期代表幹事都市
- 5 その他規約第 4 条に掲げる事業
 

この他にも web サイトの更新等もおこなっていききたいと思いますので宜しくお願いします。

### 「第 4 号議案 次期幹事団体の改選について」

- 1 幹事団体 (案) (五十音順)
  - ア 金沢市 (代表幹事団体)
  - イ 神戸市
  - ウ 篠山市
  - エ 札幌市
  - オ 鶴岡市
  - カ 新潟市
  - キ 浜松市
- 2 任期

平成 26 年 4 月 1 日から平成 28 年 3 月 31 日まで  
金沢市、神戸市、篠山市、鶴岡市さんには、引き続き幹事団体をお願いいただきたいということ。意向調査を 10 月に行なっておりまして、就任意向をお示しいただきました、札幌市、新潟市、浜松市が加わりまして、7 団体に。金沢市さんが代表幹事。そして任期は 2 年ということでございますので、自治体の会計等に合わせまして平成 26 年 4 月 1 日から平成 28 年 3 月 31 日までにしたいということでございます。

なお、創造農村ワークショップ、政策セミナーの方を議案とさせていただいておりますけれど、補足等ありましたら、お話いただければと思っておりますがいかがでございましょうか。

### 東川町写真の町課 竹部修司氏

皆さんおはようございます、北海道は写真の町、東川町の写真の町課の竹部と申します。宜しくお願いします。只今創造農村ワークショップの 4 回目を北海道の東川町でということ。日程的には 8 月 9・10、土日になりますけれども、東川町国際写真フェスティバルのイベントにぶつけて、この創造農村ワークショップを開催したいと思っております。札幌市さんとも連携をとりながら、進めてまいりたいと思いますので、是非東川町の方にお越しいただければと思います。宜しくお願いいたします。

### 札幌市 市長政策室プロジェクト担当係長 山口康広氏

札幌市の山口と申します。この度次期幹事団体として立候補させていただいております。札幌市は昨年ユネスコ創造都市ネットワークに加盟いたしまして、これからさらに創造都市を加速して進めていこうということでございます。国内におきましても、今後は CCNJ の枠組みを使いまして自治体の方々、幹事団体の方々、あるいはその他関係団体や個人の方々と協力していきたいと思っております。今年はその最初の年という事でございまして、セミナーの方を 8 月に開催したいと思っております。東川町さんとも連携していきたいと思ひますし、今年は札幌市も札幌国際芸術祭の年でありまして、ちょ

うど7月から9月まで開催しております。そういうものとも連携しながら、皆さまをお迎えするように進めていきたいと思ひます。今後とも宜しくお願ひします。

#### 横浜市 文化観光局創造都市推進課 藤田氏

東川町さん、札幌市さんどうもありがとうございます。説明は以上になります。どうぞご審議宜しくお願ひいたします。どうもありがとうございます。

#### 横浜市 文化観光局局长 中山氏

ただ今、事務局より、議案の内容についての説明がございましたが、顧問の佐々木先生、補足等がございましたら、お願ひいたします。

#### 顧問 大阪市立大学大学院都市研究科教授 同都市研究プラザ所長 佐々木氏

今年は、お話がありましたように、札幌市で国際芸術祭があるということと、東川町の写真の記念事業がある。2つが重なっておりますので、例年はワークショップとセミナーは1ヶ月程度空けていたのですが、思い切って2つ重ねて連続的に行ける設定にさせていただこうというのが、今年新しいところです。また、横浜市さんが秋に行われる東アジアのコア期間に全国の首長が集まって、海外の方々も交えた取組をすると、東アジアのみならず、東南アジアの創造都市の代表の方もおそらく参加できるのではないかと。次のある展開、東アジア文化都市をさらにアジア全域に広める、というようなことが出来ればいいと思っております。内外ともに更に一層の広がりを生んでいきたい。宜しくお願ひします。

#### 議長（中山氏）

佐々木先生どうもありがとうございます。夢がどんどん膨らんでいくような感じでワクワクします。それでは議案についての質疑討論を行いたいと思ひますので、ご発言される場合にはスタッフがマイクをお持ちしますので、是非この場をご利用なさって、挙手をお願いしたいと思ひます。また、ご

発言の冒頭には、団体名、肩書き、お名前をおっしゃっていただきますよう、お願ひいたします。

#### 神戸市 企画調整局デザイン都市推進担当局長 安廣哲幸氏

神戸市、企画調整局デザイン都市推進担当局長の安廣哲幸です。まず、横浜市さんには本当に感謝を申し上げます。幹事につきまして、私どもは引き続き頑張らせていただきたいと思っております。ネットワークが非常に大切だということで、長官をはじめ色々とお話いただいたのですが、このCCNJは一年少し経ったところであります。ネットワークが育成、熟成されていくその前に、すぐに成果を求められる側面もありまして、前長官がおっしゃったように、予算の中で苦労したり四苦八苦したりしています。じっくりと構えて底上げする必要がある一方で、何か目に見えるような、例えば「このネットワークは神戸としてもこんなに役に立っているよ」という、議会や市民に訴えるような展開ができればと思ひています。今回のメニューを見ておりますと、いろんな形で次々と盛り上げつつありますので、是非をこれからの事業展開にあたっては、文化庁のご指導をいただきながら、一緒になって盛り上げていきたい。これは質問とか意見ではないですけど、自分のところの思いも含めて、発言ということにさせていただきたいと思ひます。

#### 文化庁長官 青柳氏

今の神戸市さんのお話で思いついたのですけれど、これから創造都市で予算も使い人も使って、色々やっていただいて「成果をなんだ」と言われた時に、なかなか1年や2年ですぐ出せるものではないと思ひます。が、そうしているうちに、数字にならないと言っているうちに、5年10年経ってしまう可能性があると思ひます。今から、世論調査でもいいですし、文化に関する予算に対する投資効果というか、なんらかの方法で、創造都市、文化都市をやったポリシーが具体的に目に見える成果になっている。それは経済効果だけでなく、もちろん定性的なものでもいいですけど、効果があるということを間接的に示せるよう、今あるところから持ってくるのでは

なくて、統計を作る体制を今からとっていただくことで、5年目10年目に成果が目に見える形で出せるという仕組みを市で作っていく、もしくはネットワークとして共通のものがあればもっといいかもしれません。そういうことを考えていただければと思います。

#### 顧問 国立新美術館館長 元文化庁長官 青木氏

神戸の方がいらっしゃるの。元町の商店街に、これも日本有数のジャズ喫茶があるのですが、そこを訪れることを楽しみにしています。年に3回くらい、その為に神戸に行くのです。そういうものを絶やさないでいただきたい。横浜市もそうですけど、そういう物が残っていて、しかも市民や商店街がバックアップする。このようないい所を残さないと、新しいものばかりでは、なかなか町の魅力とはならない。ジャズに引きつけて言いましたが、もちろん他にもさまざまなことがあると思います。宜しくをお願いします。

#### 金沢市長 山野之義 氏

第4議案までお認めくださったら、代表幹事挨拶のところで話をさせていただこうと思っていたのですが、今ふっていただきましたので、お話をさせていただきます。来年2015年の5月にユネスコ創造都市ネットワークの世界会議が金沢で開かれることが、去年の9月、ポローニャ会議で正式に決定いたしました。2011年ソウルの世界会議で正式に立候補を示してから、東京オリンピック、パラリンピックではございませんけれど、いわゆるロビー活動を重ねまして、決定致しました。これはしっかりやっていかなければいけないと思っております。

先ほど神戸市さんの方からお話がありましたけれど、確におっしゃることがよく分かります。金沢の場合は、幸い今申し上げましたとおり2015年の世界会議がありますので、きちんと成功させるということで議会も市民の皆さんもご理解をいただいているというふうに思っておりますし、これを契機にまちをひとと言で言うと元気にする。またいろんなことで言えば選択肢が増えている、見えてくると思いますので、その選択肢をしっかりと捕まえて新

しい展開をしていく。もちろん先生がおっしゃったとおり、残さなくてはいけないものをしっかり残していきながら、強い刺激を与えていきながら、新しい街づくりの選択肢というものを見極めて、しっかりと捉えて作っていくことが大切かなと思っておりますし、是非神戸市をはじめその会議にご出席いただきまして、我々にとってもそうですし、お越しいただいた皆さんにとってもいろんな刺激を持って帰っていただけたらと思いますし、そこからまた新しいまちづくりのヒントというものが、きっと見えてくるのかなと思っておりますので、お互い高め合う場になればと思っています。

#### 議長（中山氏）

他に、ご発言はございますか。ありがとうございます。それではこれまでのご意見を踏まえまして議案の採決に入りたいと思いますが、いかがでしょうか。

#### 【異議なし】

ありがとうございます。それでは議案の採決に入りたいと思います。本ネットワークの規約第10条第3項では、総会にご出席の構成員の「過半数」をもって議決となります。

本日の会議の出席団体数・個人会員の出席者数は、

○自治体22団体

○自治体以外の団体7団体

○個人会員3名、

「過半数」が17となります。よろしく申し上げます。また、採決の方法については、各団体1名及び個人会員の方の「挙手」にて行わせていただきたいと思いますので、よろしく申し上げます。

それでは、第1号議案「規約の改正について」の採決を行います。議案に賛成の方は、挙手をお願いします。

#### 【賛成者 挙手】

ありがとうございます。賛成多数ですので、第1号議案は「承認」とさせていただきます。

続きまして、第2号議案「平成25年度事業報告について」の採決を行います。議案に賛成の方は、

挙手をお願いします。

【賛成者 挙手】

ありがとうございます。賛成多数ですので、第2号議案は「承認」とさせていただきます。

続きまして、第3号議案「平成26年度事業計画について」の採決を行います。議案に賛成の方は、挙手をお願いします。

【賛成者 挙手】

ありがとうございます。賛成多数ですので、第3号議案は「承認」とさせていただきます。

続きまして、第4号議案「次期幹事団体の選任について」の採決を行います。議案に賛成の方は、挙手をお願いします。

【賛成者 挙手】

ありがとうございます。賛成多数ですので、第4号議案は「承認」とさせていただきます。

以上をもちまして、すべての議案が採択されました。皆様、ありがとうございました。ここからは、司会にマイクをお返しします。



## 司会（金野氏）

中山局長、ありがとうございました。では今年度新しく参加されたお名前から紹介したいと思います。資料をご覧ください。右端に届の受理日がございます。こちらを参考にしてください。

- ・埼玉県 さいたま市
- ・千葉県 佐倉市
- ・神奈川 県小田原市
- ・新潟県 十日町市
- ・静岡県 静岡市
- ・滋賀県 草津市
- ・滋賀県 守山市
- ・奈良県 奈良市
- ・福岡県 久留米市、

以上9自治体が参加されました。

- ・東京都 音楽文化創造 様
  - ・滋賀県 滋賀次世代文化芸術センター 様
- この2団体が新規の加盟となります。

合計11となります。お時間もございますので、ご発言をされたい方がおられましたら、是非宜しくをお願いします。

## 守山市 教育委員会事務局文化スポーツ課長 田中滋規 氏

失礼いたします。滋賀県の守山市、教育委員会事務局文化スポーツ課長、田中滋規でございます。一番新しく加盟させていただいた団体でございますので、ご挨拶をさせていただきます。守山市は滋賀県の琵琶湖のほとりにございまして、人口8万人の市でございます。夏は琵琶湖で泳ぐことができ、今の時期でしたら30分程車でいきますとスキーも出来るという大変自然に恵まれた場所でございます。現在の宮本市長が、ナント市を見習った文化都市にしたいという非常に熱い思いを持っておりまして、この創造都市ネットワークの話があった時にも二つ返事にすぐに加入して、行って来いと言うことで本日伺った次第でございます。

まだまだ文化を中心に町おこしということで、いろいろ模索している段階ですけれど、こちらチラシをお持ちしております「ルシオール アート キッズフェスティバル」というのを2年前から開催しておりまして、これは琵琶湖ホールで行なわれます「ラ・フォル・ジュルネ」という音楽祭のプレイベントということで、守山市の方で行っております。昨年と一昨年は1日の開催だったのですが、本年度4月5日、6日の土日2日間開催いたしまして、



街中ではいろんな屋台もあり、音楽を楽しみながら、食事ができる。2日目につきましては市民ホール、それから立命館高等学校と中学があるのですが、そちらを中心に致しまして、音楽イベントであったり子どもを中心としたワークショップであったりを、楽しんでいただくというイベントを開催しております。横浜からでも3時間で来られるという大変交通の便もいい所でございますので、是非皆さんもお越しいただいて、皆さんの情報も得ながら、文化都市としても発展していけるように頑張りたいと思っておりますので、どうぞ皆さん宜しくお願いいたします。

### 奈良市 市民活動部参事 西崎美也子氏

奈良市からまいりました、市民活動部参事文化振興課長、西崎美也子と申します。昨日は東アジア文化都市のオープニングセレモニーに参加させていただいて、カルチャーショックをうけました。後半のでんぱ組.incの元気なステージを見せていただきまして、女の子の元気なステージにも驚きましたが、客席の方にはじけておられる観客の方々にも驚きました。やはり今の日本の文化をひとつ象徴しているものかと思ひ刺激をいただきました。

奈良市は皆様ご存じのように1300年の古都、世界遺産の町ということで知られている訳でございますけれど、昨日のオープニングセレモニーを見まして、やはり奈良の役割というものも強く感じました。横浜に行きますと、新しい文化、近代の文化を目にいたします。そういうものと、奈良時代の文化、いろんなものを残していかなければならないという思いを強くいたしております。奈良市では有名な大和路を撮り続けた入江泰吉という写真家がおられました、奈良市は入江泰吉記念奈良市写真美術館を運営いたしておりますが、今年から入江泰吉記念写真賞という、写真の賞を創設することになりました。この写真賞を二年に一度、全国の皆さんから写真を応募していただきたいと思っております。奈良の写真というのでなくても、勿論奈良に来て奈良の写真を撮ってもらってもいい、全国の街並みの美しさ、人の営み、いろんなものを切り取っていただいて、ご応募していただきたい、とここで宣伝させていた

できます。どうぞ宜しくお願いいたします。

### 十日町市 観光交流課長 渡辺正範氏

皆さんこんにちは。新潟県十日町市からやってきました観光交流課、渡辺と申します。どうぞ宜しくお願いいたします。私どもの十日町というのは新潟県の南部でございます。人口は6万人。名だたる豪雪地でございまして、人口の密度の高いところでの積雪量は世界一だと、逆の言い方をすると普通ならば人が住む所ではないと、いう所でございますが、そういう所でいろんなことをさせていただいております。名だたる豪雪地でございますので、過疎高齢化も最先端、そんな中で地域文化というのが、古くからは国宝火焰型土器をはじめとする縄文文化、そこから連綿と里山文化が、自然も含めて、連綿と続いてきた。それが今になってプラスの部分もありますけれど、過疎高齢化が進み、空き家、廃校も多く空き家は1000件以上、廃校は20数校あります。

そういった、ともすれば負の財産となりがちなものを、文化の力、アートの力で光を当てて地域再生に結び付けていこうということで、「大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ」というのを2000年から始めさせていただいております。一昨年第5回目を、文化庁さんから多大なご支援をいただきながら、成功に収めることができました。ありがとうございました。私どもが2000年に始めた時は、芸術で町づくりなんてとんでもないと言われていた時でありました、どぶに捨てるより勿体ないと議員さんからも言われました。そんなものでうちの前の側溝が直せるのか、道がきれいになるのかと言われたのですが、今は「町づくりは芸術だね」とおっしゃってくださっているのですね。私はそんな風に心が変わるの、ありがたいなと思っております。これは文化の力、芸術の力だと思っておりますし、こういった過疎の町の地域のお年寄りが、元気に「うちの街は芸術の町だよ」と言っています。そういう、地域、あるいは人の心の再生が一番大事だと、内外にアピールしていきたいと思っております。

私どもは小さな所ですけど、CCNJの中でど

れだけの役割が果たせるかどうか分かりませんが、とりあえず来年第6回目を開催させていただき予定でございます。文化庁をはじめ皆さまのお力をいただきまして成功に向けて努めてまいりたいと思いますので、どうぞ宜しくお願いいたします。

### 静岡市 企画課参事 青嶋浩義氏

静岡市企画課の青嶋と申します。このたびは、本会への参加をお許しいただき、誠にありがとうございます。先ほど神戸市さんから、「文化の振興については、経済という側面からその効果を計れるかが、課題となっている」とのご意見がありましたので、少し発言させていただきます。

静岡市では昨年、近藤前長官をはじめ文化庁の皆さまのご尽力によって、「三保松原」が富士山世界文化遺産の構成資産として登録されました。以前の「三保松原」というのは、皆さんが実際に行ってみると、がっかりしてしまうような、さびれた観光地の一つであったと思うのですが、登録を受ける少し前から、お客様が増え続けまして、現在も、毎日3倍以上の方々にお越しいただいております。

土産品も、たいした物は置いて無かったのですが、今、現地のお店は相当の売り上げになっているという事で、あまりの反響の大きさに驚くとともに、市や県も、受け入れ体制の整備等、様々な取り組みをスタートいたしました。

今回、本ネットワークに参加させていただききっかけにもなりましたが、うちの市長が、「これから創造都市だ。」という事で、私ども職員も、昨年から佐々木先生の著書で創造都市の勉強をさせていただきました。しかし、「文化を活かした地域の活性化」というようなことを、実感として理解することがなかなか出来ませんでした。しかし、「三保松原」の件をきっかけに、地域の皆さん自らが課題解決のための活動を始めたり、また、市長もいろいろな場面で「地域の文化に創造性というスパイスをふりかけて、経済力に変えていく」と繰り返し発信するなど、私どもも、いま正にその意味や効果を実感しているというのが、現在の状況です。

「三保松原」に関しては、たくさんの課題もあって、その解決にはまだまだ時間がかかりますが、本

ネットワークに参加させていただき、会員の皆さんとの情報交換等もさせていただきながら、着実に推進していきたいと思いますので、どうぞ宜しくお願い致します。

### 司会（金野氏）

ありがとうございました。それでは最後のプログラムに入ってまいります。

それでは、改めて次期幹事団体に選出されました団体の代表の皆さまをご紹介します。

- ・神戸市 安廣哲幸 様
- ・鶴岡市 阿部知弘 様
- ・札幌市 山口康広 様
- ・新潟市 松田暢夫 様
- ・浜松市 影山伸枝 様
- ・篠山市長 酒井隆明 様

篠山市酒井市長、せっかくですからご挨拶いただけませんか。

### 篠山市長 酒井隆明氏

兵庫県の篠山市、丹波篠山です。黒豆が一番皆さん知っていただいておりますので。歴史的な街並みを大切にしたい、文化の薫る町という事で平成20年に、文化庁長官表彰「文化芸術創造都市部門」を受賞しました。ちょうど青木先生からいただきまして、どうもありがとうございました。それ以来こういう創造都市の取り組みをしているのですが、私の所は小さな農村部ですので、創造農村という取組をしております、今日この佐々木先生の本の紹介チラシが配ってあるのですが、写真がありますね、これ写真篠山市の写真ですね。ちょっときれいに写りすぎていると思っておるところですけど、また色々ご指導いただければと思います。どうぞ宜しくお願いいたします。

### 司会（金野氏）

つづきまして金沢市長 山野之義 様

以上、7団体となります。山野市長改めてご挨拶宜しくお願いいたします。

## 代表挨拶



## 金沢市長 山野之義 氏

改めましてこんにちは。只今、代表幹事にお認めいただきまして本当にありがとうございます。これまで横浜市さんが、ずっとお骨折りしていただきまして心から感謝を申し上げたいと思いますし、その想いをしっかりと継いで取り組んでいきたいと思っています。

お三方の長官の皆さんには、金沢はいろんなご縁をいただいております。青柳長官には先月、創造都市のフォーラムで基調講演をいただきました。青木先生は自己紹介にありましたけれど、金沢市が毎年9月に行なっております、ジャズストリートでアドバイザーとしてご助言をいただきながら、素晴らしいイベントになっていると自負しているところがあります。また、近藤先生にも金沢の経済団体が金沢創造都市会議を開催しておりまして、そちらの場でも講師としてお越しいただいたり、また同じく本市の創造都市フォーラムで基調講演をいただいたり、大変力強いご支援をいただいているところでございます。先ほど申し上げました通り、2015、来年5月に世界会議を金沢で行います。世界中から創造都市の関係者と、創造都市ネットワーク日本のみなさんにお越しいただいて、いい会にしたいと思っています。

ちょっとだけ金沢の宣伝をさせていただければと思います。創造都市と金沢の接点を少しでも説明させていただければと思います。恐らく金沢のイメージというのを皆さん歴史、文化、学術というように思っているのではないかと思いますし、その通りです。これは、色々勉強してきて、歴史の必然と歴史の根源の両方があったなということを思います。歴史の必然はご存じのとおり加賀120万石、でも外様でありました。特に3代藩主までは徳川家に睨まれて、いつ謀反を起こすか分からない。加賀藩もそんな気はないのですが、徳川家に睨まれてはたまらない。歴代の藩主は、武のほうではなく文の方にずっと力をいれてきました。特に5代藩主綱紀公の時は、文化を家老だけではなく、庶民にも広げる努力をずっとされてきました。それ

が今日まで連綿と繋がってきたというふうに思っております。これが歴史の必然です。歴史の根源、これは言葉も選ばなくてははいけませんが、金沢市は400何年間にわたりまして戦災に遭うことがありませんでした。戦争に巻き込まれることはなかった、大きな自然災害に襲われる事ありませんでした。ですから古い街並みも残っていますし、先ほど必然のところでは言いましたけれど、先輩方が連綿と繋がってきたものがいまだに根強く残っています。この2つがあったからだと思っています。例えば私の妻は、お茶と生け花を習っていました。私の下の子は中学生ですが、週に一回小学校の頃から続けてきた日本舞踊を習っています。恐らく多くの家庭で自然な形で、連綿と繋がっているのではないかと思います。文化が生活の中に入り込んでいる、という表現でもいいのかもしれませんが。でもその文化が生活の中に入り込む為には、それが持続可能で400年間続くには、何といても経済的なバックボーン、ビジネスとして繋がらなければ続かないと思っています。藩政時代はお殿様がやれと言えよよかったかもしれませんが、今の時代そんな訳にはいかない。これはやはり何度も言いますが、連綿として残っている、常に生活の中にある文化をビジネスに繋げていくということを歴代の市長さん、職員の皆さん、議員の皆さんが、意を持ってきたからだと。今日の金沢の創造都市として評価が、恐らくいただいていると思いますが、そこで世界会議が開かれることになったのではないかと思います。これから先輩方が繋いでくれたことを、今の市長として責任を持って後輩たちに伝えていかなければならないと思っていますし、その環境をきちんと作っていかなければならないと思っています。先ほど世界会議のところで言いましたけれど、そんな事は金沢市ひとりが騒いだところで出来るはずがない、やはり皆さんにお越しいただいて、顧問の先生方に色々ご助言いただいて、今の歴史や文化に常に刺激を与えてもらわなければいけないと思います。常に刺激を与えてもらって、変えるべきところは変えるという作業をやっていかないと、文化は廃れていってしまうと思いますし、創造都市金沢でなくなってしまうと思います。だからこそ、来年

5月に皆さまには、是非お越しいただきたいですし、  
いろんなご助言をいただきたいですし、5月の前から5月の後も、ずっといいお付き合いをさせていただければと思っております。その為に精一杯努力をいたします事を誓い申し上げまして、私からの挨拶にいたします。どうもありがとうございました。

司会（金野氏）

山野市長ありがとうございました。

以上をもちまして、「平成25年度 創造都市ネットワーク会議」の午前の部を終了とさせていただきます。皆様、ありがとうございました。



<平成26年2月26日収録>

第 1 号議案 規約の改正について

創造都市ネットワーク日本 規約の様式の一部を、次のように改正します。

○ 創造都市ネットワーク日本への参加届（団体）（様式 1）中

「

主な取組実績（計画）をご記入ください。（別紙可）

」

を

「

主な取組実績（計画）をご記入ください。（別紙可）

推 薦 （個人 又は団 体のい ずれか）	個 人	氏名
		所属・役職等
	団 体	名称
		代表の役職・氏名
		住所

※推薦は本ネットワークの参加構成員とします。  
※自治体の場合は「推薦」欄の記入は不要です。  
※自治体以外の団体の場合は、規約、会則その他これらに類するもの、役員名簿、  
団体の活動状況が分かる資料を添付してください。

」

に改めます。

○ 第 8 条（幹事団体会議）

第 4 項中 幹事団体の定数は、

「 3 から 5 程度」 を 「 5 から 7 程度」 に改めます。

## 第2号議案 平成25年度事業報告について

平成25年度中に以下の事業を実施しました。

### ○顧問の設置（五十音順）（規約第9条）

- ・ 青木 保（国立新美術館館長 元文化庁長官）
- ・ 近藤 誠一（前文化庁長官）
- ・ 佐々木 雅幸（大阪市立大学大学院都市研究科教授／同都市研究プラザ所長）

### ○ 創造農村ワークショップ

（1）日 程 平成25年8月24日（土）・25日（日）

（2）場 所 木曽町郡民会館（長野県木曽町）ほか

	8/24（土）	8/25（日）
テーマ		地域資産と創造農村
パネリスト （敬称略）	(現地視察)	田 中 勝 己 （木曽町長／木曽広域連合長） 入内島 道 隆 （前中之条町長／NPO法人ぐんまCSO理事長） 大 南 信 也 （NPO法人グリーンバレー理事長） 金 野 幸 雄 （流通科学大学教授／一般社団法人ノオト 代表理事）
モデレーター （敬称略）		佐々木 雅 幸 （大阪市立大学大学院創造都市研究科教授／同都市研究プラザ所長）
参加者数		86 人

### ○ 創造都市政策セミナー

（1）日 程 平成25年11月2日（土）・3日（日）

（2）場 所 新潟東急イン（新潟市）

	11/2（土）	11/3（日）
テーマ	メディア芸術と創造都市	創造都市が目指すもの
パネリスト （敬称略）	酒 井 裕 司 （札幌市市長政策室政策企画部プロジェクト担当部長） 白 須 正 （京都市観光産業局長） 木 村 勇 一 （新潟市文化観光・スポーツ部長）	宮 武 寛 （高松市創造都市推進局長） 松 本 尚 人 （金沢市都市政策局企画調整課政策推進グループ長） 奥 田 裕 之 （横浜市文化観光局創造都市推進課長）

モデレーター (敬称略)	太 下 義 之 (三菱UFJリサーチ&コンサルティング グ芸術・文化政策センター 主任研究員 ／センター長)	野 田 邦 弘 (鳥取大学地域学部地域文化学科教授) 佐々木 雅 幸 (大阪市立大学大学院創造都市研究科教授 ／同都市研究プラザ所長)
参加者数	100 人	

○ web サイトの改善



など

## 第3号議案 平成26年度事業計画について

次のように、平成26年度の事業を実施します。

### 1 創造農村ワークショップ

- (1) 開催月日 平成26年8月
- (2) 開催地 東川町（北海道）

### 2 創造都市政策セミナー

- (1) 開催月日 平成26年8月
- (2) 開催地 札幌市

### 3 創造都市ネットワーク日本 首長サミット・国際シンポジウム（仮称）

- (1) 開催月日 平成26年10月
- (2) 開催地 横浜市

### 4 ネットワーク会議（総会）

- (1) 開催月日 平成26年度中
- (2) 開催地 次期代表幹事都市

### 5 その他規約第4条に掲げる事業

#### ※事業実施にあたっての留意事項

- ・規約第2条（目的）及び第3条（役割及び使命）の達成に資する内容とする。
- ・文化庁及び幹事団体会議が連携して推進する。
- ・事業の広報については、CCNJのホームページ（URL；<http://ccn-j.net/>）を通じて行うとともに、文化庁及び関係自治体・団体にも協力を依頼する。



## 第4号議案 次期幹事団体の改選について

### 1 幹事団体（案）（五十音順）

ア 金沢市（代表幹事団体）

イ 神戸市

ウ 篠山市

エ 札幌市

オ 鶴岡市

カ 新潟市

キ 浜松市

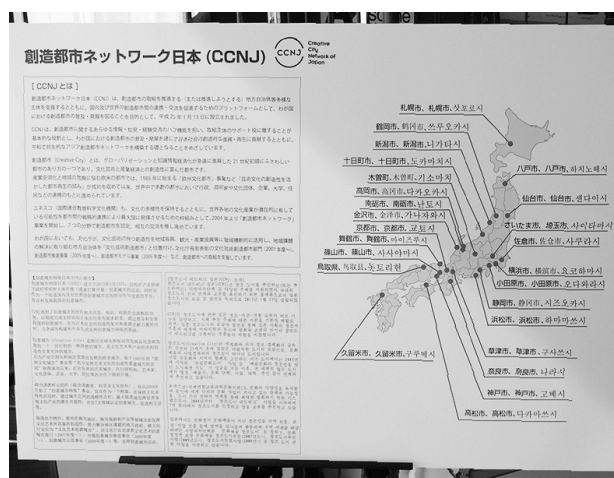
### 2 任期

平成26年4月1日から平成28年3月31日まで

## 東アジア文化都市レセプションへの名産品提供

本総会の前日となる、平成26年2月25日に行われた東アジア文化都市2014横浜のオープングレセプションに、24のCCNJ参加団体の自治体からお酒及びお菓子の提供をおこなった。

レセプションでは、多くの出席者に各都市のお酒やお菓子を堪能していただき、好評であった。



ご協力いただいた自治体



自治体紹介パネル



提供品のお菓子と案内カード



提供品のお酒と案内カード

第 4 章関係

# 創造農村ワークショップ「地域資産と創造農村」 in 長野県木曽町

< 創造農村シンポジウム 平成25年8月25日収録 >



## ■主催者挨拶

文化庁環境政策課長 清水明氏

皆さん、おはようございます。ご紹介いただきました、文化庁の政策課長の清水と申します。文化庁を代表いたしましてご挨拶をさせていただきます。

今回『第3回創造農村ワークショップ』でございますが、佐々木先生、パネリストの先生方、全国各地からご参加の皆さん、本当にありがとうございます。また開催にあたりまして、準備にあたってこられた一般社団法人ノオトの皆さん、そして何よりも田中町長はじめ木曽町の皆さんのご尽力に、この場をお借りいたしまして感謝申し上げます。

昨日この木曽福島の宿場町、開田高原などを視察し、歴史あるクラシックの「木曽音楽祭」を鑑賞させていただきました。その後の夕食会では、木曽のお酒や地元の素材をふんだんに使った料理をいただきながら、木曽町や全国各地で創造農村、文化・芸術創造都市計画づくりに取り込んでいらっしゃる皆さんとお話し、各地で大変いろいろとご苦労しながら、熱心に取り組んでいる皆さんのお話を伺う事が出来て、本当に大変よかったと思っております。今日、このワークショップで、全国の皆さんとのネットワークを広めていくことが出来ることは参加者の皆さんにとっても、また私どもにとっても大変嬉しい事であると思っております。

文化芸術の持つ創造性を活かして、産業振興や地域活性化に取り組んでいる創造農村、文化芸術創造都市というのは、大変重要な取り組みだと思っております。文化庁としても平成19年度から、文化庁長官表彰の文化芸術創造都市部門といったものを設け、その後もこの事業でありますとか、ネットワーク化の推進などに取り組んできており、木曽町も平成22年度にこの文化庁長官表彰の対象になったところでございます。

文化庁といたしましては、今後もこの取り組みは重要だと思っております。実は下村文部科学大臣が文化芸術の力が大事だということで、今年の5月に文化芸術立国実現のための懇談会といったものを立ち上げ、文化芸術立国の中期プランを作成しようと、今進めているところでございます。

2020年までに、日本が世界の文化のハブとなる事を目指そうと、文化予算についても倍増していきたいとかなり意気込んでいるところでございます。そのプランの中で、文化の力で地域を元気にするというのが大きな柱の1つで、文化庁としても、文化芸術創造都市推進事業について一層拡充したいと思っております。また、芸術文化、文化財を担当する部署で、創造都市・創造農村の取り組みについて別枠を設けたり、優先的に採択したりとか検討して

いるところでございます。こういったことを通じまして、全国の皆さんの活動につきまして、支援出来たらと思っております。

本日は、この後のシンポジウムにて、各地の取り組みについてお聞きするとともに、意見交換などを通じて、このセミナーが、創造都市・創造農村のネット

## ■開催地挨拶



木曾町長／木曾広域連合長／木曾学研究所顧問 田中勝己氏

皆さん、おはようございます。只今、ご紹介をいただきました、木曾町町長の田中と申します。木曾学研究所の顧問という立場でもあります。本日の文化庁主催であります、町も主催者に加えていただきましたので、ご挨拶を申し上げたいと思います。

ようこそ木曾までお出で下さいまして、心から歓迎申し上げます。

私が佐々木先生を知ったのは、今から10年ほど前の平成15年秋で、大分に向かう飛行機の中で、出会いました。勿論、本人に出会った訳ではありませんで、私は飛行機の中で、井上ひさしさんがご出身の山形県で開いておられた生活者大学校での講義録が1冊の本になった『あてになる国の作り方』を読んでおりました。

その本の中に、イタリアのボローニャの街を引き合いに出したまちづくりが紹介されており、末尾に「詳細は『創造都市への挑戦』佐々木雅幸」と書かれてありました。これが私の最初の出会いでした。大分に着いてすぐに、家内に電話をいれて本を直に取り寄せるお願いをしました。これが先生の書物と出会った最初であったと思います。

それから新しい年が明けた1月か2月でありましたが、突然、先生の訪問を直接受けることになりました。先生はその当時、WILL国際文化交流研究所というNPOの理事長をやっておられました。そのNPOの理事でこの町出身の太鼓センターの理事長をやっておられる東さんが、佐々木先生と一緒に訪ねて来られて、先生を紹介していただきました。私がビックリして「先生の本、読みました。」と言っ

ワークを広げる大きな力になれば幸いだ、と思っています。

簡単ではございますが、これで主催者としてのご挨拶とさせていただきます。皆さん、よろしくお願いいたします。

たら、先生もビックリされてですね、鞆の中から3冊出されまして、私が「それです。」と言いました。それからいろんな懇談をさせていただきました。

創造都市論という考え方に共感しておりまして、佐々木先生に「先生、これは都市の問題だけではなく、農村でも同じことではないでしょうか？」と申し上げましたら、先生は「まったくその通りです。」と言われました。私は「実は、この町で木曾学研究所というのをつくって、こうした運動とまちづくりを進めたい、今までもやってきましたけれども、こういう方向でやっていきたい」という話をしますと、先生から励まされて、非常に感動したことを今でも覚えております。その年の秋、平成16年9月に、木曾学研究所設立を目指して、第1回の木曾学研究所設立総会を開催しまして、佐々木先生においていただき記念講演をしていただきました。

その時のパネラーは、今日来られておられる前都留文科大学教授の田中夏子先生、もう故人となりましたがバイオリン製作者の木曾町でバイオリン作りを始めたという、陳昌鉉先生。昨年お亡くなりになりましたが、東洋のストラディバリといわれた方です。その後も毎年、1回～2回の講演会を開催し、多才な皆さんにこの講演会にお出でいただきました。哲学者の内山節先生、故人になりましたが木村尚三郎先生、湯布院で、まちづくりをやっておられる中谷健太郎先生、富山和子先生。今日、お出でになっているのではないかと思います。信州大学の加藤光一先生、四国・馬路村の農協組合長の東谷望史先生、岡田知弘先生。時松辰夫先生、滝坂信一先生、向山明孝先生、竹内敬二先生。いろんな多才な皆さんに、この間にお出でいただいて8年間

に10回を数えました。

この他に、公民館の講座として年10回ほど、この木曾に住むいろんな研究者の皆さんに、お願いをして「木曾学講座」をずっと開いて参りました。町ではこうした温故知新の学習だけでなく、実際の事業をしようというふうを考えて町の活性化を願って、創造的なまちづくりということを願っているような活動をやって参りました。これについてはパネルディスカッションの方で、報告させていただきたいと思っています。いろんな文化でいえば『木曾音楽祭』。全国に例のないような「徹底した住民が主人公のまちづくり」、「安心して暮らせるまちづくり」、「交通システムの確立」の中身については、事例報告の時に話し申し上げたいと思っています。

私の町長在職16年間は、創造都市論の理念に励まされながら、自分なりに歩いてきた道程ではないかと思っています。その間、佐々木先生が開いていましたゼミにも時々参加をし、長い間ご指導いただいたことに心からお礼を申し上げます。

私も76歳、本当に物忘れが激しくなり、これでは町政にも町民にもご迷惑をおかけするということを考えて、この11月に勇退をするという決意表明した次第であります。

私の町長最後の時期に、こうした機会を、文化庁それから佐々木先生の方から、木曾町にいただいたことを本当に心から感謝申し上げて、私の歓迎の挨拶とさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

## (1) 事例報告



群馬県中之条町 入内島道隆氏  
前中之条町長／NPO法人ぐんまCSO理事長

今日は、「アートによるまちづくり」というテーマでお話したいと思います。

中之条町は群馬県の長野県と新潟県と接しており、2011年から「日本で最も美しい村」連合に加入した町です。

今、全国各地で、ビエンナーレ、トリエンナーレなどが行われています。有名なところだと、「越後妻有トリエンナーレ」と「瀬戸内国際芸術祭」などですが、中之条もそういった形のアートイベントをやっております。

地方にとって「過疎とどう立ち向かうのか」というのは大きな課題です。やはり「若者がどんどん出ていってしまう」ことが、過疎の最大の原因で、そのことによって、どんどん衰退していってしまう。逆に言えば、若者が戻ってくるような政策をとれば、地域がまた元気になってくると言えます。

東京が元気なのは、全国から優秀な人材が東京に流れていったからです。その逆の流れをつくれれば地方も再生できるんじゃないかなと思います。その方法はたくさんたくさんあると思いますが、私がとっ

た方法はアートイベントでアーティストやクリエイターを移住させるという政策です。

### ■住民主体の芸術祭

ビエンナーレを始めたのは2006年、町に関係のあるアーティストと一緒に、越後妻有の「大地の芸術祭」というのを見に行ったのがきっかけです。一緒に行った彼らが「中之条でもできますよ」という話からスタートしました。

第1段階のアートツーリズムから説明します。2006年に新潟の「大地の芸術祭」を視察して、役場スタッフは「1年以上、準備期間を置いてやりたい」という話をしていましたが、アーティストは「直ぐやりたい」ということで、準備期間が半年という状態でスタートしました。

ポスターも全部アーティストの手作りで、非常にセンスのいいものができたと思います。最初のときの宣伝チラシを作ってくれたのは、総合プロデューサーの山重徹夫さんで、彼の作ったチラシのセンスによって、中之条ビエンナーレにも多数の入場者がありました。

地域の公民館に、ゲートボール場があり、お年寄りには毎日ゲートボールをして、ゲートボールが終わると、公民館中の現代アートを見ていきます。「よく分からないんだけど、毎日見て帰るんだ」と言っていました。群馬県でアートイベントを大々的にやっているということがなかったものですから、非常に珍しがられてメディアなどに随分いろいろと取り上げていただきました。

1, 2回目は、アーティストのボランティアによる非常に少ない予算で運営されておりました。

2回目となる2009年はちょうど、越後妻有トリエンナーレとかぶっていました。北川フラムさんのところにお邪魔し、「中之条ビエンナーレ」の方向性などについて相談していました。

この時の実行委員長は普段住んでいるのは神奈川でしたが、準備期間の1年間は中之条に滞在し、手弁当で自分の貯金を崩しながら実行委員長をしてくれました。



アーティストが作品づくりのために、町に滞在しますので、滞在する場所を確保するために、町にあるキャンプ場を「芸術の森」とし、条例改正しました。

場内の管理棟が、東京からアーティスト仲間がやって来て、料理を作って賄うレジデンスになり、そこではバーベキューをしたり、アーティスト同士の交流が盛んでした。

町中の空き店舗をつかった「ダンスホール」(写真)んという作品で、このダンスをしているのが商店街の人達です。みんな自分の顔がダンサーになっていますね。町長室も作品の展示会場に貸してくれないか、と言われ、週に1回2時間だけ貸出して、私が来場者に説明していました。奥にいるのは秘書ですが、いろいろ大切なものがあるものですから、本当



は困るんだと睨みをきかせています。

1回目は「こんなもんかな」と見られていましたが、2回目は「これはかなり本格的だな」という評価を得られるようになりました。メディアに取り上げられる数も増えました。

### ■進化する中之条ビエンナーレ

2011年、3回目の実行委員長が、写真の彼女(写真)です。彼女は町出身の人で、東京に出て行っていたんですが、ビエンナーレで町が元気になり始めたために、2回目から戻って来て、実行委員に加わり3回目は実行委員長となりました。このように1ターンだけでなく、Uターンのメンバーも増えてきました。

3回目は現代アートだけでなく、いろんなイベントも入れていくようにして、回を追うごとに進化させています。ちょうどこの頃、六合村が合併したので、展示会場も相当多くなりました。これは六合村にあった湯本家という古い医者家で高野長英を匿っていた家です(写真)。その当時、高野長英は2階にいて、追手が来たときにすぐに、裏に逃げられるような造りになっていました。作品を見る順番を実際の逃亡ルートで見ていただきました。





音楽イベントでは、地域の伝統文化を合わせて、ビエンナーレの中で楽しんでいただき、ワークショップもやりました。テレビの取材等も結構入って来ていました。

3回目の予算が1,900万円。経済効果は5億円ぐらいです。入場者数が35.8万人、作家さんが125人、会場が43と、かなり規模を拡大しています。規模が拡大することによって、遠方から来る方々は2泊くらいしていただいて全部を見て回っていただきますので、地域経済にも貢献するイベントだと思います。

### ■クリエイティブな人材に移住してもらう

アートイベントとして成功しても、それだけではクリエイティブな町にはなっていきませんので、アーティストがどうしたら移住してくれるかということが次の課題でした。

1回目から参加した韓国人のアーティストは、1回目が終わったときに、町に移住して来てくれました。とはいえ、なんらかの生活基盤がないと、彼らただ単に移住してくれと言っても、移住できません。

ちょうどその頃、町の真ん中に、1,000坪の空き地があり、その有効活用という課題が随分前からあがっていました。私が町長になってから、こ

の1,000坪を取得して再開発して、そこにつくったのが「つむじ」という施設です（写真）。この施設の運営をアーティストの人達に、任せることによって、彼らがここで生活できる基盤をつくったわけです。テナントの選定からイベント、パンフレットの作成と運営全部を彼らにまかせたことで、センスの良い空間ができて上がりました。

こういった施設ができて、「ふるさとが楽しそうになってきた」ということで東京などから町に戻って来る人もいました。この施設をつくるときに目指したのが中心地に人を呼び込むことでした。アメリカの事例などを調べましたが、バーリントン、ボルダーでは、車優先から人中心のまちづくりによって、人集めをしています。中之条町もそのようにできやってみようということになったのです。

「つむじ」オープニングのときには、中心部を歩行者天国にして、イベントをしました。メンバー達が仮面を作り、仮面舞踏会をやりました（写真）。

「つむじ」ではアーティストの1点ものや、デザイナーが作ったものを販売しています。アーティストが移住することで可能になっていることです。六合村には、伝統的に伝わる「こんこん草履」があります。今までは無造作に並べて売っていましたが、これをアーティストが展示すると写真のようになります。これはオープニングのときに一気に売り切れたようです。段ボール箱に入れて売っているのと、アーティストが展示に手を加えて売っているのでは随分違うと思います。

看板ひとつにしても、アーティストに頼むと、随分違った風にできるわけですね。アーティストがいればこういったことが自然にできでき上がってくる効果があります。





## ■クリエイティブな人材をつなぎとめるという課題

「中之条ピエンナーレ」が成功して、アートイベントとしては上手くいきました。クリエイターに移住してもらうというシステムも整い、上手くいきました。クリエイターはある意味「若者、バカ者、よそ者」を全部、一人で兼ね備えてます。若者であり、外からの視点もあり、新しいことが発想できるという人達なんです。

ただ、そういった異質の人達を地域が受け入れら

れるかというのが、最終的に一番の課題なのではないかと思います。私も、そういった人達を、役場の嘱託職員にしたり、委託したりしていますけれども、「なぜ地元の人を使わないで外から来た人を使うんだ」と言われます。そこを乗り越えられるかどうかが一番の課題だと思います。

私が町長を辞めてから、残っているアーティストが少なくなっている。そういったところが今後の課題だと思います。



徳島県神山町 大南信也氏  
NPO法人グリーンバレー理事長

神山町はサテライトオフィスの町です。私が代表を務めるNPO法人グリーンバレーが何をやっているのかをご紹介します。簡単に言えば「仕事がないから移住して来られない。仕事がないから故郷に帰って来られない」と言わせないようにしようということです。

## ■サテライトオフィスの町

例えば地域で生まれた子ども達を、サテライトオフィスに連れていきます。「周りの大人たちは『神山には、仕事がない』と話しているよね。でもこのサテライトオフィスで働いている人たちは、何のために神山に来ているのだろう？」「しっかりと仕事をやってるだろ。ということは神山にも仕事があるということだ」「こんな職種に就けば、君らも神山に帰って来られる」ということを子ども達に伝えます。今までは「一生懸命勉強して東京や大阪の会社で働きなさい」と言って送り出してきましたが、「こういう職種なら神山に帰って来られるから、頑張っ

て勉強しろよ」というような送り出し方が、できるんじゃないかと思います。

一方、地域における世代間の循環だけで田舎が続いていけるかというと、これはもう不可能になっています。必ずよそから入って来てもらう必要がある。特に若い人たちがが必要です。その時にもまた仕事の問題が、頭をもたげます。「うちの町には雇用がない、仕事がない。だから、移住者を受け入れられない」

という話になります。この問題には「ワーク・イン・レジデンス」という手法で解決を図ります。仕事がないのであれば、仕事を持った人に移住してきてもらえば、うまくいくのではないかと思います。

## ■「ヒトノミクス」から考える地域の未来

「日本の田舎をステキに変える！」というのが、グリーンバレーのミッションです。最近「ヒトノミクスから考える地域の未来」ということでやっています。「アベノミクス」の向こうを張りまして、「ヒトノミクス」という言葉を広めています。今、神山がなぜ、注目されているのか。それは、過疎の町で起こった二つの異変の所為だと思います。

一つ目は、2011年度の社会動態人口（転入者－転出者の数）の異変です。神山町は1955年に生まれ、ずっと転出超過が続いておりました。2007年に神山町移住交流支援センターが設置さ



れ、その運営が民間住民団体であるグリーンバレーに委託されました。これに並行する形でウェブサイトの「イン神山」を作り、「神山で暮らす」のコーナーで古民家情報を積極的に発信し始めました。これらが功を奏したのか、町の歴史始まって以来初めて転入者が転出者を12人上回ったのです。

もう一つは、2010年の10月以降、ITベンチャー企業など10社がサテライトオフィスを設置したり、本社を神山に移転して来たり、さらには新会社も生まれてきていることです。地理的な立地を見てみると、徳島空港から徳島市内にある県庁まで車で約20分、そこから約40分で神山町に到着できます。

## ■アドプト・プログラムとアーティスト・イン・レジデンス

1997年に徳島県新長期計画が発表されます。神山を中心とした地域に、「とくしま国際文化村」を作るというものでした。その新聞記事を見た時に、「これから10年後、20年後を考えれば、町や県が作る施設も必ず住民自身が管理・運営する時代が来るだろう。与えられたものだったら上手く運営できないだろう。そこで、住民の思いを反映したプランを作り、逆に徳島県に提案をしよう」と考えて動き始めました。最終的に「環境」と「芸術」の二つを軸に据えて、「環境」については、全国で初めてアドプト・プログラム（アメリカ生まれの道路清掃プログラム）をスタートさせることになりました。

もう一つは、「国際芸術家村」を作ることです。その手段としてアーティスト・イン・レジデンスを取り入れました。これは1999年から続いており、2000年から2004年まで、文化庁から助成していただきました。神山アーティスト・イン・レジデンスは、3名の芸術家を神山に招き、約3ヵ月間、滞在しながら作品制作し、展覧会での発表を終えて帰国するというプログラムです。その期間中、住民が芸術家の制作の支援を行います。これは今年15回目を迎えます。

神山町にやってきたアーティストたちは様々な作品を残していきます。例えば、「隠された図書館」。町には図書館がありませんでした。そこで、事前の



芸術家(日本人1名・外国人2名)を招聘・制作支援

リサーチでそれを知ったアーティストはアート作品で図書館をつくったわけです。

さて、「アートによるまちづくり」には二つの方法があるように思います。作品を見学に訪れる観光客をターゲットにするものと、作品の制作に訪れるアーティスト自身をターゲットとするものです。

多くの場合、見学に訪れる観光客を獲得することを目指します。そのためには、有名なアーティストに来てもらい、残していった作品を集積していく必要があります。ところが神山のプログラムには2つ弱点があります。

一つ目は、潤沢な資金を持たないこと。年間予算は約350万円、うち140万円が神山町からの補助金です。したがって、高名な芸術家に来てもらうことは無理です。

二つ目は、町のおじさん、おばさん達が始めたプログラムなので、アート教育をきちんと受けた専門家がいけないこと。だからアートを高めることは不可能なわけです。

そこで、こう考えます。四国はお遍路さんが往来する土地柄でもあり、お接待の文化を持っています。これらの特徴を活かすことによって、アートは高められなくても、アーティストは高められるだろうという方向に進んでいきます。そこで、制作のために訪れる芸術家をターゲットにします。

例えば、欧米のアーティストたちに「日本へ制作に行くなら神山だよね」と言われるような場所を作ろう。そのためには、神山を磨いて「場の価値」を高めて、芸術家たちの滞在満足度を上げていくことに力を注いでいます。このプログラムを7、8年続けてきた頃、「そろそろこの『制作滞在支援』をビ

ビジネスに転化していけないものか?」「町の経済を動かすようなものに変えられないか?」と考えるようになりました。

### ■ウェブサイト「イン神山」と古民家情報

そこで2007年から2008年にかけて、総務省の補助金を使って「イン神山」というウェブサイトを作りました。制作にはデザイナーの西村佳哲さん、トム・ヴィンセントさんの力を借りました。当然、アートでビジネスを起こしていこうという思惑を持っていたので、アート関係の記事の作り込みを丁寧に行っていました。

ところが2008年6月4日にこのサイトをオープンすると、一番よく読まれる記事が、アート記事ではなく、「神山で暮らす」でした。「このお家は2万円で借りられますよ」「この家、傷みが激しいから薪ストーブを入れても大家さんは許してくれますよ」といった古民家情報へのアクセス数が、他の情報より5倍から10倍多いという現象が起きました。もともと神山は、1ターン者がほとんどいなかった町です。私の知る限り、1980年代初頭に越してきた2組以外に例がありません。ところがこの「神山で暮らす」から移住需要が一気に顕在化して行きました。

その発端となったのが、やっぱりアーティストの移住です。1999年に「神山アーティスト・イン・レジデンス」を始めた2、3年後から、引き続きこの町に住みたいというアーティストたちが現れます。毎年1組ずつくらいですが、その人たちのための空き家探し、所有者の紹介、引っ越しのお手伝いなどをする間に、グリーンバレーに移住支援ノウ

ハウが蓄積されていきました。そんな折に神山町移住交流支援センターが設置され、その運営をグリーンバレーが担うことになりました。このことが新たな展開を生んでいきます。

### ■ワーク・イン・レジデンス

ワーク・イン・レジデンスというプログラムをスタートさせました。これは、「地域に仕事がないのなら、仕事のある人に移住してもらえば、この問題は解決する」という考え方です。具体的には、町の将来にとって必要と思われる「働き手」や「起業家」を、ピンポイントで逆指名しようと考えました。

例えば「神山には石窯で焼くパン屋さんがいない。でも、そういうパン屋さんができたら町民の皆さんも喜ぶよね」ということで、ある空き家はパン屋さんをオープンする人だけに貸し出す。最初から入口を絞ってしまいます。

さらには、「これからインターネットの時代になるのに、神山にはウェブデザイナーがいない。じゃあ、この家にはウェブデザイナーに入ってもらおう」ということで、入口を絞る。そうすることで、町をデザインすることができるようになります。

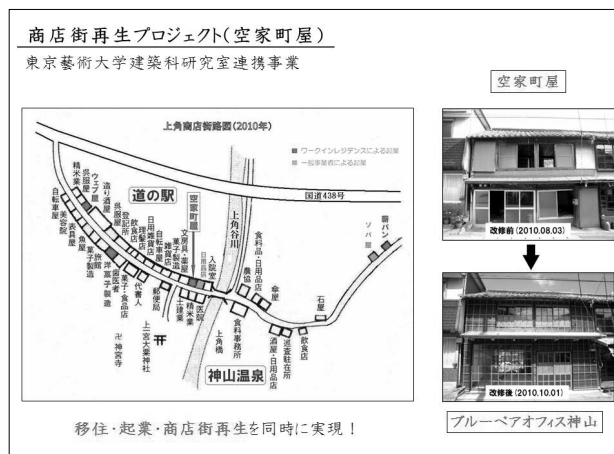
1955年の神山町にある上角商店街、当時は、商店の他にも石屋、酒屋、桶屋といった職人もいて、ここで商売していました。ところが、だんだん時代に合わなくなり、店を閉めてしまう。ワーク・イン・レジデンスを始める前には、38軒あった店が6軒にまで減っていました。そこにワーク・イン・レジデンスで移住者を誘致して行きました。パン屋、カフェ、日用品店、洋菓子製造所がオープンし、ウェブオフィスも入ってきました。こうして空き店舗が出るたびに、住民にどんな店が必要なのかを尋ね、そこを埋めていきます。これを連続的に繰り返していくと、ほとんどコストをかけずに商店街の再生ができることになりました。

### ■空家町屋プロジェクト

そうした中で新規事業の「空家町屋プロジェクト」を始めます。商店街にある長屋の一角を、グリーンバレーが出資する200万円と地域活性化センターの助成金200万円を合わせて、合計400万円の

創造の森アートウォーク





資金で空き家を改修するというものです。

通常、空き家は借りた人が改修工事を行います。ところが水回りなどの改修には、直ぐに100万とか200万円単位のお金が必要になってきます。神山に入って来るクリエイターやアーティストは、そんな多額な初期費用を賄うことはできません。そこで、グリーンバレーが改修を行い、家賃に上乗せし、新規入居者にサブリースする形で貸し出すプロジェクトを始めたわけです。この改修工事を主体的に進めてくれたのは、東京藝術大学建築学科の学生や院生、助手、さらに首都圏の建築系学生達でした。延べ約250人がほぼ手弁当で手伝ってくれました。このようにして「ブルーベアオフィス神山」ができました。この改修のプロセスの中で、サテライトオフィスが生まれてきたのです。

何が起きたのかを話すと、この改修工事には坂東幸輔さんと須磨一清さんが建築家として加わってくれました。そして、たまたま須磨さんが、後に神山初のサテライトオフィスを開設することになるITベンチャー企業の寺田親弘社長と同級生だったということです。寺田さんは、かつて、三井物産に勤めていた時代に、シリコンバレーでの勤務経験があり、その時にシリコンバレーでの新しい働き方、テレワークの実態をつぶさに見てきていました。帰国後、退社し、「働き方を革新する」というミッションでSansanを起業します。

2010年9月、寺田さんは須磨さんから「四国の山の中で、長屋をオフィスに変えるプロジェクトをやっている。その神山という町は、各家庭に光ファイバーが引き込まれていて、ネットの速度がめちゃめちゃ速い」という話を聞き付けて、早速視察に訪

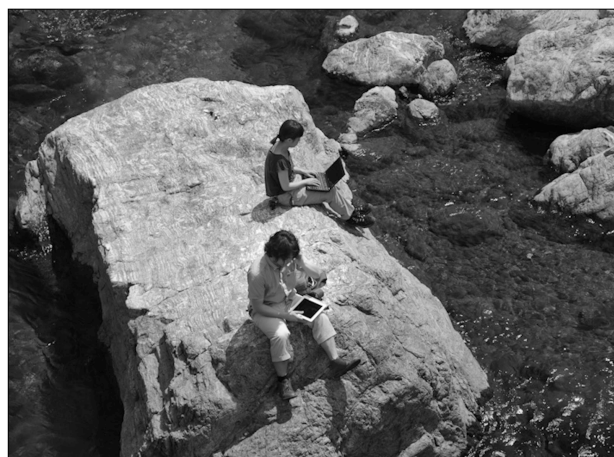
れたのですが、ほぼ即決でサテライトオフィスを設けたいという話になりました。

寺田さんは一旦東京に帰り、社員に神山サテライトオフィスの構想を打ち明けたところ、思いのほかたくさんの社員から賛同の声が上がり、具体的に「10月14日から、男性社員3名を神山に送り込みたいので、よろしく頼む」と連絡が入りました。そのため1週間で空き家所有者の同意を取り付け、残りの1週間で、荷物整理や掃除を終え、10月14日には開発チーム3名を迎え入れたというのが神山におけるサテライトオフィスのスタートでした。

今、神山にはたくさんの人が視察に来られていますが、「シリコンバレーかどこかで、サテライトオフィスというアイデアを見つけ、それを神山で始められたんですよね？」と考えられている人がほとんどです。しかし、本当はサテライトオフィスという言葉さえ知らなかったのです。神山にやってくる人達の想いやアイデアを住民が一緒になって実現していたら、結果としてサテライトオフィスが生まれたということなのです。

その約1年後、NHKの番組『ニュースウオッチ9』や『クローズアップ現代』で、ITベンチャー社員が小川のせせらぎに足を浸けて、東京の本社とテレビ会議をしながら仕事をする姿の映像が流れ、「日本にもこんな場所があった」とIT関係者に衝撃を与えたわけです。その1枚の映像が神山を変えてしまいました(写真)。

しかし、サテライトオフィス誘致とは言っても、積極的に誘っているわけではありません。「来てください」とは、どこのサイトにも記載していません。



マスコミや口コミ情報で知った人達が、月に何人か必ずやって来てくれます。

## ■商店街再生

### プラットイーズ「神山センター」



正規社員4名雇用！（15名追加募集中）

「(株)プラットイーズ」という会社が初めて神山を訪れたのは、2012年4月です。そこからトントン拍子で話が進んで、古民家と周辺の土地を購入しました。2013年1月より改修工事に着手し、7月にオフィスを開業しました。

このオフィスはガラス張りになっていて、その中でみんなが仕事をしています。建物の外周には2.5～3mくらいの縁側が付いており、地域に開放されています。また夜になるとパーティがたびたび開かれて、住民や他のサテライトオフィスで働く人達の交流の場ともなっています。ここでは、正社員4名が雇用され、うち2名は神山町内の新卒女子です。現在、社員を追加募集中で、1年後には20数名の若者が働くオフィスになります。

農機具小屋を改修したサーバー棟には超高速の1GB回線が引かれ、土蔵を改修した「蔵オフィス」は、開発チームのような静かな環境が求められる業種に使われます。そして夜を迎えると、幻想的な空間に生まれ変わります。この情景に触れると、六本木ヒルズとかミッドタウンで働いているITベンチャーの人たちは「ああ、こんな所で仕事がしたい」とノックアウトされるわけです。また、2014年にはアーカイブ棟が完成します。ここでは4K、8Kと呼ばれる次世代の超高精細テレビ規格の実証実験の場が西日本に初めて生まれることになります。

プラットイーズがサテライトオフィスを構えているのが寄井商店街です。長い間空き店舗が目立っていたこの商店街が活気づき始めています。近くには

改修中のビストロが11月末に完成します。また、映像作家や映画の予告屋に加えて、グーグルの仕事をされている人がサテライトオフィスを開きます。さらに、演出家の女性も事務所を置く予定です。

このように商店街の空き家にクリエイターやサテライトオフィスを誘致し、もう一度人の流れを取り戻していきます。そうした中で、次はどのような職種が必要かを見極めて、ワーク・イン・レジデンスで最適な人材を集積していくというサイクルで、商店街の再生を進めています。

NTTドコモのCM「森の木琴」やNHK大河ドラマ「八重の桜」のタイトルバックを制作した「ドロージングアンドマニュアル」もオフィスを置いており、この秋くらいから本格的に動き出します。このような第一線の会社が来ることによって、さらに力のあるクリエイター達を呼び込むという循環が生まれることになると思います。

## ■クリエイティブな人が集まる「せいかいのかみやま」

神山町はまったくアートの素地がなかった場所です。ここに1999年突然、現代アートが舞い降ります。当然地域の人達も「わけのわからないことをやっても、何にもならない」と冷たい目です。これは活動に関わっている人間には辛いことですが、都合の良い面もあります。わけがわからないことだから逆に邪魔をされません。その結果、自分達の思い通りに育てられます。そして、そのようなわけのわからないことでも、10年、15年と続けていけば、地域の魅力を形成していきます。「神山って面白いよ」ということになれば、そこにクリエイティブな人達が集結し始めます。今、神山ではこの連鎖と循

### 「せいかいのかみやま」の風景



クリエイティブな人が集まる良質な価値創造の場

環が起こっています。人が人を呼ぶ。さらに、旧住民と新住民の間では知恵と経験の融合が起り、自然発生的に新しいものが生まれています。こちらで何もコントロールする必要はありません。勝手にやり始めるとい状況です。

地域づくりの要諦は、「そこに「何」があるか」ということではなく、どんな「人」が集まるか」です。



兵庫県篠山市 金野幸雄氏  
一般社団法人ノオト代表理事

私の主な活動拠点は、兵庫県の丹波篠山です。空き家の活用というのをきっかけにして、まちづくり、地域再生をしています。古い建物だけど何か魅力がある建物が、創造農村といわれる地域にたくさんあり、しかもそれらが隅っこに追いやられて、ほったらかしにされています。そこで、それらを上手く使っていくのがこれからの日本再生のキーになるのではないかと、本気で思っています。

### ■地域資産に光を当てる

よく「地域資源」と言われますが、我々は最近では、経済的な意味に加え、文化寄りのイメージがする「地域資産」という言葉を用いています。地域資産とはなにかということを、我々の団体を作った4年ぐらい前に議論しましたが、だいたい私共が考えた地域資産とは、食、祭、古民家、工芸などです。こういうものに光を当てると、何か地域が輝きだして、人も来るのではないかと考えました。これらは全部、

2
たたみ・土間・縁側・客間 いろり・おくど 来客・もてなし・しつらい 陶磁器・漆器・布・和紙・木工・竹細工 里山・農地・薪炭 虫の音・鳥の声 気配・闇・畏敬の念 五感・祈り・土地の神様 食文化 集落・商店街・まつり コミュニティ・子ども・家族

「人」が集まることによって、「何」はそこから生まれてくるのではないかと思います。

クリエイティブな人が集まる良質な「価値創造の場」を作れば、そこから「モノ」はいくらでも生まれます。まず人が集まる心地よい場を作る。これが今の神山の歩んでいる方向です。

今の日本社会が捨てようとしているものです。皆さんもお気づきでしょうが、古民家、在来作物、伝統工芸とこれ全部ブームが来てます。

### ■ノオトのコンセプト

懐かしくて新しい日本の暮らしを提案

一般社団法人ノオトがつくったコンセプトが、「懐かしくて新しい日本の暮らしを提案します」。いろいろキーワードがありますが、集落、農園、里山、酒蔵、商店街といったものに、価値があるということです。これらも日本が捨ててきたものなのです。集落は、集まって落ち着くということなんで、日本人の農業をベースとした暮らし方というものを表現していると思うんです。

今の日本社会というのは、隣の人のことは知らない方が良いという社会をつくろうとしているわけで、もう一度、集落という一緒に集まって暮らすということに、光を当てようとしています。

農園は、農場と違いまして、見渡す限りのとうもろこし畑ではなく、棚田でお米があって、畑では篠山ですと黒豆とか、お野菜が採れ、栗、柿の木、しいたけのほだ木をつくるためのクヌギの林、せせらぎにはワサビが自生している。生活の糧が全部身の回りにある農園というのは、案外あります。たまに、お肉が欲しいと思うと、いのししや鹿が近場で駆除に困るぐらいたくさんいますので、手に入る。そういう身の回りですべて済んでしまうという豊かさに、光を当てようと考えています。

これは冗談みたいな話ですが、もし我々がそういう



暮らしをしたら、T P P も関係ないわけです。自分の周りに全部あるんですからね。国際的な情勢も関係ないということになります。

私は「どういう仕事をしているんですか？」と聞かれて、地域再生とか、コミュニティ再生と答えています。だけど、自分の中でも半信半疑で答えている。

空き家、古民家などを再生しますが、そこに食文化、暮らしの生活文化があったのです。伝統工芸、お祭り、料理とか習わしなどもあると思います。そういうものをセットで再生していくことをやっています。一言で言うと、「暮らしの再生」というふうに考えていますが、暮らしが再生するとどうなるかというと、人が行き交います。

「篠山は阪神間から車で1時間強ですし、便利なところだから、空き家を活用しても上手くいくでしょう。しゃれたカフェをつくと阪神間から来てくれますからね」とよく言われますが、その時には、「いやいや、そんなことないですよ。徳島の神山、見てご覧下さいよ。どこが便利ですか？」と言います。篠山は都会に近いので、遊びに来てくれますが、日帰りが普通です。それをなんとか1泊してくれないかと思っているんです。だけど、神山は、そうじゃないから、いきなり「ここで暮らしませんか？」って言っちゃうわけでしょ？ 我々のところは、日帰り、1泊2日から始めて、短期ステイ、2地域居住、移住みたいなパターンにだいたいなります。神山は、きっと移住とか半年、1年のステイから入っていますね。でも今、現地に行かしてもらおうと、やっぱり宿泊施設、欲しいなとか言う話になって、たまに1日居て1泊して見て回りたいという人も、出て

きているわけですね。だから入口はちょっと違うし、主なターゲットは違うと思うけど、人が行き交うということというのは、一緒だと思うんです。

## ■古民家で地域の食文化を伝える

例えば、限界集落があります。半分以上が空き家のような集落です。そんな集落の建物を改修して、地域の食文化をもう一度取り戻して、その暮らしを表現します。

地域の野菜やお肉を使ったお料理です。ただしフレンチだったりすると、ちゃんとフランスから食材がきてフォアグラ、キャビアが混じったりしますが、基本的には地域の食文化を再生します。

あるいは、お母さんが自分達でしめ縄を作ります。そこで、「それをそのまま、ワークショップにしてください」とお母さん方をお願いをして、ちょっとカッコイイチラシを作って撒くと、たくさん人が来ます。古民家・地域の食文化・伝統文化の3点セットでやって、人が行き交う状況を作るといことです。

茅葺民家の再生にも取り組んでいます（写真）。屋根の茅が細って、穴があいて崩れそうになっていたんで見るに見かねて直しました。事業資金を回収しなければいけないので、セミナーハウス、合宿所になっています。学生や企業が合宿で来てくれます。ご近所に蕎麦屋さんがあって、そこのおじさんに蕎麦打ち体験をしてもらったり、先ほど言ったような素晴らしい里山の農園がありますので、そこで農業体験ができます。例えば山椒の実を摘もうとか、黒豆の畝立てしようとか。

地域の庄屋さんだった空き家では、その蔵に眠っていた食器を使って、地域の食材で和の創作料理を作るシェフがお料理を出すなど、いろんなイベントをしてその地域の文化を学ぶこともできます。

## ■古民家再生

古民家を流動化させる

こういう古民家再生をしつこく、しつこくやって、4年間で50棟くらい改修しました。店舗数でいうと26軒です。古民家再生の過程で、我々なりのノウハウが蓄積されていきました。そろそろ皆さんに提供する時期だと思って、古民家改修事業スキーム



をオープンにしています。

古民家再生にはいくつかのハードルがあります。1つ目はコストの問題。古民家を改修して住んだりするのは贅沢で、すごく改修コストが高いと言われているのは嘘です。いろんなやり方で、コストを下げるができます。我々で、だいたい坪単価30万円くらいで、先ほどの宿泊施設のように直せます。それをペイラインに乗せるためにボランティアに手伝ってもらって、さらにコストを下げる(図)。または、公共性を付与して補助金をいただくことはしますが、いずれにしても、もともとの改修費用が安いということをご承知ください。

2つ目は、田舎では、空き家が流動化しない。売ってくれたり、貸したりしてくれない。地域の合意を得ることはなかなか難しいです。変な人に貸すとコミュニティに迷惑がかかるなど、都会の人が思わないようなことを田舎の人は思うんです。また、売ったり貸したりすると、「あの家、お金に困っているんじゃないか」と噂されるかもしれないと気にします。そういう世間体をとってあげるのが大事です。従って、誰がどのような目的で使うかということが地域で理解されればいいのです。説明会や住人ワークショップをして、地域の合意を取り付けるとその瞬間に、空き家の流動化が始まる。これも我々やっていて知ったことです。

神山と同様に、我々も空き家を所有者から借りて改修し、事業者に貸すというサブリースをします。その家賃収入で、我々は10年間で投資した資金を取り返すというサブリース手法です(図)。この手法は多くのところでやっています。ポイントは、宅建業免許がいらないんです。我々が不動産仲介すると宅建業になり違反になりますけれど、我々は直接取引している当事者ですので、宅建業免許がなくても契約できます。地域で不足するリソースを補填するという中間支援体制を構築するのが、我々のやり方です。我々は古い建物を使いますが、自分では利用せず、誰かが我々の古い建物を利用するという状況を作りだすのです。例えば集落を再生して宿をしたい。でも、地域の人達だけでは、リソースとかプレイヤーが揃わない。地域のどこに1級建築士がいますか？ 普通いません。じゃあ、我々が担いまして

う。改修資金が無ければ、我々が資金調達しましょう。補助金や銀行融資申請などのお手伝いを我々がして、地域コミュニティに底入れをすることで、地域の夢を実現させることがひとつの中間支援の考え方だと思っています。

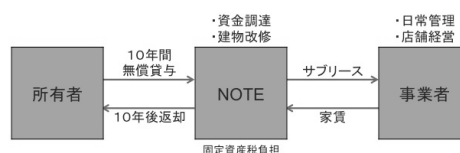
## ■地域コミュニティ再生

ノオトでは、いろんなコミュニティにくっ付いて、いろんな人をマッチングしたり、地域の人達がコミュニティビジネス、ソーシャルビジネスで事業を起こせるような状況を作るということをやっています。ポイントは、小さくやるのが大事です。集落単位が1番いいです。地域で合意して、地域でまちづくりをする。地区で地域の皆さんを巻き込みながらやるというのが非常に重要で、やってみて分かるのは、思いがけなくいろんな付帯効果があります。先ほどの宿泊施設を始めた集落丸山はもう4年経ちますが、今ではほとんど耕作放棄地がないんですよ。人が行き交うから、有機農家の若い子が「やらせてくれ」と言ってきたり、都会の人が1畝ずつ黒豆畑のオーナーになったりします。募集をしたわけではないですが、勝手にそうになっていくのです。企業や市民の里山ボランティアの団体が、この集落に入ってきていただいて、里山再生を始められたりするんです。

里山再生とか、耕作放棄地解消を、行政が考えて施策して大きな網を打っても、ほとんど効果が出ません。だけど、ある小さなエリアでクリエイティブにやると、勝手におまけのようにできてしまう。こういう小さなコアを作って、その頑張っているコアをネットワークすることと、創造都市ネットワーク

### 【成果3】事業スキームの構築

- ・NOTEが「仮りそのの大家」になる不動産の所有と利用の分離手法
- ・空き家を10年間無償で借り受け、必要な改修を行ったうえで、事業者にサブリース(又貸し)
- ・10年間で投下資金を回収
  - ⇒ 空き家となった古民家を10年間継承
  - その10年間で、コミュニティに何を残せるかが重要





の概念とは一緒だと思います。

## ■事業協同組合Opera

小さなコミュニティのコアをネットワークしていくと、1つの市町村域になります。その市町村がまた、ネットワークしていくという入れ子構造になったネットワーク構造を今考えています。各地域のクリエイティブコアが集まり、全国のコアをネットワークする事業協同組合をつくって、地域の空き家・古民家の活用、地域の食文化、生活文化を再生する1つの大きな事業体、運動体を作りたいと思っています。

篠山で構想している事業協同組合Operaの「Opera」は、佐々木先生の本（岩波現代文庫「創造都市への挑戦」2012）から引いたものです。もともとオペラの意味は職人の技術と魂を込めた

「仕事」だということです。職人達が元気を出せるような新しい運動体を作り、そこで創造人材、つまり職人の育成というようなことを考えています。

## 小規模自治体の再生と文化クラスターの形成



- ・ 伝統的建築物のクラスターによって、小さな市町村がそれぞれの土地に根ざした文化を表現
- ・ 小さな市町村のクラスターが広域文化圏を形成
- ・ 広域文化圏のクラスターが多様な国土を形成

21

集落丸山



ささらい



天空農園



## 木曽町 田中勝己氏

木曽町長／木曽広域連合長／木曽学研究所顧問

## ■木曽町まちづくり条例

国の財政圧力を背景にして全国で合併がどんどん進んで、約3200あった全国の自治体が1700と半分になってしまいました。長野県は、北海道とともに合併が進まなかった県の1つです。全国的には、平成の大合併というのは、ほとんど気に入られていないというのが、私は実態ではないかと思っています。木曽町では基本的には、合併して損したとか、やらない方が良かったというような話は、今は本当にはないのではないかと私は思っております。

木曽町では、合併して損をしたと後悔しないような

まちづくりをやるうということで、まちづくり条例をつくりました。

全国の自治体では、まちづくり基本条例をつくっているところがたくさんありますが、自治法とかあるいは合併特例法という国の法律に基づかない、まったく自主的、独自の組織によって、独自の条例を作りました。

まちづくり条例で一番特徴的なものは、先ほども申したように、独自の条例として、自主的な地域自治組織をつくったということです。

全国には地域自治組織が600ほどあると言われてますが、議長の諮問機関として作られているのがほ

とんどです。

木曽町では、地域自治組織が諮問もできるし、提案もできるし、町長のリコール運動だってできる、行政への反対運動もできる。同時に、条例の中で自治組織の代表の集まりを諮問会議と位置付け、この諮問会議の了解を得ないと、町長は議案提案できないという仕組みを作りました。ですから、自主組織が提案権とともに拒否権、町の行政に対する拒否権を実施する仕組みを作ったところは、全国でも、この町だけだろうというふうに思います。

### ■徹底的な情報公開

木曽町ではもう1つ、徹底的な情報公開を掲げました。

情報公開を掲げている市町村は非常に多いですが、だいたい計画が全部できてから、情報公開するんです。そうすると、事実上は情報公開にならないのです。住民参加で町を作っていくという仕組みにはならないと思います。賛成か反対か、どちらかになっていくだけで住民参加の行政にはならない。

私達は計画段階、構想段階から公開することにして、町民を行政に参加させる仕組みを作りました。

昨年、篠山市に行った際に市長から、「私の知る限り合併をリードした首長で、2期目もやっている町長ってというのは、聞いたことがない。木曽町で、あなたは2期目の町長をやっている。何で、2期目も当選するんだ」と尋ねられました。私は、この「まちづくり条例」と、まちづくりの町の精神・理念という話を短い時間でしたが申し上げました。

### ■生活交通システム

評価を受けているもう1つの施策として、生活交通システムがあります。

例えば、開田高原からバスに乗って木曽町に来ると、片道1560円もかかりました。病院もスーパーも木曽福島にしかありませんし、電車に乗るにも、木曽福島駅まで出ないと乗れない。開田から出てくるには、自家用車以外は、バスしか交通手段がなく、合併のときに、「同じ町になるんだから、是非、交通問題を解決していただきたい。」という意見が非常に強力に出されました。合併協議会の中に木曽町

の交通システムを考える委員会を立ち上げて、4年間かかって交通システムを研究し、200円で町内どこへでも行けるというシステムを作りました。幹線バスは開田行きバス、三岳行きバス、日義行きバスがあります。こういう幹線バスを走らせて、幹線バスの周りに循環バスを走らせて、それでもカバーできないところは、デマンドタクシーを組み合わせで大変なお金がかかっておりますが、そういうシステムをつくりました。

これは本当に喜ばれて、開田地区の住民から「町長、このシステムは5年だけは維持してもらいたい」、「お金がかかるので永遠に続くとは思えないが、5年だけは維持してもらいたい。」と言われましたが、もう8年経ちましたから、上手く維持されております。


「木曽学研究所」については、先ほど触れましたのでここでは省きたいと思います。

木曽町のまちづくりは、創造的なまちづくりをしようと、挨拶のときにも申し上げましたが、いろんなことを、そういう立場、そういう考え方で、まちづくりを進めてきました。「木曽学研究所」もそうした運動と人づくりというか、私達が勉強する場として、作ったものでありますが、それに基づいてまちづくりをしてきたということです。

### ■日本で最も美しい村連合

「日本で最も美しい村」連合に、2006年に加盟しました。最初は開田地域だけ入りましたが、木曽町に調査に来た審査員の委員長の熊本大学の先生が、木曽町全体を見て「開田高原だけでなく全部入るべきだ」と言われて、2011年には全町が参加

4 景観と文化を活かしたまちづくり  
NPO「日本で最も美しい村」連合に加盟  
H18年10月・開田高原が地域加盟、H23年10月・全町加盟



the most beautiful villages in japan

(自治体・地域)  
(長野県)大鹿村、中川村、南木曽町、池田町、小川村、高山村  
北海道美瑛町、岐阜県白川村、京都府伊根町  
徳島県上勝町、高知県馬路村、島根県海士町等49団体

(企業サポーター)  
カルビー(株) 伊那食品工業(株) (有)エイチ アイ エフ  
(株)博報堂 信濃毎日新聞社等

連合の理念と活動  
平成17年10月、失ったら二度と取り戻せない日本の農山村の景観や文化を守るため、フランスの活動を模範にNPO法人を設立。呼びかけ人の北海道美瑛町をはじめ、平成24年10月現在49の町村・地域が加盟。企業サポーターも多数。海外ではフランス・イタリア・ベルギー・カナダ(ケベック州)などで組織。

することになりました。

「日本で最も美しい村」連合は、小さい村や農村がどんどん衰退していく中で、農村景観や農村文化を守っていけば、観光客がそういうところを訪れるので「町を元気にしていこう」という趣旨で始まった運動であります。フランス、イタリア、カナダでは大きな運動となっています。イタリアでは400ぐらい自治体が参加した大運動となっています。最近では、イタリアをレポートした本も出版されました。その本では、イタリアも同じような山村地帯、農村地帯が過疎になっていたのが、過疎が止まって、農村がだんだんまた活気を取り戻したと報告されております。

## ■「すんき」を核とした産業振興

食文化を伝える

「伝統＋科学で再生を！」と掲げて、地域資源研究所を3年前につくりました。自治体の多くは工場誘致だけに力を入れているのがほとんどです。もちろん工場が来てくれるのは有難いですが、それよりもやっぱり、伝統的な産業、地域にあった産業を育てていくことも、大事ではないかと思います。町の資源を発掘し、これを活かして地域を活性化していこうということで信州大学を退官した先生を迎えて設立しました。乳酸菌漬物「すんき」は、木曽町や、その周辺で作られています。いつ生まれたかは、はっきり分かりませんが、松尾芭蕉の句に出てくるので、江戸時代には間違いなくあった伝統食品です。ずっとひっそりこの地域で伝えられてきた食品で、乳酸菌という菌の発酵の力で漬けているという世界でも類を見ない塩で漬けない食品です。世界に例のな

### 5 伝統＋『科学』で産業おこし 地域資源研究所の設立

木曽谷は資源の宝庫、菌が新しい産業を創り出す  
乳酸菌漬物「すんき」を核とした産業振興

すんき

すんき乳酸菌を使った町内企業の商品

(左) 研究所の内部

(中央) 保井久子所長の指導を受けるスタッフ

(右) 抗ウイルス機能を持つほお

い漬け物ということで、東京でシンポジウムを、去年までで3回やりました。そして、近年は全国放送でもどんどん取り上げられるようになりまして、「すんき」ブームみたいなものが今、起きています。

この乳酸菌を新しい産業に活かそうと、ヨーグルトやアイスクリームなどいろいろ作っている会社から、「植物性乳酸菌でヨーグルトができないか？」と相談を受け、私も自分で実験したりして、作れることが分かったので、県の研究所に依頼して、菌を探してもらいました。今は商品化されて、結構売れています。

そして今やっているのは、町の天然酵母採集です。2011年に町の資源を探そうということで、5000種の天然酵母を集めました。乳酸菌は約200種集めました。それ全部を保存しており、そのうち7種類の特許申請を出しております。このほか、枯草菌の研究もしています。

さらに、木曽に来られたら、木曽の食べ物食べていただくことが、観光客の皆さんへの最高のおもてなしになると考え、「スローフード木曽」を立ち上げてスローフード運動を起こしました。今では全国での運動となっています。

## ■木工芸振興

### 6 木は木曽の代名詞、木工芸振興

伝統工芸(八澤春慶塗)の保存

(左) 漆の館で春慶塗を研究する手塚隆氏

(右) 中学生の漆塗り体験

新しい木工芸 クラフトマン支援

伝統工芸からライフスタイルをデザインする 木曽生活研究所の設立 (H24)

東京でのクラフトフェア

生活研究所の商品群

大工と職人の技を継承する

私が木曽福島町長の時代に在来工法住宅の推進を始めました。大工さんが、どんどん減っていき、そして大手住宅メーカーの家が建ち並ぶという状況が少しずつ増えていき、日本の農村景観が失われてしまい、九州に行っても、北海道に行っても、木曽にしても同じ風景だと、悲しく思っていました。また、

大工技術を大事にしなくてはいけないと考えて、「木造住宅推進協議会」という組織を1999年に作り、在来工法技術の住宅をつくることに努力してきました。

またこの町は、春慶塗の里でもありました。八沢春慶とも木曾春慶とも言いますが、戦後に崩壊したのです。これを保存しようといろんな努力をしています（写真）。

## ■木曾音楽祭

39回目を迎えた木曾音楽祭

「小さな町の素敵な音楽祭 木曾音楽祭」は2013年で39回を数えました。この回を積み上げてきた背景には、木曾音楽祭を支えているボランティアがあるからだと言えます。

演奏家の皆さんの食事をすべて町民の皆さんがボランティアで作っておられます。宿泊も、ほとんど別荘や民家に分宿しております。

演奏家に払うギャラも、私が町長になってから1度も上げたことがなく、16年間凍結して本当に安いギャラで、ボランティアで演奏家に来ていただいております。日本を代表するような著名な演奏家がたくさん来ますし、それから最近頭角を現した若い演奏家も中にはいます。こんな片田舎で、もの凄い演奏会が良く続いていると、よそから来られた方がビックリされるような音楽祭になっています。

## ■木曾町サポーターズ倶楽部

2011年に「木曾町サポーターズ倶楽部」という組織を立ち上げました。木曾町が面白い町だと、いろんな人が訪ねて来ます。訪ねて来た人が、また友達を誘ってくるという形で、多才な皆さんが来られています。彼らが町を応援するような運動をします。例えば、メディア関係者と協力して「木曾メディア塾」というのを町で始めました。将来メディアの世界に進みたいという大学生を、木曾で呼んで合宿をします。そして、第一線のメディアの皆さんが、指導するのです。こうした多才な活動が広がっているのです。

### 10 サポーターズ倶楽部

70名の外部応援者たち(H25年1月現在)



町出身者や縁あって知り合った方などにまちづくりのアドバイスをいただく

- ・大学教授
- ・マスコミ関係者
- ・芸能、芸術関係者
- ・企業経営者 など

## (2) パネルディスカッション

**佐々木氏：**事例報告では非常に多彩な話が出ましたが、創造農村という切り口が、いろんなアプローチがあると分かったと思います。そこでまず、会場から質問を受けたいと思います。

### ■伝統工芸とアート

**女性A：**東京でデザイン事務所をしており、経産省で伝統的工芸品産地プロデューサーをしています。「日本の宝というのは、何か？」という、やはり「技」にあるのではないかと思います。技というのは日本の地域の地域性、伝統の中で、育まれて残ってきたものです。世界的な評価を受けてきているもの、ただこれをもう少し力を入れてやっていくこと、これもアートのひとつではないかと、私は考えていますが、先生方のご意見を聞かせてください。

**佐々木氏：**地域には伝統工芸のある昔の暮らしを支えてきた技があり、現代アートのアーティストを地域がどれだけ活用するかという話がありました。このアートと伝統工芸の「技」は、どういう関係にあるかという質問ですが、学者風に応えますと、ラテン語にアルテという言葉があって、アルティスとも言います。これは「技」であり「美」なんです。そこからアートが発生します、語源は同じものなんです。だから非常に親近感がある。

ただ、日本語の「技」と書くのと、アートと書くのとは距離があるように見えるけど、同じだと考えていいと思います。そういったところから、現代アートに入っていくと「中之条ビエンナーレ」が、地域の技にどれだけ影響を与えたかをまず伺いたいと思います。

**入内島氏：**すごく難しい問題だと思います。中之条の「こんこん草履」は、熟練のお婆ちゃんが、1日かけて2足やっとできるのですが、それで1,200円です。これでは生計を立てていくのは無理です。どんどん後継者が居なくなってしまうのです。何かデザインの力をプラスアルファして、残っていくようにできないかと思って、エルメスの副社長、地元の工芸作家に相談しているんですが、簡単には

答えが出てこないというのが現状です。「こんこん草履」は工芸品ではなく民芸品ですが、どうしたら時代にあったものとして残していけるようになるのか、やっぱりデザインの力、アートの力ではないかと私は思っています。しかし、上手くできていないのが、現状です。

**佐々木氏：**同じことを、金野さんに聞きましょうか？

**金野氏：**篠山では、伝統工芸で丹波立杭焼があります。今そういうものが脈々とあって残って来たとおっしゃったんだけど、ほとんど残っていないと思うんですね。だから何とか残さなければいけない。結局は「人」なので、佐々木先生が言ったように、やっぱり職人を育てないといけないわけです。新しく作ることは、僕らはあまりやりません。これまでのものを、次の世代にどう繋げるかということを中心にやっています。新しい現代版徒弟制度のようなものをつくって、ちゃんと基準をつくり、現代にあてはめるということ、当たり前のことだけでも、そういうシステムをつくらないと駄目じゃないかと思って、今、篠山でやろうとしています。

**佐々木氏：**大南さん、どうぞ。

**大南氏：**もともと僕らも職人を意識していました。商店街を再生する上で、若い職人達に商店街の長屋などいろんな所に入ってもらおうと考えて、空き家改修を始めたら、職人じゃなくて、その動きを見ていたサテライトオフィスのベンチャー企業が入り始めたということです。手探り状況の中で、予期せぬ現象が起こったから、それじゃあ、サテライトオフィスに来てもらえば、商店街再生という目的に近づいていけそうだと考えて、そっちの方向に走っていったのです。たまたまです。結果として、サテライトオフィス街のようなものができつつあるところです。だからまだ、職人さんには非常に未練が残っております。

佐々木氏：田中町長、いかがですか？

田中氏：技とアーティストが同じだと考えたことはありませんでしたが、伝統技術を守るのは本当に大切だと思っています。木曽町では、春慶塗、漆器、住宅建設です。日本の住宅、日本の大工さんが、今、もの凄い勢いで減っています。大工さんが高齢化し年寄りが亡くなっていき、若者の中で大工を目指す人がほとんどいなくなっています。宮大工は特殊な人ですが、住宅建設の普通の大工さんいなくなってしまう。日本では、恐らくあと50年もしたらまったく変わってしまい、古い家をもう修理修繕する人がいなくなるのではないかと、危機感を持ちます。私はこの間、金沢に行って、職人大学を見せてもらいましたが、ああした運動を起こしていかないと、日本の文化が衰退すると思っています。

佐々木：金沢の話も出ましたが、私が金沢大学にいた当時、山出前市長といろんな議論をしてきました。金沢市が、「市民芸術村」を旧繊維工場の倉庫の中に作ります。そこでは、演劇、音楽、絵画、現代アートなんかも扱う。その中に職人大学校があり、行き来ができるのです。先程、人の往来があると言いましたが、「市民芸術村」の中で、伝統工芸の職人さん達もいれば、コンテンポラリーアートをやっている若い人達もいて、彼らが自然と交わるような場所を作っていくことがポイントです。その中で自然の動きが発生してくるというようなシステムを皆さん言っておられるんですね。そのシステムをどうやって準備していくかというところが、従来は欠けていたのです。

ただ単にハードな建物を作って、作りっぱなし。その中を活用したり、あるいは古いものでも、古民家でも、それを上手く活用していくと、そこに隠されていた、あるいは眠っていた価値が再発見される。そのことによって古い技と新しいアイデアが結びつくきっかけが生まれるのです。

創造都市とか、創造農村というのは、そういう古いもの新しいもの、異質なものが出会う場所を上手につくっていくことだと思います。

## ■伝統と創造

男性A：岐阜県立森林文化アカデミーという専修学校で教員をしています。

特に創造農村の農山村のことについてお聞きしたいと思います。空間文化や景観という話があります。地形、自然の繊維、あるいは農林業などは、人の手が加わってできてきたもので、決して名のあるアーティスト、デザイナーさんがした仕事ではない。「用の美」という言い方もありますが、培われてきたものと、今回お話のようなアーティスト、商業デザイナーのような方による、古民家や商店街を再生した空間は、私の目から見ると、心地の良い美しい景観に見えますが、この2つは果たして一致するものでしょうか？

あるいは、そういった新しい動きが「用の美」というものを、復活させるような起爆剤になるのかどうか、私自身は感じつつも、確信が持てないんです。皆さんにそのあたりのことを、お伺いしたいと思います。

金野：篠山では、今、おっしゃたような、暮らしというようなテーマでやっているの、暮らししている人が作っているものに重心を置きます。だからおっしゃっていることは非常によくわかって、私もいろんなことを考えています。

農村空間とか美しさというものは、本当にそれだけでアートなのです。彼らは、名はないけれども素晴らしい能力、技術をきっと持っているわけです。そういうものを伝えているという考え方であって、その中から少し尖がったものが出てくるとか、何かインパクトがあってもいいかと思っています。

田中氏：非常に難しい話なんですが、木曽町は伝統的な文化や技術、いいものを残して、新しい時代に再生し、活かしていくという考え方できました。まったく新しいものを、アートとして入れるということはやっていませんが、町にはたくさんの移住者がいます。こういう人達の中には、創造力を、持っている人達がたくさんいます。すべての時代は進化していくわけですから、そうして新しい文化が育っていくのではないのでしょうか？そうやって時代や歴

史は、作られていくのではないかと思います

**大南氏：**僕自身は、あんまり同じになってきたら、逆に面白くないと思っています。

伝統工芸から入ってくる人、現代アートから入ってくる人、演劇から入ってくる人、いろんな人がやるから面白いのであって、それを全部同じような形に、価値観1つに決めていく方が、逆に新しいことを生み出しにくい気がします。

### ■創造都市と創造農村

**佐々木氏：**「創造都市」というものを考えた時と、「創造農村」というものを考えたときに、例えば都市景観の美しさは多分に建築家やデザイナーといったアーティストの意図が非常にはっきりしています。ところが農村の自然景観は、自然の持っている美しさ、自然の持っている創造性、このウエイトが圧倒的に大きいです。

人間が行う技というのは、小さいものだと思います。そこで、田中町長が言ったように、美しい村を作ると決めたら、まずその景観を保全するところから入ると思うんです。自然景観の美しさを取り戻す。取り戻した先に何か少しでも新しいものを付け加えるかどうかというのが、美しい自然景観と向き合った時に、創造的な活動をする人達の配合の仕方ではないかと思っています。

例えば今、現代アートのトリエンナーレをやっています。瀬戸内海では「瀬戸内国際芸術祭」、大都市では「あいちトリエンナーレ」をやっています。この「瀬戸内芸術祭」と「あいちトリエンナーレ」を比較すると、僕はそのことを非常に実感します。

瀬戸内の場合は、ベネッセの会長が、小さい頃から自分が慣れ親しんでいた瀬戸内海の美しさが工業化の中で、どんどん汚されていくのを見て、それを何とか戻したいという、それが瀬戸内の復権なんですね、大きなテーマです。これにはまず瀬戸内がもってる美しさを、人々が生活レベルで再建することから始めないといけない。

例えば、豊島では、産業廃棄物の山ができた。そこをアートで再生しようとしたときに、「金沢21

世紀美術館」の設計者である西沢立衛さんが、豊島美術館をつくった。島々が見える丘の上に、自己主張するよりも、むしろその中に溶け込むような美術館、そこで自然と対話ができるような美術館を作った。

彼には、圧倒的な自然の持っている景観美というものが、まず出発点にあった。ところが「あいちトリエンナーレ」のテーマは「揺れる大地」です。その芸術監督に選ばれた五十嵐太郎さんは東北大学で震災を経験し、「揺れる大地」をテーマにした。そこで選んできたメインのアーティストはヤノベケンジさん。彼の作品は、愛知芸術センターの中に「サン・チャイルド」という大きい造形物があります。彼がかつてチェルノブイリを視察したときに、チェルノブイリの保育園で、子供達がいなくなって、誰もいない中で拾った人形からインスピレーションを得て、22世紀、23世紀の未来の核戦争の中でも生き延びれるような、姿の人形をモチーフにするんですけど、これには巨大な自然科学が破壊的な力がやってきた時に、人間がどう立ち向かうかという強いメッセージを持っています。それが、愛知芸術センターのど真ん中に立っているんです。それは、これまでの文明がつくってきた大都市が持っている問題と向き合うアートの力です。

都市と農村の大きい違いは、自然の圧倒的な造形美の中でアーティストが非常に小さい存在として自覚できたアートと、人間の営為の積み重ねである大都市で出くわすアートとの違いです。そういったものを感じます。だから、創造農村といった場合、農村景観とか農村の美しさ、自然の美しさというのを第一に考える。ここを外してしまうと、創造農村の存在の意味がないと思っているくらいです。

**男性B：**福岡県京都郡みやこ町という非常に小さな町から参りました。「スローラボ」というNPOをやっております。クリエイターとは、アーティストとか、特殊な人と考えずに、創造的暮らし手だと自分達の活動の中で言っているんですけども、誰もがクリエイターであるという考えのもと、いろんな活動をしています。私の住んでいる町も、やはり過疎高齢化が進んでいますが、地縁、血縁というも

ので成り立っているこの町を変えていくには、新しい価値観というか、違う縁というか、新しいレイヤー層をつくっていかなくてはいけないという思いで、私どものNPOに共鳴してくれる人達とつながりながら、活動をしているところです。パネラーの方々の実例を参考にさせていただきながら、良い所を普及させて、自分の地域が発展することができればと思っています。

先ほど、入内島さんが、すでに町に移住して来られた方が、離れていったことがあったと言われましたが、アートやまちづくりに取り組むために移住して来られた方が離れていく原因と、それに対して、どうすれば地域が持続的に発展することができるか伺いたいと思います。

**入内島氏：**中之条という小さい町の小さい事例でしかないですが、アーティストは、自分達を待っていてくれる地域に行きたいという気持ちがあると思います。「中之条町にアーティストが、移住し始めた」という記事が載り始めると、「私も移住したいですけど、どうすればいいですか？」という電話もありました。ただ本当に移住できるかというと、そうではない。例えば、山重さんという総合プロデューサーは、電通の仕事をしていますので、東京都と中之条を行ったり来たりしています。中之条に住むことも可能ですが、移住しないアーティストが、圧倒的に多いと思います。

アーティストで食べていきたいけれども、30歳くらいまで頑張って、やっぱり食べていけなくて、普通の人になるという人が、日本ではすごく多いと思います。そういう彼らにチャンスを与える町があれば、行ってみたいと思うんですよね。私はそういう方針でやっていて、アーティスト50人移住してもらうのを目標にしようと言っていたので、彼らとも話をしたり、直接接するようにしていました。そうすると、移住者がだんだん増えて、10人くらいまでいったんです。役場の嘱託職員になってもらったりしていました。

でも、私が辞めて、選挙もなく無投票で新しい人が町長になっているんですが、前任者の方針は、なかなか受け継ぎづらいところがあります。しかも、

こういうアーティストみたいな分かりづらいことは、議会も「文化で町が良くなるのか」と平気で言います。「経済は文化のしもべ」と福武總一郎さんは言っています。そこを分かってないと、アーティストはすーっと居なくなってしまいますよね。それを分かって、彼らをちゃんと受け入れられるかどうか地域力だと思います。

「若者、馬鹿者、よそ者」を、私はすごく良い意味で言っているんですけども、その3つを揃え持つ人はいないです。アーティストは3つとも持っていますから、そういう人達をいかに町に引き込むかってことが、本当に大事だと思うんです。その辺が分かってないのが一番残念なところです。

**大南氏：**神山の場合は、基本的に、去る者は追わずというか、離れていくというのは、ある面、人の気持ちの移動の問題なので、防ぎようがないと思っています。結局、神山に入ってきた人達が、自分達の夢とか思いを実現する際に、受け入れ側としてどれだけお手伝いできるかが、1つのポイントになるかと思っています。よそでは断られたけれども、神山だったらやらせてもらえるらしいといった感じで若者が入ってくるわけです。現このように断らないことを、1つの価値として続けていたら、結果的にいろんな人達が入って来て、彼らのネットワークに繋がっていったのかなと思います。

でも、実際に事業をやるのは彼ら自身で、地域の人間はサポート役になります。彼らが上手くやり遂げたら、そこから新しい人間関係ができて、また違う人とつながって新しいことを生み出していくといった連鎖反応を起こしていく気がします。

**田中氏：**今「手仕事市」を、町のあちこちでやっていますが、木曽町には38人の木工作家が来ています。木曽では技術専門学校が隣町にあります。そこで学んだ人達の中には、一流企業で頑張っていたのに、突然、考え方を変え、生き方を変えて、専門学校にやって来て、木工技術を学んで、木工作家になった人もいます。「ちっとも売れないもんだから、生活に苦労しているんじゃないか？」という人達を支援したいと思って、町の規則を作ったりもしましたが、なかなか難しいですね。町が買い取る



ということもできませんし、会社を作って、彼らの作品を集めて販売するのはどうかなど、私自身も非常に悩んでいます。

そういうことを大事にしていかないと、日本の未来は淋しいと思います。皆さんの中で知恵があったら、是非、知恵を貸していただきたいと思います。

**佐々木：**今の質問の中でいくつか関係するテーマがあったと思いますが、1つは、中之条のように、入内島さんが在任中に3回やられた「ビエンナーレ」。町長を引退された後でもどうやって続けるかという話でしたが、これが順調に展開していければ、アーティストも、まだまだ希望が持てますよね。

「ビエンナーレ」や「トリエンナーレ」を長くやっている世界の町がどれくらいあるか調べましたが、「ベネチア ビエンナーレ」は100年やっているんです。1世紀です。1世紀やる間に、相当、たくさんの市長が代わっているわけです。でも続けるようなシステムやノウハウがある。この回答の1つは、行政ができることと、NPOや市民セクターができることが、それぞれあって、うまく分担できていることだと思うんですね。

例えば、神山町は、行政は頭が固いかもしれないけれど、NPOのグリーンバレーは、凄く先進的です。行政の限界をカバーしているわけです。あるいはノオトのような一般社団法人と行政がWin-Winであればもっと効果が高いです。「創造都市」や、「創造農村」ということで、明確な意識を持ってやっておられる首長さんが、ずっと続けばハッピーだけど、そんなことは必ずしもあるわけではない。世の中紆余曲折があります。

金沢で十数年、「創造都市」を推進しているのは、その間、市長が代わられたりするけれど、「金沢経済同友会」という経済団体が「創造都市会議」を毎回開催しているからです。

町村の中で、どういうプランがあって、どういった推進母体を、それぞれの町村のケースに合わせて作り出していくかというのも大事なことでないかと思っています。決して行政だけで持続可能になるものではないと思います。

**男性C：**信州大学の加藤と申します。2点伺いたいと思います。

1つは「創造農村」というコンセプトをどう考えているのかということ。もう1つは、今、アベノミクスと調子のいいことっていますが、まさに右肩上がりから、高齢化社会、減少社会という状況になって来ているという中で、この「創造農村」という概念を我々がどうクリエイティブするか、というのが今、我々に投げかけられている課題です。それは別の言葉でいうと、農山村の再生という概念だったりします。その時に、いつも気になるのは、「生業（なりわい）と営みの場である集落」。皆さんは、コミュニティと横文字を使いませけれども、私は共同体という問題でいいじゃないかと、どこに違いがあるのだろうという気がします。

ところが、コミュニティ、共同体はよそ者が来るのを拒否する場合もある。そういう意味で共同体が持っている両義性、これをどういう風に皆さん考えるのか、このことを考えない限り、「創造農村」は実現しないのではないか、という感じがしています。

**佐々木：**今の質問ですが、本当は最後の答えとして、皆さんに一言ずつ答えていただこうと思っていたので、それまで皆さん、ちょっと考えていて下さい。皆さんの答えを、全部かき合わせていった時に、グローバル資本主義が荒れ狂う中で、いったい過疎の小さなコミュニティや共同体に、未来があるのかというような疑問に、1つの道筋が与えられるのかもしれないと思っています。答えは後の楽しみにしておきましょう。

**男性D：**長野県の本曾地方事務所の者です。移住や空き家について、それぞれ先生方のお話があったので、興味深くうかがいました。金野先生の資料の中で、「空き家が流動化しない理由」を書いてありますが、「仏壇が残っている」「盆や正月には子どもが帰ってくる」「変な人に貸すと近所に迷惑がかかる」というようなことがあがっていると、これは絶望的だと思ってしまいますが、貸せない理由を創意工夫でクリアしていくヒントをもう少しいただけますか。

あと、同じ資料の中で、最後時間で説明いただけなかったのですが、「伝統的建築物を活用する」制度枠組みが必要」というようなワードを、ちょっと教えてください。

**金野氏：**その建物がどう使われるかというのが地域で合意されると、流動が始まると申しました。例えば、「仏壇が残っている」から貸せないとありますが、我々の集落では、仏壇が残ったまま、宿泊施設として貸していました。普段は、お客さんが来て泊るんです。何故か開かない襖が1枚あるだけなんです。そこには仏壇が、ちゃんとあるんです。そこを持ち主の方は、年2日、お盆と正月に帰ってくるだけなので、この2日の優先宿泊権利を持ち主の方に与えます。そうすると、カビ臭い家ではなくて、草が生えている家じゃなくて、綺麗な宿泊施設に帰って来て、法要をしてそこに泊まって、なんならフレンチを食べて帰れるわけです。創意工夫とはそんなことです。

家が片付いてなかったら、行って片付けたらいいんです。「片付いてない」と持ち主の方に言われたら「僕ら片付けます」と言っておしまい、そんな感じです。

もう1点聞かれたことは重要なことなんです。日本の国は、古民家など伝統建築物を文化財として指定して保存するという制度があります。しかし、文化財指定された建物の約1,000倍くらいの、指定されていないけれど価値のある建築物があります。これを活用するという制度が、日本にはありません。おかしいでしょう？ ヨーロッパに行ったら、街角の古い建物にカフェがあったり、B&Bがあって、そこに泊まったりできます。しかし日本ではそういうのをつくってはいけない制度になっているんです。これは改めなくてはいけません。現在、「国家戦略特区」の取り組みを進めています。上手くいくと10月に、この制度が動きます。「建築基準法・旅館業法・消防法などの一体的な規制緩和」を、内閣府に持ちかけている段階です。

**女性B：**山梨で教員をしていましたが、今は長野県で農ある暮らしと仕事を求めて移住して、取り組

み始めた者です。今日話をうかがってとても勉強になった、確認できたなと思ったのは、その地域について考える時の順序です。往々にして1ターンを増やすとか、人口減少をくいとめるとか、少子化に対応するとか、耕作放棄地を解消するということを目標において、それに向かっていくと考えがちですが、そうでなくて、あくまで結果だというようなコメントが複数の先生方がされたと思います。

それが、結果であったとして、例えば、景観保全だとすれば、何色にするかとか、どう揃えるかとか、草刈りを何回やるかとか、そういうことではなく、生業が成り立ったり、やりがいを持って農業に取り組めるという社会的な環境があって、初めて景観保全がなされると思っています。そうしますと、小さかるうが、限界集落と言われようが、その条件を活かして、一生懸命やっていくんだという人々の営みが、まずあって、それが結果として、政策的にみて成功と言われる時もあれば、政策的に日の目を見ないということもあると思うんです。しかし必要なのは、その手前のプロセスをつくることだというのが皆さんのお話で分かりました。

例えば大南さんは、「芸術家にとって場の価値を生むような地域をどう作っていくか」と言われましたし、金野さんは、「行き交うということを生む」とおっしゃいましたし、入内島さんは、「空間デザインの運営をアーティストに委ねながら、それを育てていく」とおっしゃいました。表現はそれぞれですが、プロセスをどう作っていくかってことを、教わった気がします。

しかし、そのプロセス自体は、やはり担い手、その地域に固有のものなので、容易には真似できないように思うんです。そこを承知で伺いますが、そういうプロセスはどうやったら生まれるのでしょうか？

**大南氏：**結果的に面白いものが生まれるスタートは、本人自体が「こんなことをやったら楽しい」ということから始まるような気がします。例えば、グーグルをつくった人も「なにか面白いから、やろう」からスタートして、それをずっと掘り進んでいくうちに、結果として社会の課題が解決していく。神山

ではよく、「大南さん、もうアーティスト・イン・レジデンスの使命は終わりましたね」「これだけサテライトが入って来て、移住者が入って来ているから、もう、やらなくてもいいじゃないですか？」と言われます。でももともとアーティスト・イン・レジデンスに使命を与えていたわけではないんです。地域の住民達が、アーティストであれば、自分達の力で町に呼んで来られる。お接待の文化が根付いているから、そのお世話はできる。そして、自分達もその制作に加わるような形になればもっともっと「面白くなるよね」というところからスタートするわけです。それからいろんなことが発生していきます。

物事っていうのはやっぱり、やってみないと分からない。サテライトオフィスに来る人は循環してくる人だから、雇用を生まないと言われたが、2年間で20以上の雇用を生み。移住には結びつかないと言われたが、4、5世帯が移住し、神山で働くことになった。とにかく最初は、面白いとか、こうやったら楽しいよねっていうことから入って行って、内にいる人達が楽しそうにしていたら、その場は外から見ても楽しいわけです。

みんなが頭を突き合わせて、下向いて「限界集落って辛い」と言うようなところには、入っていきたくないじゃないですか？ 人間、やっぱり辛い状況にありながらも、前向きに真剣にやっていくことで、「おれも一緒に参加してやろう」という人を引っ張ってくるのであって、自分達が直向きに、少しは良くなっているはずだと信じながら一步一步前に進むことだと思います。

## ■伝統芸能

**男性 E** 木曽町出身で、サポーターズ倶楽部の会員でもあり、今日は京都から来ました。和太鼓の底辺を広げる仕事をして、人々がハッピーになるために、人間的なコミュニケーションを豊かにすることを仕事としてやっております。

先ほどの話、本当に勉強になって、とても素晴らしいなと思いますが、全体としてはアートといいながら、芸能というもののまでは意識があまりされてないかなと。

例えば、第2次世界大戦後に日本中に芝居小屋は、1,000以上あったのが、今はもう100もあるかないかと言われています。各農村地帯には地歌舞伎、あるいはさまざまな神楽、芸能があって、祭りを中心として、人々のコミュニティがすごく発達し、その中に豊かな人間関係がある。

地域の中で、住民が主役となって表現することが祭りという形に象徴的に表れていると思うんですが、そのようなことをもっと意識して、「創造農村」とか、あるいは、「創造都市」ということに、私は力を入れていきたいと思っています。

**入内島氏：**中之条町は人口1万8,000人しかないですけども、獅子舞と神楽が24あります。子供も少なくなっているんですが、24の集落で残っているんです。たぶん、この人口規模で、こんなに残っているところは、日本でもないんじゃないかなと、群馬県だけは調べてみたところ、人口対比でみると断トツで多いです。

そのことに最初に気付かせてくれたのは、アーティストでした。アーティストが入って来て、町のパンフレットをつくるときに、神楽などの伝統芸能を前面にもってくるわけなんですね。住んでいる人達は、あまり気付かなくて、当たり前だと思ってやっているんですが、遠くから見ると、これがいかに素晴らしいことを、改めて教えてもらった。私も、そのことに気づいて数を数えて、あまりに多いのにビックリして、これらを残していこうと再認識するようになりました。

**佐々木：**私が印象に残っているのは、東日本大震災で被災された方々が、再び勇気や希望を持って暮らし続けられるかどうかという時に、伝統芸能の力が根源的だということがあちこちで報告されています。私も、神楽の復興のお手伝いをさせてもらったことがあるのですが、実は東北地方に、あれだけたくさんの伝統芸能があるというのは、歴史的に非常に大きな被害が繰り返されて来たからではないかと思っています。亡くなった方を弔ったり、自然の猛威を受け止めながら、特に生き残った人達が本当に、勇気を持って生きられるかっていったときに、伝統

芸能は、まさに人々の心を奮わす力があるんだろうと思うんです。それをアーティストが再発見することなんだと。

**男性F**：信州大学の医学部を出たあと、東京で医者をやっています。お伺いしたいのは、村という思い浮かぶのが、村八分とか。いい言葉ではないですが、特に何が気になるかという、皆様がやっている「創造農村」で、医療とか教育のインフラを、今後どうやって考えていくのかということです。

「村の子ども達は、結局、都会の高校に行かないといけない」とか、「年を取ってくると、うちのお婆ちゃんは息子が都会にいるから、都会の方に引越すことになった」という話をよく聞きます。創造的なエネルギーを持って、教育、医療などの問題をどのように解決していくのかということ、ぜひお聞かせ願いたい。木曽町では既に先進的にやられているようなのでお伺いしたい。

**田中氏**：木曽町もどんどん過疎が進んでおりまして、合併してから、人口が11%減少しました。若者が都会に出て行って帰って来ないということが大きな原因です。私は、「ここで食っていけない」ことが、一番大きな原因になって、都会に出て、都会で暮らし、村の年寄りが一人で暮らせなくなると、都会へ呼ぶという形で人口が減っていくと考えてきました。しかし、日本の農村が、どんどん崩壊していくことになれば、日本の国家そのものが、持たないのではないかと思います。

2011年2月、国土交通省の長期展望委員会が、「2050年の日本」の中間報告を発表しました。それを見ると40年後に、山村は61パーセント人口が減り、山村の2割は、無居住化すると書いてある。無居住地域には色が塗ってあり、都市部を除いて日本中が真っ赤です。北海道、四国、東北地方も真っ赤ですし、木曽も真っ赤です。山村人口が今の4割になるということですから、もう大変です。私は、そういう日本であっては日本の未来がない、何とかしてここで暮らしていける社会を作っていないといけないと思って、新しい日本の未来、日本の国づくりのために、「創造農村」の地域づくりに取

り組むことは、戦いだと思っています。

頑張っていくうちに国民の意識もだんだん変わり、価値観が変わっていく。価値観が変わらないと農村は生きていけないですよ。儲けた金で、楽しく贅沢して暮らすことが幸せだと考えているうちは、日本の社会は変わらないと思います。価値観が変わり幸せとは何だとか、人間が支え合って生きていく社会でないと農山村は守れないとか、こういうことに気付かないと、きっと木曽も守ることができないのではないかと思います。

**佐々木氏**：医療の問題で言いますと、信州では佐久総合病院が世界的にも農村医療のトップクラスです。そこでは今、地域交流が病院をコミュニティの中心にして展開されている。病気になってから患者として訪れる前に、日常的に生活レベルで予防医学に努めている。そういった実践が各地で始まっている。病院が持つコミュニティ再生機能に着目したいところです。

**男性G**：私は地元の高等学校を経て、最後は定時制で教師をしておりました。さっき田中町長さんが、八澤春慶の話をされていましたが、八澤春慶の塗職人は、いくらでもいます。一番問題なのは、木地をつくる後継者がいないことなのです。今、木地をつくる職人は90代。私が担任をしました45歳の木地職人は、ここでは生活できなくて、よそで生活しています。15年後には、彼がただ1人の木地職人になるでしょう。木地職人はもう絶滅状態です。私は、日本木地師学会を1983年に設立した1人で、約30年間にわたり、雑誌を延べ約4,000ページ編集してきました。編集しながら、後継者をどうつくるのか、木地師、木工挽物の職人をどうつくるのか、研究者である私の宿命だったわけです。具体的に取った対策として、岐阜県、鳥取県、岡山県で木地師を「人間国宝」にいただきました。それは個人の名誉というよりも、後継者の問題です。

私どもは、江戸時代以降を中心に木地師研究をしていますが、彼らは山から山を転々と歩いて移動した人達です。さっき福岡県の方が、みやこ町と申しましたが、ここもやはり木地師の集落があります。

四国の半田町、群馬県の上野村にも、木地師の集落があります。彼らは転々としながら、その地域の産業を打ち立てていく。会津漆器、輪島漆器も、すべて木地師が基をつくったのです。

**佐々木：**私も金沢の伝統工芸を調べている時に同じような思いを持ちました。そここのところが欠けたら、蒔絵づくりとか、加飾だけではできませんね。そういうベースのところをつくる人達に光を当てる、これは「創造都市」「創造農村」の中でも大事なテーマだと意識していますので、ぜひ一緒にやっていきたいと思います。

では最後に、4人の方に「創造農村」を一言で言ってもらって、まとめてたいと思います。それでは入内島さんから。

#### ■創造農村とは

**入内島氏：**一言では難しいですが、根底ではどう生きるかという価値観が変わっていかないといけないと思います。グローバリゼーションがすべてという価値観の中では、農村は魅力がないかもしれないけれど、その価値観をちょっと変えた時に、農村の持続可能性ではなく、持続価値というものがみえてくると思います。それを生み出すのが「創造農村」の役割ではないかと思います。

**大南氏：**今日まで日本の地方において、集落は血縁者に託して受け継いでいくのが一般的だったと思います。ところが、現在はその地域における世代間の循環が、ブツリと切れてしまっています。そこで、今度は「誰が継承するか」に固執せずに、「何を受け継いでいくべきか」に視点を移していくと少し見え方が変わり、スッキリとしたものになる気がします。

「創造農村」とは、地域に住んでいる人と、新たに地域に入って来た人達が共につくる新しい暮らしの形、新しい暮らしの場だと思います。

**金野氏：**創造農村が何かということについては、私ども篠山で昨年、第2回の「創造農村ワークショップ」をしたときに、同じように悩みました。

創造性の源泉というのは、「職人の仕事（Opera）に込められた生命の発露」、これは佐々木先生の言葉です。ある土地、環境に働きかけること、職人の技術と魂が、何か新しいものを、その空間に生み続けていくこと、これを創造と解釈しました。そういうものが起きる場所を「創造農村」と捉えています。

お百姓さんは、百の能力があるという意味ですよ。お百姓さんも「創造農村」を支える人材だし、工芸をやっている人もそうだし、その他、お祭り、芸能とか、そういうのも含めて、創造的なものとして受け止めています。

コミュニティの捉え方は、大南さんと一緒です。両義性というものは閉鎖的なものと否定せずに、大いなる前提としておいた上で、物事を考えます。それが息苦しいんだったら、どうやって空気を抜くか、みんなで考えるのがよいですね。その閉鎖性が駄目だから、なにかふわっとしたネットワーク型で人間関係をつくりましょうなどとは考えないですね。

**田中氏：**私は、天より地を活かした地域づくり、と言ってきました。地産地消の産業づくりということも言ってきました。そこに住み、地域にあった産業をつくり、そして暮らせる社会をつくらなければいけないのではないかと考えています。

それが「創造農村」であり、文化だと思います。文化を、例えば、狭く捉えるのではなくて、広い意味の文化として捉える必要があるのではないかと、いうふうに考えます。

**佐々木氏：**それぞれ非常に含蓄のあるお話をいただきました。あともう1人、お話をいただきたい方がいます。北海道東川の町長の松岡市郎さん、お願いいたします。

**松岡氏：**来年、私ども北海道の「写真の町」東川町で「第4回創造農村ワークショップ」を開催をしていただくことになりました。

私達の町は、本州の皆さん方の手によって開拓が始まってちょうど120年目にあたります。創造農村ワークショップが、未来のまちづくりの参考にな

るのではないかなと期待しております。

もう少し話させていただきますが、私達の町ですけれども、いろいろなものがないです。全国的に珍しい町だと思います。鉄道がない。国道がない。上水道がない。だけど人口が、10年で400人くらい増えている。という不思議な町です。ですから、その不思議さを、ぜひ発見して欲しいと思います。

私も行政に携わっておりますと、北海道はもともと“疎”で、過疎です。ですからその“疎”に、どういう価値をつけていくかと、いうことが私達の役割ではないかと思っています。そういう価値をつけるというのが、文化であったり、芸術ではないかと思っています。そして最も大切なことは、3つの「わ」だと思います。

1つ目の「わ」は「会話」です。今住んでいる人も、これから農村に住む人達も、しっかりと対応できるまちづくり。「会話」のできるまちづくりをどう進めるかです。

2つ目の「わ」は「調和」です。自然と文化の調和をどう図っていくのか。あるいは新しく来た人と古い人との調和をどう図るかということ。

3つ目の「わ」は、「支え合う和」をどう図っていくかということ。この3つの「わ」が、大切だと思っています。

私達の町も日本一が、たくさんあります。木曽町と同じように。どんな日本一があるか、旭川空港に日本一近い。そして、旭山動物園に日本一近い。ぜひお越しください。お待ちしております。

**佐々木氏：**これでシンポジウム終わりです。どうもありがとうございました。

\*本稿は2013年8月25日に長野県木曽町で開催された「第3回創造農村ワークショップ」での議論をもとに加筆修正したものである。



<平成25年8月25日収録>

# 創造農村ワークショップ シンポジウム「地域資産と創造農村」 アンケート（有効回答数38）

## 1. ユネスコの「創造都市（クリエイティブ・シティ）」についてご存知ですか

	回答数	割合
はい	22	58%
いいえ	16	42%

## 2. 創造都市（創造農村）への取り組みから、今後のまちづくりに可能性を感じましたか

	回答数	割合
はい	35	92%
いいえ	1	3%
無回答	2	5%

## 3. 本日のワークショップはいかがでしたか。

テーマについて

	回答数	割合
大変適切だった	26	68%
適切だった	8	21%
もっと検討すべき	0	0%
無回答	4	11%

内容

	回答数	割合
大変よかった	25	66%
よかった	10	26%
あまりよくなかった	0	0%
無回答	3	8%

主な理由や感想

- ・ クリエイティブな活動、あらゆる取組や方法論を聞くことができ有意義だった。
- ・ 新しい町づくりと古くから地域で守られている町づくりがうまく調和するとよい町づくりと考えるが、その移りかわりを地域が受け入れることができるか。
- ・ アーティスト的な考えはさまざまな想いがあり難しい。
- ・ このようなシンポジウムを私の住む町でも実施したい。
- ・ これからの農山村を考えていく上で大変参考となる論点を先生がたよりいただいた。アートの力で地域をいかにして演出し、皆でつくり上げていくか考えてゆきたい。
- ・ 創造農村の基本概念がややおいまいに思います。文化庁としてのめざす目標を今少し明らかにする必要があるのではないのでしょうか。

## 4. ワークショップに参加して、創造農村「木曽町」への可能性を感じましたか？

	回答数	割合
大いに感じた	20	53%
少し感じた	15	39%
あまり感じなかった	1	3%
まったく感じなかった	0	0%
無回答	2	5%

理由と感想

- ・ 木曽町ですでに始まりつつ流れを大きくしていくことで創造農村をつくれる気がした。
- ・ 限られた時間で語るにはあまりにも大きなテーマです。
- ・ 地域が抱える共通の問題などをいくつか抽出し、テーマ毎の検討会などがなされたならより生産的な時間となるのではないのでしょうか。

## 5. その他、創造的なまちづくりへのご意見・アイデアなどあればお聞かせください。

- ・ 更なる芸術家、活動家と地域住民との支援充実。継続は力なり。
- ・ 「農業」「農村」の根本的な考え方・取り組み方について深く話し合う必要があるのではないのでしょうか。
- ・ 「若者の力」というのが町を活気づけると思うので、地元の小・中・高生を参加させれば良いかと思いました。
- ・ 伝統産業への価値は認識されているものの、継承、革進への具体策がないように感じます。

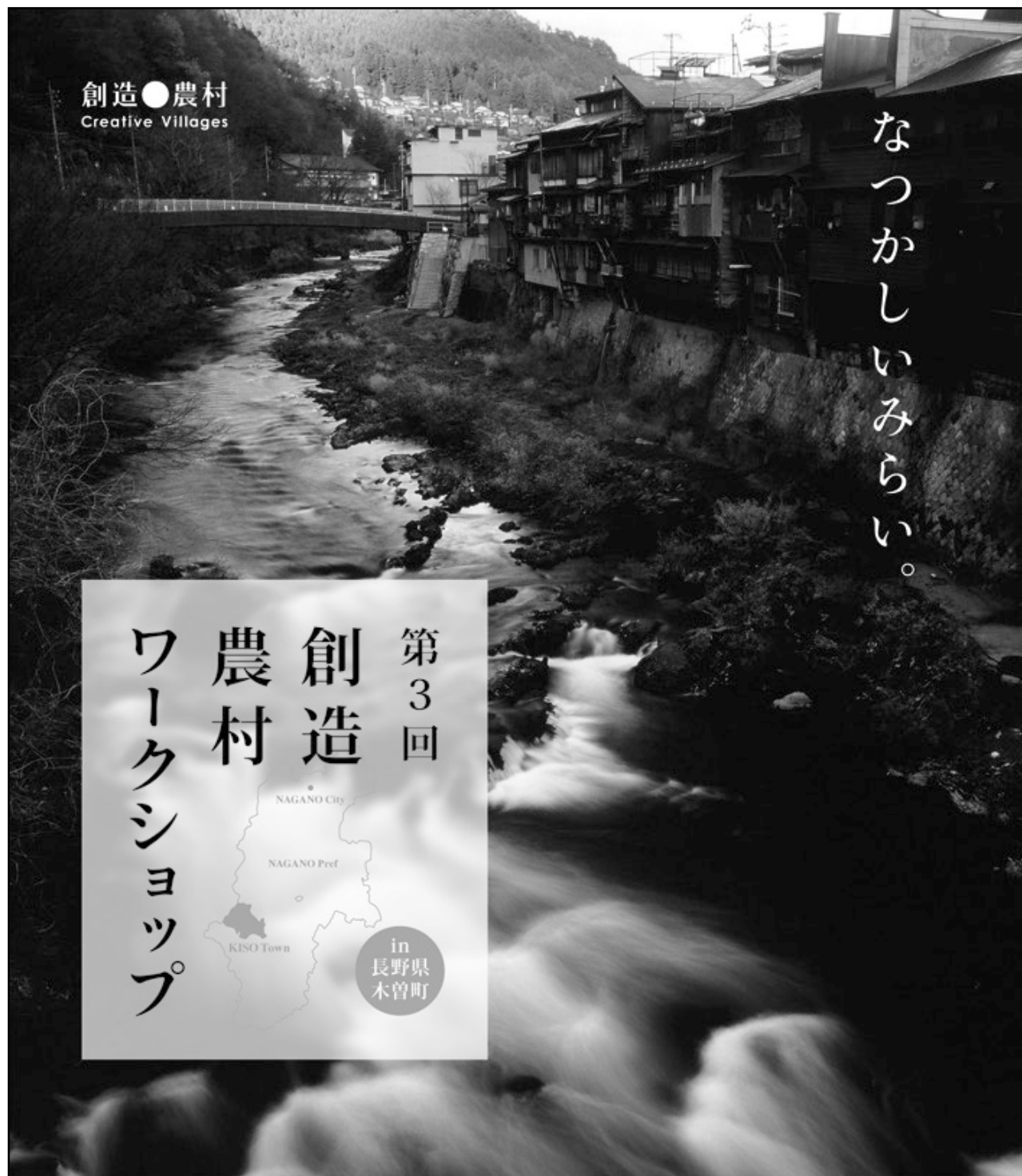
お住まいの市町村

	回答数	割合
長野県内	11	29%
県外	16	42%
無回答	11	29%

所属等

	回答数	割合
一般・市民	6	15.8%
研究者・教員	5	13.2%
学生	4	10.5%
自治体職員	11	28.9%
地域づくり団体等	4	10.5%
その他	4	10.5%
無回答	4	10.5%

創造農村ワークショップ シンポジウム「地域資産と創造農村」  
広報チラシ



2013年 8月24日(土) 25日(日)

会場：長野県木曽町(木曽文化公園、開田高原、木曽郡民会館など)  
主催：文化庁、創造都市ネットワーク日本(CCNJ) 共催：木曽町  
お問い合わせ：木曽町役場企画財政課  
〒397-0001 長野県木曽郡木曽町福島2326番地6  
Tel. 0264-22-4287 Fax. 0264-24-3602 Mail. seisaku@town-kiso.net

文化庁

文化庁  
[www.bunka.go.jp](http://www.bunka.go.jp)

CCNJ  
Creative  
City  
Network of  
Japan

創造都市ネットワーク日本  
[ccn-j.net](http://ccn-j.net)

木曽町

長野県 木曽町  
[www.town-kiso.com](http://www.town-kiso.com)



農山漁村の持つ豊かな文化資産を活かした地域づくりについて考える創造農村ワークショップ。2011年(第1回)は仙北市に、2012年(第2回)は篠山市に創造農村に取り組む地域が集まり、それぞれの地域の多様な文化とその可能性、地域の連携の必要性について考えてきました。

2013年(第3回)は、長野県木曽町で開催することになりました。そして、今回から文化庁と創造都市ネットワーク日本(CCNJ)の主催事業となります。

御嶽山、中山道の町並み、木曽馬のいる高原…「日本で最も美しい村」で、豊かな明日の日本について語り合いましょう。

#### 現地視察 ～木曽町の見どころ～

中山道の要衝であった福島関所を中心に栄えた福島宿の街並みと崖家造り。木曽御嶽山(3,067m)の裾野に広がる高原に、日本の在来馬である木曽馬が飼育されています。

#### 木曽音楽祭

39回を数える日本で最も古い地方のクラシック音楽祭。ブルッフ/弦楽八重奏曲変ロ長調、ラハナー/九重奏曲へ長調などが演奏されます。

#### 木曾学研究所

「木曾の人々が、木曾の資源に誇りを持つことにより、木曾の人々の顔が輝けば、人々を引き付ける魅力につながる」と考え、山村・森林・環境・農林業など様々な面での活動を行っています。

### パネリスト紹介

#### 田中 勝己氏 Katsumi Tanaka

木曽町長／木曽広域連合長  
www.town-kiso.com



1937年生まれ。木曽山林高校林業科卒。30歳で木曽福島町議に当選、国有林再生のための全国運動を展開、事務局長を務めた。1998年木曽福島町長に当選。中心市街地活性化事業を進め町の活性化に注力した。木曽町合併を主導し、2005年木曽町長となり、独自のまちづくりに取り組んでいる。

長野県  
木曽町

#### 入内島 道隆氏 Michitaka Iriuchijima

前中之条町長／NPO法人ぐんまCSO理事長  
www.iriuchi.com



1963年群馬県中之条町生まれ。東北大学卒業後、1999年中之条町議、2005年中之条町長に当選。中之条ビエンナーレ、NHK朝の連続テレビ小説「ファイト!」(ロケ地)など観光面を強化し、役場の対応の向上などに取り組んだ。

群馬県  
中之条町

#### 大南 信也氏 Shinya Ominami

NPO法人グリーンバレー 理事長  
www.in-kamiyama.jp



1953年徳島県神山町生まれ。米国スタンフォード大学院修了。「神山アーティスト・イン・レジデンス」や「神山塾」開設による人材育成、IT企業のサテライトオフィス誘致を推進。的確な目標に向かって過疎化を進め、人口構成の健全化を目指す「創造的過疎」を持論に活動中。

徳島県  
神山町

#### 金野 幸雄氏 Yukio Kinno

流通科学大学教授／一般社団法人ノオト 代表理事  
plus-note.jp



1955年徳島県生まれ。東京大学工学部土木工学科卒業後、兵庫県職員、篠山市副市長を経て2011年から現職。専門は都市計画、国土計画、公共政策など。篠山を拠点に、限界集落の再生、農村地域の再生に取り組んでいる。

兵庫県  
篠山市

#### 佐々木 雅幸氏 (モデレーター) Masayuki Sasaki

大阪市立大学大学院創造都市研究科教授／同都市研究プラザ所長  
www.creative-city.net



1949年愛知県名古屋生まれ。博士(経済学)、文化経済学会<日本>会長(2008-10年)。著書に『創造都市への挑戦』『創造都市と社会包摂』(共編著)等がある。NPO法人都市文化創造機構理事長も務め、理論と実践の両面から創造都市の具現化とネットワーク構築に取り組んでいる。

### プログラム (☆印はオプションです。希望のものを申し込みください。)

24日	現地視察(定員40人、無料)
	13:00～ 受付(木曽町本庁第1会議室)
	13:30～15:30 現地視察(木曽福島、開田高原など) ※マイクロバス2台でご案内いたします。
	15:30～16:00 宿泊施設にチェックイン
	木曽音楽祭鑑賞(定員40人、参加費4,000円)☆
25日	17:00～19:00 木曽音楽祭(木曽文化公園 主催:木曽音楽祭実行委員会) ※マイクロバス2台で送迎いたします。
	懇親会(定員30人、会費4,000円)☆
	19:30～ 「鳥鍵」にて懇親会
	シンポジウム(木曽郡民会館、定員120人、無料)
	9:00～ 9:20 主催者あいさつ(文化庁) 開催地あいさつ(木曽町長)
	9:20～ 9:50 木曽町からの報告「木曾学研究所のあゆみ」 田中勝己(木曽町長)
	10:00～12:15 パネルディスカッション「地域資産と創造農村」 入内島道隆(前中之条町長) 大南信也(NPO法人グリーンバレー理事長) 金野幸雄(一般社団法人ノオト代表理事) 田中勝己(木曽町長) モデレーター:佐々木雅幸(大阪市立大学教授)
	昼食(弁当代500円)☆
	12:15～13:00 「グルメ工房」のお弁当(お薦めです)
	町内視察(自由行動)
	13:00～ 第6回手仕事市など(散策マップを配布します)

お申し込みはこちら

<http://creative-village.jp/kiso-2013/>

上記URLより申し込みいただけます。

定員になり次第、締め切りとなりますので、お早めにお申し込みください。

創造農村



# 創造都市政策セミナー「メディア芸術と創造都市」in 新潟

<平成25年11月2日収録>



## ■主催者代表挨拶

内田広之 氏（文化庁長官官房政策課企画調整官 文化広報・地域連携室長）

皆さんこんにちは。私は文化庁で創造都市を担当しております、内田と申します。開催にあたりまして主催者として、ひと言ご挨拶を申し上げたいと思います。ご承知かと思いますが、オリンピックが東京で開催されることになり、スポーツ競技だけでなくこの機会に、日本全国で文化プログラムを盛り上げ文化振興の機会にしたいと考えております。全国津々浦々のいろんな文化行事や、地域の文化資産を活用しながら全国的に盛り上げて、世界からたくさんの人をお招きしたい。そうしたことで政策をとりまとめております。創造都市の皆様方も、大きな核となるような活動をしている方かと思うので、そのような観点からも是非創造都市の取組、盛り上がり期待しているところでございます。

新潟市は昨年、文化長官部門を受賞されており、面白い取組を進められていると思っております。市長、部長さまも情熱が感じられて、多くの文化政策に携わってきた人と接してきましたが、その皆様、また、CCNJの皆様は御自身の街が好きなのだろうと伝わってきまして、そのようなことを文化庁にしながら盛り上げていきたいと思っております。

東日本大震災を通じて感じたことは、高齢化、都市化、若者人材の流出、そのような課題が震災後、急に進んでしまったことです。ただこのことは日本

全国の共通課題ではないかと思います。街が自立的に魅力ある街をつくり、国内外からいろんな人が集まってくる。そういった、それぞれの自治体で完結しながら発展していける地域づくりが求められているのではないかと考えておまして、創造都市の政策が、まさに合致する仕組みだと思い、各方面に説明にあたっていますが賛同してくれる方も多い印象です。

2020に向けてスポーツだけで終わるのではなく、文化政策の部分で東京一局集中ではなく日本全国で広がっていけるような、CCNJの繋がり、創造都市の枠組みを使いながら、財政的にも人的にも支援していきたいと考えています。観光振興、産業振興といった分野とも連動しながら、省庁横断的にやっていきたいと思っております。

文化庁としても、日本全国の1割、170くらいの都市がCCNJに加盟するようになれば、全国的に創造都市の仕組みが広がっている実態が作り上げられるのかなと思っております。本日のセミナーもまさに、そういったきっかけ作りとなっていくと思いますので、今日お話しを伺ったことは国、組織全体としても盛り上げるきっかけにしていきたいと思っております。



## ■開催地挨拶

篠田 昭 氏（新潟市長）

このたびは、創造都市政策セミナーを新潟市で開催いただきありがとうございます。

ただ今ごあいさついただいた文化庁内田企画調整官はじめ CCNJ（創造都市ネットワーク日本）の関係者の皆さま、そして、開催にご尽力いただいた皆さまに心より感謝申し上げます。

また、全国各地からご参加いただいた皆さま、ようこそ新潟へお越しくださいました。81 万人市民を代表して心より歓迎申し上げます。

新潟市は今、クリエイティブ・シティを目指しています。私が 11 年前に新聞記者からこの仕事に就き、市役所職員がどうしたら縦割りの考え方をやめて総合的に考えられるのかということを幹部職員と意見交換をしている中で、「市長のしたいことは「創造都市」ではないか」と言われ、私のしたいことが既に学術的に体系付けられていることを知り、それから、まずは、市役所が創造的な組織になるべきだと言ってきました。今はだいぶ創造的になってきたと思っています。

本日は「にいがたアニメ・マンガフェスティバル」通称「がたふえす」が開催されていますが、新潟は漫画家を多数輩出しているほか、アニメの関係者が非常に頑張っていて、「がたふえす」を始める前から新潟のマンガを大いに売り出そうと民間の方たちが動いてくれていましたので、われわれも一緒になって盛り上げていこうと取り組んでいます。

踊りもまた、いろいろな方が面白いパフォーマンス、自己表現をしていて、これも新潟市の宝だと思っ

ています。

新潟市には日本一の信濃川とそれに次ぐ水量の阿賀野川と二つの母なる川が流れており、新潟は日本一大量の水と多様な土から育まれたということで、昨年には 2 回目となる水と土の芸術祭も開催しました。

私は、芸術・文化はあがめ奉るものではなく、今日を楽しく明日を豊かにするものが文化と言っていますが、そういう意味では、私の大好きな日本酒も十分に酒文化です。この新潟の食文化についてユネスコ創造都市ネットワークの「食文化」の分野で、日本で初めて登録していただきたいと本日おいでの佐々木雅幸先生 からいろいろ教えていただいたことも生かさせていただきました。

また、先日、文化・スポーツコミッションを設立しました。スポーツコミッションは既にさいたま市が作っていますので、日本で初めての取り組みが良いと「文化」を付けました。2020 年の東京オリンピックはスポーツだけでなく文化と一体になるということを、コミッション立ち上げの際に本日おいでの太下義之さんから伺いました。これからのオリンピックはスポーツだけでなく文化と一体ということを新潟が道付けしたと言っていきたいと思っていますのでよろしくお願いします。

これからも皆さまとともに、クリエイティブ・シティの道を歩んでいきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

本日は誠にありがとうございました。



## ■導入 太下義之氏

三菱UFJリサーチ&コンサルティング 芸術・文化政策センター主席研究員、センター長

それではパネルディスカッションを始めてまいりたいと思います。今日のテーマは「メディア芸術と創造都市」です。創造都市については文化庁としても非常に力を入れている政策のひとつになっています。文化、そしてクリエイティビティで都市や地域を活性化していこうという考え方であり、運動であると私は理解しています。

創造都市の活動の中で、今日は特に「メディア芸術」に焦点を絞って進めてまいりたいと思います。ちなみに、「メディア芸術」という言葉は日本で生まれた造語で、文化庁さんがメディア芸術祭を立ち上げるときに作られた言葉なのですね。このメディア芸術祭には4つの分野があります。すなわち、「アート、エンターテインメント、アニメーション、マンガ」です。一方で、「メディアアート」という英語がありますが、これはテクノロジーを基盤にした新しい表現、新しいアート、現代美術のことです。実は「メディア芸術」と「メディアアート」は微妙に違うということがご理解いただけると思い

ます。特に違うのはメディア芸術という日本語でいう場合は、ゲーム、そしてマンガやアニメが含まれるということです。これらは、日本の産業としても、文化としても強みがある分野です。その意味では、「メディアアート」とは違う「メディア芸術」の強みを、いかに創造都市に生かしていくことができるのかということが、日本の創造都市のひとつの大きなチャレンジになるのだらうと思います。

今日お越しの2都市、札幌市、京都市とホスト役である新潟市は、いずれも「メディア芸術」に関して大きなポテンシャルを持っており、行政としてもこの分野に力をいれて取り組んでいる都市です。もっとも、「メディア芸術」に関して実際に行政がどう取り組んでいるかということは、社会の中であまり伝わっていないのではないかと思いますので、まず各都市のプレゼンをお聞き頂いて、その後私の方からインタビューさせていただき、そして時間があれば会場の方からもご質問を頂くという構成で進めていきたいと思います。

## (1) 事例報告



### 札幌市 酒井 裕司 氏

市長政策室 プロジェクト担当部長

#### ■創造都市を目指す背景

札幌市の酒井でございます。まず始めに札幌市の取組のイメージ映像を見ていただければと思います。

イメージ映像 <http://www.youtube.com/watch?v=HoU1bwZhT0I>

ユネスコに申請する時に、2年前に作ったものでございますが、札幌市の取組の概要を見ていただきました。私からはこれまでのきっかけから現在に至るまで、パワーポイントを使ってご説明させていただきます。

札幌市というのは産業が脆弱でございまして、

80年代の半ばころからソフトウェア産業に力を入れ、それが今コンテンツ産業ということで発展をしてくれているところです。約2万人が従事していて、年間4千億円程度の売り上げがあります。製造業が脆弱な札幌にしては非常に大きな位置を占めているところでございます。その支援のためにプロバイダーが無い時代に、インターネットの環境をいち早く企業に提供するというをやってまいりました。そして1990年度半ばから2000年に入りましてからは、コンテンツ産業の振興という形に発展をしております。それらの更なる発展の為に海外との交流、企業誘致、人材の交流ということ

が非常に重要になってきてございます。

そのようなところから、２００６年３月に創造都市さっぽろ、新たな札幌というブランド作りを目指しまして、創造都市さっぽろ宣言を行ってございます。コンセプトとしては「創造性に富む市民が暮らし、外部との交流によって生み出された知恵が新しい産業や文化を育み、新しいコト、モノ、情報を絶えず発信していく街」というところでこの宣言をさせていただいたところでございます。文化庁によれば創造都市とは「文化芸術の多様な表現に代表される創造性を活かし、産業振興や地域の活性化に取り組み、様々な都市の課題を解決する取組である」という定義でございまして、札幌市もこうした街づくりを目指していこうというところでございます。２００７年文化庁長官表彰が始まりまして、２年目に表彰を頂いてございます。

札幌市の産業振興の分野だけでなく、街づくり全体に創造都市の考え方をいれていこうと、この長官表彰をきっかけに動きが高まりまして、２００８年には創造都市さっぽろ推進会議という、市民が学識有識者に提言を頂くような形をとりまして、創造都市さっぽろのこの先のビジョン作りに着手したところでございます。２００９年３月にはユネスコの創造都市ネットワークへの登録を目指そうと、分野の検討も行いました。２００９年１１月には創造都市さっぽろ実行委員会ということで産学官民の組織を立ち上げまして、本格的に推進していく為の仕組み作りに着手してきたところでございます。

この創造都市さっぽろの目的を大きく３つあげてございます。１点目が、やはり札幌オリンピックのイメージから札幌は脱却出来ないというところが

ありまして、新たな札幌のイメージ作り、新たな都市ブランド、というものを世界の創造都市との交流によって培っていこう、都市ブランドの向上ということを大きな一つの目標にあげてございます。２点目が文化芸術を活かした創造産業というものを活性化して、振興していこうという産業振興ということがでございます。都市ブランド、産業振興という中に伴いまして、創造都市札幌に集まってくる人材、創造的な人材の育成、そして集積というこの３つの循環をすることにより、創造都市札幌というものを実現していこうという目標を掲げさせていただいたところでございます。

一方ハード整備の方も、様々な老朽化が進んでまいります。ここ数年はそれらの更新であったり、新たなインフラ作りというものに着手しておりまして、今までばらばらだった地下空間をひとつに繋げていく札幌駅前通地下歩行空間の開通。川や水に親しめるような親水空間である創成川公園。市民の意見を入れて、既存の地下空間をギャラリーにしていこうと称５００ｍ美術館、というような場の整備をここ数年行ってまいりました。

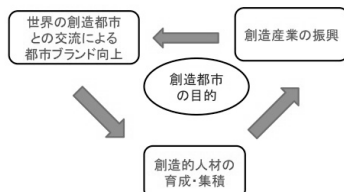
## ■新たなステップへ ユネスコ創造都市ネットワークへの加盟申請

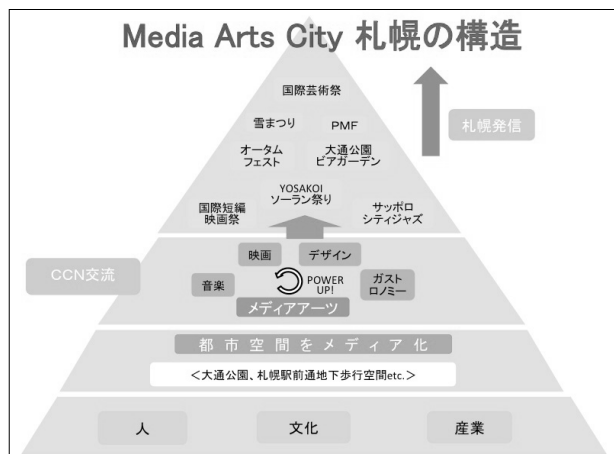
創造都市さっぽろの取組というものをはじめ、創造都市ネットワーク日本へ参加させて頂くということをやしつつ、産学官連携の推進体制を整備し、新たな創造活動の場である都市部の整備が徐々に進んできている現状を踏まえまして、今度は世界に向けて新たな取組というステージに入っていこうではないか。創造都市さっぽろ推進会議の提言により、ユネスコ創造都市ネットワークへの加盟申請ということの本格的に行うことをひとつ決めました。それと創造都市札幌を力強く進めていく為にシンボリックなイベントとしての、札幌国際芸術祭を開催していこうということを決めたところでございます。

登録分野はアジア発のメディアアーツ分野で登録を目指そうと考えております。先端的な芸術表現だけでなく、札幌の街全体がメディアとなって札幌の様々な魅力発信していく「札幌版メディアアーツ」というものを目指していこうじゃないか。そういう

### 創造都市さっぽろの目的

- 世界の創造都市との交流・情報発信による都市ブランドの向上
- 文化芸術を活かした創造産業の振興、まちづくり
- 「創造都市さっぽろ」実現に寄与する人材の育成・集積





コンセプトを持って、ユネスコへの申請を行っているところでございます。まさに都市空間を使いその上でメディアアーツというものを効果的に使いながら、映画祭、YOSAKOI ソーラン、サッポロシティジャズ、音楽祭、芸術祭というものを、この中でより発信力を高めてこの先進めていくような、こういう都市像を描いてございます。

力強く推進していくために実行委員会を立ち上げたと言いましたが、この中に分科会としてメディアアーツラボ、通称 SMAL と呼んでおりますが、産学官研究者の連携研究組織を作りまして、この中で国内外の人材の交流、研究、新たな事業企画をする組織を作って活動が続けているところでございます。著名なアーティストのシンポジウムの他、大学のメディア関係者による研究会、これは月例会という形で、情報交換、意見交換を行っております。

この、メディアアーツのひとつとしてプロジェクションマッピングを、既存の公園・既存のイベントの中で展開していくということを、昨年ぐらいから始めてございます。札幌市民は新しいもの好きでありまして、あまり広告しなくてもたくさんの人が



来て、これは大変なことになるぞ、そういう予感を持ちながら今年の2月に雪まつりでプロジェクションマッピングを、SMAL の監修で行ったところでございます。今年の雪まつりの時の大雪像というプロジェクションマッピングを、ご覧になった方もいらっしゃるかもしれませんが、見ていただきたいと思います。

プロジェクションマッピング動画 大雪像  
<http://www.city.sapporo.jp/kikaku/creativecity/creativecity/projection.html>

題材になっておりますのが、札幌の歴史的建造物、北海道初の迎賓館でございます。歴史をこの物語の中で語るような企画でございます。雪まつりは非常に大きなイベントではございますが、近年観光客の方は訪れますが、札幌市民の足は遠のいていたところ。連日東京キー局をはじめとする沢山のマスコミに取り上げていただいて、これ以上は本当に危険だということまで行きまして、泣く泣く土曜日1回目の上映回以降中止ということで、私もテレビ番組に連日謝罪ということで出させていただきました。が、既存のイベントに、メディアアーツを活用させることによって付加価値を付けることができたという意味では、私どもにとっては非常に価値があったと考えております。これをいつまでも私どもの方でやり続けるということではなく、今後は民間の力によってこれを継続していくという流れをとろうとしているところでございます。

## ■創造都市札幌のシンボルイベント「札幌国際芸術祭」

そして最後になりますが、創造都市さっぽろのシンボルイベントとしての札幌国際芸術祭というのを来年から3年おきにトリエンナーレという形で行います。坂本龍一さんがゲストディレクターをやっただけということで、都市と自然というテーマで、来年の7月19日から9月28日まで72日間、美術館だけではなく札幌の街中をアートで染めていこうと、札幌市民、札幌市役所職員燃えております。是非ですね、来年の夏は快適な空気とこのアートを楽しみにお越しいただければということで、プレゼンを終了させていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

## ファシリテータ 太下義之氏

札幌市の酒井部長どうもありがとうございます。非常に札幌市らしいフロンティアスピリットに溢れる取組の紹介だったと思います。引き続き京都市からお越しの白須さんを取組をご紹介していただきたいと思います。ちなみに、先ほど札幌市のプレゼンの中で、また、新潟市の篠田市長のご挨拶でも紹介されていましたが、ユネスコの「創造都市ネットワーク」という言葉がございました。ご存じの方もいらっしゃると思いますが一言説明をさせていただきます。ご存知の通り、ユネスコという国際組織がございしますが、このユネスコが世界の文化創造都市を認定する制度を2004年から始めております。それが創造都市ネットワークという制度です。文化創造都市を認定すると言っても、文化の分野は

幅が広いものですから、ユネスコは7つの分野を決めているのです。その7つの分野の中で、札幌市は日本で初めて、そしてアジアで初めて「メディアアート」の分野で認定されようとしているということです。そして新潟市と鶴岡市が食文化創造都市の分野で申請されようとしています。また、浜松市が音楽分野で申請されようとしています。一方で、既に名古屋市と神戸市がデザイン都市に認定されていますし、金沢市はクラフト&フォークアートという分野で認定されています。この「創造都市ネットワーク」は、おそらく世界遺産に次いでユネスコで人気のあるメニューになっていくのではないかと私は考えています。

では続いて、京都市さんの取組についてご紹介いただきたいと思います。



京都市 白須 正氏  
産業観光局長

### ■創造都市として多彩な顔を持つ都市、京都

京都市の産業観光局長の白須でございます。今日のテーマは「メディア芸術と創造都市」ということですが、創造都市ということを考えてみると、京都市も景観の問題や産業の問題など様々な形で取り組んでおります。その中のメディア芸術に関しまして、今日は特にその中で創造産業、クリエイティブインダストリーという観点から、特に最近産業観光局が力を入れている分野につきましてお話させていただきます。京都市の産業政策としてこの分野に力を入れる必然性につきましては後ほどお話させていただくとして、初めにコンテンツ産業振興に焦点を絞ってお話させていただきます。

京都の場合は、多面的な要素を持った都市です。ひとつは文化観光都市であり、歴史都市であるということです。平成25年4月時点で世界遺産が京都市内には14あり、国宝は全国の19%、重要文化財は14%を占めるなど、京都には文化財が、歴史的な建築物も含めて集積しております。このような文化財に恵まれているという要素もあり、観光都市

という側面も持っております。特にこれから観光産業には力をいれる必要があり、京都市も取組を強めているところでございます。観光客数が平成21年に5千万人の目標を越えまして、これからは質の充実、ラグジュアリー層に焦点を当てようということで、今様々な取組を展開しております。米国の権威ある旅行雑誌「トラベル&レジャー」では世界4位、アジアの中では今京都が1番高い評価を得るなど観光都市としての評価も高まっております。

その他にも、宗教では、かなりの宗派の本山が京都に集まっておりますし、華道や茶道の家元も集まっています。能とか狂言とかも含めて、文化観光歴史都市といえます。京都のこういった歴史文化、景観を守って、そのことを観光で発信していくと取組を「京都創生」ということで進めてきたのですが、この取組は、創造都市という話とも非常に近いと思います。

一方では京都は産業都市でございます。ものづくりの分野でもグローバル化が進んで、製造現場が京都から離れていきますけれど、それでも製造出荷額は2兆2千億円、全国で12番、内陸部では京都

が我が国最大です。特徴としまして、その中でも売上高1千億の企業が14あるということで、どこかの企業の城下町ということではなく、京都には例えば京セラ、オムロン日本電産、島津製作所、ワコールさんなど様々な企業がございいます。伝統産業も京都は盛んで、国の法律である伝産法という指定品目17で日本で最大であります。小売業でも全国で5番目の売り上げです。しかしそうは申しまして、生活様式の変化等、グローバル化やサービス産業化が進む中で、付加価値の高い産業をどう振興していくのが課題になっております。

### ■豊富なコンテンツ資源

こういう中、一方京都には非常に豊富なコンテンツや資源がございいます。これをどのように活かすのか、ということが特に産業振興の点では重要な課題になっております。マンガ関係でいいますと、京都精華大学に日本で初めてマンガの専門の学科ができて、学部もできております。京都造形芸術大学にもマンガ学科ができていますし、立命館大学にも映像学科ができて松竹さんと連携して様々な活動をされております。この他にも専門学校もありますし、メディアアートという点では京都大学には学術情報メディアセンターがある。京都には様々な芸術系の大学があり、7千人の芸術系分野の学生がいます。京都は大学の街ですがその中でも芸術系の大学は非常に多く、卒業生もたくさんいます。こうした人材をどう活用するかというのが非常に大きな課題となってくる訳です。

もうひとつ、コンテンツということでは映画が京都の大きな宝です。今でも東映の撮影所と松竹の京都撮影所がありますが、残念ながら最近は時代劇が減ってきております。映画村も京都を代表する観光地として修学旅行生が集まった所ですが、今はかつてほど観光客も集まりません。その他、任天堂やトセさんなどのゲームの会社がある。また、マンガとかアニメでは、ベースは宇治市になりますが、京都アニメーションさんが京都市内にも事務所を持っておられます。

こういったことに加え京都国際漫画マンガミュージアムといった豊富なコンテンツがありなが

ら、行政としましてこうしたコンテンツを十分に活かしていない。これをどういう形で活かしていくかを取組として始めたということでございいます。

国際マンガミュージアム、これは京都市内の真ん中にあります。京都の場合明治に入り、政府に先駆けて地元の皆さんがお金を出し合って多数の小学校が出来ました。これはそのひとつ龍池小学校ですが、これを活用しております。京都山に囲まれ場所がなく、市内の小学校跡地をどう活用するかというのが非常に大きな課題です。成功例といわれておりますのは国際マンガミュージアムで、今日のテーマであるメディア芸術に関係する京都芸術センターというのめかなり注目を集めております。マンガミュージアムは2006年に開校しました。京都精華大学がマンガ学科を作られ、20万部の蔵書をもっていました、大学の方でもこれをどうするかが課題であったので、京都市が小学校を無償で提供し、実際運営は精華大学がされる、という形式で運営しております。養老孟司さんが館長です。ここは一旦入っていただくと1日マンガが楽しめるということで、入館者は出たり入ったりできますし、マンガ好きな方は何回も来られます。外国人の方が多いのも特徴で、特に欧米、フランスの方が多いのが特徴となっております。精華大学の研究員、学芸員の方がここで研究を続けておられます。

### ■具体的なコンテンツ産業活用の取組

このような重要な資産を、どう活用するか、京都市としてコンテンツ産業をどういう形で育て上げるかが大きな課題でした。京都の場合元々伝統産業が強く、最近では大学がたくさんあるのでこれを活かして先端技術、いわゆる成長分野のバイオとかグリーン等に力を入れています。それに加えてもうひとつコンテンツ産業でいこうということで、新産業振興室という組織をつくり、環境・グリーンと生命科学・ライフサイエンスとコンテンツ分野の3本柱で新しい産業振興を図っていこうと思っております。

それでは、具体的にコンテンツ産業振興で何をやっているのかということですが、これをどう産業化するか、実は暗中模索というか難しいところであ



ります。ひとつは少女漫画から流行を作っていくということで、毎年公募して「京都マンガガールズコレクション」をやっております。ファッションショーなどを開催し、商品になっているものもございます。それと、もうひとつ大きいのは、文化庁さんのご支援いただいて昨年から始めた京都国際マンガアニメフェア「京まふ」です。これは、岡崎地区にみやこめっせという会場がありまして、岡崎というのは美術館等が集積しているのですが、観光地という訳ではないので目的意識がないと来られない場所です。みやこめっせも産業観光局の所管ですが、どれくらい来られるかと非常に心配しました。去年は2万6千人と、私も見たことないくらいたくさんの方が来られて、朝早くからたくさん並ばれました。去年が多かった原因のひとつは、近くにある平安神宮で声優の方のコンサートがあるため、セットで見られる方が非常に多かったのです。ということで、今年は声優の方のショーとセットにならず大丈夫かなと思ったのですが、お陰さまで3万人を超える人が来ました。初日、雨が降ったので、これはまずいのじゃないかと思って開始前の9時頃見に行くと、もうずらっと並ばれている。それと非常に感心したのは若い方が多い訳ですが、非常に整然と並ばれてこのフェアをお楽しみ頂いたということなのです。

この催しの特徴ですけれど、ひとつは東京の出版社やアニメの会社からいろんなものを出しているということです、秋にどういうマンガやアニメの新作が始まるかというのが中心になっている訳ですけど、それだけではなくここに書いてありますようにキャラクターを京都の伝統産品や食品とどう組み合わせるかというのが、これがまたひとつビジネスの取引になる。ふたつ目はクリエイター人材の育成支援ということで、関西にもたくさんマンガ家志望の方がいる訳ですけど、東京から離れているのでなかなか発掘されない。というので東京の編集部の方に京都に来て頂いて、そこに自分の作品を持ち込み読んでもらいます。去年は200人くらいだったのですが、今年は300人を超えて、出版社も40何社が来られ非常に盛況でした。去年も何人かはものになったというケースもあったようですし、今年も出てきているようです。

事業の概要ですが、入場料は千円で今年は出展企業・団体が56。来場者3万1800人。資料写真左は各社のオーダー、ラインナップ、真ん中はキャラ食ということでキャラクターといろんな食べ物と組み合わせたものです。それに2つのステージを設け、イベントもやります。先ほど話しました出張のマンガ編集部で、私はこれが非常に意味があるかと思っております。写真右のこれはショーです。最終的に、今年はキャラクター商品が1千800万円の売り上げがあるなど、事業規模が昨年よりも大きくなりました。もっと関西で生まれたコンテンツが発信できるようになればいいと思うのですが、今はやっぱり東京に来ていただくというようなイメージになっており、このことがこれからの課題になるかと思います。

**京都国際マンガ・アニメフェア2013**  
KYOTO INTERNATIONAL MANGA ANIME FAIR 2013

- 入場料 一般1,000円  
※小学生以下、外国籍の方無料
- 出展者 56企業・団体  
(出版社、アニメ関連会社など)
- 来場者数 3万1800人(2日間)
- 予算規模 約6500万円
- 開催内容 作品PR展示、限定商品販売、  
ステージイベント、CGアニメコンテストなど

【写真：出展エリアの様子】 【写真：キャラ食エリアの様子】 【写真：ステージイベントの様子】

他に、有頂天家族とタイアップしてラッピングバスを走らせ、プレミアムイベントも南座で行い満員でした。京都市がやるというより、いろんな形で関連する皆さんに協力して頂いている形になっております。「有頂天家族」の放映はもう終わりましたが、また京都が舞台の漫画ということで「京騒

**アニメを活用した観光の取組**

●有頂天家族聖地巡礼

＜下鴨神社＞ 松ヶ崎 吉田 清水 寺町三條 六波羅屋敷 京都タワー 六角堂 出町柳商店街 出町柳駅前 開電奥川発電所

戯画」等もしていただくという、京都市にとっては非常にありがたい話で、これは観光とうまく結びつけることも重要だと考えています。例えば「有頂天家族」ですと下鴨神社とか六角堂などが舞台になりますが、京都は非常にコンパクトな街ですので、これを全部まわっても1日もかければ十分回れます。

この他にも、京都版トキワ荘という形で町家を改修して、実際の運営マネジメントは東京の専門家の方をお願いしていますが、ここにマンガ家志望の方を集めて、育成の取組を進めています。また京都シーメックスという事業では、歴史的な映画を中心にした京都ヒストリカ国際映画祭や国際学生映画祭であるとか、経済産業省の支援も得ながら様々な取組をしています。

### ■今後の展望

コンテンツ産業の振興を図るため、京都府と共同で特区の申請出したのですが、残念ながら認められませんでした。客観的に考えても、国際総合特区は難しくても、地域活性特区に通らないはずがないと思っています。中心になるのは「太秦メディアパーク」ですが、太秦地域には東映のや松竹の撮影所など、映画会社を中心にいろんなものが

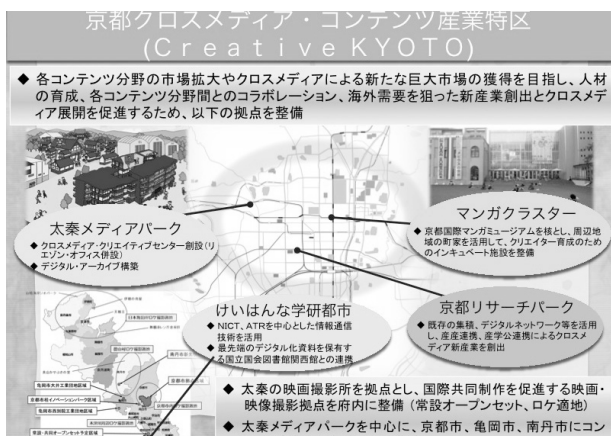
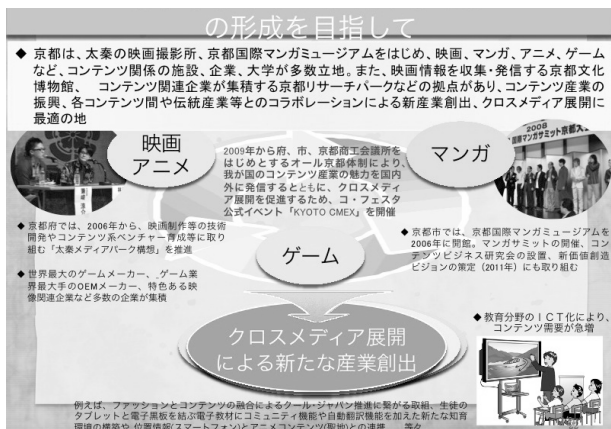
集まっています。この近くに京都市の元図書館が空いているので、特区が認められるとここをうまく利用してクロスメディアセンターを作ろうと計画ですが、ウェイティングの状態になっております。この他マンガのクラスターは国際マンガミュージアムを中心に取組を進めていくなど、映画、ゲーム、マンガ、をうまくクロスさせることによって、コンテンツ産業の振興を図っていこうと考えているところです。

産業振興は年数を積んでいくとノウハウがでくるのですが、コンテンツ産業はまだ経験も浅く、それなりの取組をやっているのですが、まだまだこれからの課題です。こうしたことから、新潟市、他都市の状況を聞き、京都市としてもせっかくのコンテンツをどのように活かしていくかということで努力していきたいと思います。

全体の話につきましては、また後でお話させていただきたいと思います。どうもありがとうございました。

### ファシリテータ 太下義之氏

京都市の白須局長ありがとうございました。京都というと、どうしても伝統文化というイメージが強いのではないかと思います。そうしたイメージとはちょっと違うソフトな一面の取組をご紹介していただいたのだと思います。私も実は最近、ご紹介のありました「京都版トキワ荘」を見てまいったので若干の補足をさせていただきますと、この「トキワ荘」とは元々は東京の豊島区にあったアパートなのですね。往年の漫画家「手塚治虫」「藤子不二雄」といった綺羅星のような方々が若い頃に一緒に住んでいた伝説のアパートです。この「トキワ荘」のように、若いマンガ家の卵が共同生活をしながら切磋琢磨する場が必要ではないか、ということで、一種のインキュベーターのようなものとして、東京でNEWVERYというNPOが現代版のトキワ荘を開始したのです。そして、これが非常に上手くいっているということで、京都版トキワ荘に発展したというわけです。京都市では京町屋でこの「トキワ荘」プロジェクトをやっていらっしゃるのです。京町屋に住みながら、漫画家になるための修行が出来る



ということでたくさんの応募があったと聞いております。私ももし漫画家を目指すならそういう所に住んでみたいと思います。それではいよいよ本日のホストである新潟市の木村部長から取組についてご紹介



新潟市 木村 勇一氏 氏  
文化観光・スポーツ部長

#### ■新潟市の概要と課題

新潟市の文化観光・スポーツ部長、木村と申します。メディア芸術に関しては新潟市は取り組み始めたばかりです。例えば、プロジェクションマッピングを今年の4月に、第一弾として、ラ・フォル・ジュルネ音楽祭でやらせていただきました。また、昨日から新潟市歴史博物館で4日間、このセミナーに合わせてやらせていただいています。先ほど紹介ありました札幌市さんのプロジェクションマッピングに負けず劣らずのいい出来になっているので、是非見てください。

早速、話に入ります。新潟市の概要です。新潟市は、14市町村が合併して今の市になりました。そのため、多様な文化が共存しているような状況です。日本一の田園と豪農文化ということで、米の作付面積が日本一、当然のことながら、穫れ高日本一です。また、旧新潟市は古くから柳都文化が栄えており、おもてなし、芸妓文化が栄えている市です。

現在、新潟市が抱えている課題です。これはどこの都市も同じですが、少子高齢化社会への急速な進展ということ。それから、京都市さんの話を羨ましいと思って聞いていたのですが、新潟市の企業は大半が中小企業のため、景気の影響を本当にすぐ受けやすい。それから、全国的に新潟「市」という知名度がかなり低く、雪の新潟というマイナスイメージが強い。皆様もそう思っていると思いますが。実際には、新潟市は雪が降ってもほとんど積もらないのです。海岸と山間部ではかなり状況が違います。それから、ランドマークとなる建造物が無い。歴史的に浅い市なので、観光資源に非常に乏しいという課題を持っています。それから、住民要望が旧市町村レベルで多く、市としての一体感に欠ける。

介していただきたいと思います。それではお願いします。

大規模店が中心地から撤退していくと、それに伴い商店街が衰退していく、というような課題を持っています。特徴ですが、繁華街が分散しています。今いるエリアは、新潟駅の万代口で、ここは反対側の南口と一緒に商業地でありビジネス街であり、飲食店街です。一番勢いがあるのが「万代エリア」ここは商業地です。課題というか問題になっているのが「古町エリア」、ここは昔の繁華街。この古町地区の地盤沈下をどうやって防ぐかというのが市の課題になっています。

#### ■「マンガ・アニメを活かしたまちづくり」の背景

そういう課題を「文化の力で市民を豊かにしたい」ということで、新潟市は「文化創造都市ビジョン」という計画を昨年3月に策定しました。先ほど市長が言っていましたが「今日を楽しく明日を豊かにする」をモットーに文化創造都市を作りあげようと思っています。

その中で、重点的に取り組む施策として「マンガ・アニメを活かしたまちづくり」を挙げました。皆様にマンガ版をお配りしましたが、昨年の3月、ビジョンと同時期に構想を策定しました。



何故マンガ・アニメでまちづくりをやると思ったかという、背景がかなりありまして、新潟市はマンガ・アニメクリエイターを多数輩出しております。それから、新潟市には日本アニメ専門学校、JAM の存在がある。ここからかなりの学生がマンガ・アニメを学んで卒業していきます。一方、ガタケットと申しまして、東京でやっているコミケットの新潟版ですね、同人誌の即売会とかコスプレとかをしているのですが、この活動が2か月に1回ずつ30年も続いている。また行政的には「にいがたマンガ大賞」を15年前から取り組んでおり、全国から様々な作品を応募いただいて、大賞を決めています。

新潟が生んだ主に有名なマンガ家では、水島新司さん、高橋留美子さん、魔夜峰央さん、新しいところで小畑健さん。市長も言っていた赤塚不二夫さん、この後インタビューで取り上げていただく山田芳裕さん、安田弘之さん。数えたら100人くらいの連載マンガ家がおります。それからアニメのクリエイター、映画監督ですが、長井龍雪さん。この方は文化庁のメディア芸術祭で賞をとられた「あの日見た花の名前を僕達はまだ知らない。」の映画監督です。それから、山賀博之さん、鶴巻和哉さん。山賀さんはテレビ版のエヴァンゲリオン、鶴巻さんは劇場版のエヴァンゲリオンの監督。そういった方が新潟から出ている。

先ほどお話しした JAM では、講師陣もかなり揃っているのですが、卒業生の中で約70人がプロのマンガ家としてデビューをしているということです。それとガタケット、本当にびっくりするのですが、今現在も2か月に1回ずつガタケットやっております、毎回7千人集める。その4分の1は県外から来る、一番いい時期は2万人集まったと聞いております。それと、コスプレスタジオが、万代にあるマンガ・アニメ情報館の隣にあるのですが、日本最大ですから、たぶん世界最大です。

行政と地域で取り組んできた「にいがたマンガ大賞」は、今年で16回目になります。それから古町五番町に、これは商店街が作ったのですが、水島新司さんのドカベンキャラクターの様々な銅像が、町並みというか歩道に立っています。京都市さ

んがやっておられましたラッピングバス、新潟市も観光循環バスとして走らせています。そして今日明日の「がたふえす」です。また、オリジナルのサポートキャラクターを2011年に作って、このブランド化を図りたいと思っております。

マンガ大賞が15、6年続いているのもすごいことですが、実はこのマンガ大賞からプロデビューをしている人たちも結構います。特に今年は14歳の中学生の少女が昨年のマンガ大賞で部門賞をとって編集者の目に留まって、「なかよし」というマンガ雑誌にプロデビューします。第2次審査の様子です。出版社の垣根を越えたありえないメンバーの2次審査員とありますが、様々な出版社の編集長クラスの方が来て、「普段はマンガ見る時に、売れるか売れないかの目で見られるけれど、そういうことを考えず面白いものを選べる」と編集者の方も新潟に喜んで来てもらっています。

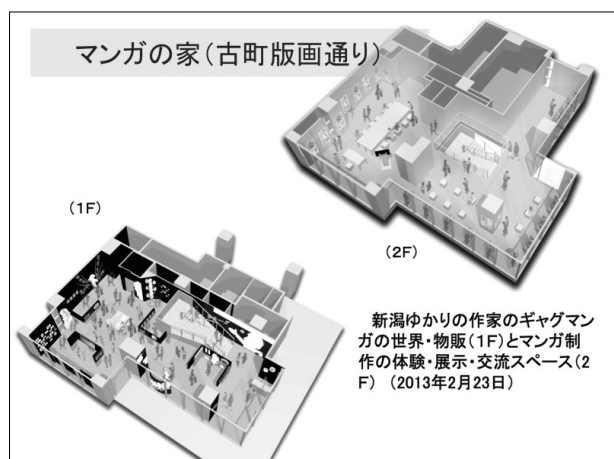
それから「がたふえす」ですが、昨年は4万6千人集めました。今年はかなりバージョンアップしているので2日間で5万人以上が集められるのではないかと思います。これが、物販部門ですね。古町、最近シャッター街になりつつある所を活性化したいと、街路上でフェスティバルをやっています。野本憲一さんというガンブラを作らせた日本一、この方も新潟出身で、ガンブラ講座をしたら、約200人の方が周りを取り囲んで微動だにしない、それはそれで異様な光景でした。痛車（いたしゃ）の展示もしました。またコスプレパレードということで、コスプレイヤーは一般の方と区別されがちなのですが、出来るだけ一般の人にうけていただこうと、第2の秋葉原を狙って、無理やり引っ張りだしたので、すね。プレイヤーの方たちはまだ違和感があるらしいですが、一般の方たちはすんなり受けいれてくれました。今年もそのパレードをします。

## ■「マンガ・アニメを活用したまちづくり構想」の今とこれから

「マンガ・アニメを活用したまちづくり構想」これから本題ですが、昨年3月に作った構想ですが、基本理念として、マンガ・アニメを本市の文化施策の重要な柱と位置づけ、市民の誇りとなるよう継承

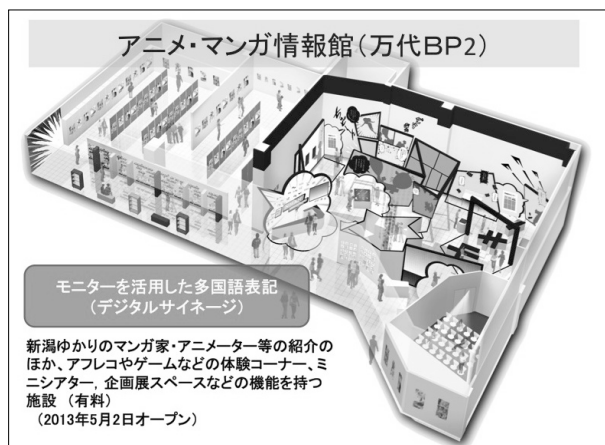
と発展に努める。特性を活かした取組を進めて、国内外に発信し、多様な交流を促すことで地域の活性化を実現する。という理念の下、ふたつの実施計画の期間を設けました。ひとつ目は発展期、マンガ・アニメでにぎわうまちづくりを発信する。ふたつ目は成熟期ということで、マンガ・アニメパワーでクリエイターと関連産業が躍動するまちとしています。ステップ1については平成26年くらいまでに実現しそれを継続しよう、ステップ2については平成28年くらいまでに実現して継続していこうという計画にしました。

ステップ1ですが、マンガ・アニメ情報館の設置、マンガの家の整備、マンガ・アニメ関連のコンベンションの誘致と自治体ネットワークの構築、「にいがたマンガ大賞」、「にいがたアニメ・マンガフェスティバル」の拡充、その他キャラクターの積極的活用や市発行物のマンガ化等が短期目標です。



これはマンガの家です。ここは古町通りという市が課題としている繁華街のちょっと裏手にある通称版画通りという所で、空き店舗対策も兼ねています。ここにマンガの家を設けました。一階に入ると新潟ゆかりのギャグマンガ家で揃えております。2階に行くとギャラリーとマンガの書き方講座などを行うワークショップスペースになっています。

また万代地区、一番勢いのある地区の商業ビルの中に、マンガ・アニメ情報館を設けました。新潟のマンガ・アニメ文化を紹介をすると同時に体験型の施設を造りたいと思ひまして、体験コーナーとミニシアター、それと企画展を行う展示スペースといった機能を持っています、ここは有料です。先ほどのマンガの家は無料です。今とりかかっている



のですが、サイン関係を多言語表記にしていきたい、将来的には対岸諸国はもちろん、東南アジアの方までマンガツーリズムという形で引っ張ってきたいなと思っています。デジタルサイネージというスイッチ一つで解説の切り替えが出来る設備が間もなく設置できる予定です。ここは以前はゲームセンターでしたが、これが撤退して映画館とか様々なものが入っています。これも空き店舗対策という形で、一から造るとお金もかかりますし、既存の建物に入ると相乗効果があるということで造りました。

常設展や、アニメのキャラクターが登場するゲーム、辞典みたいになっていて本を押すと作家の履歴とかが見られるもの、実際のアニメに自分の声でアフレコが出来るコーナー、特別展示もあります。また、オープニング記念では、「マンガ・アニメを活かしたまちづくりは税金の無駄遣いか」ということで学識経験者や出版社の方を招き、市民向けのシンポジウムを行いました。もちろん半分関係者なので、無駄遣いという結論にはなりませんが、活用して頑張ってくださいということでした。フレンズショップも実施しています。特に古町地区でマンガ・アニメ関係、マンガの家と連携した事業が出来るお店を選んで、年間500万円の家賃、初期設備費等を補助しています。これを3年続けます。第1号店は、Tシャツだけでなく、iPhone ケース、ペンなどなんでも自分が持ち込んだ物に写真などを印刷出来るお店です。ここがマンガの家と連携して、自分で描いたマンガでTシャツを作ってもらってコンテストをやりたいということで、今後事業連携を図っていきます。これも古町地区の空き店舗対策、起業家支援の一つです。第2店舗目として、有機野菜の八百屋さん、マンガ・アニメを活用した八百屋さん

ということで、どう活用するのか興味があるのですが、まもなく開店します。



サポートキャラクター花野古町（はなのこまち）と笹団五郎（ささだんごろう）です。花野古町は新潟の花チューリップをイメージしたキャラクターで、「こまち」はあえて古町と書かせていただきました。団五郎はこの地域の笹団子をイメージしたキャラクターです。このキャラクターを利用して、行政単独でアニメを作るのは新潟市が最初だと思うのですが、今、第2作目まで出来ておりまして、現在、3作目を制作中です。そのほか着ぐるみをどこでも無料で貸し出しており、オリジナルグッズも制作しております。それでは、アニメをご覧ください。

アニメ上映 <http://www.manganime-niigata.jp/animetion.html>

主題歌を歌っている方も新潟市出身、作曲している方も新潟市出身、監督も新潟出身。行政単独で作らせていただいて、背景はすべて新潟の建物等を忠実に再現しています。これを作ったからといってすぐに聖地巡礼にはならない、そんな甘いものではないと思っていますが、継続していこうと思っています。

最後に、成熟期についてです。マンガ・アニメ関連インキュベーション構築とか、コンテンツビジネスを推進する事業を平成28年度までに取り組もうと思っています。

そして、来年度出来ればいいと思っているのですが、フレンズショップをもう1店舗増やして、合計で3店舗、古町界隈で展開していきたい。アニメ制作も続けていきます。また、新潟市を背景にしたアニメを作っていただこうと、ひとつふたつの制作

会社と今話しているところです。それからオリジナルグッズの制作と販売、これは民間にやっていただこうと、著作権はほぼフリーにして、儲けを出していただければと思っています。また、マンガツーリズムの実現ということで、先ほど市長も申し上げたとおり、市で文化・スポーツコミッションを立ち上げましたが、スポーツだけではなく、文化の力を使って海外から人を呼んでこれればと思っています。

それから、プロを目指す個人への支援ということで、インキュベーターに繋がるのかなと思っています。ですが、シェアハウスを設置したい。プロを目指している人たちは経済的にきつい部分があるので、衣食住の住の部分を支援していけたらと思っています。それからアーティストバンク、これは札幌市さんを参考にさせていただいたのですが、音楽家や芸術家はもちろん、マンガ家、アニメーター等も結構新潟に住んでいるので、そういう人たちもアーティストバンクの中に入れて、ニーズがあったらマッチングを市がするというようなものです。

企業の誘致と起業家支援ということで出版社がアニメ制作会社を新潟で作ってもらえたら、と思っているのですが、現在「プロダクション・アイジー」という有名なアニメ制作会社の子会社が新潟にひとつあるのですが、その他の大手のアニメ制作会社とも話をしています、近い将来アニメ制作会社を作ることが出来るかなと。また、かなり難しいと思うのですが、将来的には新潟に出版社が作れたらと思っています。これらが実現することによって、雇用の創出と交流人口の拡大と、まさに創造都市が現実になるのではないかと考えております。以上です。ありがとうございました。

## (2) パネルディスカッション

### ■質問 行政がメディア芸術に関わる背景

**太下氏：**新潟市の木村部長ありがとうございます。行政がアニメまで作ってしまうという、かなりはじけた展開をしておりますね。実は新潟市の「マンガ・アニメを活用したまちづくり構想」を検討する委員会の委員長を私はおおせつかっております、こんな風にはじけさせてしまった責任の一端を感じております。

さて、3都市のプレゼンテーションをお聞かせいただいた訳ですが、残りの時間でいくつかインタビューをしながらディスカッションをさせていただこうと思っております。まず最初は、白須局長の前振りがありましたけれど、何故そもそも行政がマンガやアニメであるとか、メディア芸術やコンテンツといったものに関わっていくのか、という点です。こういったそもそもなんで、というところをまた先ほどの順番で、札幌市の酒井部長からコメントをいただければと思います。宜しくお願いいたします。

**酒井氏：**札幌市の場合あまりアニメーションであったりマンガであったり行政が深く関わっているということはないのですが、先ほどのビデオの中でも触れていたのですが、札幌市の場合きっかけ作りというか、創造的な産業を生み出されていくようなきっかけ作りを中心にこれまでいろんな取組を進めていましたが、2007年にクリエイティブコモンズの世界会議、アイコモンズサミットの開催を行いました。これは著作権を自由に、ある程度作家の作品をリスペクトしながら自由に流通するような仕組みを作っていこうとしていくような会議で、その中で初音ミクを生んだクリプトン・フューチャー・メディアの社長が参加し、コンセプトに非常に共鳴し、それが会社のビジネスにつながっていくというように繋がった訳です。札幌市としては、新潟さんや京都市さんのように具体的なアニメといったようなものに直接的に関わっていくよりも、環境整備であったり、交流の場作りに現状は力を入れているといったところでございます。

**太下氏：**ありがとうございました。先ほどの映像

に登場した伊藤穰一さんという方はアメリカでずっと育った方で、現在は米国マサチューセッツ工科大学のMITメディアラボの所長もされております。アメリカで21世紀を担う100人を選ぶとかといった時にも選ばれるような凄い方です。この伊藤穰一さんがオーガナイズしたクリエイティブコモンズの世界会議「isummit08」のシンポジウムでも、実は私はモデレーターをしていました。本日も相変わらずモデレーターをしておりますので、この5年間でやっていることが全然進化していないという見本みたいなものですが、さて、京都市さんの場合、そもそもなんで京都という伝統的な都市がコンテンツなどの新しい分野にチャレンジされるのか、そのところを是非ご紹介ください。

**白須氏：**今全国のどこの自治体でも産業振興や地域の活性化ということが非常に重要な課題になっています。そして産業政策とか都市のあり方を考える場合、大切なことはその都市の特徴というのをどれだけ活かせるかということです。

京都のは、学生が14万人、人口の1割が学生という大学の街です。学生というのは、1人当たりの消費額ということを考えても非常に大きな産業の要素です。また全国から来られるのですから、京都という歴史的な所に新しい風というか新しい文化を持ち込んでくるという非常に大きな意味があります。しかし、せっかく京都に来て、学んできたことが京都で生かせる場所や機会がないために、才能のある方のがかなりが東京に行ってしまいます。学生の方をどういう形で京都に残し、京都から文化や産業を発信していくかということが非常に大きな課題です。ふたつ目は、創造都市といいますか、これからの都市を考える場合、世界中からその才能のある人がその都市に集まってきているんことをしていただくというのが重要です。この点で京都は歴史とか文化とかでかなり恵まれています。

新たな産業をどういう形に掘り起こしていくかという点ですが、これからを考えると伝統産業が京都の将来を支えられますかという、これは相当に難しいと思います。ハイテク成長産業にも力を入れて



いますが、多くの企業の関わりという点では、大学の研究者であるとか、大企業、先端的なベンチャー企業などに限られます。こうしたことから、京都のこれからの産業ということで、伝統産業を新たな商品に展開していくとか、既存の産業に知恵や工夫を加えて創造的な産業を生み出すといった、英語でいうクリエイティブインダストリーに力を入れていくということです。

そういう中でやはり大切なのは、先ほどの説明になりますが、京都にたくさんの芸術家の方がいて、いろんなコンテンツがある訳ですから、それを上手く活かすにはどうしたらいいのかということです。それと観光というのはこれから非常に重要な戦略的な産業です。京都がこれから生き残っていく場合、やはり観光というのを全面に出すことが非常に重要です。そういう点でも先ほど申し上げましたように、マンガ・アニメで京都をとりあげていただくと現実に効果があり、京都全体が活気づくとか、波及効果が広いといえます。若い世代、我々の世代くらいは若い頃からマンガを読んでいるので、マンガの年齢層の幅が広いというようなこともあります。加えて海外にも非常に発信力があります。

このように色々な取組をしている訳ですが、これからの京都の産業をどうしていくかということで、ひとつは観光産業、ひとつは勿論ものづくり、加えて創造産業として何をやっていくのかということです。柱のひとつは伝統産業の海外展開、もうひとつは京都市の場合文化、芸術、伝統芸能がありますので、これをどう産業化していくか。3つ目の柱として、コンテンツをどう振興していくかということで、今後ともアニメの取組を強めていきたいと考えています。ただ新潟市さんのようにトータルな取組が出来ている訳ではなくて、京都の場合は色々な資産が有るだけになかなか、この分野に特化するということは難しいといえます。そういうことがありますけれど、この3年間やってきまして、さらにこの分野につきましては今後も続けていきたいと思います。

もうひとつ付け加えますと、そマンガとかアニメとかは歴史ものも多いのですが、歴史の話になると必ず京都が出てきます。こういった結び付けも含めて、マンガ、アニメやコンテンツは非常に有力な、

といえますか、文化としても活かせる、産業としても有望な産業であるのではないかと考えておられて、今後は、もっと映画等とも連携するなど、総合的に考えていきたいと思います。

**太下氏：**ありがとうございました。次世代の経済振興として、マンガ・アニメなどのコンテンツ産業に取り組んでいらっしゃるということですね。ところで、第一次産業、第二次産業、第三次産業という言い方がありますが、それに続けて第四次産業という言い方があります。これは第三次のサービス産業の中でも特に知識集約型の産業のことを意味しています。さらに「第五次産業」という言い方もあるのです。この第五次産業とは、第四次産業である知識集約型産業の中でさらに文化とクリエイティブティーに関係する産業のことです。ある意味で京都市さんは、この「第五次産業」を目指されているということではないかと思います。

それでは新潟市さんの場合を、木村部長の方からコメントを頂けますでしょうか。

**木村氏：**行政的に見た体系づけた部分は、京都市さんが言われたものがまさにその通りだと思っています。私の考えだと今の時代民間だけでは儲けを出していくのは難しいのかな。よほどのブランド力をつけなければいけないと思っていますし、また行政が単独でやっても難しい分野だと思っています。先ほどスライドで見ていただいたのですが、「ガタケット」という同人誌即売のグループですが、インターネットの普及等で集客力が落ちてきていると聞いています。なんの手も加えず放っておくと消滅しちゃうかなと思っています。あと、JAMという専門学校があるのですが、ただ卒業生をいたずらに輩出しているだけでは、そのうち立ちいかなくなっていくかな。受け皿というものを作っていかねばならない。そうなった時に民間が単独でマンガ・アニメクリエイターで受け皿を作れるのかということかなり難しいのではないかと。それではそのきっかけ作りを市がやりましょうということと、まずは「マンガの家」と「情報館」という箱ものを建てた。その運営について指定管理者として、「ガタケット」と



「JAM」から参加してもらっている。行政はきっかけを作って、民間を活用して、民間から利益を出してもらえればいいかなと思っています。アニメを作っているのは、理想を言えば、聖地化して、そうするとオリジナルグッズも売れて経済効果てきめんだよと思っているのですが、なかなか軌道に乗らない、そんな甘いものじゃないとは重々承知しております。たとえば「あの日みた花の名前を僕たちはまだ知らない。」あれは秩父市がかなり経済効果を生んでいる。また「氷菓」というアニメもかなり聖地巡礼がある。その一方で「輪廻のラグランジェ」、鴨川市が舞台になっているのですが、かなりネットで叩かれたアニメです。何故鴨川が叩かれたのか、というとあまりにも露出が多すぎたのですね、どうも。諸刃の刃じゃないかとは思っているのですが、ただやらないよりは取りかかろうと始めた訳です。

#### 質問 メディア芸術と創造都市、今後の展開

**太下氏：**ありがとうございました。実は木村部長は知人ぞ知るオタク部長として有名で、アニメの機微がわかる非常に貴重な存在の部長さんです。さて、3都市のプレゼンの中でもそれぞれご紹介していただきましたが、これからの展開について、例えば街づくりなどの次の展開であるとか、民間企業とのコラボレーションどうやっていくのかとか、または市民の参加協働を今後どう展開していこうとしているのかとか、そういった点について教えていただけますでしょうか。それではまた順番で酒井部長からお願い致します。

**酒井氏：**先ほどプレゼンの資料の中にも触れましたけれど、札幌市の場合この創造都市施策に関して3つの視点で取り組んでいます。やはり札幌というイメージをもっと世界に、知っていただくような都市ブランドの向上ということがひとつでございます。そしてそのことによって、世界の核としての交流というものを活性化させて、産業にもそれを結び付けていきたい。人的交流というものの、それと創造的なクリエイターと言われるような人たちが、札幌に来たくなって、ある人は定住して、その中で様々な創作活動といったものを続けていって、街全

体がやはり活性化してくと、そういった循環をイメージして進めております。

そういった意味でメディアアーツというのはひとつのきっかけでございますので、こうしたものを使って、札幌のイメージである食であったり、イベントというものを、先ほどの雪まつりの例をあげましたけれども、いろんな分野で新しい価値を付加していくイメージを持っています。そういった意味で先ほど太下さまに解説していただきましたが、ユネスコ創造都市ネットワークへの加盟というのはひとつの大きなきっかけだと、私どもは思っておりますので、なんとか早期に加盟を実現して、新しい札幌を国内はもとより海外の方々にも知っていただけるような努力を今後も続けていきたいと、そのように考えているところです。

**太下氏：**ありがとうございました。札幌市さんがメディアアートという分野で登録されることになる、先ほどもご案内したとおりアジア初ということになりますし、世界でも2番目ですね。これは非常にインパクトがあることになるかと思います。それでは続きまして京都市の白須さん宜しくお願いします。

**白須氏：**札幌市さんのお話や新潟市さんの話を聞いて改めて思ったのですが、京都市の場合は、産業政策のを考えるとき、大きな将来展望を描いてというやり方ではなく、積み上げていっているのですね。ひとつは観光との連携をさらに強めていく、そして観光の振興にも繋がるのですが、少し活力が弱っている既存の商店街であるとか、伝統産業の集積地、産地、そういう所とうまく結び付けて、地域の活性化を図るということに繋げていくことが大切だと思います。つまり地域の活性化に上手く繋げていきたいというのが1点。

2つ目はですね、これも先に申しましたけれど、京都の場合ゲーム会社があり、映画の撮影所もある訳ですね。こういう分野間の連携というのは、どういう形で可能性があるのか。もちろん、既にそれぞれでもされている訳ですが、うまく行政が関与することで、全体としてマンガ・アニメを、ゲームとか、

映画、こういったものともっとクロスメディアできる可能性があるんじゃないかということです。

3つめは、今日のメディア芸術の話で言いますと、これまではマンガ学科がある造形大学とか精華大学とかが中心になっているのですが、一方で情報という点では京都大学の情報研究科は強い力があって、先生の中にはまさにメディアーツというか、非常に面白いことをされている方もおられます。京都工芸繊維大学も含めて、いわゆる情報学の分野、そういったものとうまく結び付けると、さらに違う発展の仕方があるんじゃないかと思っています。今の3つのことを具体的に組み込んでいくことによって、来年度は是非、なにか次の展開に繋げていきたいと思っています。

**太下氏：**ありがとうございました。またまたこれからの展開も楽しみです。それでは新潟市の木村部長お願い致します。

**木村氏：**かなり難しい話ですが、マンガ・アニメだけでは多分ダメだと思います。マンガ・アニメをいかに、それぞれの都市が持つ文化、例えば食文化ですとか、酒文化、新潟市でいうと踊り文化、そういうものと連携を組みながら、うまくいくとそれがひとつの新潟ブランドになっていくのかなと思っています。その新潟ブランドが内外に認められると、将来的には観光に繋がるし、当然のことながら雇用の創出に繋がっていく、ということなので、まずはとりかかったばかりですから、新潟のマンガ・アニメといえば、皆が「ああ」と思い出しただけのように取り組んだことをしっかり継続していくと。それからさっき言ったような他の文化との融合によって、やっと新潟ブランドが出来るのかなと思っていますので、まずは続けていくことが大事なんじゃないかと思っています。

**太下氏：**ありがとうございました。各都市とも非常に力が入ったプレゼンテーションをいただいて、実はもう当初予定していたシンポジウムの時間をオーバーしている状況ですけども、せっかくの機会ですから、もし会場の方からこれだけは聞いてお

きたいということがありましたら、お受けしたいと思いますけれども何かございますでしょうか。はい、一番後ろの方、最初にご所属等ご紹介いただいてからご質問頂ければと思います。

#### 一般質問

**質問者（一般市民）：**新潟市の木村部長にお尋ねします。これは20年くらい前から言われていることで、「こんなイベントがあってマンガ家になる人もいっぱいいるのに、アニメの放映本数は一番少ないのか」言われるのです。新潟県の人に関わっているアニメをいずれも新潟県で見られない。例えば新潟市文化観光・スポーツ部の方で、広報番組と同じような感じで関東ローカルのアニメないしスポンサーとして誘致して、アニメマンガの土台を整えるというお話、そういう観点があるかどうかというのはお聞きしたいと思ひまして。

**木村氏：**ありがとうございます。あなたと気持ちとは全く一緒です。新潟はテレ東系列が無いんですね。アニメはかなりテレ東がやっているの、そういうアニメが新潟では見られない。これにはかなりのお金をかけて持ってこなくちゃいけない。それはいろんな市民の方から手紙をもらいますので、市長も気にして、某テレビ局の社長に自ら「アニメを放映してくれ」と頼んでトップ会談で決まったこともあるのですが、あまり人気の無いアニメが深夜帯に2、3本出ただけで、これじゃあダメだなと思いました。気持ちは一緒ですが、いかんともしがたいものだと思います。

#### 統括

**太下氏：**会場に創造都市に関する研究で第一人者である、大阪市立大学の佐々木先生がいらっやっているので、最後に何かコメントをいただけますでしょうか。

**佐々木氏（大阪市立大学大学院創造都市研究科教授）：**どうもありがとうございます。非常に楽しく伺いました。こういう分野で1番気になるのは、実際のアニメーターの人たちは非常に所得が

低いし、生活困難を抱えている訳ですよ。『それはね本人が希望するのだからしょうがないよ。アーティストというのは、大抵飯は食えないのだけど、我慢して売れるのを待つしかない』という形のままでいいのかどうかですね。先ほど住宅を提供するという話があったのだけれど、けれどなにか安定的な支援をもうちょっと行政も含めてやっていけるようにならないと、この分野が継続的に伸びていくということにはならないなと思っていて、そういったことは今別にお答えいただこうとは思いますが、これからの日本の社会の中で大きい課題であろうと思っている次第です。どうも今日はありがとうございました。

**太下氏：**貴重なコメントありがとうございました。佐々木先生からある意味大きな宿題と申しますか、課題を出された形になりました。今日プレゼンテーションをして頂いた3都市は、日本の中でもメディア芸術の分野に関して最先端で取り組んでいる都市かと思います。札幌市、京都市、新潟市の3市には日本の希望として是非これからもより一層頑張っていただきたいと思います。

会場の皆様からこれ以上のご質問を頂く時間がないのですが、パネリストの方々、また佐々木先生、そして明日セミナーの講師をされます鳥取大学の野田先生、皆様懇親会にもいらっしゃると思いますので、是非何かお聞きになりたいということがありましたら、懇親会にて宜しく願いいたします。それではシンポジウムの方は終わりにさせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。



<平成25年11月2日収録>

## 創造都市政策セミナー in 新潟 「スペシャルインタビュー」

『へうげもの』からみる創造都市～クリエイターが育ち、活動しやすいまちとは～



インタビュアー：太下 義之氏

ゲスト：田村 一氏 陶芸家 激陶者集団へうげ十作

金 理有氏 陶芸家 激陶者集団へうげ十作

藤沢 学氏 株式会社講談社 週刊モーニング編集部

## ■「へうげもの」とは

太下氏：引き続いて、スペシャルインタビューと題されておりますけれど『へうげもの』からみる創造都市」のセッションに入りたいと思います。

そもそも、「へうげもの」って何なのかということから説明する必要がありますね。これは後でまた、編集者の藤沢さんの方からご説明いただけるかと思いますが、マンガのタイトルです。新潟市出身のマンガ家、山田芳裕氏が書かれているマンガが「へうげもの」です。実は私も大ファンでコミックスを全巻持っています。現在17巻まで出ています。新潟ご出身というご縁で、この「へうげもの」をグループ名として謳っているクリエイター集団「激陶者集団へうげ十作」の展示会を新潟市内で開催しています。そこで今日、田村さん、金さんという2人のクリエイターの方、陶芸家の方が登壇されているわけです。というわけで、陶芸家の方それから編集者の方、みなさん広い意味で言うアーティスト、クリエイターとなるわけですが、こうした方々から見て創造性はどのような環境で発揮されるのかとか、創造都市を実現する為には行政や街づくりはどうあるべきなのか、といった視点でお話をいただければと思います。よろしくお願い致します。

最初に、このセッションの契機にもなったマンガ「へうげもの」と作者である漫画家の「山田芳裕」さんについて、ご担当編集者である藤沢さんの方からご紹介していただくのがいいかと思いますので、まずは皮きりにその辺りからご紹介をお願いします。

藤沢氏：ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、「モーニング」は毎週木曜日発売の漫画誌です。山田は新潟市で生まれ育ち、大学生の時、うちの新人賞「ちばてつや賞」に『大正野郎』で入賞しました。デビュー以来、早25年くらいになりますか。非常にクリエイター人気の高い作者ですが、マンガのコアユーザーから支持されているとは僕は思っていないんです。今まで十種競技とか宇宙飛行士とかメジャーリーガーと、いろんなマンガを描いてきたんですが、2005年から始めた『へうげもの』が目下の代表作です。NHKでアニメ化もされましたので、ご覧下さった方もいらっしゃるかと思います。主人公は古田織部という実在の武将茶人です。信長、秀吉、家康の三英傑に仕えた知らざるの傑物なんです。千利休の後にお茶の第一人者となり、やきもの、茶の湯を通じ、桃山文化の一大プロデューサー

として活躍した人ですね。あまり知られていないのですけれど、よくよく調べていきますと、今に伝わっている文化の源にこの人がいます。そういう凄い人ととりあえず申し上げておきます。

ちょっと話が逸れちゃいますが、先ほどのお話、行政の皆さんの取り組みについて伺っていると、薄々分かってはいたものの、ちょっとびっくりしたことがいくつかあります。皆さんが「マンガアニメ」とおっしゃる中に、我々青年誌のマンガはどうか視野に入っていないんですね。今回、新潟市の方から「がたふえす」にお誘いをいただきました。ご当地作家であり、山田とモーニングにぜひ協力をせよということだったんですが、アニメ・マンガフェスティバルは明らかに場違いなんです。「マンガ」と一口に言っても、例えば、何年か前の国連生物多様性年であったり、多世代共生といったキーワードみたいに、それほど個性差があると思っています。あえて垣根を作る必要はないだろうという意見もありますけれど、逆に皆さんが「マンガ」おっしゃる際、イコール少年・少女誌、ファンタジー誌のマンガを指している。ほぼ100%そうです。そこと決別していかないと我々青年誌は生きていけないんじゃないかと。アニメ〜マンガ〜ゲームというリンクが世間的にはありますけれど、青年誌は必ずしもそこには当てはまらないですね。だから山田と『へうげもの』の連載を始める時に、密かなテーマとしたのは、「反マンガ脱マンガ非マンガ」ってことなんですね。「マンガ」という枠の中でくられるのもちょっと抵抗があるし、さっきも言いましたとおり、簡単に括れないほど多様化しちゃっているの、自分たちが「友達」を探すとなると、アニメでもない、ゲームでもない。そもそも青年誌のマンガというのは、三次元に向かう傾向が強いですし、『へうげもの』のフィールドワークとしては、陶芸家、アーティストたちとの連携しかないと思いました。それが大人のクロスメディアとかメディアミックスだろうと。あくまでも私見ですが、マンガばかり読んでいる読者が、果たして自分たちを支持してくれる人かどうか、そこから考えていこうと思ったんですね。ある種の大人の意地で、クールジャパン＝オタク文化に対して、あえて決別というか石を投げていかない

と、俺たちの居場所はどこにもないよというのが『へうげもの』の原点ですね。

ですから先回りになっちゃうんですが、いわゆるアニメやマンガをビジネスとか事業の対象とされる方々には、その辺の個性差というのを分かっていた方がいいですし、例えば新潟市の方々は「マンガ」の多様性をここまで理解しているということが前提になれば、産業、文化、観光、歴史といったもので、アニメやマンガのリンクに入ってくるんですね。そうなってくると、我々大人のマンガもどこかそういう仲間に入れていただけるかもしれないし、場違いかなとは思いつつ、作者の郷里に敬意を示しまして、新潟でイベントさせていただくことになりました。実際、新潟の地で桃山時代、江戸時代、明治、大正、そして現代といった感じで、いろんなものが共存しておりまして、今までいろいろイベントをやってきた中で、ある面一番いい展示になっているように思います。それは新潟が持っている歴史とか埋蔵量によるものであり、すごく新しい発見ができたことに感謝しております。

## ■マンガから広がるコラボレーション

**太下氏：**ありがとうございました。先ほど藤沢さんから「へうげもの」については二次元展開だけでなく三次元に向かっているのだというお話があり、陶芸と接点があったということですが、せっかくなのでクリエイターのみなさんのお話を伺う前に、いろいろなコラボレーションの具定例を簡単にご紹介していただけますでしょうか。

**藤沢氏：**数年前「細川家の至宝展」というのが東京の国立博物館でありまして、その際宣伝タイアップをさせていただきました。マンガの中に細川幽斎という細川護熙元首相の祖先が出てくるんですが、幽斎の顔を護熙さんで描いちゃったんですね、作者が勝手に。あちらから協力してほしいという話をいただいた際、これはヤバイぞ、元首相に怒られるよと内心焦ったんですが、そんなことは一切なくて、作者の肩に手をかけて写真を撮らせてくださったり、非常に気さくな対談ができたりしたんですね。これは行政じゃなくて、美術館やプロモーターとの連携

の一例ですが。

あるいは、やはりマンガの中に上田宗箇という織部の弟子が出てきます。そのご子孫が広島で上田流というお茶の家元をなさっています。いわば茶道界の広島カーブみたいな感じですね。本山にあたる和風堂というのが、織部が基礎を作った武家の数寄屋を宗箇が洗練させたものでして、先年特別公開されました。その際、陶芸家の人たちにも協力してもらい、伝統文化とサブカルチャーの融合みたいな催しをやらせていただきました。あとは大阪府の堺ですね。ちょうど一年前ですが、堺といえば利休の故郷、堺幕府とも称される日本の拠点、南蛮貿易の拠点だったわけですけど、毎年恒例の文化財特別公開において、『へうげもの』がメインテーマとなり、桃山時代の文化財でマンガや陶芸の展示をやらせてもらいました。これがご縁になりまして、堺の方が新潟にも協力してほしいということで、今回イベントが実現した経緯があります。箱モノの中ではどうも面白くないとずっと感じていて、リアルに生きている過去、過去から未来へ続いていくものの中で展示ができたということが、新潟市でも実を結んだかなと思っております。

#### ■アーティストと「へうげもの」の出会い

**太下氏：**ありがとうございました。「へうげもの」には細川元首相もマンガの中に出てきてしまうのですが、他にもいろんな人が出てきていまして、例えば虎退治で有名な加藤清正の配役で元ボクサーの具志堅用高さんが出てきているとか、黒人奴隷の登場人物がいるのですが、その役でマイルス・デイビスだったり、が何故か出てきたりとか、とても凝ったつくりになっていて、分かる人にだけ分かればいいみたいな感じとなっています。

藤沢さんにご紹介いただいたように、マンガからスタートしたコラボレーションというものは、普通の場合はアニメへの展開が多いのですが、「へうげもの」の場合は、陶芸という文化へと面白い展開をしています。さて、今日お越しのお二人は「激陶者集団へうげ十作」いう非常に過激なネーミングのクリエイター集団のメンバーですが、こうしたアーティスト集団の方々とのコラボに至っているわけ

ですね。では、このグループはどんなことをやっているのか、また、そもそも何故こういうことを始められたのかという辺りからご紹介していただけますでしょうか。

**田村氏：**僕はたぶん一番最初の頃からへうげ十作に関わってまして、その時の多少の経緯を話させてもらいます。美濃に青木良太という陶芸家がいて、『へうげもの』がすごく好きで、彼がここにいる藤沢さんにアプローチしまして、リアルな陶芸家とコラボレーションができないかという話をしたのが、最初だと聞いています。それについて、面白がって下さったので、とりあえず1回展示会をしようということになりまして、それで青木くんが選んだ陶芸家に私もいたのかな。それが最初、目白のギャラリーで2009年です、たしか。

**藤沢氏：**活動の発端にはたしかに青木良太さんがいるんですが、彼は若手のトップランナーですけど、古田織部が実際に織部十作という陶工集団を美濃で組織していた史実があったので、そういったモーニング娘、モーニング息子的なスピノフをやろうと、こちらから提案させてもらいました。うちは「モーニング」ですね。まずは誌上でやきもののグラビアを掲載したところ、うつわの大手企業、京都・たち吉のバイヤーの方が若手の育成にとっても熱心で、是非ともリアルな展覧会をやろうと誘ってくださり、伊勢丹新宿店で初めての催しを実現しました。そこからギャラリーとか、いろんな場所に派生していったという流れです。

**田村氏：**やっているうちに藤沢さんが、僕らみたいな若手の陶芸家の個展によく顔を出してくれるようになって、僕が言うのもなんだけど、けっこう目が肥えていて、その辺の目利きの方より断然目利きになってきたり、それが僕もすごく面白くて。藤沢さんからこういう作家がいるからとメンバーが増えてきて、陶芸家以外の作家も加わり、どんどん層が厚くなっているのが現在の状況ですね。

**太下氏：**金さんはどういう経緯でこのグループに

参加されたのですか。

**金氏：**僕は途中からの参加になるんですけど、元々『へうげもの』というマンガは知っていて、熱心に読ませてもらってたんですが、たしか現代美術家の村上隆さんとか、その他デザイナー、クリエイターの方がいるんな雑誌のインタビューの中で名前を出されていたので、興味を持って読んでみたらすごく面白かったんです。陶芸と言っても、僕は元々現代美術の方でずっと発表したり美術館などで展示したり、陶芸界のコアな方々からは異端児扱いされているような立場でずっと活動が続けていて、先述の青木くんという陶芸家のパーティで藤沢さんと出会った時にポートフォリオを見せたんですね。その頃、自分も活動する場所の広がりを探していたので、常にポートフォリオを持ち歩いて売り込みなんかをしていたのですが、そこで「なんじゃお前は、変な物作るな」と言ってもらってですね、その後「へうげ十作」という活動をしているので、参加してくれないか」と誘っていただいて、それまで茶の湯に関しては全く門外漢でしたし、敷居が高いようなイメージがあったんですが、藤沢さんに是非お前のテイストで茶器を作ってくれないかというお願いをされて、それが自分が器ものとか茶器を作り始めるきっかけだったんです。

『へうげもの』とのコラボイベントというのは、それまでの客層とは全然違う個性豊かなお客さんが観に来てくださるので、そこでの出会いは自分にとって大きな広がりになりましたし、特に印象的だったのは、たしか伊勢丹での展覧会だったんですけど、どこその中学生がお年玉を握りしめて、DSを買うかお茶碗を買うか迷ってお茶碗を買いに来たという話があって、普通の陶芸家の展覧会ではありえないというか、『へうげもの』というマンガの力を思い知ったりしましたね。そのご縁でずっと今もお付きあいいただいています。

**太下氏：**ありがとうございました。田村さん、何か補足があればお願いします。

**田村氏：**藤沢さんから、今までこういうことをやりましたという紹介があったんですけど、あれはま

だとてもやさしいほうで。僕がすごく嬉しいのは、今の金くんの話もそうですが、無茶なことも本当やらせてもらってホント楽しいんですけど、例えばあるミュージシャンの子たちのライブイベントで、TシャツとかCD売っている横で茶碗売ってみたいなとか、そんなこともやってますね。

**金氏：**ぐい飲みが意外に売れました。

**田村氏：**ちゃんと売れたっていうのがすごく良かったよね。そんなこととか、まさにアウェイの場所でもいろいろやって、そのことがまた、僕らとしてはすごく同時代を感じるんですね。僕らが日頃聴いている音楽を奏でているような人たちのライブで、自分たちの茶碗を売る。僕としては感動してしようがなかったですね。さっき藤沢さんが青年誌独自の立場という話をしてましたが、僕もそれはすごく感じています。「へうげ十作」の頭には「激陶者集団」と冠が付いているんですが、本当に僕はある種、格闘技の気分で、リングに放り込まれたような感じで、『へうげもの』に関わっています。それがたぶん、自分という作家が「へうげている」ということになるのかと思ったりしています。佐々木中さんという同世代の哲学者がいるんですけど、彼のことがすごく好きで、彼の本を読んでいた時に、彼はいわゆる萌えだったりオタクについては一切語らないんですね。今の音楽はこうで昔ながらの音楽はこうだ、でも哲学もこうだ、哲学者の本質はマイルス・デイビスだ、マイルスを古いというミュージシャンはいないんだし、哲学が今それを古いということなんてありえないじゃんと彼が言っていて、その言葉がすごい心に残っているんですけど、自分がこうして関わっている仕事だったり制作を通じて、いろんなジャンルのいろんなことを心に留めながら作っている感じですね。

## ■作品紹介、制作の背景

**太下氏：**ありがとうございます。「激陶者集団へうげ十作」というすごいグループ名ですが、現在、新潟市内で展覧会やっています。この会場の近くでは「旧齋藤家別邸」、ちょっと離れたところで「北方文化博物館」でも開催していますので、実際ご覧

になるとよく分かるかと思うのですけれども。もしみなさんの作品の画像があればご紹介いただけますでしょうか。

**金氏：**イベントのチラシでは、僕の作品は左下と右上ですけれども、この写真も僕の作品ですね。その下は前川多仁さんという京都の染織作家、この方もかなり変わった奇抜で面白い方ですけど、その方のテキスタイルの上に、マネキンの頭を石膏で型どりして、焼き物に置き換えて、なおかつ一人ずつ表情を変えていくという、群像がテーマの作品です。自分の知名度が上がったのは、チラシにも使っているひとつ目の目ん玉がある作品です。陶芸を始める前からSF映画やアニメやマンガがものすごく好きだったので、その造形感覚が入っていると思いますね。手塚治虫から始まり、ガンダムの解説本で構造とかじっと見ていたりしまして、思春期になってからは『エヴァンゲリオン』とか『攻殻機動隊』にすごくはまったという感じですね。

**太下氏：**へうげ十作に関わる皆様の、その他ご紹介していただける作品はないでしょうか。

**藤沢氏：**今回初めて参加してくれた作家で、京都の表具屋さんの若ボン・井上雅博さんがいるんですけど、掛け軸の画像ございますか、その屏風がそうです。マンガと現代アーティストと何代も続く伝統工芸作家が組んでいるという、その幅広さが特長ですかね。太下さんも読んでくださった最新刊の画はボンカレーのいわばパクリです。大塚食品と勝手にコラボさせてもらいました。非公式もいいところですけど。

**金氏：**現代美術の方でも発表を続けているんですが、ホワイトキューブという真っ白な箱の空間で展示することが多いんです。どのような作品を持ってくるにしても、作品だけ浮き立つようにと真っ白な空間に展示されているんですが、『へうげもの』のイベントで、普段は見学すら許されないような重要文化財の建物とかで、展示させてもらおうというのはすごく面白くて。ホワイトキューブは自分の作品をどう見

せるかという展示空間ですけど、旧家なんかに展示するときは建物との勝負という高揚感がすごく出てきたので、ホント貴重な機会をいただいたなと思います。

**田村氏：**今回新潟でも『へうげもの』の原画と僕らの作品がいっしょに展示されてるんですが、中にはこういう織部の向付とか、マンガに触発されたコラボ作品もあります。そういう二次元と三次元の共存が実に面白いんです。僕は普段磁器でものを作っています。「磁器ってなんでもできるんだぜ」というのが僕の裏テーマにあるので。普段僕はこういう、コラボ的な仕事はしないのですが、自分の土で実際にひいてみて実際横に並べると面白いんじゃないかと思って作った作品です。齋藤家の方に展示してありますので、時間があればぜひ。やっぱり実在する物だったり、そこの建物だったり、実際に知っていると、こういう感じで自分なりの解釈で物を作れるんですね。広義ではなくて自分の作り方で自分の素材で、『へうげもの』と関わっていると、こういう仕事の仕方が、決していつもというわけではないですが、できたりするのが嬉しいですし、これを作っていて、すごく新しいクリエイションに繋がっていくという瞬間が何回ありまして、それは僕らの中でかなり大きなことですね、はい。

**太下氏：**せっかくの機会なので、田村さんの他の作品もご紹介いただけますでしょうか。

**田村氏：**これも何だろう、どんどん綺麗に破けていくとどうなるだろうという破け袋。器は破けていくけれど、それをどう綺麗に破くか、というのが自分の中でテーマの作品ですね。これは片口ですけど、これがとっても好きで。違う何かを想像させるねってことで。僕は金くんと違って現代美術のこととか知らずに作っていて、独学で陶芸始めたので、まっとうな作り方もよく分からないので、自分なりに器を作ってきたと思ってます。でも『へうげもの』と関わるようになって、金くんは勿論そうだし、十作の仲間たちの作品を見ると、悪い言い方をすると芸の肥やしにしていますので、それはそれで楽しいこ



とです。

**太下氏：**藤沢さん、だいぶ目が肥えてこられたというお話でしたけれど、藤沢さんの目からみてこれらの作品は、どういうふうに感じられるのでしょうか。

**藤沢氏：**青年誌一般に、さっきも言いましたが、おおむね現実～形而下に向かうものなので、例えば「島耕作」は皆さんご存じかと思いますが、あの作品を担当していたら当然企業を取材する、サッカーのマンガを担当していたらサッカーを取材するわけで、そこは結局、各作品の重要なリンク先になるわけですね。『へうげもの』の場合、やきものから直接連想される伝統工芸、民芸というカテゴリーからはあえて離れまして、田村や金のように、現代の個人作家でオリジナリティーの高い活動をしている人を、こいつらこそ「へうげもの」だというオマージュを込めつつ、協力をお願いしています。ものづくりをしている人、なおかつメディアアートではなくて、実際に立体物、フィジカルなものを作っている人に対して、敬意を捧げたい、同士愛を持ちたいと思ってるんです。参加作家の大半が、世代のトップランナー的存在であり、僭越ですが、『へうげもの』との関わりの中で注目されつつある若手もいますので、独自のスピノフとして長く続けていきたいと願っています。再来年、2015年は主人公の織部没後四百年にあたっていて、大規模な展覧会がいくつか行われると聞いています。『へうげもの』を核にして独自の企画を東京でやりましよう、某新聞社と画策しているのですが、二次元からいかに離れて、フィジカルをどう見せるか、マンガとしての実存というのでしょうかね、作家と作品の実存をどう見せるかということをいつも考えています。

#### ■「アーティストが育つまち」について考える

**太下氏：**ありがとうございます。本日は前半のセッションで3都市のプレゼンテーションを聞いていただき、後半は実際にクリエイティブなことに関わっている編集者とアーティストのみなさんにお越しいただいているわけですが、実際にクリエイティ

ブな活動をされている方からみて、自分たちの活動といったものを、もっとやりやすくする為に、行政や都市にこういうことをしてくれたらいいのにと、日頃思っていることがあれば、是非教えていただきたいと思います。今日は冒頭でご紹介したとおり、北は北海道から南は沖縄まで、全国から様々な自治体の方が来ていますので、一番いい提案をしてくれる街に移住されてもいいのではないのでしょうか。

**田村氏：**僕は秋田で制作しています。僕が作っている土地は秋田市の秋田駅から、17キロくらい山の中に入っていった所です。そこから300m進むと県の公園なので、家が建てられなくなるようです。なので僕の家は住所は家ハツレといいます。元々家の外れだから家外れだったと聞いています。ここは雪が今年1m50cm以上積もりました。木が半分くらい埋もれました。でも僕はこの土地がとても好きなので、動こうとは今後も思いません。これは僕が最近関わっている、秋田県の上小阿仁村でやったアートフェアの時の作品のイメージです。上小阿仁村には人口が2,500人くらいしかいません。その中でも一番奥の奥の集落で、17人しか住んでいないんですね。会場は屋外にも建物の中にもあるんですが、僕の作品はこの廃校、今は公民館で展示されました。周りは壊れた建物ばかりだった。この時の作品ですね、教室の一部屋に展示したものです。先ほど話を聞いていまして、すごく感じたのが、ここってもう本当に世帯が7軒、17人しか住んでないとかいうところなので、賑わいがどうかシャッター商店街がどうか、そういうレベルではなくて、なんていうのかな、もう確実に10年以内にはこの集落誰もいなくなっちゃうよね、っていうのが誰にでもわかるような所です。そういう所で、じゃあなんでこういうアートフェアをやるかっていうと、これはもう本当にエンディングノートみたいな、最後の遺書みたいな、ここに人がいたっていうようなことを証明しているかのように見えそうですね。そのためのアートというのはとても僕は健全だと思っていて、だからここでやるっていうのはすごく意味のあることではないかと思っています。先ほど行政の方々が話されていたことと反対な

のかもしれないですけど、人がいなくなるっていうようなことを、もう正直避けられない側面が、たとえば秋田県には間違いなくあるわけで、そういう現実に対してもこういうお見送りみたいなことはできるんじゃないかと僕は思っています。お金を生むも生まないも、とにかくやると。そういうことを考えるのも、ひとつの行政の役割なんじゃないかなと、僕はこのアートフェアに参加してすごく感じました。今回は都市っていうお題をいただいたんですけど、秋田は本当にもう都市とか考える都市ではないなと思ったので、あえて説明させて頂きました。

**太下氏：**ありがとうございました。今、田村さんがおっしゃったように、人がどんどん減少していってしまうことは止められないという点は、確かにその通りだと思います。そして、そういう限界集落の存在を前提としてアートプロジェクトを展開しているのが、新潟市の近くで言うところ「越後妻有アートトリエンナーレ」になるわけですね。

**田村氏：**すみません、補足を。このフェアも去年から始まっています、越後妻有アートトリエンナーレの飛び地開催ということで始まりました。

**太下氏：**はい、それでは金さんはいかがでしょう。

**金氏：**僕は資料を何も用意してこなかったのですが、自分の経験として行政の方と一緒にやって助かったなということからお話ししたいと思います。まず最初に、横浜市で横浜トリエンナーレというすごく大きな国際展があるんですが、やきものメディアとして、やきものを素材として使っている作家として僕が初めて呼ばれたという自慢から入るんですけど。その際、美術館の方とお仕事して、普段はプライマルギャラリーとかコマーシャルギャラリーとか呼ばれる、その作品の売買自体が商売になっている場所での発表なので、個展と言っても売り上げを出さないといけないというプレッシャーがあったりするけれど、予算が行政から年々減っているとはいえ、僕らの単位から見たらすごく潤沢に出ているので、作品の輸送であったり、いろんな手配にす

ごくよく動いてくださって、本当に作品をどう見せるかということに集中して展示できて、すごく楽しかったという経験がありました。受付の横に「モーニング」が展示されていると思いますが、その横に一冊、赤い冊子が置いてあって、それは僕が今年3月にニューヨークのチェルシー地区で行った「JOMONISM」(ジューモニズム)という展覧会のアーティスト紹介です。展覧会の発端は、ニューヨークのギャラリーのディレクターから、なかなか面白い企画がない、経費を全部負担してくれるなら、その場所自体は自由に使っていいよというお話があって。ただ海外の展覧会だしお金はないし、そういう話があるけど、どこから予算出ないかなと言って回っていたんですね。そしたら、青森県が縄文土器とか遺跡とかを観光資産として活用しようと予算をつけている活動しているんですけど、その間に入っている JOMONISM という、ねぶた祭や縄文土器にまつわる展覧会を東京で開催している NPO があるんです。そのメンバーの方がたまたまその次の年度に何をするかという会合に僕を連れて行ってくれて、そこでプレゼンしたところ、その展覧会に予算を付けようとして取りまとめてくださり、青森県から運送費や運営資金などの予算を頂いて、実際にニューヨークで展覧会ができたんですね。そもそも「縄文」という言葉自体、アメリカの方はほとんど知らなくて、「なんだそれは、神道なのか？」と。みんななぜか神道が好きで、いろんな単語がたくさん出てきたんですけど。そういう意味でもきちんと宣伝という成果を出せたと思うんですね。向こうのメディアに取り上げられたし、青森新聞の記者の方も来てくださって、結構大きな記事を載せていただいたし、行政の側の方も市民から面白い動きやっているねと反響があったということで、彼らも宣伝にはなったし、僕たちも NY というそのアートの本場で展覧会を開催できたし。とにかくそういった形で、使い道がかなり自由な予算を出してくださったというのはすごく助かりました。それでちょっと味を占めてといいますか、文化庁の芸術家支援というのがあるんですけど、海外に作家を派遣する支援制度です。ただし、苦情ではないですけど、推薦人をつけるのが結構大変だったり、作家同士で推薦人

の奪い合いになったりと、今年から変わったみたいですが、どこかの団体を通さないと応募できないといったように手順が結構複雑で、今までちょっと出しそびれていたのですが、それにチャレンジしようかなという気持ちが出てきました。その前段階としてというか、京都市でも作家に対する助成を行っていて、年間300万円というお金が、海外に行ってもいいし、展覧会やってもいいし、かなり使い道が自由なものがあって、来年度の募集に応募させていただいているので、ぜひプッシュしていただければなと思ってます。

大阪にアトリエを構えて活動しているので、芸術にまつわる鑑賞であったり、発表であったりとか、京都に行くことが多いんですけど、京都は「HAPS」という施設があったりとか、かなり芸術に対する支援が充実しているなという印象なので、そういった形でどんどん柔軟な支援制度というのができていくといいと思いますね。先ほど行政の方のプレゼンテーションを伺って、自分たちが想像していた以上に柔軟に、しかも具体的に提案されて実行されているのだなと実感としてあったんですけど、それこそ知人のアーティストがアトリエの引っ越し先を探していた時に、少し郊外のシャッター通りになっている商店街の一店舗をアトリエとして安く借りられたというようなお話があったので、そういうこともどんどんやっていただければ、本当にお金がない作家というのは、場所はどこでもいいので、とにかく作りたいという気持ちがあると思うので、人も増えるかな、という感じがします。

**太下氏：**金さんありがとうございました。先ほどおっしゃった、アーティストを海外に派遣する制度というのは在外研修制度のことだと思いますけれど、文化庁の内田政務官もしっかりメモをされていたので、きっと何か良い方向に変化があるのではないかと思います。それでは、藤沢さんいかがでしょう。編集者の立場もありますし、ある意味、「へうげ十作」というアーティスト集団をコーディネートされている立場もあるかと思いますので、その両方の立場からは是非コメントを頂ければと思います。

**藤沢氏：**とにかく行政の方々はグランドデザインを考えられて、すごくマクロにやってらっしゃると思うんですが、例えば少年ジャンプがメジャーリーグだとすると、我々は新潟アルビレックスくらいの存在なので、だからこそこういうアナログなことができるんですけども、やっぱり文化というのは「人」だと思うんですよね。未来志向だけだと、大人の表現はできません。少年誌やファンタジー誌は非実在少年を描くわけですが、俺たちは酒も飲めばタバコも吸う、博打もやるわという、ある種リアルな人物像を追及していくわけです。『へうげもの』の山田の持論はですね、日本とか日本人とかカギカッコ付きで考えないと掘り下げられないと。先ほど申し上げたように、それほど多様であると。たとえば新潟には新潟の独自の歴史があるわけですよ。ですから我々も個体差とか地域差を区別して、いろんなものを差別化して、ある意味ミクロに表現や制作をやっていきたいと思っています。それから、今回こういう場所にお招きいただいてすごく良かったと思うのは、いろんな縁でここにいるんですけど、行政の方々と交流がなさすぎるなと痛感したことです。我々には皆さんのご苦勞がなかなか分かりませんし、逆に行政の方は我々のマンガの制作現場がどうなっているか、作家の創作活動が個別にどうなのかとか全くご存じないと思うんですよ。あまりにも共通言語がなさすぎるなと。だからこそ、もっとインタラクティブに、双方向にやっていかないと、例えば産学官連携とかいったビジョンがありますけど、産業と行政の連携はきわめて不十分じゃないかなと思います。数年前に新人賞の責任者ということで、主に関西の芸大で臨時授業をけっこうやらせてもらったんですけど、その時思ったことは、マンガ学科から少年誌には人材を出しているけれど、うちの雑誌に美大芸大の出身者はいても、マンガ学科出身はたしか一人もいません。それはなぜかという、やっぱりマンガ学科とかマンガ学校が、関係者がいたら申し訳ないんですが、大人の目から見ますとどこか温室になっているんですよ。カリキュラムの問題もあるんですが、単に好きこそものの上手なれじゃ教室から作家は育たないと思うので、例えばマンガ専攻の子にやきものをやら

せるとか、学際的に平面の子に立体をやらせる、ワークショップとかインターン、地元で根付いた形である種労働体験させるとか、街の活動に参加させるとか。そういうことがないとやっぱり人材は育たないんじゃないかというのが、非常に重要な悩みどころになっています。拙いたとえですが、これ以上純粋なオタクの人が増えてしまうと、自分たちのように興味が雑多な人間からすれば、ラーメンしか食べていないヤツからラーメンうまいよと言われても、あんまり説得力がないというような話でして。

とにかく「都市」というのはやっぱり雑多性、雑食性が強いものだと思いますし、大人の媒体はそういう多彩な表現を目指しています。行政の方々にはもっと広く、もうひとつ別のマンガといますか、これまたたとえ話ですが、ヤクルトにいたホーナーが「日本にはもう一つ別の野球があった」と言い遺して一年で帰っていきましかつ、それくらい個性差があるし、マンガの裾野はものすごく広いんですよ。最初に申しましたように、それぞれリンクできる先というのは千差万別です。産業、観光、歴史、文化など、幅広く連携を考えていただけたら幸いです。山田芳裕という作家は本当に偉才だと思いますし、新潟市から生まれた作家の中でも飛び抜けた才能だと個人的には思うんですね。そういったこともぜひ知っていただいて、大人のマンガをより地域振興に活かして頂けないかなというのが、今日の一助です。どうぞ今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

**太下氏：**辛口のコメントを含めてどうもありがとうございました。電気も付いてだいぶ終わり感が漂ってまいりました。では田村さん、追加のコメントがあるようでしたらどうぞ。

**田村氏：**今回の展覧会に参加している十作の仲間が三人来てくれました。ハンチングをかぶっているのが大阪の増田敏也、髪型が武士の人が千葉の小孫哲太郎、それから『へうげもの』にかぶきものの造形モデルとして登場して、華々しく散った京都のかのうたかおです。すいません、内輪のことで。

**太下氏：**ありがとうございました。マンガの登場人物までリアルに登場してしまいました。では最後に大阪市立大学大学院教授の佐々木先生から総括的なコメントをいただけますでしょうか。

**佐々木氏：**時間も来ているのでひとつだけ。非常に緊張感がある話で面白かったです。私は創造都市論の中で、都市全体がいきなり創造的になるのは難しいけれど、今日の話にあったようにですね、「創造の場」というのはしばしば周辺で起こるんですね。だから中心よりむしろ周辺の方が面白いので。家ハツレというのは非常にいい言葉ですね、まさに「創造の場」ですね。片方でセレンディピティという言葉があって、探しているものと違う価値あるものを見つけることがある。それを仕掛けるのが藤沢さんかもしれないですね。古田織部は極めて前衛的な人で、彼の仕事は現在では伝統工芸と言われるけど、全てその時代にはもの凄く前衛でアバンギャルドなものです。こういう物をオールドメディアと思われたようなマンガで表現したのが二重三重の意味で面白いのですね。文化産業というのは普通の産業と違うので、意味をいくつも重ねあわせて読み替えていくものです。そこに新しいものが発見されて、その価値が今度は大量生産のマンガで、大人のマンガでやられたなと思いながら感心して聞いていました。どうもありがとうございました。

**金氏：**今のお話もそうですし、先ほど藤沢さんが「やっぱり人だ」と言いましたが、行政が支援する場合は箱モノとかイベントの方が目に見えやすいですし、短期的にも結果が分かりやすいので例が多いとは思いますが、僕もやっぱり「人」だと思うんですね。自由度の高い助成を受けることもすごくありがたいんですが、ただお金を貰うだけでは使い道をどうしていいかわからない作家もたくさんいると思うんですね。助成金は生活に使えないことが多いし、行政と作家の間でマネージメントする人材っていうのが少ないと思うので、そういう点にも留意しつつ支援していただければと思います。藤沢さんとか本当にそうですね。こんな面白い展覧会ばかりを企画されているので。

太下氏：佐々木先生、どうもありがとうございました。金さんが指摘されたのは、いわゆるアートマネージャと言われる存在のことですよね。これについては、文化庁さんでも大学を支援する形で全国的に養成しようということで動いています。本日はアーティスト、クリエイターの立場から貴重なお話をいただきました。どうもありがとうございました。だいたい時間が押してしまいましたが、是非皆さん旧齋藤家別邸で展覧会を開催中ですので、お出かけください。非常に面白い内容になっております。どうもありがとうございました。



<平成25年11月2日収録>

## 創造都市政策セミナー「メディア芸術と創造都市・スペシャルインタビュー」アンケート（有効回答数33）

### 1. ユネスコの「創造都市(クリエイティブ・シティ)」についてご存知ですか

	回答数	割合
はい	25	76%
いいえ	8	24%

### 2. 創造都市への取り組みから、今後のまちづくりの可能性を感じましたか

	回答数	割合
はい	30	91%
いいえ	2	5%
無回答	1	3%

### 3. 本日のシンポジウム「メディア芸術と創造都市」はいかがでしたか。

#### テーマについて

	回答数	割合
大変適切だった	7	21%
適切だった	25	76%
もっと検討すべき	1	3%

#### 内容

	回答数	割合
大変よかった	8	24%
よかった	22	67%
あまりよくなかった	2	6%
無回答	1	3%

- ・街づくりの様々なアイデアが自分の中で浮かんだ
- ・新潟市の場合、ひとつのツール、きっかけとは思いますが、マンガが主体的に進歩しているのに多少違和感があるしかし芸術・文化…アートとしてとらえれば創造都市として期待がもてる
- ・自治体が何故アニメに直接関わるのかその必要性を感じない
- ・創造都市への取り組みとひと口で言っても、それぞれの都市で方向性の違いを感じ興味深かったです

### 4. シンポジウムに参加して、創造都市への可能性を感じましたか？

	回答数	割合
大いに感じた	13	39%
少し感じた	18	55%
あまり感じなかった	2	6%
まったく感じなかった	0	0%

- ・クリエイターと行政の連携による展望は見た。しかしファンや消費者の参加、関わりが見えにくかった
- ・どうやって人を呼ぶかではなく、どんな面白いもの

を作るか。クオリティの高いものがあれば自然と人が集まってきて、まちの活性化にもつながると思います

- ・芸術文化、伝統文化を含め一体的な展開が必要とすれば、その基盤はあると思う
- ・イベント、祭りという点から線（日常）へマンガ、アニメが広がっていかなければいけないと思う

### 5. スペシャルインタビュー「へうげもの」からみる創造都市はいかがでしたか？

	回答数	割合
大変よかった	15	45%
よかった	15	45%
あまりよくなかった	1	3%
無回答	2	6%

- ・様々な価値観を認める創造都市の広さを感じられた。
- ・アーティスト、藤沢さんいずれの話も説得力があった
- ・自治体がそれぞれの特性を活かし、限られたお金を有効に活用して貰いたい。民間成長を促し、自治体の関わりは限りなく少なくする必要があると思う
- ・ひとつの新潟市出身の方の漫画からこうして陶芸家の方が集まって、新潟で展示するという企画、インタビューが実際に体験できて良かった

### 6. その他、創造的なまちづくりへのご意見・アイデアなどあればお聞かせください。

- ・ファンが利用できる、交流できる企画をして欲しい。
- ・今後も開催予定があればぜひ参加したい。どのような取り組みが出来るか可能性があるか、勉強していきたい。
- ・テーマは人づくりと思います。今後もアイデアを出し努めたいと思います

#### お住まいの市町村

	回答数	割合
新潟県内	18	50%
県外	6	20%
無回答	9	30%

#### 所属等

	回答数	割合
一般・市民	14	42%
研究者・教員	1	3%
自治体職員	9	27%
無回答	9	27%

## 創造都市入門セミナー「創造都市が目指すもの」

<平成25年11月3日収録>



### ■問題提起



佐々木 雅幸 氏

大阪市立大学大学院創造都市研究科教授、同都市研究プラザ所長

#### ■日本における創造都市のあゆみ

日本で創造都市という流れがいつ始まったかという点ですが、私は97年に『創造都市の経済学』という本を出しています。これは主に学術的なもので結構難しい本ですが、たまたま、作家の井上ひさしさんが非常に高く評価してくれました。取組としては、2001年に創造都市会議を金沢で経済同友会が始めたことが最初になります。これまでに十数回もの回を重ね、まさしく日本における創造都市を起動していく装置として定着したと思います。2003年には大阪市立大学大学院創造都市研究科ができ、私がそこに移ることになりました。①人材育成、②研究交流、③国内外への発信、という3つの機能を併せ持つプラットフォームを提供したという意味では、当時の大阪は創造都市というものを日本にある程度定着させる上で、重要な役割を果たしてくれたと感謝しています。

そして2004年にこの流れが具体的に都市の政策レベルで実現していきました。横浜市に文化芸術都市創造事業本部がおかれ、創造都市推進課という課が設けられ、その推進課長に野田邦弘さんが就かれました。私と彼とは文化経済学会の中で一緒に研究をしておりまして、学会での全国的ネットワー

クを活かして議論し、一緒に推進してきました。この時に、神戸市も同じように創造都市論を都市政策として具体化することを考えておられました。ちょうど阪神淡路大震災から10年経って、次のステップを考える時に文化芸術に着目されました。だいたい横浜と神戸というのは、日本における新しい都市政策事業をやるときの2つの窓口だと思います。

そうこうしているうちに、2006年には、札幌と京都でそれぞれ創造都市を市のレベルで進めていこうという提案がありました。札幌市の場合は、英語では「Idea City」という言葉を使い、日本語では「創造都市」としていました。京都は文化芸術都市創生条例を作りました。条例まで作ったのは京都が最初だと思います。

その翌年に私どもの都市研究プラザが、文部科学省のグローバルCOE事業の採択を受けましたので、5年間大きなシンポジウム等を連続的にやることになりました。チャールズ・ランドリーをはじめ、世界の著名なコンサルタントや研究者、ユネスコの関係者等を招きながら議論を続けました。これがきっかけになり、創造都市ラウンドテーブル会議の第一回を大阪市内で開催しまして、創造都市ラウンドテーブルの事務局は川井田祥子さんが担ってられて、人的ネットワークの中心になっていただきま

した。この時に、当時の文化庁長官の青木保先生から一度話がしたいとの連絡があり、長官室にお伺いしたところ、青木先生は「創造都市は非常にいい考え方だし、これを東アジア全体に広げたい」と言われました。そして、まず文化庁長官表彰〔文化芸術創造都市部門〕が2007年度から開始され、2009年度からの文化芸術創造都市推進事業とともに続けていただいています。

2008年に、神戸と名古屋が相次いでユネスコのCreative Cities Networkにデザイン分野で登録され、2009年には金沢がクラフト分野で登録をされました。アジアで日本がいきなり3都市が登録されたということで、中国・韓国に対して結構インパクトがありまして、この後、猛烈な勢いで中国・韓国が創造都市事業を推進するということになりました。

この辺りまでは、主に政令市とか中核市のレベルですね。やはり創造都市で事業をやるというのは、予算もマンパワーも必要です。文化庁の方で2010年度から設けて頂いた創造都市モデル事業は金額は少ないものでしたが、インパクトがありました。この事業を受けたのは、仙北市や鶴岡市といった農村部で、それほど財政力は高くないけれども、文化芸術事業はやりたいというところでした。ちょうど良いタイミングで、農村部でも創造都市的事業をやる、つまり「創造農村」という流れができました。神戸市で行った「創造都市ネットワーク会議」の中で仙北・篠山・木曽・中之条町から、創造農村ワークショップを独自に立ち上げてみたいという声があり、2011年秋に仙北市で第1回創造農村ワークショップを開催しました。今年8月の木曽町での第3回創造農村ワークショップでも非常に中身の濃い議論ができたと思います。

### ■次のステップへ進む創造都市

この辺りで大体10年経ち、次のステップに差し掛かっていますが、そこで彗星のごとく登場したのが高松市です。高松市に創造都市推進局ができて、どうも50人以上の体制で取り組んでいるらしい、大西秀人市長が創造都市推進審議会まで条例で作ったという情報を聞いて仰天しました。始めて10年

くらい経ってくると、これまでとは違う広がりが出てきますね。私は創造都市の取組は多様性が命だと思っていますので、そういった意味では、取組や進め方なども非常に多様性があって面白いなあと思っています。

2013年1月に横浜市で創造都市ネットワーク日本(CCNJ)を立ち上げることができまして、横浜市の林市長が現在代表を引き受けてくださっております。この流れの中で、2014年から東アジア文化都市事業という、欧州文化首都事業にならったものが始まりますが、いきなりアジア全域でできるわけではないので、とりあえず日中韓で合意しよう、ということから始まりました。しかし、折から、歴史問題・領土問題で非常に波風が高いので、うまく漕ぎ出せるかという心配がありますが、こういう時期だからこそ文化で自治体間の交流チャンネルを広げる・深めることに意味があると思っています。初年度に日本では実績・リーダーシップの面で横浜市が選ばれました。2015年には、ユネスコ創造都市ネットワークの年次大会を金沢で開催することが、今年9月のボローニャの年次大会で満場一致で決まりました。金沢規模の自治体で果たしてうまくマネジメントできるかどうか、ものすごくチャレンジングな事です。これが上手くいくためには、まさにCCNJのネットワークの力、皆さん方の力でこれを成功させるということが必要ではないかと思っています。そのような背景から、今日は高松と横浜と金沢、3つの都市の取組とこれからの方向性についてお話をいただこうと思っているところです。

### ■東アジア文化圏における創造都市

最後に1つだけ付け加えます。特にユネスコなどの状況を見ていまして、中国とうまく足並みを揃えることが重要ですね。ユネスコの創造都市ネットワークでも、中国はアメリカの代わりにユネスコの事務局経費を払ってくださったのですが、お金を出すという要求も出てくるのですから、東アジアにおける共生と調和といった課題が重要になっています。我々はそれぞれの都市の創造都市づくりに当然責任を持つはずなので、いまや創造都市という



取組は国際的にもだんだん事業数を増してくるようになりましたので、ユネスコのネットワークやあるいは東アジアにおける創造都市の付き合いをどんな風に考えていくかということをそれぞれ検討して方針を持っていただきたいと思います。

作家の村上春樹さんが昨年の秋に朝日新聞に書かれた言葉はなかなかいい言葉でして、やはり東アジアにおける固有の文化圏を形成できると。これまでは経済発展の格差が大きすぎたけれど、急速に経済的な発展を遂げてきて、お互いがかなり水平的に

議論できるような基盤が広がっているという中で、東アジア文化圏というプラットフォームの形成に向かうことと、我々が創造都市づくりをそれぞれの都市で取り組みながらそういった広がりを持っていくことが、共通の課題として認識されていく必要があるのではないかと考えております。その意味では、やはり今度の横浜の東アジア文化事業の中でも東アジアを意識した取組をぜひ成功させていきたいなと思っている次第です。

## (1) 事例報告



高松市 宮武 寛 氏  
創造都市推進局長

高松市創造都市推進ビジョン  
プロモーションビデオ上映

[http://www.youtube.com/](http://www.youtube.com/embed/nJ9qdY3dKbl)

[embed/nJ9qdY3dKbl](http://www.youtube.com/embed/nJ9qdY3dKbl)

### ■高松市創造都市推進局の体制と推進ビジョン

高松市では、去年の4月に創造都市推進局ができ、立ち上がり当初に180人ぐらいおりました。それが今年の4月に教育委員会から文化財課を持ってきて、今恐らく250人ぐらいではないかと思えます。どのような課があるかと言いますと、まず産業振興課、農林水産課、土地改良課、文化芸術振興課、観光交流課、その中に国際交流をやる都市交流室があり、スポーツ振興課、競輪場、中央卸売市場、美術館があって、新しく文化財課が来ました。文化財課の中には高松城跡玉藻公園もありまして、それも創造都市推進局に来た、という大所帯となっております。そんな中で、去年から約2年、創造都市推進ビジョンを作ってまいりました。これが本の表紙に作ったタイトルです。(図左)



我々行政は、持続性のある社会を作らなければいけない、と言い続けていましたが、ただ続くだけではダメなのではないか、その持続可能性の先に灯す希望が必要なのではないだろうか、その希望こそがもしかしたら創造都市ではないだろうか、ということで、未来を照らす希望の灯りとして灯台のシルエットを入れております。これは、高松市のお城のすぐ目の前にある灯台のシルエットを使っています。灯台全体が光るという珍しい灯台で、灯台全体で未来を示す、そういう意味合いのタイトルです。できましたビジョンを一つにとりまとめたのがこの絵です。



なぜ絵で描いたのかと言いますと、創造都市推進ビジョンと同時並行して、文化芸術振興条例とものづくり基本条例と新しい観光振興計画の策定を進

めていました。文化芸術振興条例のメンバーから「条例を絵で描いちゃダメなのか」という意見が出ましたが、他のもう少し制約のないもので、活かしてみたらどうか、ということになりました。そこで、全部の元締めである創造都市推進ビジョンはぜひ絵を描こうとなりました。これで、高松らしい創造都市とはなんだろう、という議論を進めていきました。

ビジョンの中で一定の結論が出たものが、真ん中の船です。私達のまち高松は、今、産業振興、コンパクトで美しいまちづくり、地域・コミュニティの活性化など、いろいろな施策事業を展開しております。これを文化芸術などのもつ創造性という船に乗せてしまおうと。この創造性を活かしてこれらの施策の調和のとれた推進を行うと。そのことによって辿り着くゴールが人間中心の都市だ、ということです。

なぜ人間中心の都市になるかという、その下に描いてある島のところで、高松はもともと非常にコンパクトにできていて、都市的な利便性があり、かつすぐ目の前に瀬戸内海が開けていて、ちょっと車で走ると山あい風景があり、田園のもつ穏やかさ、これが共に享受できる。そのことによって人々が幸せを感じられる。こうすることが、人間中心の都市なのだということで、我々高松の創造都市はこのイメージでいこう、となりました。これが創造都市推進ビジョンでございます。

### ■創造都市推進ビジョンの具体性

ビジョンと言っても、やはりもう少し具体的に落としこんでいきたい、ということで、さらに創造的なアプローチを3つの指向性、1) 世界指向、2) 独創指向、3) 未来指向、でやっていこうとなりました。創造的なアプローチの中心に近い部分は、やはり文化芸術・工芸・スポーツ・伝統芸能で、そのクリエイティブな力は、もう少し外側にある商工業・農林水産業・観光の振興、都市交流、また歴史的景観といったところに影響を及ぼします。さらに、一番外にあるであろう都市整備や環境、福祉、こども、といったところに影響を与え、結果として魅力にあふれ、活力のある創造都市を目指していこう。それが、創造性豊かな海園、田園、人間都市、という我々

のまちの目標を実現することだろうということでございます。

主なプロジェクトの具体的な事業が、交流空間、食、生活工芸、祝祭、国際会議、こども、でした。こどもという視点はこれまでの創造都市を学ぶ中では、あまり重要視されていなかったのではないかと思います。これは高松市では、イタリアのレッジョ・エミリアの真似ではないのですが、保育所や幼稚園に芸術師を派遣して小さな頃から生の芸術を体験しようという事業を従前からやっております。そういう切り口から、文化芸術に代表される創造性を主なエンジンとする創造都市というのは、こどもがとても大事な視点であると。これを入れたのは大きかったですね。我々としては、具体的な事業に落としこみ、予算獲得して、本当に事業をまわしていきたい。ビジョンという本を作って終わりではなく、本を作ってそこから何をやるかが、我々の使命である、という合言葉っぽい共通認識を持ってやってきましたので、6つの視点から始めました。

### ■創造都市推進体制から生まれたプロジェクト

本を作っている途中で入りきらないこともやりにくくなってしまい、「もっともっと創造的プロジェクト」という、「その他」をカッコ良く言ったプロジェクトが生まれました。例えば、山間部・島嶼（しょ）部では、瀬戸内国際芸術祭をやっており、島の復権・海の復権といいますか、これまで見捨てられてきた部分が随分と見直されてきました。古くなった空き家を利用してサテライトオフィスが作れないか。10年以上続けているいわゆる市民との協働も更にクリエイティブ化をしてみようとか。

あとは企業の育成誘致による経済活性化と書いてありますけれども、創造都市の視点・観点で、ジャッジをしていこうということです。企業ならなんでもウエルカムではなくて、我々が目指す都市像に合致する企業に来ていただく、そうでないものは無理して来ていただかなくてもいいという、どこかで割り切りをしたい、ということでございます。

## ■ U-40、Facebook プロジェクト、クリエイティブ大学

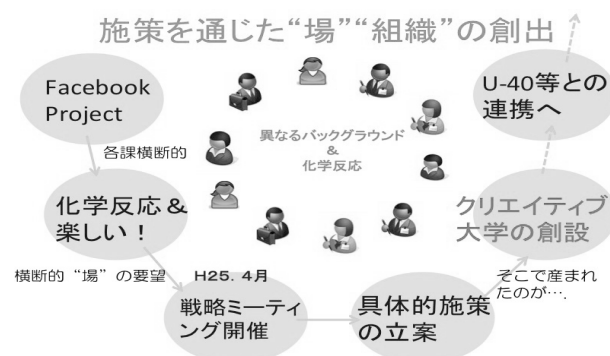
面白かったのは、ビジョンを策定する体制です。創造都市推進審議会に対して事務局が作った案をそのまま押し返す、といったことを避けるために、下に創造都市推進懇談会、通称 U-40（アンダーフォーティ）という 40 歳未満の会議を上審議会と同じように併設しました。上の審議会は各分野の代表的な TOP の方々 20 名で構成しました。U-40 の方は同じような分野から、30 歳代、20 歳代の方で構成しました。このように、創造都市推進ビジョンの原案・素案・叩き台を行政側が考えて作るのではなくて、U-40 の議論を踏まえて、それを行政側がとりまとめて審議会の方に諮るというスタイルをとりました。結構 U-40 の議論が面白かったです。

そして、行政側の担当職員が、U-40 を見ていると自分たちの意見を生き活きと述べて楽しそうだ、我々もあれぐらい意見を言わせて欲しいという、気運が高まりました。そうしてできたのが創造都市推進局の Facebook プロジェクトです。局内の若手から各課横断的にメンバーを募って、昨年の 11 月に Facebook ページを立ち上げることができました。結果が出ると楽しい、もっとやりたいという話が出まして、今年の 4 月に創造都市戦略ミーティングを Facebook のメンバーを中心に 30 人ぐらいで開催いたしました。いわゆる放課後に集まってこんな事業ができれば楽しいぞ、という話をしまして、具体的な施策の立案を致しました。その中から、ある程度私の方で拾って、来年度予算要求に盛り込んでおります。

さらに、そういう動きが大きくなって生まれたのが、クリエイティブ大学です。要は具体的な施策だけではなくて、もう少しお互いの仕事の内容や、高松市のことをもっともっと勉強しようということがやれる場がほしいと。それをクリエイティブ大学と名前をつけてしまって、U-40 と連携しているという話し合いをして、それを現実に事業化しているという動きがあります。

U-40 の方ですが、そこでも審議会に施策を上げるだけではつまらない、何か自分たちで社会実験

をやりたいとなりました。ちょうど高松市の美術館のカフェが閉鎖状態にあり、そこを実験的に開けさせて欲しいということで、これも去年 3 月に何とか 100 万円をつけて実現してしまいました。そうすると、彼らのモチベーションが上がって、テーマごとに活発な議論ができるようになり、とうとう役所から頼まれた懇談会ではつまらないと、彼らが自分で Co クリエーションという会社を作っていました。



## ■ shiro café、工芸作家 TAKUMIKUMO

高松では工芸品が感じられないとか、瀬戸芸は昼間のイベントであって夜のおもてなしがもうひとつだとか、高松城跡の披雲閣は重要文化財に指定されても、まだなかなか活用できない、工芸作家は頑張っているけれども、どうも誰が何をやっているのかわからない、というような課題がございました。それを、クリエイティブな力で解決しようということで、shiro café をやりました。夏の期間限定でしたが、6200 人が来てお客様の満足度 99% でした。何をやったかということ、高松のものづくりにおいて重要な盆栽、庵治石、漆を使いました。同じスイーツを出すにしても、石で作ったり、漆器で作ったり、石版の一部に漆をかけたり、いろいろな器で同じものを出しまして、これが非常にうけました。それを重要文化財の披雲閣でやり、瀬戸芸に来た人が夜もここで楽しめると。普通夜は公の施設は閉まっていますが、創造都市推進局の所管に来た施設は 18 時以降も極力開けています。こういったことが、観光客の誘致に繋がっていくのではないかと考えております。

shiro café から派生して、その日のためだけの料理、器、盆栽、書を楽しむ高級志向の企画を、1

人12,000円程度、1日40食限定でやりましたが、即完売しました。そこに飾っていた50～60万円の松盆栽も普段よりスムーズに売ることが出来ました。その結果、この工芸作家たちは連携が深まり、解散したくないと言ってTAKUMIKUMOというチームを作って海外に展開するそうで、早くもバンコクの伊勢丹と連携して海外展開を考えているそうです。

### ■質問

**男性 A:** 高松市の取組はすごく連動していて、次から次へと発展し、かつモチベーションも高まっている、というとてもいい印象を受けるのです。どのようなテーブルワークでまとめて、講習会に繋げていかれたのか、単純に一言では表せないと思うのですが、ぜひまた今後とも教えて頂きたいと思います。

**宮武氏:** やはり好循環、共通認識を持つということです。なぜプロモーションビデオを作ったのかという点ですが、市民向けに創造都市を浸透させようとしたのです。県外市外に対して高松はこんないいところがある、といっぱい言っているのですが、それを聞いてやってきた観光客の方が地元の人に「高松ってこれが有名ですよー」とおっしゃるわけです。ところが、地元の方が、「それ知らないよ。」みたいな反応をしてしまう。これはもう一番痛いわけで、行政が一人勝手に創造都市といって騒いでいる、そういう図式が一番怖い。我々としては足元をかためよう、一般市民にわかりやすい施策展開、創造都市とは何かということを見せようという、統一的な共通認識がありましたので、幸いうまくいっているのかと思っております。



金沢市 松本 尚人 氏  
(都市政策局企画調整課政策推進グループ長)

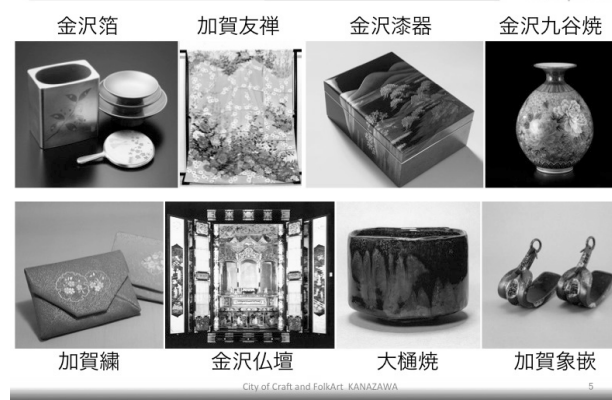
### ■金沢の歴史

金沢という都市は、自らの伝統文化に革新的な息吹を吹き込む取組を展開してきました、国内外から日本の創造都市の代表という評価を頂いているのではないかと、思っています。文化と経済のバランスがとれた都市として、歴史を積み重ねてきております。歴代の前田家の藩主が学術文化を奨励しておられたこと、そして、戦争の被害も無かったこと、永きに渡り平和が保たれた地域であることを背景にいたしまして、市民生活にも様々な文化がずっと根付いている、そういう土地柄でございます。

### ■金沢の工芸と新しい文化芸術の創造

歴代の藩主による学術文化の奨励の一つの事例として、百工比叢がございます。五代目の藩主綱紀公が作成し、当時のいわゆる職人さんの技術の向上や保存ということを目的とし、さまざまな資料や記録をとりまとめたもので重要文化財の指定を受けております。

### 金沢の工芸



現在も残る金沢の工芸としては、箔、友禅、金沢漆器等々がございます。伝統的工芸品産業の振興に関する法律に基づき、大臣の方から指定を受けたもの、市独自に指定をしているものを含め、20を超える品目を伝統工芸品として指定しております。(図)

新しい文化芸術の創造として、「前の山出市長が作った2つの顔」と、佐々木先生にご紹介頂きましたが、ひとつは市民の創造の場としての「金沢市民

芸術村」を1996年に造りました。町中の紡績工場の跡地を改装いたしまして、一年中24時間文化芸術活動の拠点としての役割を担っており、年間20万人を超える利用がございします。

そして、もうひとつが金沢21世紀美術館でございします。2004年に開館をしまして、今もなお年間150万人の来館者がございします。こうした創造の場も新たに金沢市は整備をしてきております。

### ■官民一体となった創造都市への取組

これまでの創造都市への取組は、当然行政だけで進めきたわけではなく、むしろ始まりは民間の有識者の方々、あるいは経済人の方々からの働きかけが大きかったと言えます。

故安江良介氏からの提案を受けまして、金沢経済同友会の主催で、金沢創造都市会議を2001年から開催しております。知識人や経済人などを交えまして、金沢をとりまく都市問題の創造的かつ実践的な解決方法を提案するもので、毎年開催しております。

この金沢創造都市会議の提言などを踏まえまして、21世紀における創造都市の重要性というものを認識して、金沢市では、ユネスコの創造都市ネットワークへの加盟を目指しました。2008年の5月に、工芸団体、経済団体、市民団体などと、行政による金沢創造都市推進委員会を設置しました。そこで申請に関する議論を重ねまして、同年の10月には、ユネスコへ申請書を提出して、翌年の6月には、クラフトの分野としては初めてユネスコの創造都市ネットワークに認定を受けました。

### ■創造都市・金沢が目指すべき将来像

創造都市金沢が目指すべき将来像として、1)文化とビジネスをつなぐまち、2)創造の担い手を育てるまち、3)世界を惹きつけるまち、この3つの将来像を掲げて各種の施策を展開しております。

#### 1)文化のビジネス化

まず、一番目の柱、「文化のビジネス化」という部分では、金沢クラフトビジネス創造機構を設置し、若手工芸家を中心に、販路の拡大の手法、情報発信の機能などを組織の方で担っています。

「おしゃれメッセ」という事業も毎年秋に開催しており、ファッションショーや、新たな製品の提案などの場として、多くの方に遠くから集まっていたいております。

金沢生活工芸ショップとして、「モノトヒト」という店を昨年の秋にオープンをしております。これは実験店舗で100平米ほどのお店ですが、中身を2/3、1/3に割りまして、片方の2/3には全国的に著名な工芸品を扱うギャラリーにお店を出していただいて、残りには、金沢在住の若手の工芸家さんのショップを入れまして、その若手工芸家の方に、販売の手法やビジネスのやり方を学んでいただくという意味も含め、実験店舗として開設をしております。

あと、伝統的な工芸だけではなく、新たな可能性というものを追求いたしまして、新製品開発にも民間の方々が取り組んでおられます。そうした新製品の開発なり、技術開発を進めていく上では、研究機関も重要であるということで、加賀友禅と金箔箔につきましては、技術振興研究所を設置しております。

#### 2)人材育成

2番目の柱の人材育成という面では、全国的にもめずらしい市立の金沢美術工芸大学を戦後間もない昭和21年から設置・運営しております。芸術院会員や人間国宝の方も輩出しております。美術工芸分野以外でも、さまざまな分野で学生が学び、第一線・多方面で活躍をしております。

また、金沢卯辰山工芸工房を平成元年に設立しております。これも人材育成機関ですけれども、陶芸・ガラスなど、5つの工房を構えており、これに全国から人材を公募し、その研修生には奨励金を支給しております。修了者は240名ほどで、県外や外国の方が多くいますが、その約半数は金沢周辺で居住して作家や指導者の道を歩んでいらっしゃいます。

金沢には、古くからの歴史的な建造物や古い町家が残っております。そうしたものを今後も引き継ぎ継承していくために、職人さんをしっかりと育てていこう、ということで平成8年に金沢職人大学校を作り、本科で9科、修復を専攻する科、専攻科の

2つを設けております。

あとは、平成22年からやっております、若手の工芸家や美大の学生、若い方を海外の創造都市の方に派遣しまして、新たな刺激を受けていただいて、人脈や広い視野を形成して頂くという意味で、クリエイティブワルツ事業を展開しております。今年度は4名、サンタフェ、ソウル、ブラッドフォード、ボローニャ、サンティエヌ、ゲントという創造都市に認定された都市へ派遣しております。

資金面のバックアップとして、伝統工芸の分野の後継者の方に平成2年度から「金沢の技と芸の人づくり奨励金」を出しております。そうした方々の制作・販売面の支援制度として、工芸工房を開設する際の費用、借り上げ料への補助や、市が借り上げた古い町家を、職人の工房として貸出をするという事業をやっております。

各希少伝統産業に関しても、後継者を育てる専門塾を平成20年から開設しており、加賀友禅、加賀繡、加賀象嵌など6つのコースにて専門塾を開設しております。

こどもの頃からものづくりの楽しさを体験することを通じて、職人技への興味喚起を図るために、工芸こども塾を開設しております。また、マイスターズスクールは、職人大学校で同じように子どもを対象とし、平成14年から開校しております。

### 3) 世界の発信

最後に3番目の柱、世界の発信ということで、毎年フォーラムやワークショップの開催を通じて世界の創造都市から人をお招きし、交流を図っております。

工芸の分野では、3年に一回世界工芸トリエンナーレを開催しております。金沢市では、1995年に世界工芸都市宣言をしており、世界工芸都市会議と工芸コンペティションを2つ開催して参りましたが、この2つを合わせ、世界工芸トリエンナーレという形で金沢の工芸文化を世界に発信する取組として開催しております。

最後に、2011年のソウル会議において金沢市長が、2015年にユネスコの創造都市ネットワーク会議を金沢でやりたいと表明し、今年9月のボローニャ会議にて無事金沢開催が満場一致の拍手

を持って決定されました。今後、担当者会議以外の企画内容については、ユネスコなどとの協議・調整のうえで検討していく予定です。また、日本国内のCCNJの皆さまにも実り多い会議になるよう、しっかりと準備していくつもりでございますので、また皆様方にもご協力をいただきたいと思いますっております。

## 世界への発信

### ユネスコ創造都市ネットワーク会議2015開催



2011年ソウル会議において山野金沢市長が誘致の意向を表明。  
今年9月に開催のボローニャ会議にて参加者の総意により開催決定。  
企画内容については、ユネスコと協議し検討。



City of Craft and Folk Art, KANAZAWA

27



横浜市 奥田 裕之 氏  
創造都市推進課長

### ■創造都市施策着手に至る背景

横浜市では、みなとみらいの開発を進めたところ、相対的に市役所があります関内・関外地区という横浜の歴史を支えてきた本当の業務エリアの活力が低下してきたという話が2000年頃に起き始めました。歴史的な景観を残す建物が、新しいマンションに変わってしまう、業務用のビルに空室が目立つ、そのようなことが起こりはじめ、このままでは業務機能がみなとみらいにとられてしまうことになるのではないかと、本当にそれでよいのか、という話がありました。

いろいろと議論された中で民間からのご意見も含めて、創造都市に着手しようという提言を2004年にいただきました。「文化芸術、まちづくり、創造的産業の三位一体」これで都心部復権を図る、また、アジアの文化ハブと世界発信を強化するリーディングプロジェクトとして横浜トリエンナーレを位置づけ、創造都市施策がスタートしました。

そして、2004年に文化芸術都市創造事業本部を設置して、横浜は創造都市政策を都市戦略としてやります、と宣言したところからスタートしました。その時も必ず出てきますのが、都心臨海部です。都心臨海部を中心に、元々横浜が持っている地域資源や、文化芸術の持つ創造性を活かして都市の活性化を図るということです。関内・関外地区のように相対的に低下する地区を文化芸術の力で活性化・再活性したいということであり、具体的には、アーティスト・クリエイターの関内・関外への集積を図るということです。事務所を開設するクリエイターに融資をしたり、横浜に来てくださった映像系コンテンツ企業へ助成をしたり、いろいろなことをやりました。

創造界限形成では、BankART 1929さんが、旧第一銀行横浜支店、旧富士銀行横浜支店で現代アートの拠点を作ってくださいというところからスタートしまして、いくつかの歴史的建造物を使用することで、創造系の活動の生まれる場にしようという取

組をしてきました。また、東京藝術大学の大学院映像研究科は3専攻とも横浜市にあります。これは当時誘致をかけた結果です。ただ、芸大の先生方と地元の創造界限拠点を運営するNPOの人たちのコラボレーションがなかなか起きずに、今ちょっと悩んでいるところです。

こうした取り組みが今回の東アジア文化都市に繋がってくる中で、自分たちが一番意識してきたのは、アーティスト・イン・レジデンスであり、この事業を続けたいという考えでやってきたつもりです。

### ■創造都市の取組の概要

横浜ならではの地域資源を活用した創造的アプローチ支援ということで、BankART Studio NYK、急な坂スタジオ、初黄・日ノ出町、ヨコハマ創造都市センター、象の鼻テラス、ハンマーヘッドスタジオ新・港区という6つの拠点が、それぞれ創造界限拠点として動いています。(図)

### ■横浜トリエンナーレ

横浜トリエンナーレ2014の開催が決っていますが、実は横浜トリエンナーレの開催が3年前から決まっているのは、今回展が初めてです。3年前から準備していますので、次回展はお薦めです。職員みな頑張っていますので、良いものができると思います。

しかし、昨日、札幌市の話をついたところ、これから横浜トリエンナーレは、札幌芸術祭と同じ年に同じ時期に開催することになり、ライバル関係で戦わなければならないということが分かりました。横浜トリエンナーレは、2014年は8月1日から11月3日、森村泰昌さんの「華氏451の芸術：世界の中心には忘却の海がある」というタイトルで展覧会を行います。メイン会場は横浜美術館と新港ピアで行います。

## ■アーティスト・イン・レジデンス

黄金町やBankARTが文化庁の助成事業に応募をして、海外からアーティストをよび、日本のアーティストを交流相手の団体に出すという活動をしています。やはりこういったアーティスト同士の交流、それをコーディネートする運営管理者、あるいはコーディネーターの方々、こうした人たちのネットワークが最終的には都市の力になる、財産になると思います。文化芸術振興と簡単に言っていますが、なかなか何も起きないと思いますが、やはりネットワークがきちんと生きてくることで、都市の力になると考えています。

## ■地域再生まちづくり（初黄・日ノ出町）

初黄は、初音町と黄金町、それから隣の日ノ出町。この3つの町で初黄・日ノ出町というエリアです。最盛期には、地元の方々ですら近づけないという話があり、神奈川県警が一斉取り締まりをかけました。その結果、空き店舗が増え、町の空洞化がおきてしまいました。それで、どうしようかという話をした時に、気の利いた大先輩がいらして、「アーティストに住んでもらおう」と言ったところから始まりました。実際にアーティストたちが短期のレジデンスで入ってくれたり、あるいはそれをコーディネートする地元のNPOが立ち上がったりと本当に町の中にアートが溢れる町になりました。

黄金町の取組を行政としてやってきてよかったと思ったのが、実はこの隣接地域に民間の保育園ができたという話を聞いた時です。地元の人たちも歩き難かった町が赤ちゃんを預けられる町に変わりました。また、新しいマンションを建てる時に、マンションの名前に黄金町とついている方が、マンションが売れる、という話も聞きました。文化芸術の力によって、そういうことが起きています。

その中で、心配事が2つあります。1つは、地



価が上がると民間事業者が収益上成り立つものを作れるようになり、アーティストは高くて入れなくなる可能性があります。もう一つが、アーティストが頑張っているいろいろな取り組みを進めるなかで、地元のみなさんとの距離感が少し生まれてくる、ということがあります。地元のみなさんにしてみれば、自分たちが住みやすい町にしようと思って始めたことで、一緒にやってきたのだけど、あまり突飛なことをやられると、やはり、「どうしたの」という話も出てきます。地元とアーティストの間をNPO法人の方々が繋いでくれていますけれども、地域と色々話をしながら、取り組んでいかなければならないと思っています。

## ■スマートイルミネーション

2011年に実験的に始め、7会場で、約3万人にご来場いただきました。これは普通のイルミネーションではなく、イルミネーションそのものに省電力技術を使っています。わかりやすい例としては、灯りはLEDであったり、自転車をこいで灯りを作ったりという形でやっているものです。また、それだけだとつまらないので、全部アートの作品にしようということで、アーティストの方にそれぞれ作品として作っていただいています。

比較的いろいろな雑誌・メディアにも取り上げていただき、去年は7会場を11会場に増やしたと



ころ、19万人が集まりました。やはりスマートという概念そのものの受けが良かったこと、アーティストたちがやっていることがなかなか面白かったので、いいイベントになったのだと思います。今年は会場をもうちょっと増やそうと頑張ってみたのですが、ちょうど台風がきまして、来場者数は13万人と前の年よりかは少し落ちてしまいました。

### ■ナショナルアートパーク構想

象の鼻テラスは、港湾エリアにある公園の無料休憩所です。使うに当たっては、港湾局が管理をなさい、というのが国のルールなものですから、象の鼻テラスの管理委託先をアートの会社にしてもらいました。その結果として、いろいろなイベントなどができるような仕組みにしてもらっています。

なぜここを象の鼻テラスにしたのかというと、ここは内水面でして、すぐこの前が港に向かった海なのですが、そこにもともと防波堤がありまして、その防波堤が象の鼻の形をしていて、国交省の人も含めてみなさんが象の鼻の防波堤と言っていたので、公園は象の鼻パーク、無料休憩場は象の鼻テラスになりました。先ほどのスマートイルミネーションも、ここがメイン会場で行っています。

### ■文化芸術都市の基本的な考え方

横浜では、最近、創造都市の第2ステージ、第2ステップと言っているのですが、そのきっかけがまさに平成23年5月だと思います。それまで創造都市は、事業本部でやってきましたが、局にしようという話があり、創造都市グループと市民局の文化振興グループ、経済局の観光振興グループ、これにもともと創造都市事業本部系にあったプロモーション、その4つを一つの局に、ということで、文化観光局が誕生しました。この時に、それまで創造都市が言っていた文化振興、まちづくり、産業振興、そこに明確に観光振興という言葉が入ってきました。その中で、まちづくりにシフトしていた創造都市政策を見直さなければならなくなりました。それを24年12月に文化芸術創造都市施策の基本的な考え方として整理しまして、その中での最終目標を「選ばれる都市＝横浜」、としています。

また、横浜の目指す都市像は、「賑わいと創造性に満ち、活力あふれる都市」であり、この中で外せない単語が「賑わい」です。「賑わい」を創出する一つの方法としてアジアにおける文化芸術に係るヒト・モノ・情報の拠点都市を目指しています。平たく言うとアジアの文化ハブです。こうして、平成23年からは第2ステップ・第2ステージとして始まりました。しかし、自分たち創造都市推進部が一番やりたいのは、いろいろな意味で創造的なまちづくりです。まちを違う見せ方・使い方をさせていただくということ、創造性を使ってやりたい、そして、それについてくるのが、経済活性化、文化芸術そのものの振興、そして観光振興となっています。それに都市のブランド力の発信。また、創造的なまちづくりをするためには相互交流も大切だということでその言葉を入れました。これを東アジア文化都市に応募した時の基本的な考え方としました。

### ■東アジア文化都市事業について

今年2月に公募があり、5月に横浜を選定いただきました。横浜が応募する決め手となったのが、公募要領の中にあった「文化芸術、クリエイティブ産業、観光の振興を図る継続的な発展」です。

選定都市ですが、2014年は日中韓で、2015年以降は、中国・韓国・日本の順で持ち回りとなります。その経緯ですが、2011年に第3回大臣会合が奈良で行われ、日本側から中国と韓国に東アジア文化都市をやりましょう、と提案されたと聞いています。それを、翌年の上海会合の際に、2014年からは始めるということで合意されました。正式な開催都市は、大臣会合で決めることになっていましたので、今年の9月27・28日の第5回会合で最終的に横浜と泉州と光州が決まりました。

この事業そのものは、欧州文化首都をモデルとしてしていると聞いています。この欧州文化首都は、だいたい5年前に開催都市が決まり、5年間の準備をして文化首都を行っているようです。ユネスコの会議も、せめて2年前に決めてほしいという話があったように、東アジア文化都市が文化庁の概算要求に載った後、早く実施の決定してほしいとお願いしてきましたが、2月の公募となりました。5月に候補

都市として選定いただきましたが、正直言ってなかなか準備はきついです。欧州文化首都のように数年後を目指したハード・ソフト含めたいろいろな準備ができないので、非常にきつい状態です。

9月27日に正式決定されまして、10月4日に東アジア文化都市実行委員会が発足しました。東アジア文化都市事業は国の事業ですので、当然コンセプトがあります。これからも続く、東アジア文化都市のコンセプトは必要だと思います。一方で、やはり2014年横浜開催にあたって横浜市としてのコンセプトを持ちたい、ということで議論してきました。

これまで横浜は、創造性を核にした交流や協働といったことをやってきました。自分たち自身は先駆性があり、開放性を大切にしている市民だと思っていますので、そういったものに重点を置いた考え方で動いてきました。加えて、賑わいや経済の活性化も必要だという議論がある中で、横浜でやるならば、それぞれの相互関係性をもう少し大きくまわして、流れを大きくしたい。その上で、横浜から共に創る新しい力、コラボレーションやイノベーションを起こすという考え方でやれないか、ということを経験し、これを実行委員会でも承認いただいたところで。そして、コンセプトと共に横浜の夢を書かせていただきました。「相互に深く理解し合い、新しい価値を共に創り出し、東アジアから世界へ発信する。都市の力で響きあい、共に発展していく社会を構築

すること。それが横浜の願い。」横浜はそういったことに寄与できと思っています。

スケジュールですが、2月にオープニング、クロージングが12月の頭、その間に日中韓の芸術祭、トリエンナーレなどを実施する予定です。自分たちとしてはレジデンスをできるだけやりたい、と考えています。また、国と一緒にやる事業ですので、横浜がこの事業をやりたいからこれが東アジア文化都市事業になる、というわけにはいきませんが、国ともご相談しながら、11月6日に実行委員会の中に企画部会が立ち上がりますので、企画部会にも諮って最終的に決定、という段取りを考えています。

これは先ほどの泣き言の続きです。2月の公募の時点では既に市議会での予算審議が始まっていた。もっと早くに公募があれば、東アジア文化都市事業ではこういった事業がやりたいので予算を計上したいとできたのですが、公募がなかったため予算案を計上できませんでした。しかし、提案書には事業計画が必要ですので、既存事業を中心の計画としました。トリエンナーレに東アジアのシンポジウム、創造都市シンポジウム、スマートイルミネーション、ジャズプロムナードなどです。公募時期の関係から、そういった提案とせざるを得ませんでした。ただ、次回以降は早く決まると聞いていますので、そういった所が改善されればありがたいと思っています。ご静聴ありがとうございました。

## ■考察



野田 邦弘氏  
鳥取大学 地域学部教授

### ■自治体政策としての創造都市の歴史

ユネスコ Creative Cities Network ビデオ上映 [http://www.youtube.com/watch?v=T\\_oUDsotkHU](http://www.youtube.com/watch?v=T_oUDsotkHU)

このビデオでも明らかなように、ユネスコが考える Creative City とは、7つの分野からなる創造産業を都市政策の真ん中に位置づけることにより、

都市の発展を目指す都市のことです。ユネスコは、今後の都市発展の鍵が文化芸術を中心とする創造産業の振興にあることを明確にしています。

まず、現在の日本における創造都市ブームは、自治体政策の歴史の中ではどのように位置づけられるかについてお話ししたいと思います。実は、1970年代に自治体文化行政という大きな潮流が形成された時期がありました。この頃はまだ文化施

設建設も本格的に展開する前でしたから、自治体の問題意識は、実践的なアーツマネジメントではなく、文化のまちづくりに重点が置かれていました。また、その実現のため、市民参加や「行政の文化化」が強調されており、いわば理念型の文化政策の時代といえることができます。当時神奈川県知事であった長洲氏が1976年に発表した論文「地方の時代、文化の時代」は全国に大きな影響を与え、ある意味で現在の創造都市政策に連なるものだといえるでしょう。

1980年代に入ると、公立文化施設の建設が全国で加速し、文化政策の柱も施設建設とその管理運営＝アーツマネジメントに軸足が移ったこと、1970年代の自治体文化行政をリードした革新自治体がほぼ消滅したことなどから、文化のまちづくりという自治体文化行政の基本視座が見失われました。

一方、国では、1980年に大平総理が田園都市構想を発表しました。これは、中央政府として初めて文化政策の重要性をうたった画期的なものでしたが、首相の逝去によりこの構想が実現することはありませんでした。しかし1990年代に入り国の文化政策は、大きく飛躍することになります。

現在の創造都市ブームは、19780年代の自治体文化行政が目指した文化のまちづくりという理念が現代的に蘇ったとみえることができます。ただ、当時と違うのは、当時のように中央政府に対抗するかたちで革新自治体が独自性を強調しながら取り組んだのと異なり、今は自治体が文化庁と一緒に取り組んでいることです。また時代背景の違いも大きいといえます。1970年代は高度経済成長の時期で、増えていく経済のパイを使った財政投資が可能でした。しかし、少子高齢化の進展、財政状況の悪化、中央と地方の較差拡大、地方の衰退など状況は一変しました。現在、このような深刻な地域課題を解決する政策が真に求められており、創造都市政策にその役割が期待されています。

さきほど3都市のプレゼンがありましたが、創造都市政策推進で求められることは何か考えてみたいと思います。

## ■創造都市と産業の関係性

そもそも、なぜ創造都市を目指すべきかということとをきちんと認識しておく必要があります。それは、産業構造が製造業から創造産業へ移行する知識基盤社会化が進行しているという現状認識です。先月政府が発表した日本の企業をその付加価値の大きさではかったランキングでは、上位10社の中で製造業は1社だけでした。あとは全部非製造業です。つまり日本の産業はすでに脱工業化しており、自治体政策全般もそれに対応したあらたなフォルムへと転換していく必要がある。そのことを象徴的に表現したのが創造都市という理念ではないかと思うわけです。

したがって、創造都市政策に産業政策をどう組み込むかということが最重要課題だと思います。私も横浜市の創造都市政策形成に関わっている時にその点が宿題でしたが、あまりうまくいきませんでした。しかし、持続可能で成果をあげる創造都市政策の場合、その中心には創造産業があり、それとの関連でまちづくり・教育・福祉など、政策諸課題が位置づけられると思います。その点で、高松市の盆栽や金沢の取り組みは、伝統的な文化との繋がりを取り込んでおりうまくいっていると思います。横浜の場合、実はハイテクの研究開発拠点が、製造業と連携しつつ構築されていますから、そこでの活動のなかから価値創造が起こることもあるわけです。

## ■創造都市を持続可能な政策にするために

創造都市政策をうまく展開し、持続可能なものとして定着させるためには、まず基本的な方針と首長のリーダーシップが必要です。そして、それを動かしていくボディ、つまり担当部局がしっかり組織されていること、そこにやる気のある人達がちゃんと配属されていることが重要だと思います。

しかし、ここまでは第1段階にすぎません。市民がどう関わっていくか、参画していくかということが大きな課題で、それは第2段階になると思います。第3段階では、むしろ市民のイニシアチブで創造都市づくりが進むという段階だろうと思います。

文化芸術というと、普通の市民からしてみると

ちょっと縁遠い感じがあるのですが、そのようなネガティブイメージを克服するためには、地域固有の価値や資源を発掘し、再評価して、活用することが大切です。このことが、創造都市政策の持続可能性に繋がっていくのではないのでしょうか。

高松市の「U-40」の例がありましたが、あのような若い人たちの意見をなぜ大事にしないといけないかというと、各層で意思決定の権限を持っている人は、50代以上の男性という偏りがあるからです。それを壊していく中で、若者だけでなく、女性や外国人、などの意見を聞きながら物事を決めていく必要があります。その意味で高松のアンダー40は意欲的な取組だと思います。

横浜のBankARTでは、アーティストだけではなく、様々な階層、職業、年齢の人たちが一緒になって語り合う場が形成されています。このような討論の場からいろいろなアイデアが生まれ、イノベーションに繋がるのではないかと思います。ジェーン・ジェイコブスは、新しい建物の中では、なかなか新しいアイデアが出てこない。むしろ古い建物の中から出てくることが多いと言っています。このように、クリエイティブな議論ふさわしいのは、歴史的建築物など地域の歴史を担った場所です。

この意味で、高松市がサイトスペシフィックな取組である瀬戸内国際芸術祭を強力に推進されている事に大きな可能性を感じます。そこから様々なアイデアが生まれてくるのではないのでしょうか。瀬戸内海の島にはそれぞれ島固有の歴史と文化があり、これらを再発見し評価し直すという事が大事です。それはアーティストの役割だと思います。アーティストがこれまでと異なる視点から島の固有価値を再評価することは新たな価値創造につながります。

最後に、やはり行政がイノベーションを目指していく、これが大事だと思います。クリエイティブなアイデアがいくら生まれたとしても、それらが行政過程を経て結実しない限り創造都市の取組は大きく発展することはありません。そのためにはランドリーがいう「創造的官僚機構 (creative beaurocracy)」への脱皮が欠かせません。ひとつの自治体が特定の分野で成果を出せば、全国のネットワーク CCNJ の中で情報をシェアし合いながら、

共に前進して行くことができると思います。どうもありがとうございました。

## (2) ディスカッション



**佐々木氏：**皆さん方で聞きたいことや、こういう提案がしたい等があると思うので、順番に手を挙げてください。残っている最後の時間で一分ずつ報告者3人の方に答えていただく、という形にしたいと思います。どなたでも、どうぞ。

**内田氏（文化庁）：**非常に興味深い発表ありがとうございました。先ほどの発表の中で、金沢市さんのご発表の中には、文化のビジネス化という話があり、伝統的な工芸の加賀友禅と現代的なウェディングドレスを結びつけたり、九谷焼とワイングラスを結びつけたりと、非常に面白い発想だと思います。高松市さんでは現代的なアートで人を呼んでくるとか、横浜市さんも黄金町を改善してNPOさんも入って新しい賑わいを創り出していくという話がありました。そのような中でビジネスやお金が生まれてきていると思うのですが、私としてはそのあたりに関心があります。先ほど野田先生が4つくらいのステップと言われた第1ステップの所の良い事例として、皆様方のものを発信していければ、もっと創造都市が広がっていく設計になるかと思います。その辺りの経済効果について、あまり深く数字的なものは厳密に算出するのが難しいかとも思うのですが、イメージでも見た印象でも結構ですので、教えて頂ければと思っています。

**佐々木氏：**内田さんは財務省と折衝してくださっているのですが、財務省の担当官にわかるようなデータを作らないといけません。ですから、使えるデータは全て内田さんに提供してください。これからいよ

いよ正念場にかかりますので。ただ、難しいかとも思うので最後に答えられたらお願いします。では他の方、どうぞ。

**金野氏（事務局）：**U-40というのは、どんなプレーヤーが集まっていて、どういうことでこの会議に参加していたかということをお聞きできればと思います。

**宮武氏：**U-40は、16人いまして、大学の先生、スポーツ関係者、農村で歌舞伎を教えている人、農園をやっている野菜ソムリエの人、漆芸をやっている職人さん、石材の職人さん、盆栽の職人さん、そういった方々です。行政は入っておりません。それから地元の私鉄・琴電の専務ですね。

**佐々木氏：**これはなかなかおもしろい取り組みです。私も高松に何度も応援に行っています。それでは、私の方から何人かにご指名を。山形の高橋さん、いかがですか。なんでもいいですよ。

**高橋氏（山形国際ドキュメンタリー映画祭）：**

山形の国際ドキュメンタリー映画祭の高橋と申します。昨日から参加をされていて全体的に行政の方しかいないなあ、こういう勉強会にも、もっと民間のNPOの方とか市民の方が参加されていてもいいのではないかと思いました。やはり、政策を立てる側の方々の感覚や言葉遣いで、この全体の会議が進んでいるという印象があります。私は、昔まちづくりのシンポジウムにも行ったことがありますが、全然実感としてまちづくりという言葉が捉えきれませんでした。自分は映画が好きでやる立場にいますが、それをずっとやり続けていく中で、まちづくりに繋がるのではないかということを、リアリティを持って感じていく。そういう方々がまちにどれだけいるか、どんな多彩な活動があるかということが最終的にはまちづくりに繋がっていくのだろうという気がするのですが、この会議をもっと開かれたものにしてほしいと思います。多分、閉じてはいないのですが、自分たちがやっていることがまちづく

りに繋がるかもしれない、という予感を持ち始めたNPOや市民の方などに参加していただくと、また視点が広がるのかなあといった感想を、二日間参加させていただいてとても勉強になりながらも、一方でそういうような思いを抱きました。

**佐々木氏：**どうもありがとうございました。このセミナーの設計の仕方は、私の方で整理してお話したいと思います。昨日のセミナーはかなりオープンな形で、一般市民の方、アーティストの方も入れて、一部が行政、二部がアーティストの方々と、結構面白い価値観の対立がありました。つまり、今日もそうですけど、経済ベースになると、Economic Valueが全てなのです。ところが、アートの領域はIntrinsic Valueになるので、根源的な価値の話になってくる。これは非常に多様性がある。この両方を矛盾しないでうまく政策化できるか、というところが創造都市政策の命なのですね。それを無理に全部Economic Valueで説明してしまった途端につまなくなっちゃう。だから、絶えずそういった摩擦を引き起こしながら、議論をしていくつもりで設定してあります。

ただし、2日目のセミナーは、もうちょっと政策マターとして歴史も踏まえて、政策の勉強会みたいなのをした方がいいなと思っているので、このような形になっています。それは、十分に説明をしていないのですが、今日高橋さんが言われているようなことは本当にそうだと思います。

かつて横浜で開催したセミナーは、3本記念講演がありました。1本目は、経営者の立場、2番目はアーティストの立場、3番目は私がやりました。都市の文化資本をどう高めるか。これは、3層構造なのです。それぞれがうまく回っていくと持続性が出てくる、と非常に思うのです。従って、例えば来年このセミナーをどこが引き受けてくれて、どんなコンセプトの会議にしていくなか、どんな場所でやるか。場所の設定自体が、一つのクリエイティブな場を作るという形で考えられます。例えば、酒井さんが来年札幌でもし引き受けてくださるなら、どんな設営になるのであるのか、ということも一言いただいて、何かアイデアがあればお願いします。

**酒井氏（札幌市）：**突然で驚きましたが、そうですね。札幌はちょうどその時、国際芸術祭をやっていますので、その会場の一つでもある郊外のモエレ沼公園というイサム・ノグチの公園がございまして、そこにガラスのピラミッドというところがあって、そこの中に結構大きなスペースの会議する場所が取れると思いますので、例えば、そういうところで行なうのであれば、あとは時計台の中にも実は大きな講堂がございまして、三大がっかりの中がどうなっているのかを見ていただいて議論を進めるというものかどうか、と思います。ちょっと急なものですから、そういうことが考えられると思います。

**白須氏（京都市）：**やはり、文化をどういう形で産業に結びつけていくかというのは、先ほど内田さんもおっしゃっていたとおり、かなり一番難しいけれども知恵の絞りがいいと言いますか、海外ではかなり日本より上手く出来ているんじゃないかなと思っています。昨日は、たまたま私は発表者の一メンバーでしたけれども、そういったところが芸術文化の産業化も考えられているということですね。あと、お話を聞いていますと高松市さんや札幌市さんは、かなり大きな全体としての都市像の中で考えられていますし、金沢市さんは独学を原点とされていますし、これはもういろいろな考え方でいいのだと思います。ひとつだけ経験的に思うのは、やはりうまくいくかどうかは、多くの職員の中で最も人気のある部署になるかどうか。皆さん方の部署が、それぞれの市役所の中で一番人気のある、特に若い人がぜひ行ってみたいと、あそこに行けたらええなあ職員同士が話をする、そんな職場になっていったら、自ずと前向していくのではないかと考えています。

**松田氏（新潟市）：**ちょっと話戻りますけれども、こういった会合をどのような場所でやるかということです。セミナーチラシの斎藤家別邸という歴史的建造物は、素晴らしい回廊式の庭があるのですが、実は私どもはここ、特にこの2日目はここでやりたかったのです。ただ、これは市民開放型の施設

で、今ハイシーズンのため、昨日も大変市民で賑わっていたりして、そんな都合で、会場がこういう普通のホテルになったということはこの場を借りましてお詫びしたいと思います。私どもの対応も行き届きなことあったかもしれませんが、新潟にもいろんな場所があって、会場というものは非常に重要だなと思って仕事はやったつもりではあります。しかし、そのような背景があったことをこの場を借りましてお伝えさせていただきます。

**佐々木氏：**これはこれで大変おもしろい。昨日は「へうげもの」の話が非常にインパクトのある話で良かったと思っています。たとえば、こんな形の会議をどんな風にして続けるのか、もうちょっと別のスタイルにするか、私はもうちょっと海外の事例などを入れながら、アジア全体の流れの中にどう位置づけていくかという問題も意識したいですね。来年の2月26日にネットワークの総会があり、来年の10月に国内の創造都市ネットワーク首長サミットをやって、その中にアジアの方たちも参加するという形を考えています。李さん何か一言あったらメッセージをお願いします。

**李氏（韓国）：**韓国から参りました李と申します。大変勉強になりました。韓国でもこのような文化都市、韓国では創造都市よりは文化都市と言われているのですが、文化都市関係の当事者、まちの関係の方が集まるそういうチャンスを作りたいと思っています。2007年と2008年に文化都市国際カンファレンスの時に佐々木先生もお招きをしましたが、それがまた来年光州で開かれる予定です。



ございます。その時は日本からも沢山の創造都市ネットワークの関係のみなさんも参加していただければと思っています。以上です。

**佐々木氏：**あとどうしても一言、二言、という方。ではお二人。

**男性（一般参加）：**行政とか全然関係なくて、民間の企業から来ております。

いろいろな意味で私も地域デザインという仕事をやっているのですが、行政の立場で、産官学といういろいろな形でやってらっしゃる姿は、アナウンスメントをする相手が残念ながらなかなか見えてないような気がします。たとえば、もっともっと普通の方々が、はっと気がつくようなそういう繋がりがあるいはアナウンスメントというのが、恐らくすごくこのような取組には大事ではないかと常々思っています。今香川では、瀬戸内の国際芸術祭やっていて、定量的な人は多いです。何十万人もいました。でも悲しいかな、何十万人のうちの何人を、香川や高松のファンにしているか、そういう仕掛けや取組はお考えになっていらっしゃるかどうか、ぜひお聞かせいただきたいと思ったので質問させていただきました。

**男性（一般参加）：**新潟の一般市民です。このような会は、どのような人がどのくらい集まるのだろうか、ということが気になっていました。私自身は、新潟市民が集まる会だと思っていました。来てみたら、参加者の主力というのは、各土地の行政の方でしたが、私自身は、陶芸家やアーティストでもない、全く普通の市民という立場です。本当はこのような会は、普通の市民が大勢出ることでより意義があると思います。

これからの都市の生命線というのはまさに創造にあると思って、そういう意味ではみなさんと問題意識共通しているから出てきています。しかし、たとえば新潟市が創造都市になるとかどうとか、ということは、市民がそう思うかどうか、自分たちのまちを創造都市にするのだと思うか、ということが非常に重要だと思います。私が、この会自体を知った

のは、市報にいがたで、新潟市のホームページを見て申し込んでおりますので、この場が閉じているということではなく、市民の方が逆にあまりそういう意識を持っていません。もっと市民も来てくださいますよ、と啓蒙する形で会を開催することが必要だと思います。今日のようなより専門的なものであっても、これからの都市の方向性は、こういうことを行政、文学者の方は考えているんだなあと市民も一緒に参加して勉強していく場にもなると思います。本来、そういう位置づけとして非常に本来効果を発揮する会だと思います。

このような内容は結構理念的で、なかなか市民が普通の肌感覚では実感しにくい部分ですけれども、ただ逆に目の前の損得とか、便利だとか不便だとかということだけでやっているから、なんだか行き詰まっているという面があります。ですから、このような基本になるビジョンに向かっていくという意識を市民も持つべきだと思います。

**佐々木氏：**どうもありがとうございます。私も全く同感で、こういう場所はどうしても（人数が）限定されているけれども、これを You tube とか、Ustream とかでいつでも再現できて、聞けると言う状態がいいかなと思っています。これからはこういう場でかなり中身の濃い面白い話をしつつ、それがじわじわ広がっていくような形になればいいかなと思っています。どうも今日はありがとうございました

これからの会議の進め方・組み方、そういったことも皆さんにアイデアを頂きましたし、どうも来年は札幌市さんでセミナーを開催できそうだなという予感もありますので、そのあたりは、またもうちょっとクリエイティブな場にしたいなと思います。

では、1分ずつでお答え頂けるようにお願いしておりましたので、宮武さんからいきましょう。

**宮武氏：**まず経済効果という点ですが、高松市は2004年に新たに市民文化創造拠点として作られた文化芸術ホールで検証をしようと思っています。期待をされますのが、恐らく舞台芸術のスタッフと

か、地方であまりなかった仕事が増えたのではないかと、いろいろなソフト系のイベントを活発にすることによって、それまでになかった仕事が発生している、ということがあるのではないかと考えております。

高松は、茶道の関係の教具屋・お茶屋さんがかなり多いです。それは、やはり文化的なお茶という文化を高めることによって、普通なら潰れてしまいそうなお店が生きながらえているという話があります。そのような形の経済効果・雇用を生んでいると思いますし、結果的にそれが観光資源となって宿泊者が増えれば効果はあると思います。そして、瀬戸芸や四年に一度の高松国際ピアノコンクールなどを行なうことで、普段は日本、特に高松にはよほどの用がない限りは来ないような方たちを集める仕掛けを行い、その方たちが集まったというだけで、都市のブランドは上がっていく。それが、間接的に経済波及効果を生んでいくと思っています。

それから、他の方々の一般的な市民のみなさんにどうするかという部分ですが、ご指摘たくさんいただいた点、そのとおりだと思います。そのために冒頭お見せしたプロモーション映像があるので。我々はよく議会で「高松の魅力を国内外に発信したいんだ！」ということを言っていますが、ターゲットにすべきは自分たちの市民なのです。創造都市推進局の皆がビジョンを作って本当に共感したのは、創造都市をやることで何を生み出すのか、それは我々がここ100年近くかかって失ってきた、地方の自信と誇り、これを取り戻す、ということです。これをわかりやすいプロモーション映像にまとめて、たとえば、映画館の幕間で上映してもらったり、新聞広告に載せたりということをやっていると思っています。それから、この会議の後、高松市の44のコミュニティ協議会に対して創造都市はこうなるのです、と説明してまわろうという企画を既に計画しております。

また、事例としては、高松に瀬戸芸の会場になった男木島があります。そこも島の復権がテーマで、芸術祭に絡んでいます。結果、男木島が世界的に有名になったということで、島を出て行った方が今回帰っていらっしゃいました。だから、今休校になっ



ている学校を開けてくれということで、何千万円がかかりますけれども、我々としては、これは明るいニュースであると思っています。

**佐々木氏：**非常に沢山のいろいろな形の効果が出ていますね。

**奥田氏：**経済波及効果ですが、横浜市中期4カ年計画には創造都市施策の経済波及効果230億円という数字が目標で出ております。これは、創造都市関連の民間・芸術関連のイベント来場者がどれくらい消費するかをベースに作っております。イベントでは、出口調査を実施し、そこで消費単価・来場者数が出てきますので、一定の評価が出ます。しかし、実感と乖離がありすぎと思っています。アーティスト・クリエイターが、実際に横浜に根付いて、その人たちがどのような商売をやって、どれくらいの年収を得て、それが波及効果にどう繋がっているか、ということを本来はとるべきだと思っています。今そんなことを内部で議論をしています。

産業との連携で、今、一番悩んでいることは、創造産業そのものの振興です。できれば、アーティスト・クリエイターと地元の企業がくっついて新しいものが生まれたいか、ということは今考えています。特に中小企業側とクリエイター側がお互いに説明することが得意ではない方が多いので、間にコーディネーターを入れるモデル事業を始めました。実際にどのような事業・プロジェクトが走るか、様子を見たいと思います。

それぞれの分野の従事者数ですが、横浜では直接創造都市推進課はITをやっていません。ただ、創造都市推進課が付き合っているグループの中にコンテンツ系のIT系が入ってきますので、では、IT従事者は創造都市で引っ張ってきたか、というとうまく算出できないので、その数字も使いづらいという感じです。

お話にあった定量的な評価が多いという点はその通りで、本当に定量的なものを示さないとご納得頂けないものですから、トリエンナーレ含めまして、それぞれの企画展・展覧会等では出口調査でアンケートをとっています。ただ来られる方が他の展

覧会も回っているかどうかというデータが今はないので、そういったものを今後は取れるとよいと感じました。

**宮武氏：**ご質問にあった市の職員に対してという点、現状を申しますと、市長部局にいる7人の局長、みんなが私のポストをうらやましがっていて、どうせ苦勞するならあそこが楽しそうだという感じで見てくれています。

**佐々木氏：**ありがとうございました。短い時間でいろいろな意見が出たので、全部をまとめることはいたしません、私なりの問題意識をちょっと述べさせていただきます。

この創造都市の政策をさらに世界的な規模、あるいはアジア的規模、あるいは全国的な規模で広げるために、創造都市ネットワーク日本を今年立ち上げました。自治体が中心ですが、NPOや一般市民の方ももちろん入っていただくという形で設計しています。たとえばNPO法人BEPPU PROJECTや、鳥取にある鳥の劇場といった、まさにアートクリエーションしている人たちも入っています。一般市民の方でもドネーションしてくださる方も大いに歓迎でございます。

その上で、創造都市の事業が政策的に安定していき、一定の議会・国会や地方議会できちんとした議論に耐えていくために、エビデンスが大事ですね。これは経済効果だけでなく、社会的効果、芸術そのものに対する評価などがございます。男木島で閉校された学校が再開できるなんて、ものすごく社会的影響・効果が大きいですね。それらを一覧表にしていき、これが日本の創造都市の効果です、と見せるためには、研究所がいるのです。古い研究所のイメージではなく、より開かれた形で、たとえば創造都市ミュージアムがいいな、というアイデアを持っております。私のエネルギーがもうちょっと続くならば、創造都市ネットワーク日本、東アジア文化都市事業、ユネスコ創造都市ネットワークの金沢会議、このあたりを目指して、創造都市研究センターか、創造都市ミュージアムというものを立ちあげたい、と思っています。社会を変えるアートの力を広げたい

と思っておりますので、ぜひ皆さん方からのご協力を引き続き頂きたいと思えます。

来年2月には横浜総会、10月には首長サミットがあり、2015年には金沢の世界の創造都市ネットワークとの交流の機会がありますので、ぜひさまざまな機会を通じていろいろな刺激を受けながら、面白くてしょうがない、そういう機会が生まれるといいなと思っていますので、よろしくお願いします。今回はこのCCNJのメンバーの一つであります、一般社団法人ノオトに事務局をお願いしました。大変ありがとうございました。



<平成25年11月3日収録>

## 創造都市入門セミナー「創造都市が目指すもの」

アンケート（有効回答数10）

1. ユネスコの「創造都市(クリエイティブ・シティ)」についてご存知ですか

	回答数	割合
はい	10	100%
いいえ	0	0%

2. 創造都市への取り組みから、今後のまちづくりに可能性を感じましたか

	回答数	割合
はい	10	100%
いいえ	0	0%

3. 本日のシンポジウム「メディア芸術と創造都市」はいかがでしたか

テーマについて

	回答数	割合
大変適切だった	6	60%
適切だった	3	30%
もっと検討すべき	0	0%
無回答	1	10%

内容

	回答数	割合
大変よかった	5	50%
よかった	3	30%
あまりよくなかった	0	0%
無回答	2	20%

理由や感想

- ・報告のあった3都市について、それぞれの都市の特性、取り組みの視点がよく理解できた。
- ・これからの創造都市を構築するものとして、先進的な意見も聞く事ができました。私の考え、委員会との協議から出されている課題、提案がどこの都市でも出されているということで、ますますファイトがわきました。

4. シンポジウムに参加して、創造都市への可能性を感じましたか？

	回答数	割合
大いに感じた	8	80%
少し感じた	2	20%
あまり感じなかった	0	0%
まったく感じなかった	0	0%
無回答	0	0%

理由や感想

- ・市民の理解をどのようにするのか？リーダーシップのとり方を学ばせて頂いた。
- ・都市の規模が大きくなればなるほど、本日の創造都市での各事例が一般人にまだ伝わっていないのではと。行政側の立場での事例紹介で、その反応、客観的評価がもう少し欲しかったです。
- ・自治体のやる気（意欲）とそれを裏打ちする手段、組織、事柄の内容が重要。

5. その他、創造的なまちづくりへのご意見・アイデアなどあればお聞かせください。

- ・お話を伺っていく中で、市民の不満や苦言は裏をかえすと期待、希望の存在があるからなのかと思いました。
- ・非常に意義のある事なので、より広がりを持った（参加者を増やす）取り組みにしていける事が大切であり、可能と考える。
- ・行政イノベーションを先にやらなければ、創造都市の道は遠くなる。まずは行政イノベーションを。

お住まいの市町村

	回答数	割合
新潟県内	0	0%
県外	7	70%
無回答	3	30%

所属・団体

	回答数	割合
一般・市民	1	10%
研究者・教員	1	10%
自治体職員	6	60%
その他	1	10%
無回答	1	10%

創造都市入門セミナー「創造都市が目指すもの」  
広報チラシ



in  
NIIGATA

創造都市政策セミナー

MEDIA ART and  
CREATIVE CITY

「メディア芸術と創造都市」

2013年

11月2日(土) 13:30~17:00

11月3日(日) 9:30~12:00

**会場：新潟東急イン** (新潟市中央区弁天1-2-4)

主催：文化庁、創造都市ネットワーク日本(CCNJ)

共催：新潟市

お問い合わせ：新潟市文化観光・スポーツ部 文化政策課

〒951-8550 新潟市中央区学校町通1番町602番地1

Tel. 025-226-2565 Fax. 025-230-0450

Mail. bunka@city.niigata.lg.jp

**文化庁**

文化庁  
www.bunka.go.jp

**創造都市ネットワーク日本**

創造都市ネットワーク日本  
ccn-j.net

**新潟市**

新潟県 新潟市  
www.city.niigata.lg.jp

文化庁・平成25年度文化芸術創造都市推進事業



金 理有

## 創造都市政策セミナー 「メディア芸術と創造都市」

世界に誇る日本の「メディア芸術」をテーマとした、創造都市政策セミナーを新潟市で開催いたします。創造性を活かしたまちづくりを行っている地域が集まり、その取り組みや魅力を紹介しながらメディア芸術の持つ可能性を探ります。文化芸術による都市の再興を目指す創造都市の取り組みを通じて、豊かな明日の日本について語り合しましょう。



**2日 (土)** シンポジウム「メディア芸術と創造都市」  
定員200名(応募多数の場合、抽選)  
13:30～13:45 開催挨拶  
13:45～15:45 パネルディスカッション  
事例発表(札幌市、京都市、新潟市)  
16:00～17:00 **スペシャルインタビュー ※新潟市主催:右記**  
**懇親会 定員50名(先着順)、会費4,000円**  
18:00～ 会場:新潟日報メディアシップ  
(新潟市中央区万代3-1-1)

**3日 (日)** 入門セミナー「創造都市を目指すもの」  
定員50名(先着順)  
9:30～10:00 趣旨説明、問題提起など  
10:00～11:00 事例発表(高松市、金沢市、横浜市)  
11:00～11:55 ディスカッション  
11:55～12:00 閉会挨拶  
※終了後は、「がたふえすvol.4(にいがたアニメ・マンガフェスティバル)」  
をお楽しみください。

スペシャルインタビュー ©山田芳裕/講談社  
「へうげもの」からみる創造都市 へクリエイターが育ち、活動しやすいまちとは～

**田村 一氏(陶芸家「激陶者集団へうげ十作」)**



早稲田大学入学と同時に、陶芸部に入部。大学院修了後、作家活動に入る。栃県益子町で約十年間陶作ののち、2011年郷里の秋田市に拠点を移す。東京を中心に、各地で個展・グループ展多数。うつわの世界のみならず、美術・アートの領域でも評価を高めている。

**金 理有氏(陶芸家「激陶者集団へうげ十作」)**



大阪芸術大学芸術学部大学院修了。豪快なオブジェで注目を集め、「へうげもの」どの係わりを通じ、うつわにも傾倒。若手茶人ら異ジャンルのクリエイターとセッションを重ね、国内のみならず、ニューヨーク、パリなど、海外にも活動の場を広げている。

**藤沢 学氏(株式会社講談社 週刊モーニング編集部)**

担当する「へうげもの」の作者・山田氏とも計らい、陶芸家、アーティストと日常的に交流。コラボ展をたびたび企画。漫画を通じ、美術館の広報誌編集にも協力している。

**へうげもの** 新潟市出身の漫画家・山田芳裕氏が描く歴史大河漫画。  
文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞、手塚治虫文化賞マンガ大賞受賞。

パネリスト

**酒井 裕司氏** 札幌市 市長政策室政策企画部  
プロジェクト担当部長



札幌市職員として入庁、市民まちづくり局(現市長政策室)企画部企画課長、環境局山動物園長を経て、2012年から現職。市民まちづくり局企画部企画課長時代にも、創造都市によるまちづくりに携わっており、現職においても再び創造都市及びシティプロモートの推進に取り組んでいる。

2日

パネリスト

**木村 勇一氏** 新潟市文化観光・スポーツ部長



新潟市職員として、福祉・保健分野に長く従事、保育課長を経て、2011年から現職。「文化創造都市ビジョン」、「マンガ・アニメを活用したまちづくり構想」の策定に携わる。「文化創造都市」の実現に向け、マンガ・アニメ文化をはじめ、独自の文化を活かした様々な施策に取り組んでいる。

2日

パネリスト

**白須 正氏** 京都市 産業観光局長



京都市職員として「大学のまち・京都21プラン(1993年)」、「京都市芸術文化振興計画(1996年)」の策定事務などを担当。産業観光局スーパーテクノシティ推進室長、総合企画局京都創生推進室長、(財)京都高度技術研究所専務理事を経て、2011年より現職。

2日

ファシリテーター/インタビュアー

**太下 義之氏** 三菱UFJリサーチ&コンサルティング  
芸術・文化政策センター 主席研究員/センター長



文化政策学会理事。文化審議会文化政策部会委員、東京芸術文化評議会専門委員。大阪府・大阪市特別参与、沖縄文化活性化・創造発信支援事業評議員、企業メセナ協議会監事、文化情報の整備と活用「100人委員会」委員、その他文化政策関連の委員を多数兼務。

2日

講師

**野田 邦弘氏** 鳥取大学 地域学部教授



横浜市職員として横浜トリエンナーレや創造都市政策策定に関わる。文化経済学会理事(元理事長)、鳥取県文化芸術振興審議会議長。著作は、『創造都市横浜の戦略』(2008年)「アートが地域を再生する～自治体文化政策概論(仮称)」(来春発売予定)など。

3日

講師

**佐々木 雅幸氏** 大阪市立大学大学院創造都市研究科教授  
/同都市研究プラザ所長



博士(経済学)、文化経済学会<日本>会長(2008-10年)。著書に『創造都市への挑戦』『創造都市と社会包摂』(共編著)等がある。NPO法人都市文化創造機構理事長も務め、理論と実践の両面から創造都市の具現化とネットワーク構築に取り組んでいる。

3日

お申し込みURL <http://ccn-j.net/?p=419>

上記URLよりお申し込みいただけます。お早めにお申し込みください。 ※申込締切 2013年10月24日(木) 23:59まで

新潟市がアニメ・マンガ一色に染まる2日間

**がたふえす Vol.4**  
にいがた アニメ・マンガ フェスティバル

11月2日(土) 3日(日) 万代シティBP2、古町通りほか/  
入場無料(一部有料)

数々の人気マンガ家やアニメクリエイターを輩出している新潟市で開催されるアニメ・マンガの祭典。万代、古町、白山の3エリアが無料シャトルバスでつながり、声優トークショーや原画展、コスプレパレードなどが行われる。また、旧齋藤家別邸、北方文化博物館では、『へうげもの』を題材にした展覧会「へうげた、にいがた」山田芳裕with激陶者集団へうげ十作+αを開催。原画のほか、へうげ十作らによる陶器の展示・販売、その陶器を使ったお茶会などを実施(10月29日～11月10日開催)。

問い合わせ先:025-226-2566 にいがたアニメ・マンガフェスティバル実行委員会  
[www.niigata-anime-manga-fes.com](http://www.niigata-anime-manga-fes.com) がたふえす Q



コスプレパレードも開催!!



---

本報告書は、文化庁の委託事業として「一般社団法人ノオト」が実施した平成 25 年度文化芸術創造都市推進事業の成果をとりまとめたものです。従って、本報告書の複製、転載、引用等には文化庁の承認手続きが必要です。